

一般国道
10号

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第6集 下巻

桑野遺跡

上の熊遺跡・小松原遺跡

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査

1997

福岡県教育委員会

桑野遺跡

上の熊遺跡・小松原遺跡

福岡県築上郡大平村所在遺跡の調査



大平村内出土旧石器（左・右：上の熊遺跡、中：桑野遺跡）

例 言

1. 本書は、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所から委託を受けて、平成3年度から6年度に調査を行った築上郡新吉富村と同郡大平村に所在する遺跡群についての調査成果を「一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第6集として取りまとめたものである。
2. 本書に収録した遺跡は、築上郡新吉富村に所在する三ツ溝・長田・大池添・ウツケ畑・竹ノ下遺跡、ならびに同郡大平村に所在する上の熊・小松原・桑野遺跡である。これらを、2分冊に分けてそれぞれ上巻、下巻とした。
3. 出土遺物の整理については、県教育庁文化課太宰府事務所と九州歴史資料館で行ったが、実施にあたり九州歴史資料館の横田義章と岩瀬正信・豊福弥生・平田春美の協力を得た。
4. 挿図のうち遺構実測図は池辺元明・飛野博文・小川泰樹・秦憲二・杉原敏之・吉田東明・笠原勝彦・末永浩一・犬塚カヲル・木下秀子・植山智保子・友田鈴香・是石美知子・原田和代・川野礼子・園田喜代美・棕田幸子・中井美代子・横山康子が実測し、遺物実測は池辺・飛野・小川・秦・杉原・平田・棚町陽子・岡由美子・久富美智子・田中典子・坂田順子・堀江圭子・藤原さとみ・江口幸子・堀之内久子・山本千鶴美・栗焼憲児・小田和利が実測した。また、図面の浄書については豊福・原カヨ子の助力を得た。
4. 掲載写真のうち、遺構写真は池辺・飛野・小川・秦・杉原が撮影し、遺物写真の撮影については九州歴史資料館の石丸洋と北岡伸一が行った。なお、空中写真についてはフォト・オオツカと（有）空中写真企画に依頼した。
5. 使用方位は磁北（M.N）と座標北（G.N）を併用し、特記しない限り座標北である。
6. 本書の執筆は、Ⅰを杉原と秦が、Ⅱを飛野が行い、Ⅲ以下については遺跡調査担当者が執筆・編集を行った。その内訳は、本文目次に記してある。また編集については、上巻の編集を杉原が、下巻の編集を小川がそれぞれ行い、全体の編集を杉原が行った。

本文目次

〈下巻〉

Ⅶ 上の熊遺跡	飛野
1. はじめに	121
2. 遺構と遺物	121
1) 掘立柱建物跡	121
2) 土坑	121
3) 焼土坑	124
4) 溝状遺構	128
5) その他の遺構と遺物	132
3. おわりに	134
Ⅷ 小松原遺跡	小川
1. はじめに	135
2. 遺構と遺物	135
1) 土坑	135
2) 溝状遺構	140
3) 屋敷跡	145
4) 包含層	145
5) その他出土の遺物	147
3. おわりに	148
Ⅸ 桑野遺跡	飛野
1. はじめに	149
2. 遺構と遺物	151
1) 竪穴式住居跡	151
2) 掘立柱建物跡	163
3) 土坑	172
4) 溝状遺構	191
5) その他の遺構と遺物	207
3. おわりに	221

〈上巻〉

I はじめに	1
II 位置と環境	9
III 三溝遺跡	17
IV 長田遺跡	23
V 大池添・ウツケ畑遺跡	57
VI 竹ノ下遺跡	103

図 版 目 次

巻頭図版 大平村内出土旧石器 (左・右: 上の熊遺跡、中: 桑野遺跡)

上の熊遺跡

- | | |
|-----|--|
| 図版1 | 1; 調査区西半 (南東から)
2; 調査区西半 (北西から) |
| 図版2 | 1; 調査区東半 (北西から)
2; 調査区東半 (南東から) |
| 図版3 | 1; 掘立柱建物跡 (北西から)
2; 1号土坑 (南西から)
3; 2号土坑 (南東から) |
| 図版4 | 1; 2号焼土坑 (北東から)
2; 3号焼土坑 (南西から)
3; 4号焼土坑 (西から)、8号焼土坑 (南から)
4; 10号焼土坑 (北西から) |
| 図版5 | 1; 1号溝状遺構 (南東から)
2; 下層 M1・2土層 (北から) |
| 図版6 | 1; 下層 M1土層5 (北西から)
2; 下層 M3土層6 (北西から)
3; 下層 M3土層8 (北西から) |

小松原遺跡

- 図版1 1; 小松原遺跡全景 (空中写真 北西から)
2; II区全景 (空中写真)
- 図版2 1; 1号土坑 (西から)
2; 2号土坑 (南西から)
- 図版3 1; 3号土坑 (東から)
2; 4号土坑 (北東から)
- 図版4 1; 5号土坑 (南東から)
2; 6号土坑 (南西から)
- 図版5 1; 6号土坑 (南西から)
2; 7・8号土坑 (北東から)
- 図版6 1; 7号土坑 (北東から)
2; 8号土坑 (北東から)
- 図版7 1; 4~7号溝状遺構 (空中写真)
2; 5号溝状遺構 (南東から)
- 図版8 1; 5号溝状遺構土層 (南東から)
2; 屋敷跡 (空中写真)
- 図版9 1; 1~4号カマド跡 (南東から)
2; 柵状遺構 (南東から)
- 図版10 出土遺物1
- 図版11 出土遺物2
- 図版12 出土遺物3

桑野遺跡

- 図版1 1; 調査区全景 (東上空から)
2; 調査区全景 (西上空から)
- 図版2 1; A・B地区 (上空から)
2; C地区 (上空から)
- 図版3 1; 1号竪穴式住居跡 (北から)
2; 1号竪穴式住居跡 (北から)
- 図版4 1; 2号竪穴式住居跡 (東から)
2; 2・3号竪穴式住居跡 (東から)
- 図版5 1; 4号竪穴式住居跡 (東から)
2; 5号竪穴式住居跡 (南から)
- 図版6 1; 4~7号竪穴式住居跡 (東から)

- 2; 6号竪穴式住居跡周辺 (東から)
- 図版7 1; 7号竪穴式住居跡周辺 (東から)
2; 7号竪穴式住居跡炉遺物出土状態 (東から)
- 図版8 1; 1号掘立柱建物跡 (北から)
2; 2号掘立柱建物跡 (南から)
- 図版9 1; 3号掘立柱建物跡 (西から)
2; 4・5号掘立柱建物跡 (北から)
- 図版10 1; 6号掘立柱建物跡 (北から)
2; A地区東半掘立柱建物跡群 (西から)
- 図版11 1; 9号掘立柱建物跡 (西から)
2; 12号掘立柱建物跡 (南から)
- 図版12 1; 12号土坑 (北から)
2; 2号土坑 (南から)
- 図版13 1; 3号土坑上層 (南から)
2; 3号土坑下層 (南から)
- 図版14 1; 5号土坑 (南東から)
2; 10号土坑 (南東から)
- 図版15 1; 105号土坑 (南西から)
2; 202号土坑 (南から)
- 図版16 1; 204号土坑 (東から)
2; 207号土坑 (北西から)
- 図版17 1; 208号土坑 (南東から)
2; 210号土坑 (南西から)
- 図版18 1; 211・212号土坑 (東から)
2; 211・212号土坑 (北から)
- 図版19 1; 101号溝状遺構周辺 (南から)
2; 101号溝状遺構 (東から)
- 図版20 1; 5~7号溝状遺構周辺 (西から)
2; 5~7号溝状遺構 (南から)
- 図版21 1; 5~7号溝状遺構土層 (南から)
2; 5~7号溝状遺構土層 (南から)
- 図版22 1; 215・216号溝状遺構土層 (南東から)
2; 215・216号溝状遺構土層 (東から)
- 図版23 1; 218号溝状遺構南端上層 (東から)
2; 218号溝状遺構南端下層 (東から)

- 3; 218号溝状遺構北端上層 (東から)
- 図版24 1; P1・2遺物出土状態 (東から)
2; P4遺物出土状態 (南東から)
- 図版25 1; P5遺物出土状態 (南から)
2; P6遺物出土状態 (東から)
- 図版26 1; P65遺物出土状態 (東から)
2; P307・306遺物出土状態 (東から)
- 図版27 1; P133 (住4) 遺物出土状態 (北東から)
2; 遺跡全景 (西から)
- 図版28 出土遺物1 (1・3号竪穴式住居跡)
- 図版29 出土遺物2 (4・7号竪穴式住居跡およびその周辺、2号掘立柱建物跡)
- 図版30 出土遺物3 (2・7号掘立柱建物跡、3号土坑出土土器)
- 図版31 出土遺物4 (3・5・105号土坑出土土器)
- 図版32 出土遺物5 (105・106・201号土坑出土土器)
- 図版33 出土遺物6 (202~204・207・211号土坑出土土器)
- 図版34 出土遺物7 (211号土坑出土土器、土坑出土石器)
- 図版35 出土遺物8 (土坑出土石器)
- 図版36 出土遺物9 (土坑出土石器、205~207・218号溝状遺構出土土器)
- 図版37 出土遺物10 (218号溝状遺構出土土器)
- 図版38 出土遺物11 (218号溝状遺構出土土器)
- 図版39 出土遺物12 (218号溝状遺構出土土器)
- 図版40 出土遺物13 (218号溝状遺構出土土器)
- 図版41 出土遺物14 (218号溝状遺構出土土器、溝状遺構出土石器・金属器)
- 図版42 出土遺物15 (溝状遺構出土石器)
- 図版43 出土遺物16 (P1~3・5・6・65出土土器)
- 図版44 出土遺物17 (P65・66・126・129出土土器)
- 図版45 出土遺物18 (P129・132・301・306・307出土土器)
- 図版46 出土遺物19 (P360・363・366出土土器、柱穴出土石器)

插图目次

Ⅶ 上の熊遺跡

第1図	周辺地形図 (1/2000)	122
第2図	遺構配置図 (1/400)	折込
第3図	掘立柱建物跡実測図 (1/60)	123
第4図	土坑実測図 (1/40)	124
第5図	焼土坑実測図① (1/30)	126
第6図	焼土坑実測図② (1/30)	127
第7図	調査区西端付近溝状遺構実測図 (1/300、1/60)	129
第8図	出土遺物実測図① (1/300、1/60)	131
第9図	7号溝状遺構実測図 (1/300、1/60)	132
第10図	出土遺物実測図② (1/2)	133

Ⅷ 小松原遺跡

第1図	周辺地形図 (1/2000)	136
第2図	遺構配置図 (1/400)	折込
第3図	1・2・4・5・7~9号土坑実測図 (1/30)	137
第4図	3・6号土坑実測図 (1/30)	138
第5図	出土土器実測図① (1/3)	139
第6図	4~7号溝状遺構実測図・土層図 (1/200、1/60)	141
第7図	出土陶磁器実測図 (1/3)	143
第8図	出土土器実測図② (1/4)	144
第9図	包含層出土土器実測図 (1/3)	146
第10図	出土石器実測図 (1/3、2/3)	146

Ⅸ 桑野遺跡

第1図	周辺地形図 (1/2000)	150
第2図	遺構配置図 (1/400)	折込
第3図	1号竪穴式住居跡実測図 (1/60)	151
第4図	1号竪穴式住居跡出土遺物実測図① (1/4)	152
第5図	1号竪穴式住居跡炉跡実測図 (1/20)	153

第 6 图	1号竖穴式住居跡出土遺物実測図② (1/4)	153
第 7 图	2号竖穴式住居跡実測図 (1/60)	154
第 8 图	2号竖穴式住居跡出土遺物実測図 (1/4、1/2)	154
第 9 图	3号竖穴式住居跡実測図 (1/60)	155
第10图	3号竖穴式住居跡出土遺物実測図 (1/4、1/2)	156
第11图	4号竖穴式住居跡実測図 (1/60)	157
第12图	4号竖穴式住居跡出土遺物実測図 (1/4、1/2)	158
第13图	5号竖穴式住居跡実測図 (1/60)	159
第14图	6·7号竖穴式住居跡実測図 (1/60)	160
第15图	6·7号竖穴式住居跡周辺出土遺物実測図 (1/4、1/2)	162
第16图	1·2号掘立柱建物跡実測図	164
第17图	掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/4)	165
第18图	3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	166
第19图	4~7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	167
第20图	8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	169
第21图	9号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	170
第22图	10~12号掘立柱建物跡実測図 (1/60)	171
第23图	土坑実測図① (1/30)	172
第24图	土坑実測図② (1/60)	173
第25图	土坑出土遺物実測図① (1/4)	174
第26图	土坑出土遺物実測図② (1/4)	176
第27图	土坑出土遺物実測図③ (1/3)	179
第28图	土坑出土遺物実測図④ (1/4)	180
第29图	土坑出土遺物実測図⑤ (1/4)	181
第30图	土坑出土遺物実測図⑥ (1/4)	183
第31图	土坑実測図③ (1/40)	185
第32图	土坑出土遺物実測図⑦ (1/4)	187
第33图	土坑出土遺物実測図⑧ (1/3)	188
第34图	土坑出土遺物実測図⑨ (1/3、2/3)	189
第35图	溝状遺構土層実測図 (1/40)	192
第36图	溝状遺構出土遺物実測図① (1/4、1/1)	193
第37图	溝状遺構出土遺物実測図② (1/4)	197
第38图	溝状遺構出土遺物実測図③ (1/4)	198

第39図	溝状遺構出土遺物実測図④ (1/4)	199
第40図	溝状遺構出土遺物実測図⑤ (1/4)	200
第41図	溝状遺構出土遺物実測図⑥ (1/4)	201
第42図	溝状遺構出土遺物実測図⑦ (1/4)	202
第43図	溝状遺構出土遺物実測図⑧ (1/4)	203
第44図	溝状遺構出土遺物実測図⑨ (1/4)	204
第45図	溝状遺構出土遺物実測図⑩ (1/4)	205
第46図	溝状遺構出土遺物実測図⑪ (1/3)	206
第47図	土器等出土柱穴実測図 (1/20)	208
第48図	柱穴出土遺物実測図① (1/4)	209
第49図	柱穴出土遺物実測図② (1/4)	211
第50図	柱穴出土遺物実測図③ (1/4)	213
第51図	柱穴出土遺物実測図④ (1/4)	215
第52図	柱穴出土遺物実測図⑤ (1/4)	217
第53図	柱穴等出土石器実測図 (1/1、1/3)	219
第54図	表採遺物実測図 (1/2)	220
第55図	桑野遺跡周辺弥生土器変遷図1 (1/8)	222
第56図	桑野遺跡周辺弥生土器変遷図2 (1/8)	223

Fig 目次

1 豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡 (1/2000)

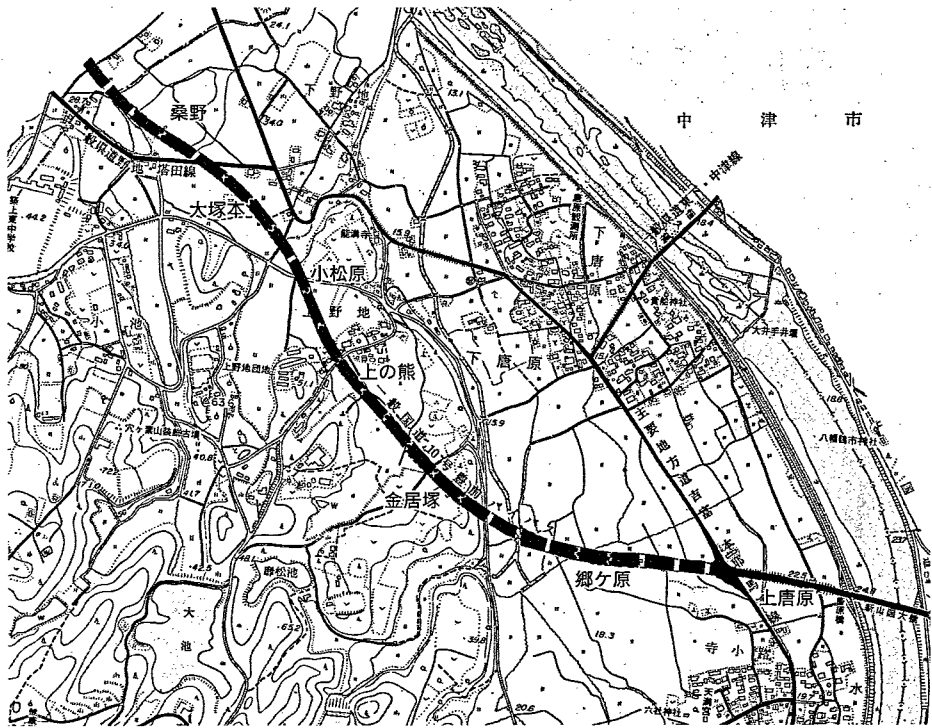


Fig.1 豊前バイパス東部周辺の地形と路線内の遺跡(1/20,000)

上^{うえ}の熊^{くま}遺跡

1. はじめに

この調査区は、築上郡大平村大字下唐原1658-1他に位置し、東に隣接する金居塚遺跡、および西に隣接する小松原遺跡とはともに小規模な谷をもつて区別される。地形的には南西から派生する丘陵の先端近くに位置し、北は河岸段丘を解析する谷へと続いている。また、遺跡の最高所は西よりの農道付近にあり、東へ緩やかな、西に比較的急な斜面となる。

調査前は水田であったが、すぐ南は山林となっていて、水田としては高位に位置するものである。ちなみに、平成8年度、南接する地点に大平村物産販売所が建設され、それに先立つ調査でも若干の掘立柱建物跡などが調査され、丘陵尾根線で古墳も発見されている。

なお、発掘調査は平成3年4月、金居塚遺跡の終了に合わせて随時作業員を移動し、同6月上旬には桑野遺跡へと移動した。調査面積は約4,500m²である。

2. 遺構と遺物

1) 掘立柱建物跡 (図版3、第3図)

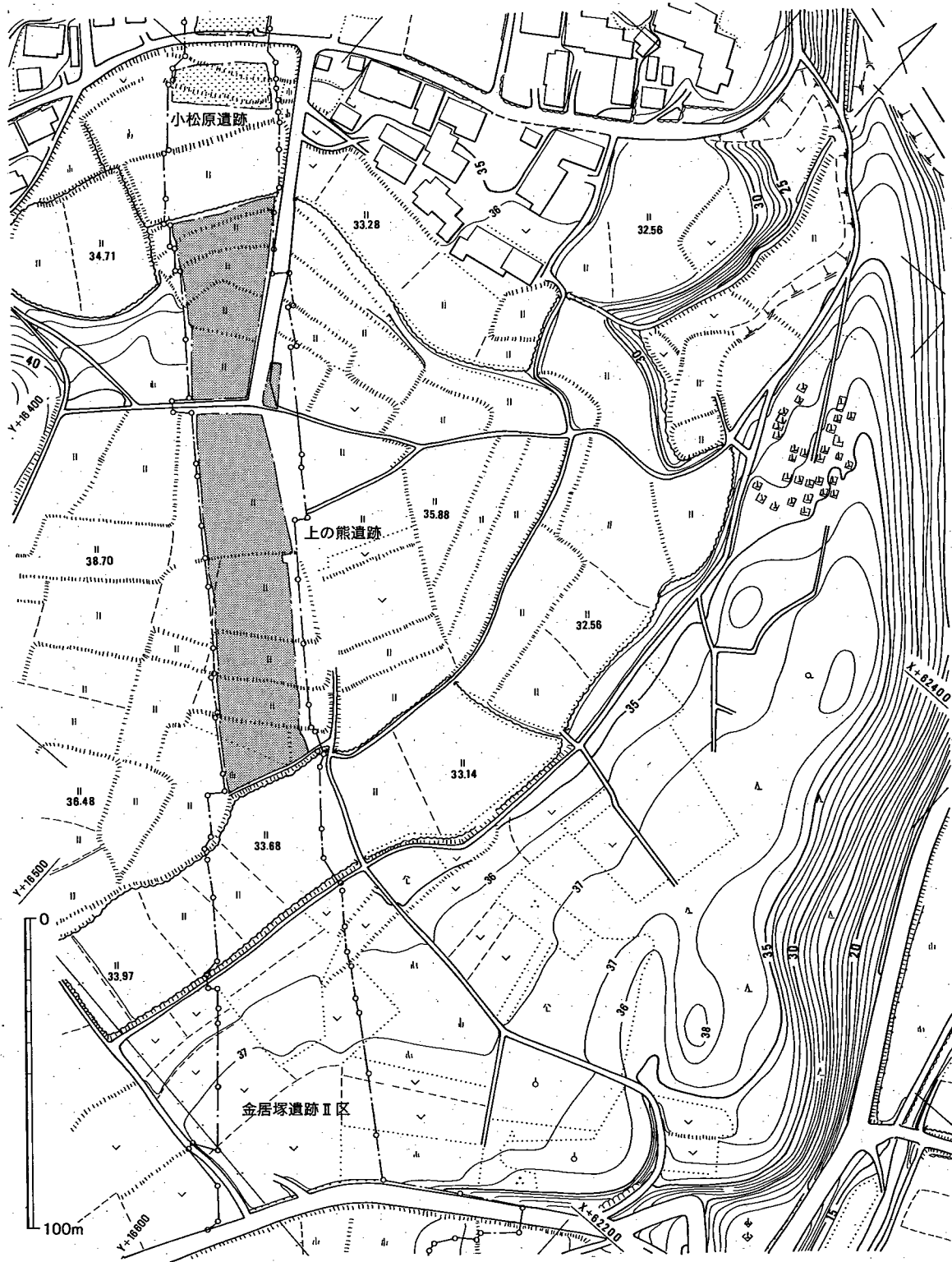
調査区の東側斜面で検出し、一部は調査区外へ続いている。確認できた規模は2×4間で、柱筋はほぼ等高線に並行する。

柱間は、梁行2.2m、西辺桁行がそれぞれ2.1、1.6、1.6、2.1mを測る。東辺桁行は3間を確認でき、それぞれ2.0、3.2mである。南端の柱間はほぼ同規模であり、それに続く東辺の1間は西辺の2間分の柱間距離にほぼ等しい。また、西辺ではそれに続く柱間が南端とほぼ同じ2.0mであり、中央2間を挟んで対象となることから、建物全体の規模も桁行4間であった可能性が高い。東辺の広い柱間の間には柱穴の痕跡がなく、ここは開け放たれていたようである。いささか特殊な構造であるが、ここに出入口があったものと思われる。

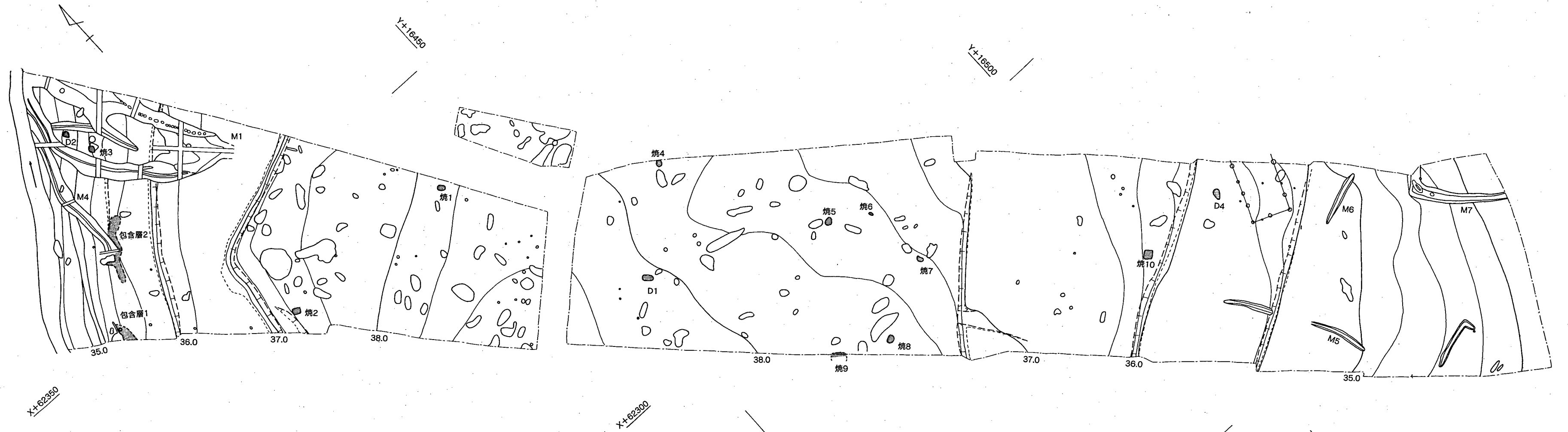
なお、柱穴掘形は直径0.4mほどの規模で、深さも同様である。柱の痕跡は径0.1m強に過ぎない。出土遺物として唯一梁行中央の柱穴から石鏃出土と記録するが、実物は所在不明である。

2) 土坑

調査区内で分散して2基の落とし穴状の土坑を検出した。ほかにも灰褐色の変色域が多数存在したためにそれらを一段掘り下げてみたが、確実に遺構といえるものはなかった。

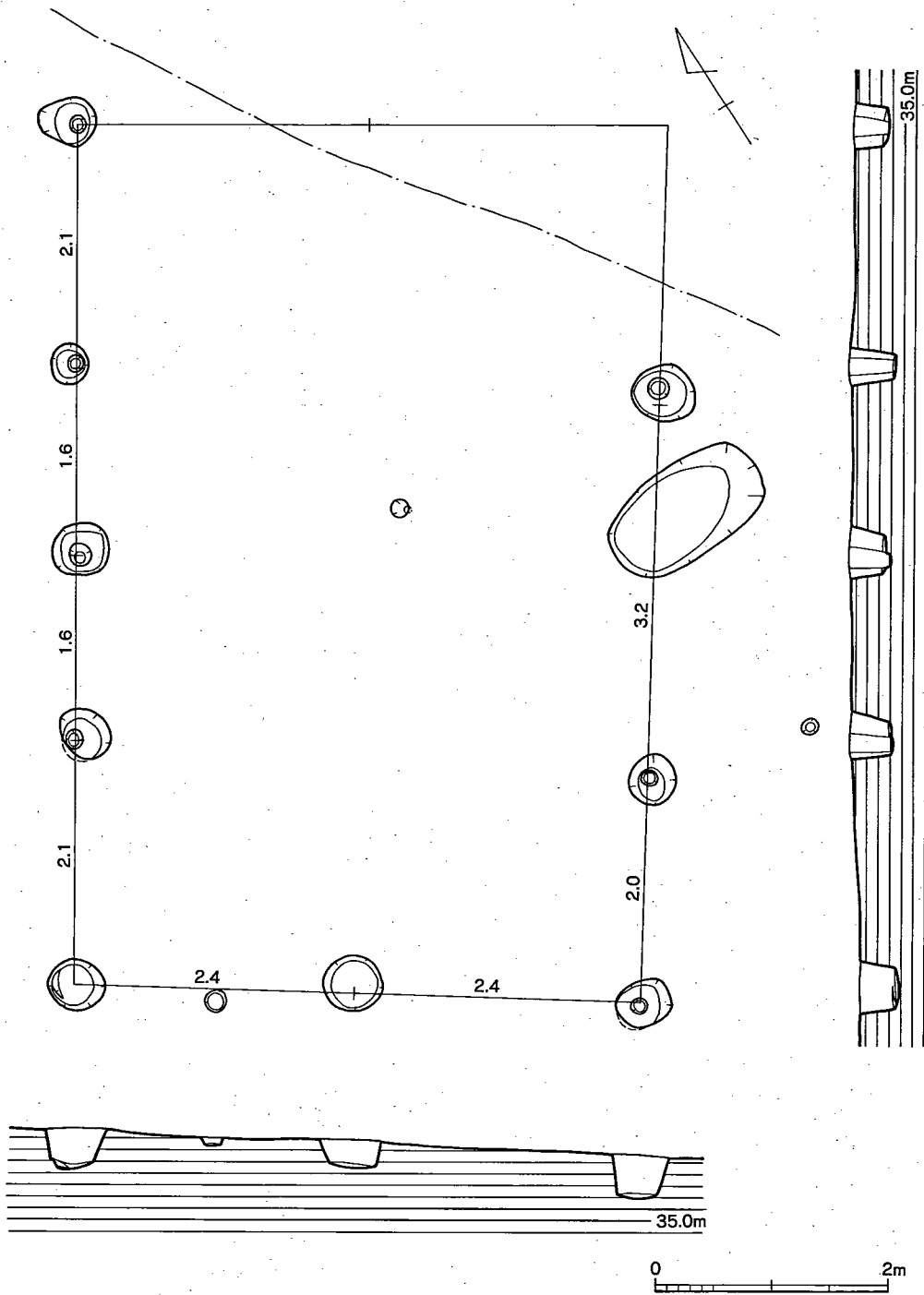


第1図 周辺地形図 (1/2000)

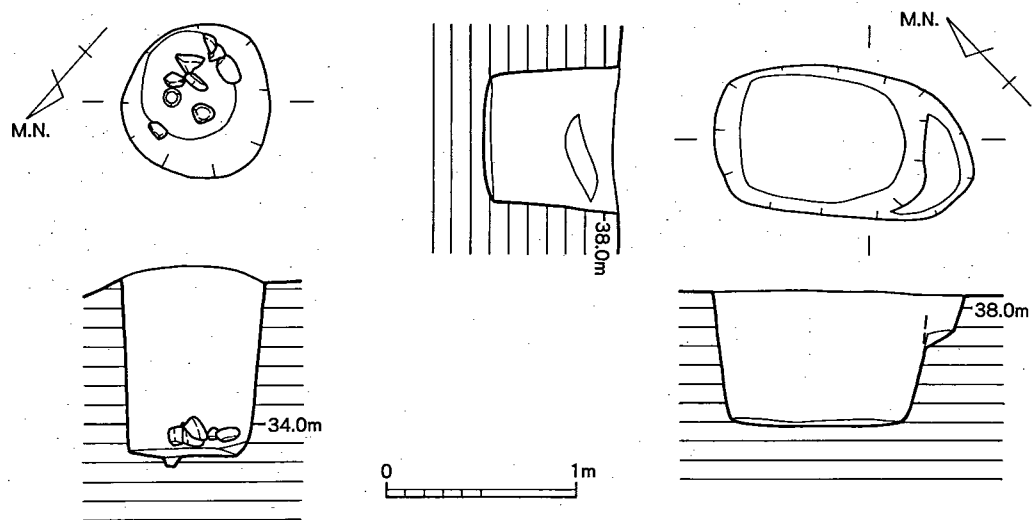


第2図 遺構配置図 (1/400)

0 50m



第3图 掘立柱建物跡実測图 (1/60)



第4図 土坑実測図 (1/40)

1号土坑 (図版3、第4図)

調査区西端付近、溝状遺構が複雑に走る中の斜面で検出した。

上端の平面プランは直径0.75~0.8mの円形に近く、下端のそれは径0.5mのやはり円形に近いプランとなる。深さは約1m。床面には拳大の小礫が散乱し、浅い小ピットが見られた。

出土遺物はない。

2号土坑 (図版3、第4図)

調査区を南北に横切る農道の東に位置する。張り出した階段状のテラスは発掘ミスであろう。本来は長軸1m強、短軸0.8mの隅丸長方形の平面プランをもつものと思われ、深さは0.7mが遺存する。

埋土は灰褐色の様な土で、分層が困難であった。出土遺物もない。

3) 焼土坑

調査区内で分散して10基の焼土坑を検出した。ここでいう焼土坑とは、壁が焼けて赤変する、あるいは埋土に炭や焼土を含むものをいう。

1号焼土坑 (第5図)

調査区を横切る農道北側で検出した。

平面形は長軸0.85m、短軸0.6m強の楕円形に近く、深さは0.1mを測る。検出面では上端の周囲約3cmほどの範囲が焼けて赤く変色する。床面は一部が変色するものの、壁体ほどには熱を受けていないようである。また、東南辺では還元して黒色化していた。

埋土は上層のほぼ半分に灰黄褐色土が覆い、下層には炭層が入る。

2号焼土坑 (図版4、第5図)

調査区西半部の中央付近南端で検出した。

長軸1.1m、幅0.6mの比較的大型の隅丸長方形プランを呈し、深さは最大で約0.2mを測る。埋土は上層に炭・焼土の小片を混入する灰黄褐色土が、下層に炭片を多く交えた黒色土が堆積していた。壁体は北側長辺の一部が、検出面から2~3cm下位まで焼けて変色するのみで、他の部位に変化は見られなかった。

この土坑で注目すべきは多数の炭の出土である。特に壁に近い床面付近で小さな板状の炭が多く検出された。しかし、必ずしも規則性を読みとることはできない。

3号焼土坑 (図版4、第5図)

1号土坑に近く、やはり溝状遺構の集中する付近で検出したもの。

これも平面形は炭丸長方形を呈する。規模は長軸0.8m強、短軸0.7m、深さ0.1m強である。壁体は四周ともによく焼けて変色しており、西辺ではオーバーハングしていた。床面は変色していない。

埋土は下層に炭混じりの層が、上層に茶褐色土が入っていた。

4号焼土坑 (図版4、第5図)

農道東側の調査区北端隅付近で検出した。

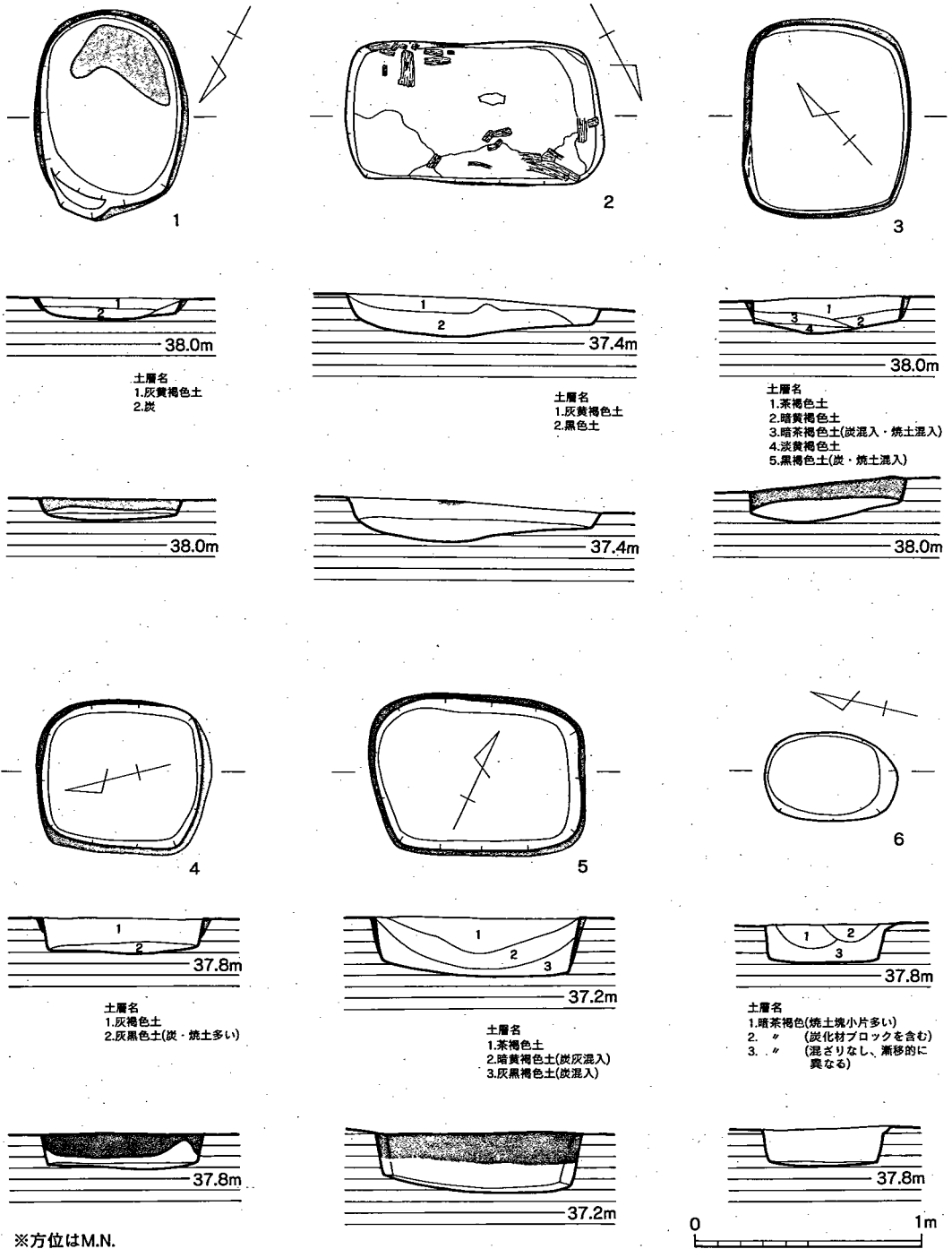
一辺0.7mほどの隅丸正方形に近い形態を呈し、深さは0.15mであった。壁体は四周ともに赤変するが、その下端から床面にかけては変色していない。その床面には炭・焼土を多く含む灰黒色土が薄く堆積していた。

5号焼土坑 (第5図)

4号焼土坑の南東で検出した。

0.9×0.7m弱の炭丸長方形平面を呈し、深さは約0.25m。これも壁体は2~3cmの幅で赤く焼け、特に壁面は硬くなっていた。

埋土はレンズ状に堆積しており、下層では炭が多く混入していた。



第5図 焼土坑実測図① (1/30)

出土遺物

最下層から土器片が1点出土した。胎土に石英・長石等を多く含み、茶褐色を呈する薄手の小片で、時期比定に足る特徴はつかめない。しかし、内面調整に篋削りが観察できることから、古墳時代のものかと思われる。

6号焼土坑 (第5図)

5号焼土坑の東に近接して検出。

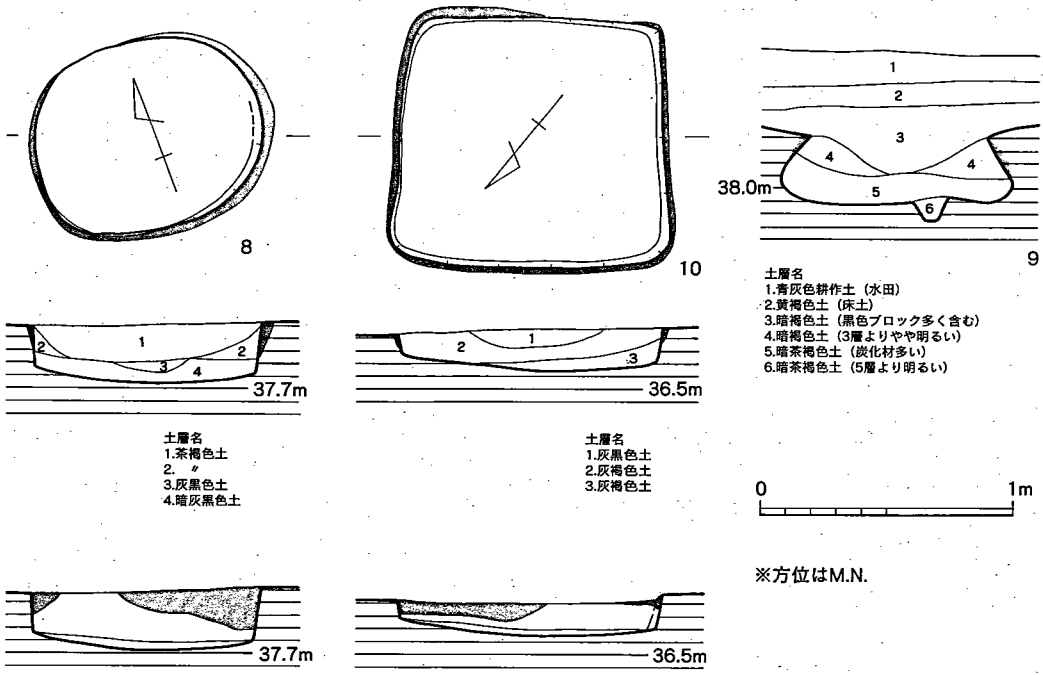
長軸0.6m弱、短軸0.4m弱の楕円形に近い平面プランを有し、深さは約0.15mであった。埋土は全体に暗茶褐色土を呈し、上層付近のレンズ状に堆積した部分にのみ焼土や炭が混入、下層にはそれらは見られなかった。これは壁体も変色しておらず、焼けた様子は見られない。

7号焼土坑

6号焼土坑の南に近接する位置で検出。

長軸約1m、短軸約0.5mの楕円形に近い形状で焼けて赤く変色した部分があり、こう称したが、壁体は残存しておらず、本来の形状は不明である。

8号焼土坑 (図版4、第6図)



第6図 焼土坑実測図② (1/30)

7号焼土坑の西側、比較的近い位置で検出した。

長軸0.9m、短軸0.75mの楕円形に近い平面形を有し、深さは0.25mを測る。上端周縁は幅5cm内外の範囲でよく赤変する。

埋土には、上層に炭を含む茶褐色土が、下層には炭を多く含む暗灰褐色土が堆積していた。

9号焼土坑 (第6図)

8号焼土坑の西に近接して、その一部を検出した。

調査区の周囲に重機を用いて排水のための浅い溝を掘削したが、その際にこの土坑を半裁し、壁面できちんと確認したものである。したがって平面形状は不明のままである。

断面形状はフラスコ状を呈し、床面の隅が丸みをもつなどほかの類似遺構とかなり異なる。壁体の上半が焼けて赤変し、埋土に隅を多く含む点は同様である。特に下層の暗灰褐色土中には多くの炭・炭化材(?)が含まれていた。床面の小孔中にも炭小片が落ち込んでいたが、本来的に付属するものか確認できない。

10号焼土坑 (図版4、第6図)

掘立柱建物跡の西で検出した。

一辺1m内外の比較的整った方形平面プランを有し、深さは約0.1mである。これも上端周辺は赤変するが、南東辺の一部で変色が見られない部分がある。また、壁面はほかと同様、上半部のみが変色し、灰色の硬化面となる。

埋土は、上層に灰黒色土、中層に灰褐色土が、そして最下層に炭混じりの灰褐色土が堆積していた。

4) 溝状遺構

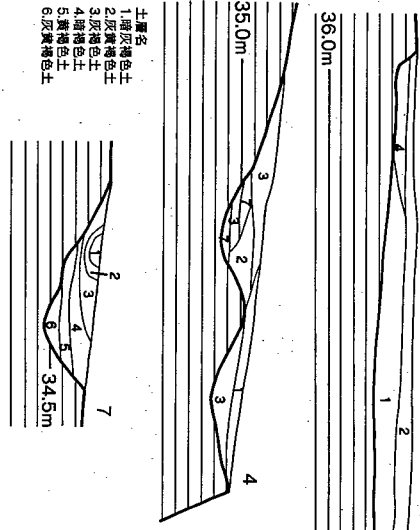
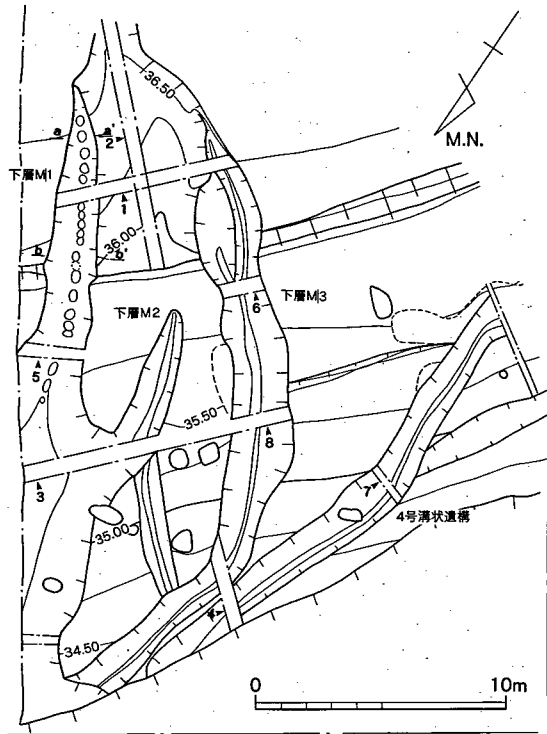
今回の調査で数条の溝状遺構を確認した。特に西側斜面で多く検出されている。

1号溝状遺構 (図版5・6、第7図)

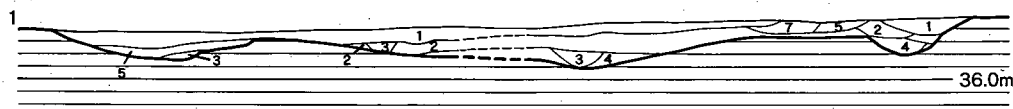
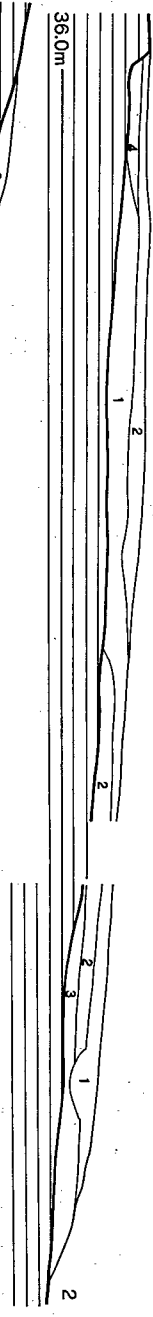
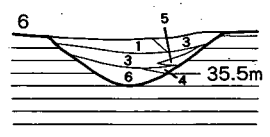
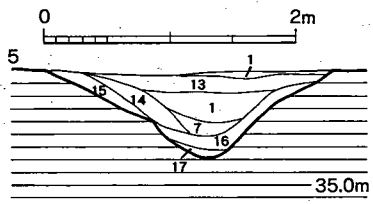
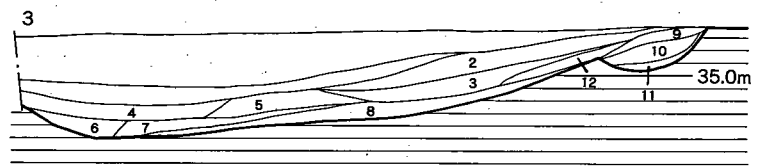
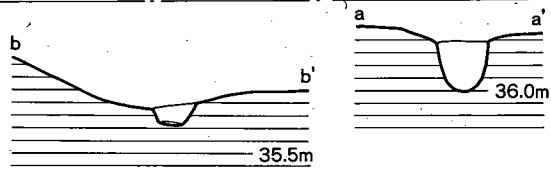
調査区北西隅にある遺構で、一部重複をする部分がある3条以上の溝状遺構を総称したものである。分別以前の埋土には網目文様を付した染付等の近世陶磁器があり、埋没時期は江戸時代後期頃かと思われる。最終的に判別できた遺構を北から下層M1、同M2、同M3とそれぞれ呼称して以下を続ける。

下層M1

その起点で下層M3と重複するが、その部分は非常に浅くなっており、切合関係等はわからない。この遺構を明瞭に判断できる部分から12m余の部分では断面形が緩やかなV字状を呈し、



- 土層名
- 1. 暗灰褐色土
 - 2. 灰褐色土
 - 3. 暗灰褐色土
 - 4. 灰褐色土
 - 5. 暗灰褐色土
 - 6. 暗灰色土
 - 7. 明灰褐色土
 - 8. 灰褐色土
 - 9. 暗灰褐色土
 - 10. 灰黄色土
 - 11. 暗灰黄色土
 - 12. 灰黑色土
 - 13. 灰褐色土 (かたい) = 9
 - 14. 3に似る
 - 15. 1に似る土
 - 16. 8より暗い同系の土
 - 17. = 8



第7図 調査区西端付近溝状遺構実測図 (1/300、1/60)

下端の判断が困難であり、かつ床面に径0.3m、深さ0.1~0.3mの円形ピットが連続して検出された。このピット中には暗灰褐色粘土が詰まっており、うちの2基を断ち割ってみたが柱等の痕跡は見出せなかった。しかし、形状や配置から見て人為的に掘削されたものとしてよからう。なお、ピットが途切れる付近から溝底の幅が広くなり、幾分傾斜が緩やかとなる。

埋土は下層付近にやや砂質の土が入り、中位に粘質土がはいるが、顕著な土層というものはない。道路遺構かと思われる。

出土遺物

土器 (第8図4)

土師器甕の小片。口縁部が直線的に外折し、口端部が水平な面となる。古代に属するものであろう。

石器 (第8図2)

淡灰緑色を呈する蛇紋岩系統の磨製石斧の刃部片。縄文時代の製品であろう。

下層M2

明瞭な掘り込みを確認できた部分の東に設定した土層 (第7図1) でもその痕跡は窺えるが、幅広く、浅いために平面的には検出できなかった。下層M1との切合を見るために設定した畦 (同3) では、下層M1に流入するようにその埋土にのる様子がみてとれた。その部分での幅は3m近い規模となる (M2新)。

また、同じ土層図の南西端にはそれに切られる古い時期の溝状遺構が表れており、その付近から北西に延びる溝に続くものであろう (M2古)。

下層M3

1号溝状遺構の起点付近ではやはり不明瞭であったが、途中から明瞭な形となる。これも2条の溝が重複するようだが、はっきりと確認はできなかった。下層M2・同M3と切り合うが、その先後関係も未確認。

出土遺物

土器 (第8図5・6)

5は須恵器甕の口縁部小片。端部は丸く、外方へ折り曲げるような形態となる。古墳時代後期から古代に属するものか。6は瓦器椀の高台小片。高台は断面方形に近く、器表は灰黄褐色、器肉は灰黒色を呈する。12~13世紀頃か。

石器 (第8図3)

この地方で縄文時代から弥生時代前期によく見られる緑泥変岩製の扁平打製石斧。基部を欠くようである。

4号溝状遺構 (図版1、第7図)

これも調査区北西隅にある遺構で、ほぼ南北方向に走る。幅約1.6m、深さ0.5mほどの規模で、断面はV字形に近い。

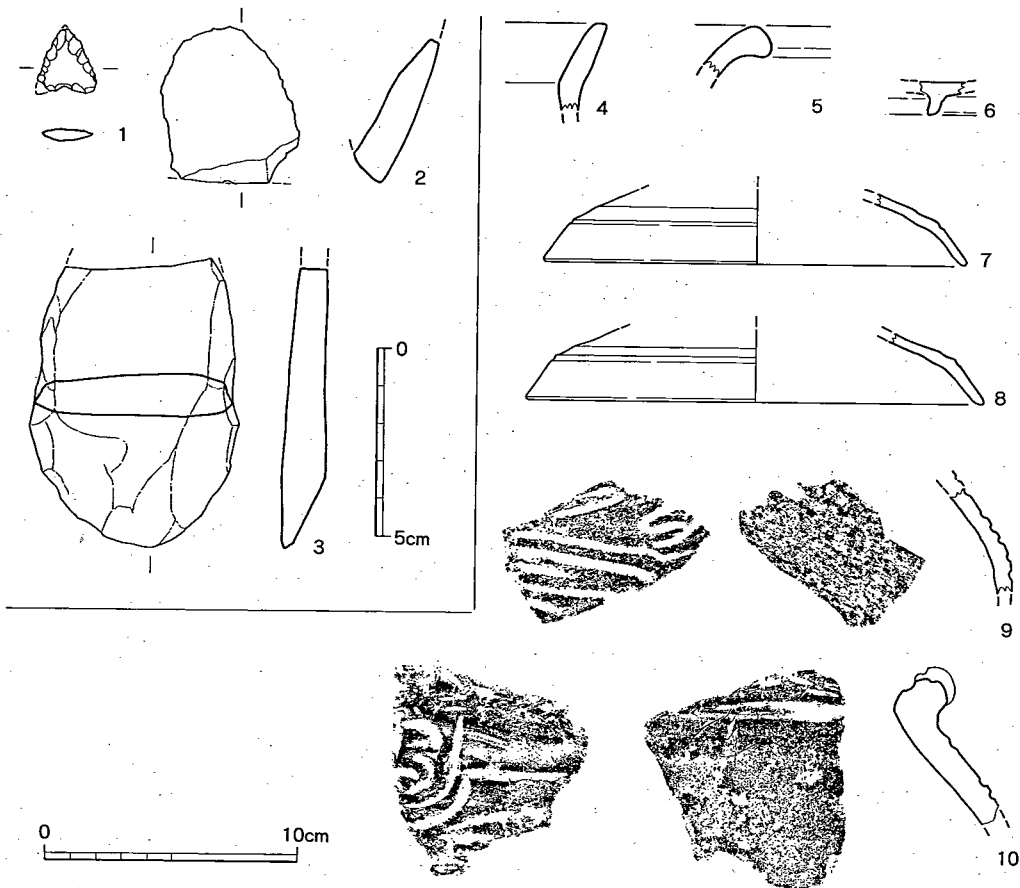
5号溝状遺構 (図版2、第1図)

調査区東端近くにある長さ7.5m、幅0.5m、深さ0.1m強の小規模な遺構。等高線に対して直行する方向に走るが、現状では畦畔等に合致していない。

暗茶褐色土が埋積し、須恵器甕小片が出土するが、時期等の判断は難しい。

6号溝状遺構 (図版2、第1図)

これも調査区東端近くにある長さ7m、幅1m弱、深さ0.1m強の小規模な遺構。茶褐色土が入



第8図 出土遺物実測図① (1/2、1/3)

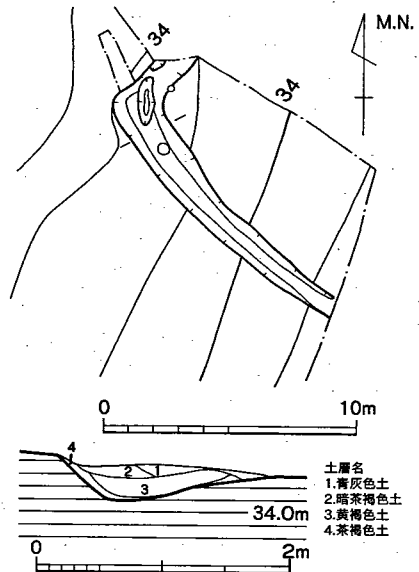
る。等高線に対して平行に走るが、これも現行の畦畔にはのらない。

出土遺物

瓦器らしき小片などが出土したが、石鏃を図示した。

石器 (第8図1)

ガラス質安山岩と思われる打製石鏃で、基部の一端を欠く。剝離の痕跡が非常に判別しづらく、十分な図化を行えなかった。図示した面は比較的平坦な面であるが、背面は厚みをもつ。



7号溝状遺構 (図版2、第9図)

調査区東端にある遺構で、L字形に屈曲する。幅は最大で1.5m強、深さは0.4mほどの規模である。埋土はさして新しそうな土ではなかったが、この位置は現状の畦畔に合致することから、比較的新しい時期の遺構かと思われる。

第9図 7号溝状遺構実測図
(1/300、1/60)

出土遺物は須恵器小片若干があるが、時期比定は難しい。

5) その他の遺構と遺物

4号土坑 (第1図)

掘立柱建物跡の北西3mの位置に近接する不整形土坑。長軸1.5m、短軸1m、深さは0.1mに満たない浅いものである。調査時は遺構と判断しかねる落ち込みであり、図化を行っていない。

出土遺物

若干の須恵器・土師器の小片が出土し、そのうちの須恵器を図示した。

土器 (第8図7・8)

天井部・口縁部界に甘い段を付して小さく屈曲する形態の、いずれもよく似た杯蓋。小片のため、復原口径にやや難があるが、17~18cmにおさまるようである。

縄文包含層

調査区西端付近で検出した包含層である。広がり小さく、出土遺物も乏しいが図示したような遺物が出土している。

出土遺物

土器 (第8図9・10)

9は灰褐色を呈し器表が荒れて調整痕は不明である。縦方向のS字状の文様と横方向の直線的な文様が見える。いずれも幅広く、深い。表面に長石や角閃石が多く浮かぶ。10は灰黄褐色を呈し、外面はよく残る。口縁部は直角に近く外彎し、頂部に渦巻文らしきがあるが、その部分は剝離してはつきりしない。頸部文様帯は磨きで仕上げるようで、施文は深くなされる。いずれも縄文後期のいわゆる鐘崎式に属するものである。

表採遺物

剝片尖頭器 (巻頭図版、第10図1)

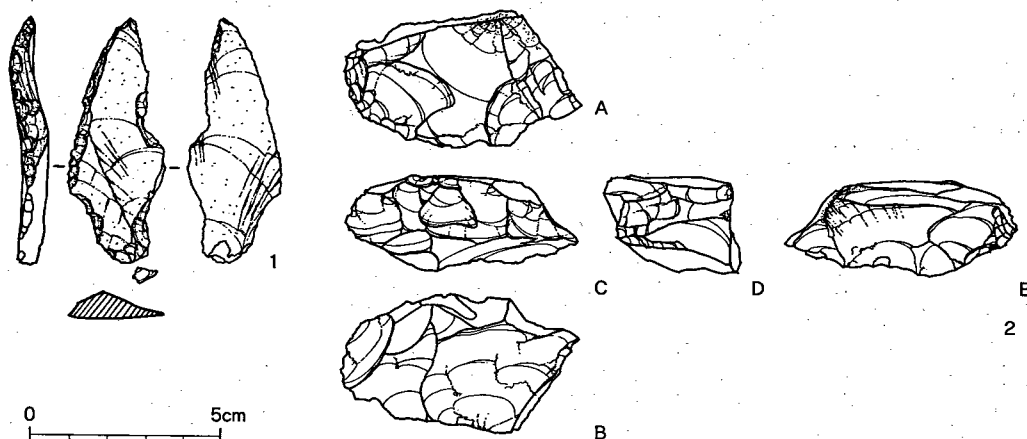
縦長状剝片を素材とする。剝片は平坦打面を有し、ネガ面、ポジ面ともほぼ同一方向からの剝離作業が行われている。打点は打面の一部が欠損しているために明確ではない。基部には両側縁よりノッチ状の二次加工が行われており、柄を作り出している。ブランディング加工は左側縁全体に行われる。

打面を残し、ノッチ状加工を施す点ではいわゆる剝片尖頭器の概念に含まれるものである。長さ65mm、幅26mm、厚さ7mmの大きさ。 (栗焼憲児)

石核 (巻頭図版、第10図2)

チャート系の石材を用いている。A面を最終打面とし、C面を作業面として最終の剝片剝離を試みるがすでに目的剝片はえられていない。E面を打面としてB面でえられた剝片は目的剝片となりえている。C面を打面としてA面でも剝片の剝出を試みているが、基本的に打面を移転しながら目的剝片を剝出するいわゆる多面体石核と考えられるが、最終の段階となっている。

(栗焼憲児)



第10図 出土遺物実測図② (1/2)

3. おわりに

本遺跡は面積に比して内容は豊富なものではなかった。しかし、長期にわたって人々が生活あるいは利用していたことが判明した。遺構の密度はおそらく江戸期以降の開発によって多くが失われた結果であろう。

旧石器時代の遺物は隣接する金居塚遺跡や桑野遺跡などの洪積台地上の遺跡から採集されているが、まとまりは乏しい。しかし、この上の熊遺跡でも図示した以外に黒曜石ではない乳白色・赤褐色等の色鮮やかな石材の薄片が数点出土しており、尖頭器の出土が決して偶然の結果でないことは間違いない。それは隣接する金居塚遺跡でも同様であり、該期の土層が良好に保存されている古墳の下層などで、今後の遺構・遺物が発見される可能性は高い。

縄文時代の遺構・遺物についても同様に今後に期待するところが大きい。が、本遺跡の東眼下の自然堤防上に位置する上唐原遺跡では縄文後期の住居跡や多くの遺物が出土しており、この台地上はもっぱら狩猟・採集のフィールドとして利用されていたのであろう。

わずかに1棟が確認されたに過ぎない掘立柱建物跡は、時期比定が困難であるが、近接する4号土坑が無関係でないとして仮定すればほぼ6世紀後半頃に存在したものと推測される。ちょうど、金居塚遺跡周辺で古墳の築造が活発化する時期であり、遺構密度の希薄さは古墳との関係の薄からぬ特殊な事情を暗示しているのかも知れない。

多く検出した焼土坑については性格・時期ともにはつきりしないままである。しかし、3号焼土坑は1号溝状遺構下層遺構の間にあり、遺構の時期の手がかりを与えてくれる。これらの溝はおそらく江戸後期にはすべて埋没していたようで、それは開墾によるものであろう。また、この調査区が水田化した時期は比較的新しいといい（ちなみに水源となる大池は明治42年に完成をみる）、そうであれば、この3号焼土坑は溝状遺構が掘削される以前、あるいは埋没以降～水田化する間の時期のものと思われる。5号焼土坑床面付近からは土器小片が出土しており、胎土などから見て古墳時代のものである可能性が高い。ただ、類似する遺構が金居塚遺跡の古墳周辺でも検出されている。金居塚遺跡やこの上の熊遺跡での分布の在り方からみて古墳との強い結びつきは考えられず、そうすれば古墳と同時期とも考えがたい。

いずれにしても赤変や硬化の度合いから見て、決して長期に使用されたものではなく、むしろごく短期間で廃棄されたものとの印象を持つ。あるいは単なる焚火ごみあなの類であるのかも知れないが、今後の資料の増加・科学的手法での性格解明に期待したい。

最後になったが、出土石器について豊前市教育委員会栗焼憲児氏の多大な協力を得た。謝意を表す。

圖 版



1 調査区西半 (南東から)



2 調査区西半 (北西から)



1 調査区東半（北西から）



2 調査区東半（南東から）



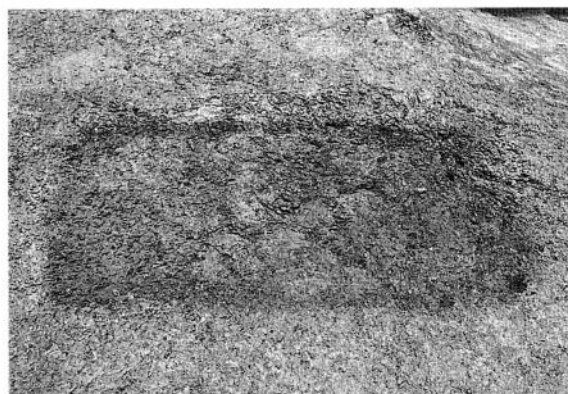
1 掘立柱建物跡（北西から）



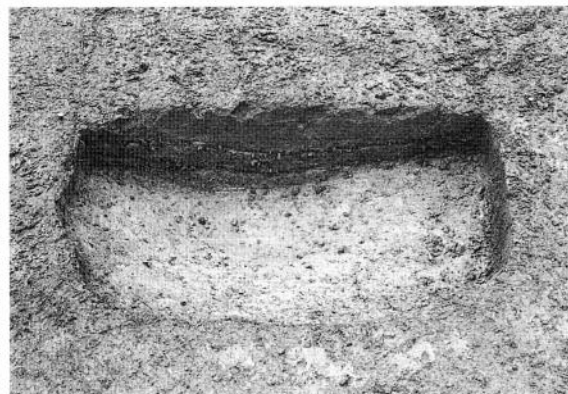
2 1号土坑（南西から）



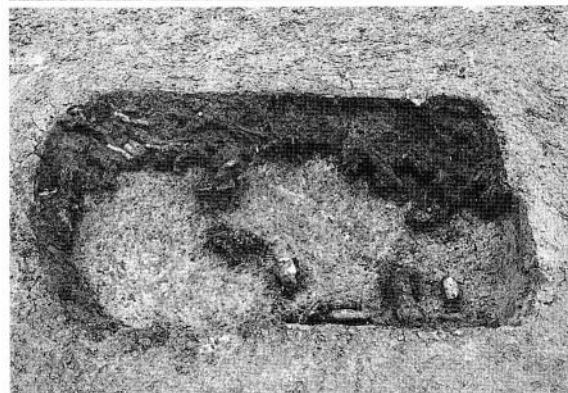
3 2号土坑（南東から）



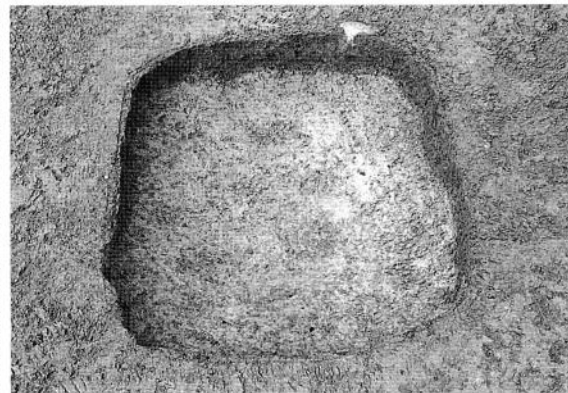
1 2号焼土坑（北東から）



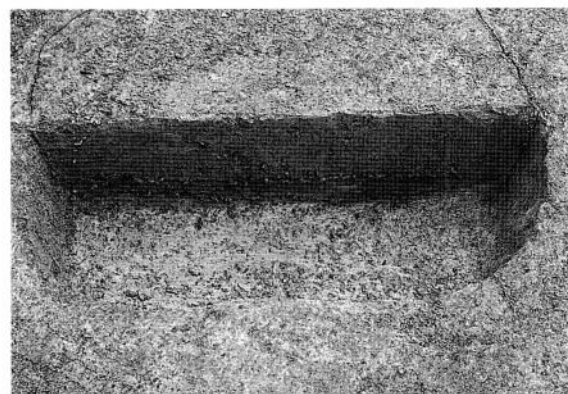
2 3号焼土坑（南西から）

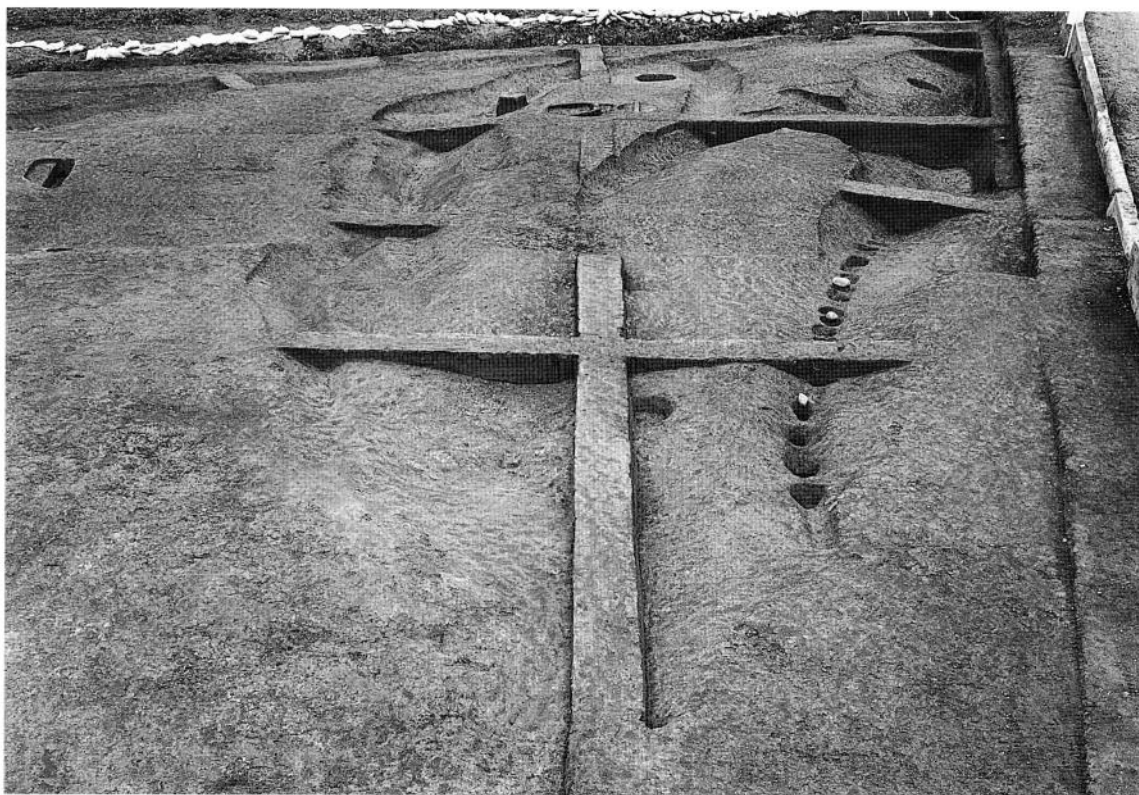


3 4号焼土坑(上：西から)、8号焼土坑（南から）

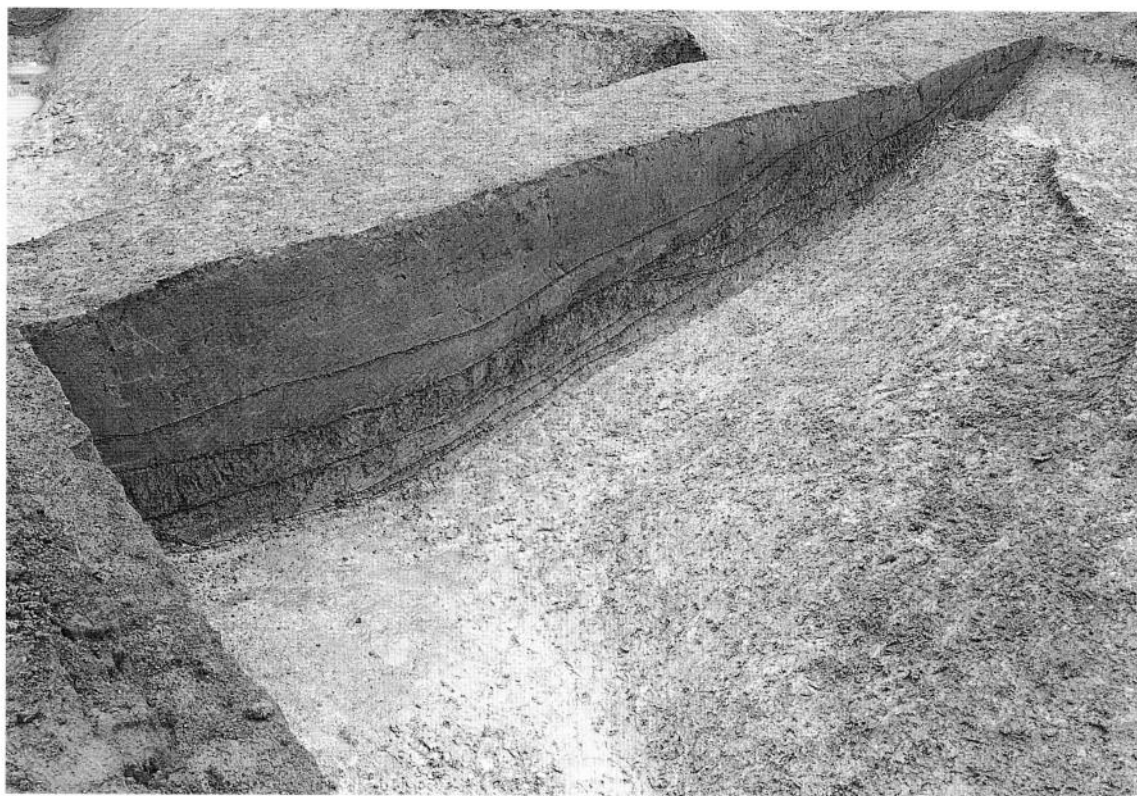


4 10号焼土坑（北西から）

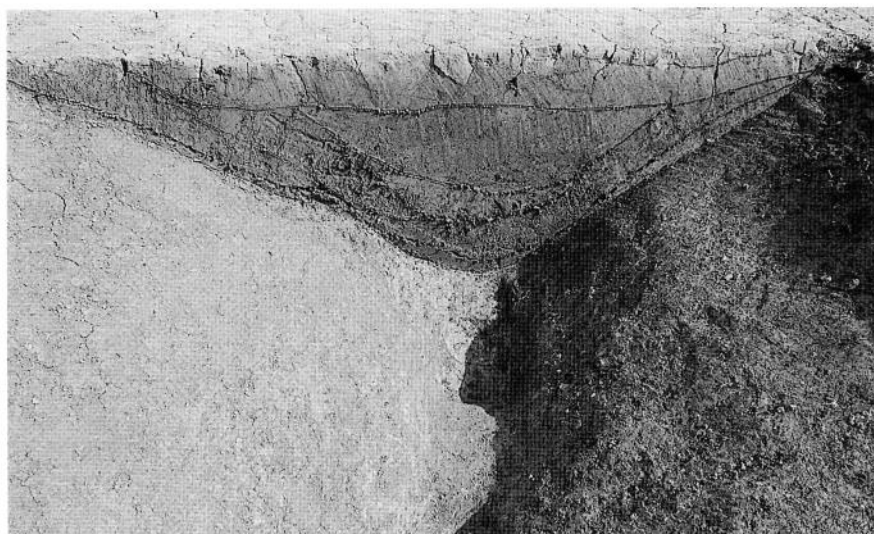




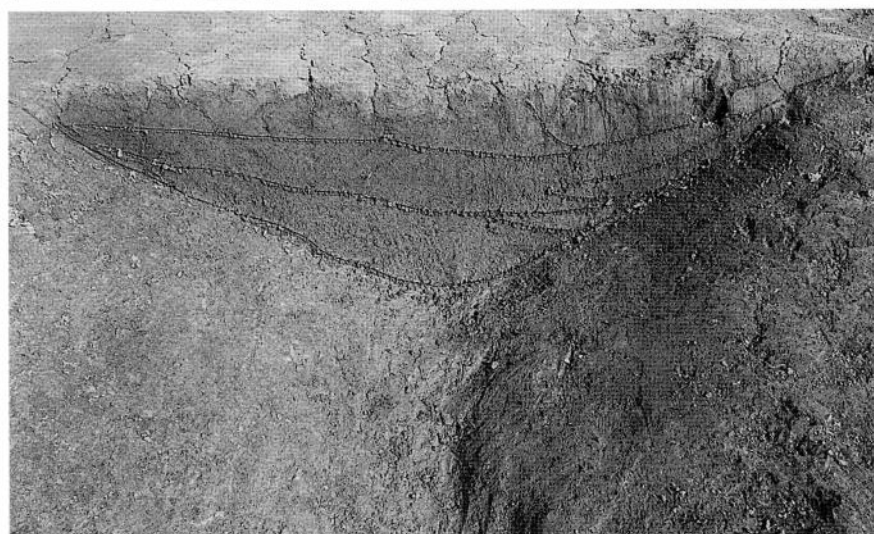
1 1号溝状遺構 (南東から)



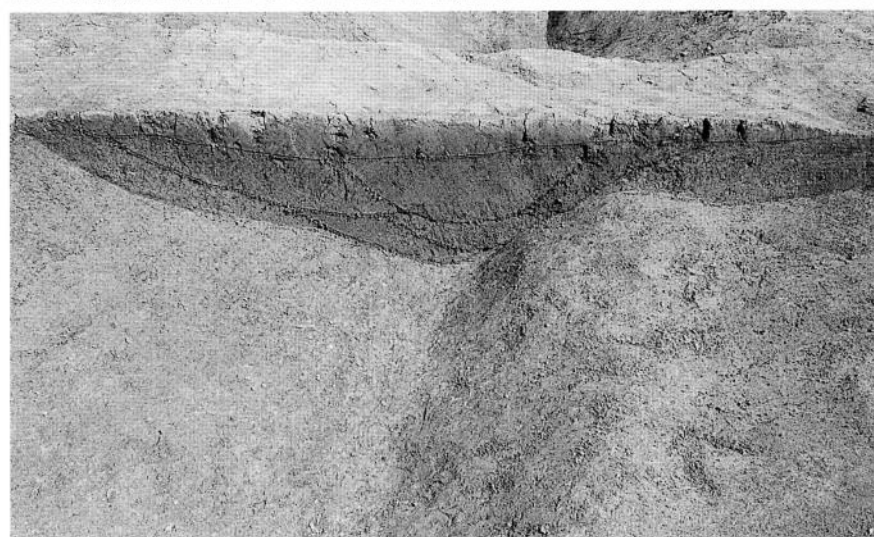
2 下層M1・M2土層 (北から)



1 下層M1土層5
(北西から)



2 下層M3土層6
(北西から)



3 下層M3土層8
(北西から)

こまつぼら
小松原遺跡

1 はじめに

小松原遺跡は大平村大字下唐原字上野地に所在する。大平村と南の大方県下毛郡耶馬溪町・本耶馬溪町との県境をなす分水嶺の一部大平山(597m)から北東に舌状に延びる尾根の先端部付近にあたり、標高34~37mの範囲に立地する。

調査区は、豊前バイパスの路線のうち概ね二級村道下田井・下野地線と二級村道能満寺・野地線の上に挟まれた部分約250m分の区間である。道路幅員は平均25mであるが、盛り土部分の法面確保のため、調査区幅は最大45mある。調査区のほぼ中央部は試掘調査の結果遺構の存在が認められなかったため、ここを排土置き場として、残り約6,300m²を調査対象地とした。

平成3年1月14日に重機による表土の除去作業を開始し、1月21日から作業員を投入し、5月1日に器材を撤収してすべての作業を終了した。

調査中は大平村教育委員会を始め地元の方々には様々な形でお世話になった。また、報告書作成にあたって、近世陶磁器に関して大橋康二氏(佐賀県立九州陶磁文化館)には多大なご教示を受けた。なお、調査作業に直接従事していただいた地元の方々には以下の通りである。

豊永安実 東正吉 末松小須美 藤田美子 高野夏子 原田綾子 藤本貞子 藤本真由美
室谷サツキ 原田和代 岡田美代子 野上リツエ 奥野テルヨ 是石美知子 中村サザコ
東ミサコ 八坂初子 八坂美津子 大平久子(順不同 敬称略)

2 遺構と遺物

検出した遺構・遺物は、夜白期のものから近世・近代にまで及ぶものまでがある。しかしながら、遺構の密度の点では試掘調査時の予想に反して低いものであった。以下順に説明をおこなっていくが、便宜的に中央の排土置き場より北西部分(I区)と南東部分(II区)に分けたい。

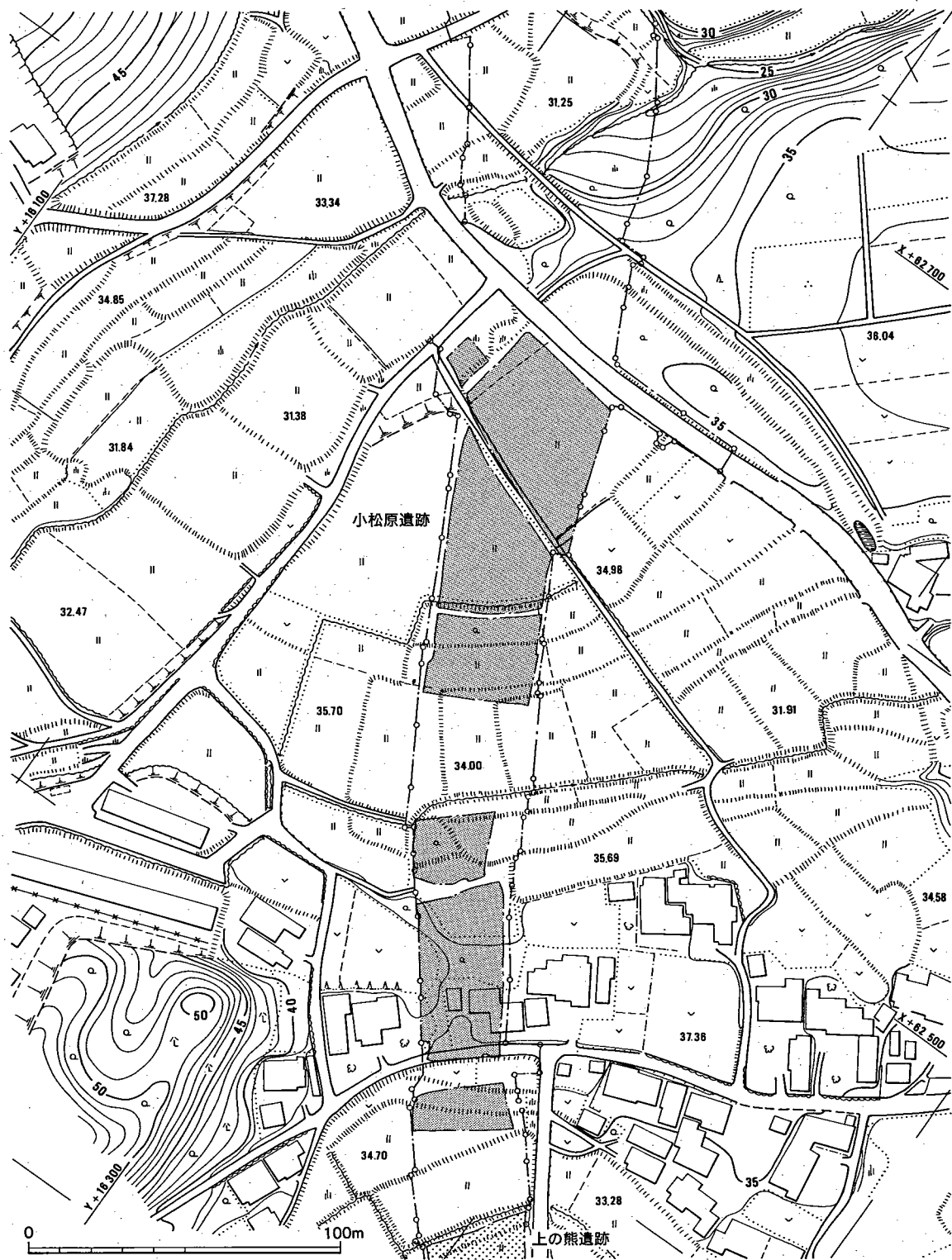
1) 土坑

1号土坑(図版2、第3図)

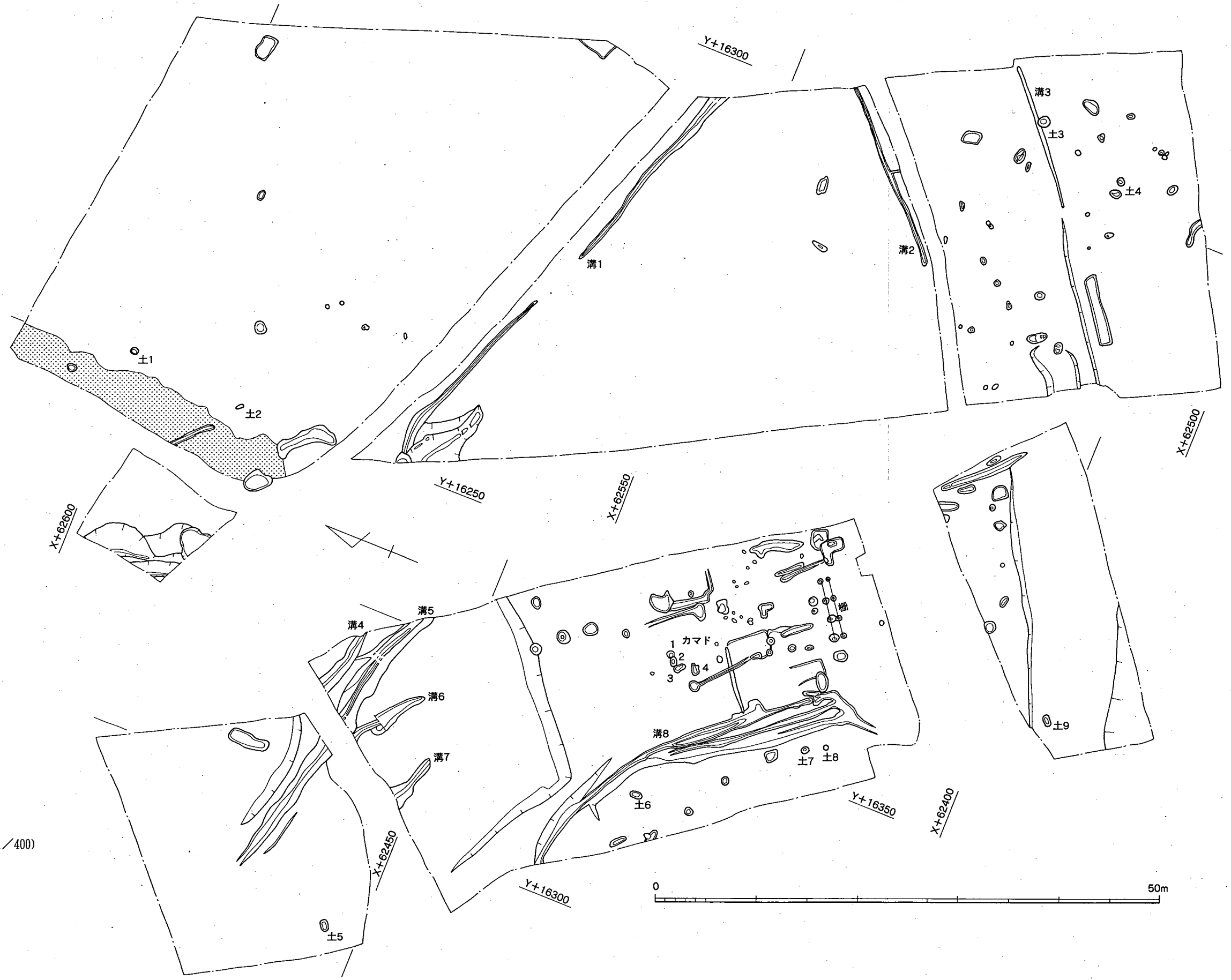
I区北西隅付近で検出した土坑。平面形は楕円に近い不整形で、上縁で長さ66cm、幅55cm、深さ12cm。埋土には炭化物粒を多く含み、土坑周縁肩部が焼けている、いわゆる焼土坑である。

2号土坑(図版2、第3図)

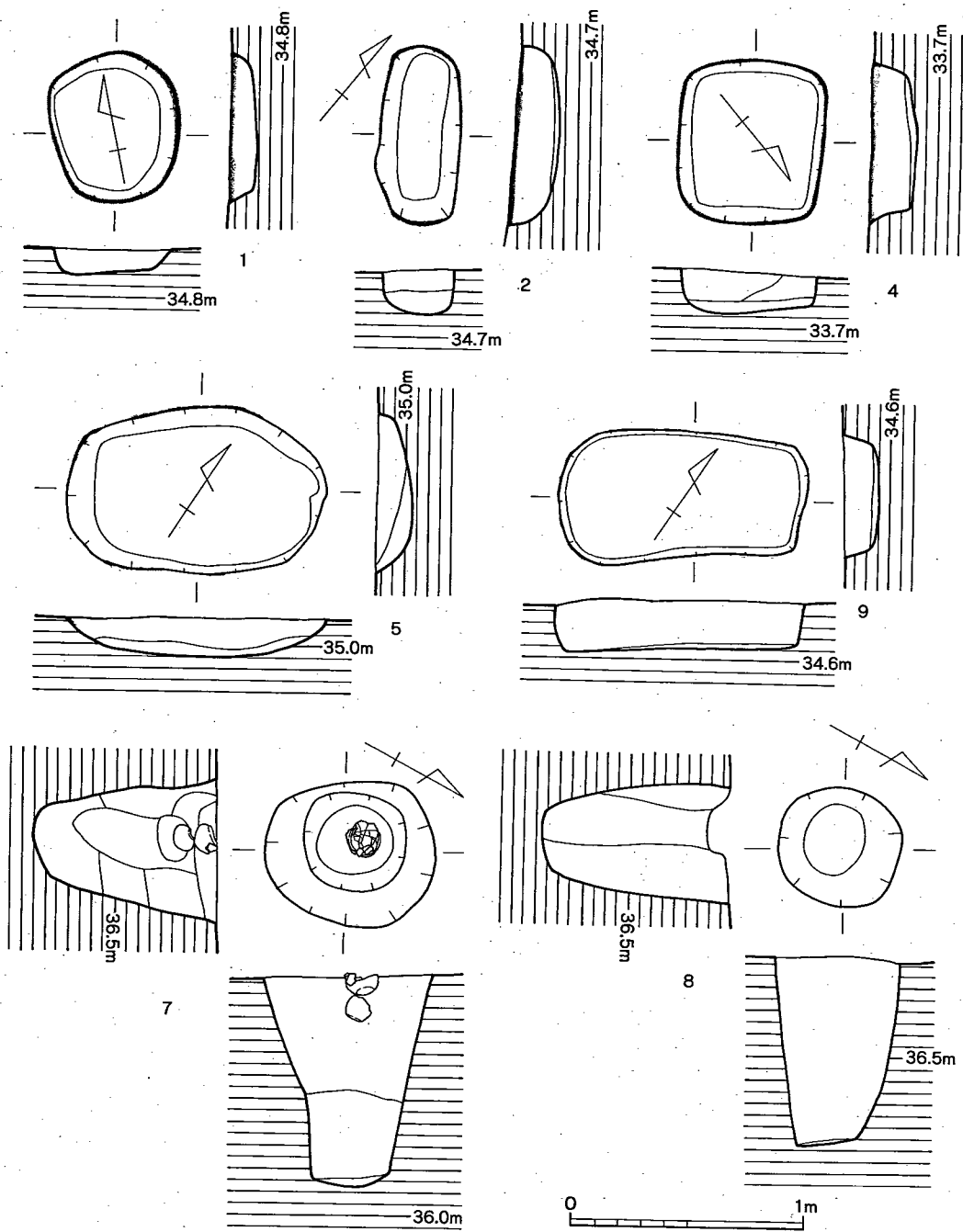
1号土坑の南11.5mの位置にある。平面形は長楕円形で、長さ77cm、幅34cm、深さ19cmで、



第1図 周辺地形図 (1/2000)



第2図 遺構配置図 (1/400)



第3图 1·2·4·5·7~9号土坑实测图 (1/30)

底面に若干丸味を持つ。1号土坑と同じく土坑周縁肩部の焼けた焼土坑である。

3号土坑 (図版3、第4図)

I区南東部で検出した。土坑の北西部分を細い溝で切られる。楕円形の平面形で、上縁で長さ126cm、幅98cm、底部では長さ67cm、幅60cm、深さは76cmで、底部中央に更に径17cm、深さ19cmの小ピットが掘り込まれている。落とし穴状の土坑である。

4号土坑 (図版3、第3図)

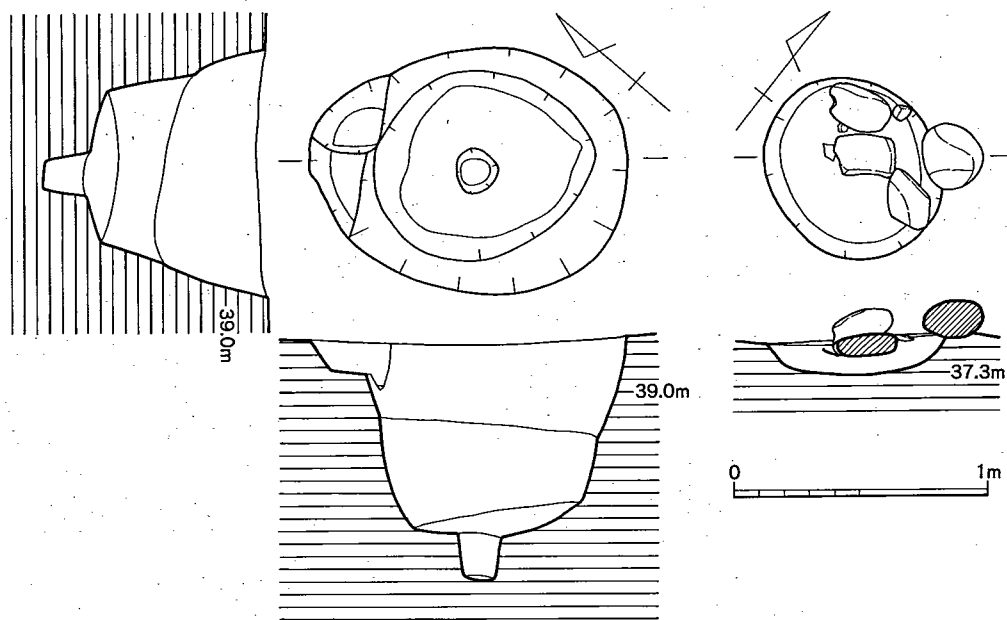
3号土坑の約9m南側に位置する。平面形は正方形に近い隅丸長方形で、長さ70cm、幅62cm、深さ19cm。焼土坑。

5号土坑 (図版4、第3図)

II区北西部で検出した焼土坑である。不整楕円形の平面形で、長さ113cm、幅72cm、深さ16cm。底部と壁面の区別は明瞭でなく、丸味を持っている。

6号土坑 (図版4・5、第4図)

II区のほぼ中央部の、5号溝で区画された段上に位置する。平面形は円形に近い楕円形で、長さ74cm、幅66cm、深さ13cm。土坑内と縁部から20~30cm大の自然石が計4個検出された。



第4図 3・6号土坑実測図 (1/30)

石の入り方に規則性は認められない。

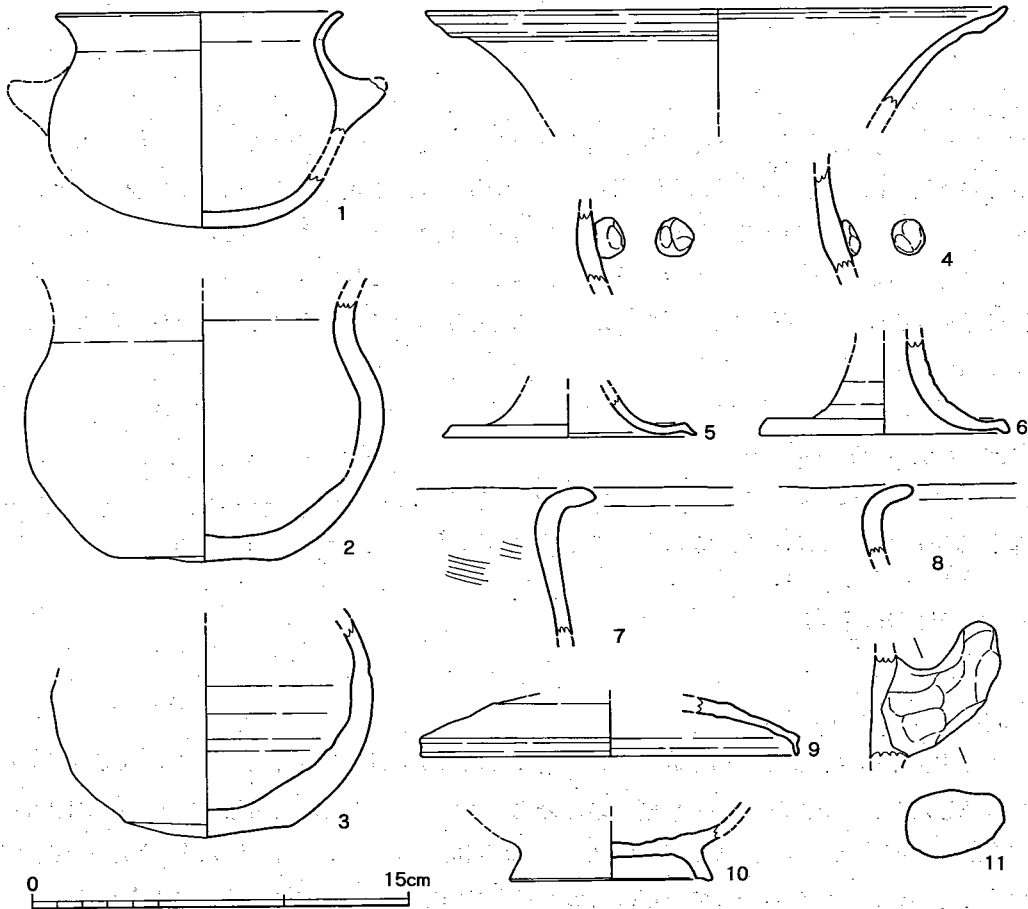
7号土坑 (図版5・6、第3図)

6号土坑と同じ段上にあり、6号土坑から南東に約8m離れて位置する。卵形の平面形で、上縁で長さ73cm、幅64cm、底部では長さ33cm、幅30cmとなり、深さは92cmある。土坑の埋土上層からは須恵器壺2点が上下に重なって出土したが、土坑の断面土層を観ると柱痕跡状の層位が認められ (図版6、第3図)、2個の壺はその上に置かれた状態になっている。これが柱痕であるとするならば、柱を抜くかまたは切るかした後に、柱の位置に壺を重ねて置いたものと考えることができる。

出土遺物 (図版10、第5図)

須恵器

壺 (2・3) 土坑埋土中より上下に重なって出土した壺である。2は2点のうち上にあつた土



第5図 出土土器実測図① (1/3)

器で、頸部から口縁部が失われている。底部は平底で、胴部の最大径は中位よりやや上にあり、14.2cm。焼成が不良なために脆く、器面の風化が目立つ。器面調整は胴部上半から頸部が回転ヨコナデ調整である以外は、剝落しており不明。灰白色を呈する。3は下の土器で、胴部中位より上は失われている。2とはほぼ同じ器形と思われるが、最大径が胴部中位にあり、12.8cm。2と同質で、器面の風化のため調整は不明。

甕(4) 同一個体と思われる口頸部から肩部の破片数点である。口縁部は外側を肥厚させるが、端部をシャープに仕上げる。釘状の装飾の付いた破片2点は肩部のものであろう。やはり焼成が不良な軟質で、灰白色を呈する。

土師器

甕(1・7・8) 1は把手付きの小形甕。短い丸底の胴部に、短く開く口縁部が付く。復元口径21.4cm、器高8.6cm、胴部最大径11.6cm。7・8はほぼ同一器形で同一個体の可能性もある。口縁部から胴部上位の破片で、口縁部は屈曲して広がる。7の胴部内面は横方向の刷毛目調整を施し、外面はナデ調整。

8号土坑(図版5・6、第3図)

7号土坑の約1.5m南東側に位置する。平面形は7号土坑とはほぼ同形であるが、一回り小さく上縁で長さ54cm、幅52cm、底部で長さ25cm、幅31cm、深さ81cmとなる。断面土層を観ると、同じく柱痕跡状の層位がある(図版6、第3図)。7号土坑と8号土坑は、土坑形状・埋土の状況・土坑底の高さが揃っている事等から一連のものと考えることができる。柱掘形と考えれば、柱間は220cmであるが、掘形を2箇所では検出し得なかったことから、建物なり柵なりと考えるには無理があろう。

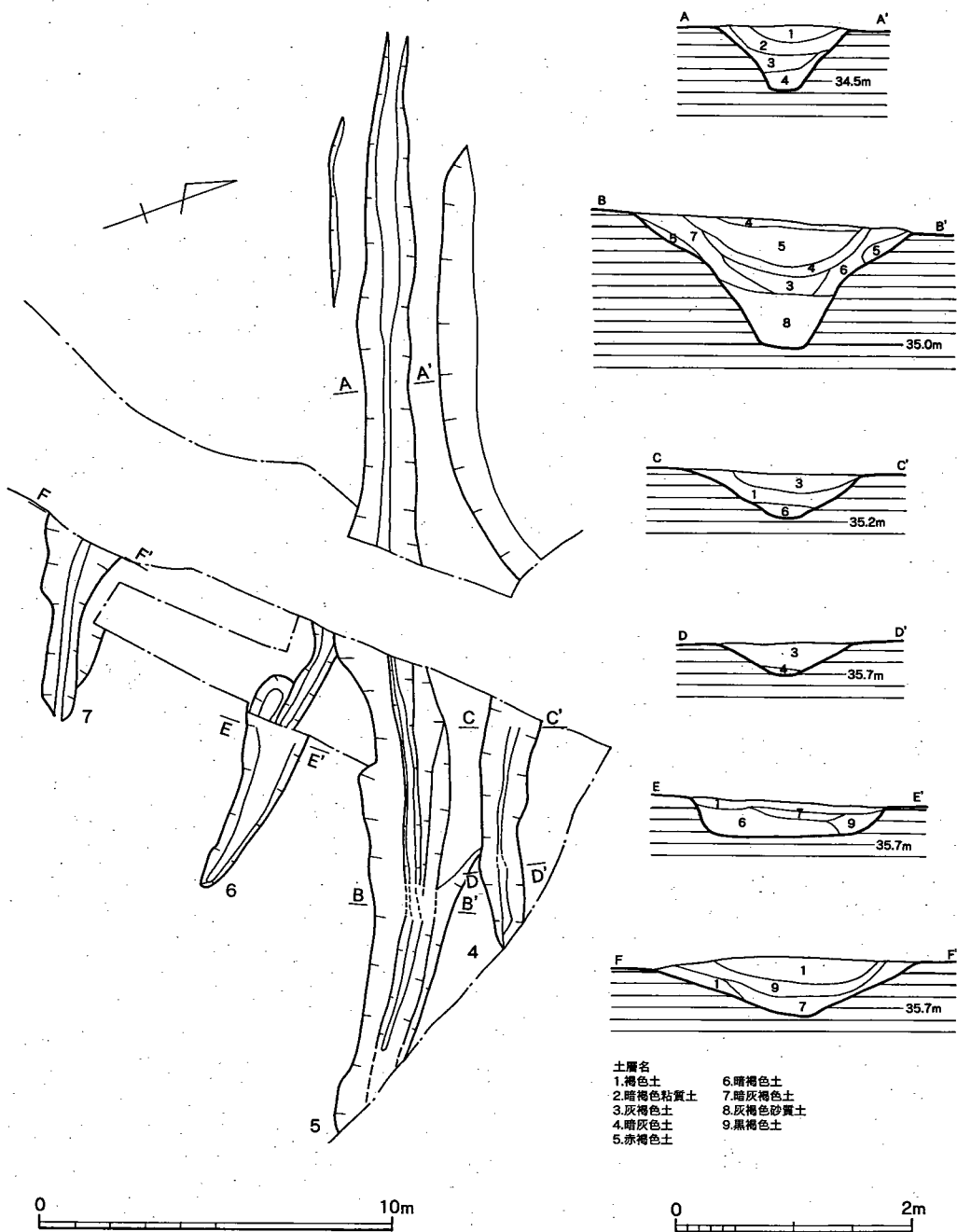
9号土坑(第3図)

Ⅱ区の南西端に位置する。平面形は丸味を持った隅丸長方形で、上縁で長さ103cm、幅55cm、深さ22cm。土坑底には炭化物が堆積し、土坑の周縁肩部が焼けた焼土坑である。

2) 溝状遺構

1号溝状遺構(第2図)

I区中央部の現在まで使用された農道に沿って南東から北西に延びる。調査区内で約47m分を確認したが、中央部分約6m分は削平のため途切れている。遺構は両端部分は最大幅約120cm、深さ30cmが残るが、中央部では幅20~30cm、深さ10cm程と細くなる。溝は中央部が途切れてはいるものの、位置からいって一連のものと考えて問題ないと思われるが、高さをみると中央



第6圖 4~7号溝状遺構実測図・土層図 (1/200、1/60)

部が高く、両側に向かって低くなっている。用水路というよりも地境の排水溝であった可能性が高い。

2号溝状遺構 (第2図)

I区南東寄りの現在まで使用された用水路に沿って南西から北東に延びる。幅30~40cm、深さは5cm内外で、南西が高く北東が低い。

3号溝状遺構 (第2図)

I区の南側に位置し、3号土坑を切り、南西から北東に延びる。幅20cm、深さ5cm程。この場所は用地買収以前は1枚の田地のほぼ中央にあたるが、周辺の畦畔の状況をみると、もとの溝に沿って畦畔があり2枚の田地であったものを合わせて1枚にした可能性がある。

4号溝状遺構 (第6図)

II区の北西側ではほぼ平行する4条の溝状遺構を検出した。4条とも南東から北西に向かって低くなる。4号溝状遺構はそのうち最も北東側のものである。調査区内で約7m分を検出した。幅90~120cm、深さは最大で約40cmで、断面は逆台形を呈する。

5号溝状遺構 (図版7・8、第6図)

4号溝状遺構の南側に位置する。南東の調査区外から北西方向に延び、現在の用水路のために調査ができなかった部分を挟んで、約30m分を検出したところで削平され途切れている。幅は最大で約250cm、深さ155cmで、断面はV字形を呈するが、底部に幅15~20cmの人が歩ける程度の平坦面を持つ。また、壁面は中位で傾斜が変わり二段掘り状になる。一見すると弥生時代の環濠を連想する迫力がある。埋土最上層から出土した遺物の示す年代は、幕末から明治・大正期であるが、古墳の周溝でも現在まで窪みとして残っている例があることを考えれば、これらの遺物は必ずしも遺構の年代を示すとは限らない。

出土遺物

日本製陶磁器 (図版10・11、第7図)

染付

皿 (6) 口縁部は輪花に仕上げ、見込にはハリ支えの痕跡が残る。見込の文様は冊子と扇面。幕末の肥前系のもの。

猪口 (12) 口縁部がわずかに外反する。体部外面には銅板転写によって丸文とたこ唐草を描く。明治~大正期の瀬戸・美濃系。

6号溝状遺構 (第6図)

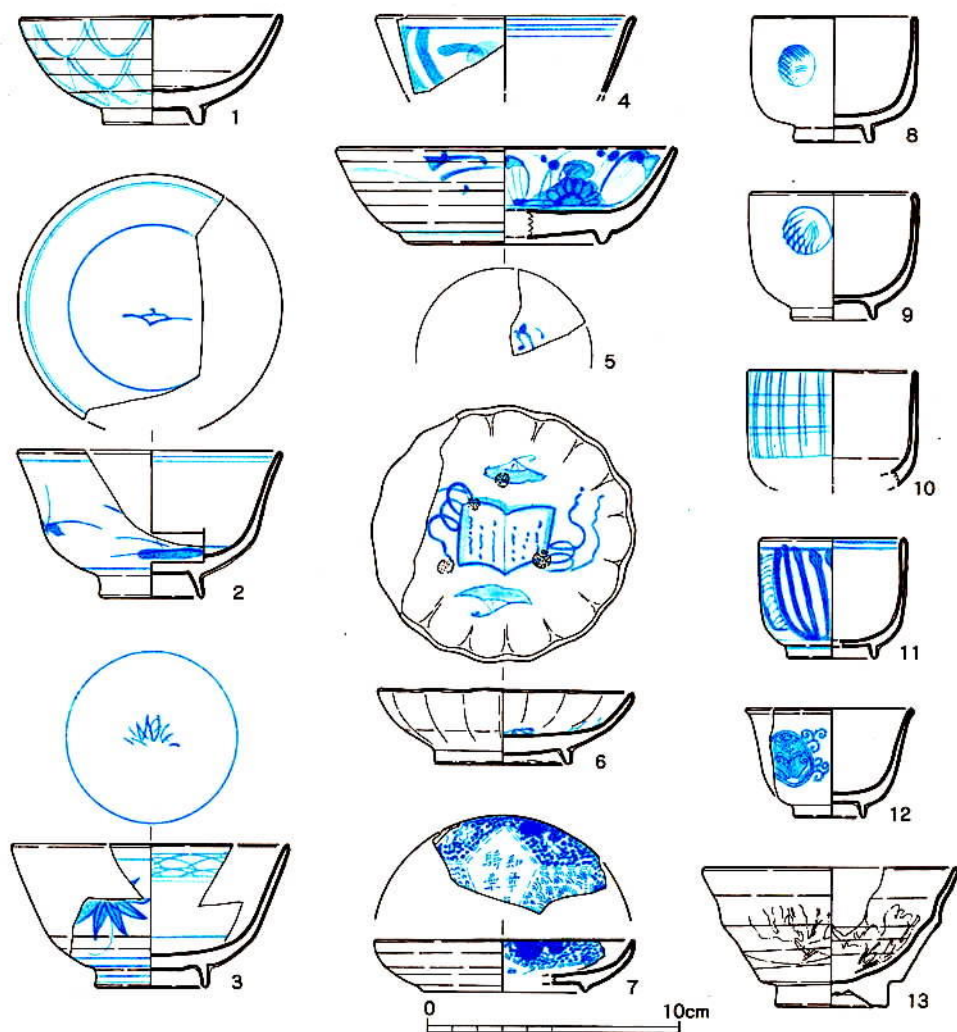
5号溝状遺構の南にある。現在の用水路の付近で5号溝状遺構と合流する。最大幅170cm、深さ30cm。

7号溝状遺構 (第6図)

6号溝状遺構の約5m南側に位置する。約5m分を検出した。最大幅約230cm、深さ40cm。

8号溝状遺構 (第2図)

Ⅱ区中央南西寄りに位置する。この溝状遺構を境に南西側の地形が40~50cm程高くなっており、用地買収以前の宅地の地境にあたる。現在まで使用された水路の下層で検出した。調査区内で地形に沿った形で約40m分あり、幅は25~90cm、深さ40~50cm。南東側約20m分は3~4条



第7図 出土陶磁器実測図 (1/3)

に分岐しており、流路を若干変えながら存続したものと考えられる。

出土遺物

日本製陶磁器 (図版10・11、第7図)

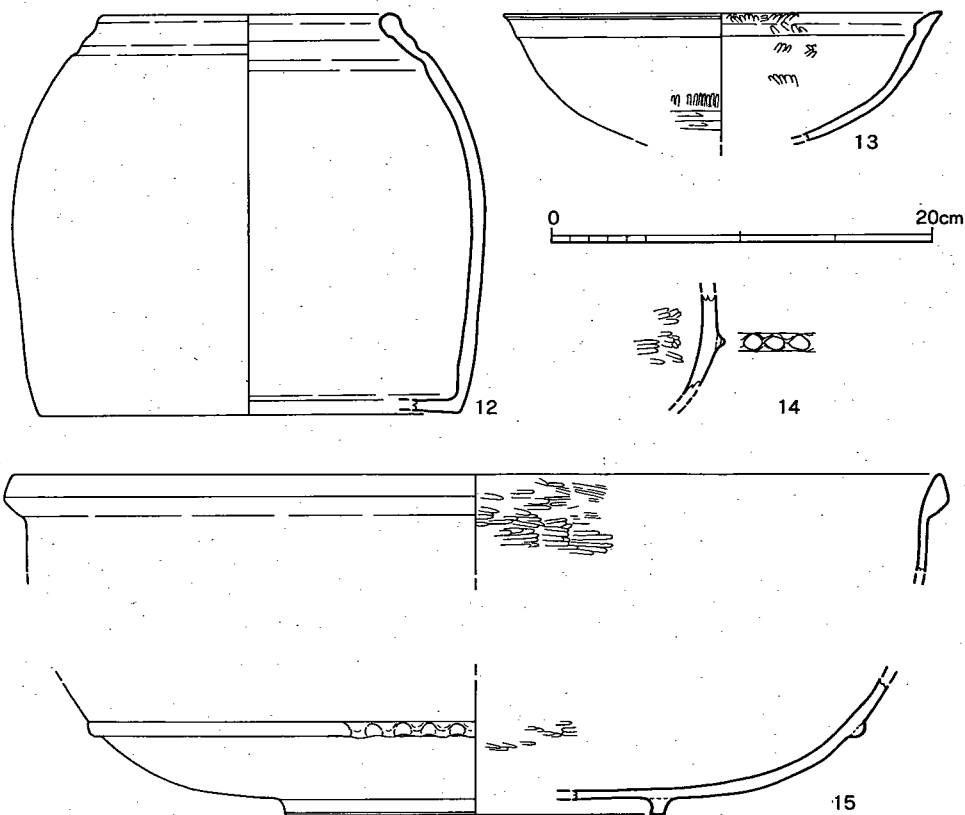
染付

椀 (1) 内面見込は、蛇の目状に釉剥ぎをおこなう。体部外面には二重網目文を描く。18世紀後半の肥前系。

湯飲み椀 (9・10・11) 3点とも底部と体部の境に丸味を持ち、体部が直立する。体部外面に9は丸文、10は格子文、11は瓜をそれぞれ描く。3点とも肥前系で、9・10は1820～60年代、11は明治期のもの。

土師質土器 (図版11、第8図)

壺 (12) 底部は平底で、体部は直線的に立ち上がり肩部で弯曲してすぼまる。口縁端部は内側に折り曲げて丸く仕上げる。体部外面は回転ヘラ削り調整、口縁部および内面はヨコナデ・ナデ調整。



第8図 出土土器実測図② (1/4)

鉢 (13) 体部は丸味を持って開き、口縁端部は内側に折り曲げて内面を肥厚させる。外面下半は二次焼成のため黒変しており、鍋等として使用したものであろう。外面下半は回転ヘラ削り調整、その他はヨコナデ・ナデ調整で仕上げる。

3) 屋敷跡

Ⅱ区の中央南東寄りの、二級村道能満寺・野路線に面した部分(下唐原1487番地)は、路線の用地買収以前は時廣巖氏の宅地として使用されてきた。現在の建物基礎の下層から、ゴミ穴等の攪乱に混じって時代の遡る建物の一部と考えられる遺構を検出した。出土した遺物によると、この地が宅地として使用されたのは19世紀前半以降と考えられる。

柵状遺構(図版9、第2図)

現在の村道から5~6m離れた位置で、道路に平行する方向で柵状遺構2条を検出した。2条の柵状遺構はともに3間分で、柱位置は80cm程ずれるもののほぼ同じ位置にある。先後関係は不明ながら、同規模で建て替えたものと思われる。2条とも2.0m等間だが、北西側(建物側)の柱掘形の方が大きく、径50~100cm、深さ50~60cm程で、南東側(道側)の柱掘形は径40~60cm、深さ30~40cm程。

カマド跡(図版9、第2図)

Ⅱ区のほぼ中央部で4基のカマド跡を検出した。1・2・3号カマド跡は壁を接して並び、4号カマド跡はこれより約1m離れており、L字形に配置する。4基とも平面形は径60cm程のほぼ円形だが、3・4号カマド跡は灰をかき出した痕跡と思われる張り出しがある。4基とも埋土に焼土・炭化物を含み、壁が焼けて明赤色を呈する。2・3号カマドは底部が黒色に硬化している。

出土遺物

日本製陶磁器(図版10、第7図)

染付

鉢 (5) 1号カマド跡の埋土中から出土した。体部は弯曲して立ち上がり、体部の内外面に文様を描く。体部内面の文様は草花文か。裏銘を施しているが判読できない。18世紀後半肥前系。

椀 (4) 3号カマドの埋土中から出土した。体部は直線的に広がる。内外面に圏線を引き、外面にはその上に青・緑で文様を描く。明治~大正期の肥前系。

4) 包含層

Ⅰ区北西端の低台地の先端部分で、厚さ最大80cm、幅3.5~5.0m、長さ30mの範囲で遺物の包

含層の堆積をを確認した（第2図アミ部分）。層位は下から灰褐色土、灰色土、赤橙色土の順で、遺物は灰色土より上層で出土した。

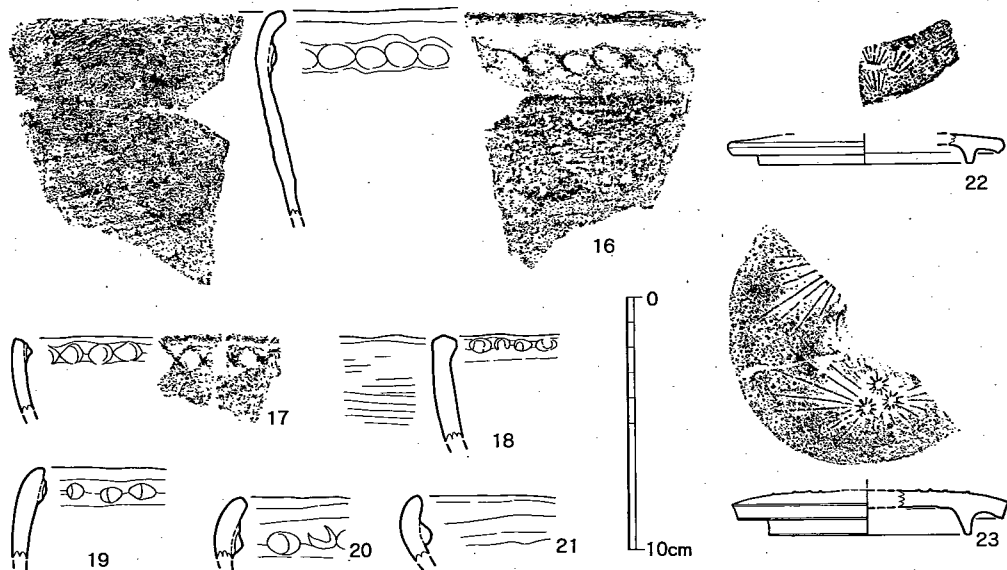
出土遺物

刻目突帯文土器（図版11・12、第9図）

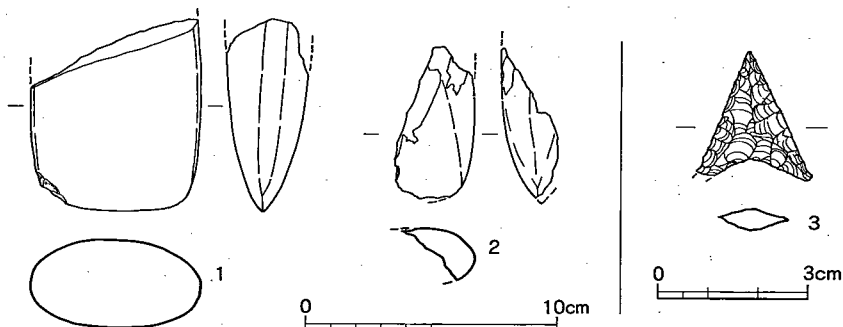
甕（16～21） 16は口縁部がわずかに屈曲して開き、屈曲部に刻目突帯を貼付する。20も同じタイプ。21も屈曲部に突帯があるが、刻目を付けない。17・18は口縁端部外面に、19はそれよりやや下に刻目突帯を貼付する。器面調整は風化のため判然としないが、16の内外面と18の内面では横方向の条痕が確認できた。

土師質土器（図版12、第9図）

蓋（22・23） 2点ともほぼ同形同大のもので、外面は型に入れて草花文を陽刻し、内面にはかえりを有する。22は型から外した後にヘラ状工具で周縁を整えるが、23は型から外したま



第9図 包含層出土土器実測図（1/3）



第10図 出土石器実測図（1/3、2/3）

まの未調整である。23は直径11.0cm。

石器 (図版12、第10図)

磨製石斧 (2) 縁部から刃部にかけての破片である。蛇紋岩製。

石鏃 (3) 凹基式の無茎鏃で、一方の脚部の先端をわずかに欠失する。姫島産黒曜石製。

1.2g

5) その他出土の遺物

須恵器 (図版10、第5図)

4点を図示した。ともにⅡ区屋敷跡周辺から出土した。

高杯 (6・7) 高杯の脚部破片。2点とも端部を斜め下方に折り曲げる。

杯蓋 (9) 端部を下方に折り曲げ、先端をシャープに仕上げる。天井部外面は回転ヘラ削り調整、それ以外は回転ヨコナデ調整。復元口径15.0cm。

壺 (10) 形態、厚さなどから壺と判断した。高台は「八」の字に開く。内外面とも回転ヨコナデ調整で、底部内面はその後ナデて仕上げる。

土師器 (第5図)

把手 (11) 甌や甕の把手。断面は扁平。

日本製陶磁器 (図版10・11、第7図)

染付

Ⅱ区屋敷跡付近の攪乱等から出土した。

椀 (2・3) いわゆる「くらわんか椀」である。2は体部外面に蝶と草花を描く。何を描いたかは不明ながら、見込にも文様がある。3は体部外面に楓文を描き、口縁部内面には帯状に幾何学文を配する。見込の文様は草であろうか。ともに1820～60年代の肥前系。

皿 (7) 型紙摺り。明治～大正期の瀬戸・美濃系。

湯飲み椀 (8) 8号溝状遺構出土の9とセットになるものと考えられる。体部外面には丸文を描く。1820～60年代、肥前系。

陶器

椀 (13) 萩焼風陶器。18～19世紀。

石器 (図版12、第10図)

磨製石斧 (1) I区の1号溝状遺構の西に接する不明遺構の埋土より出土した。体部下半から刃部で、最大幅6.6cm、厚さ3.5cm。

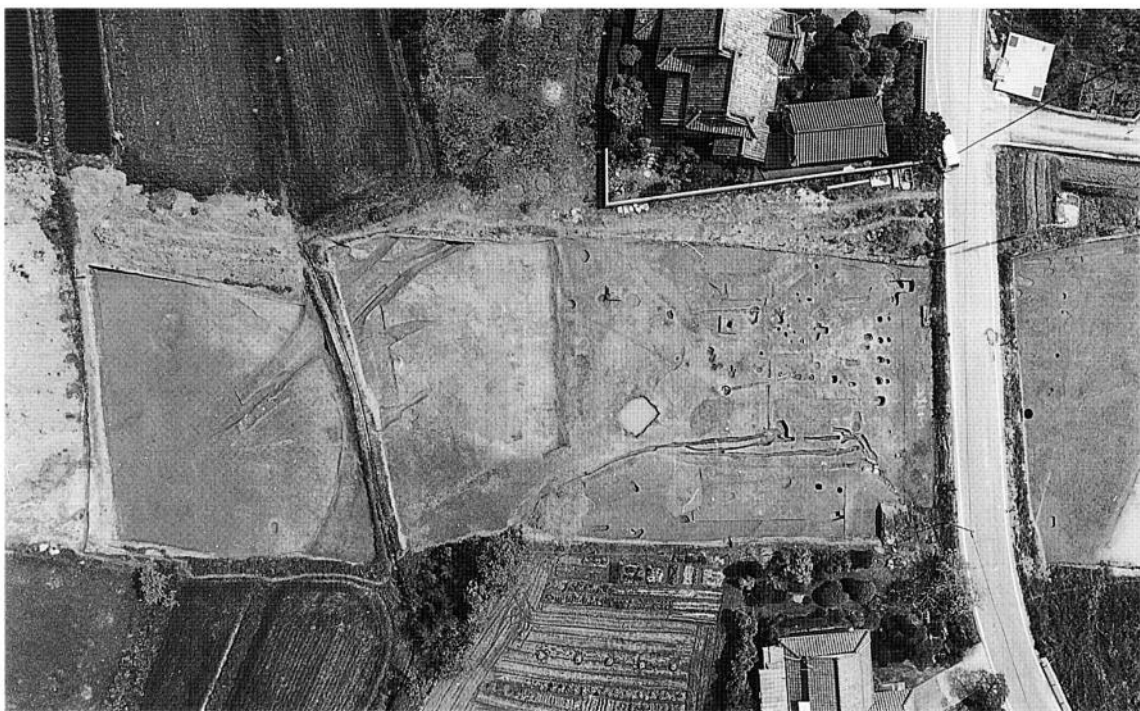
3 おわりに

今回の調査では、量こそ多くないものの、弥生時代早期から近代にいたる幅の広い遺物の出土があつた。しかしながら、6,300m²というかなり広い範囲を調査したにも拘わらず、近世以降の屋敷跡を除いて、出土した遺物と直接結びつく明確な遺構を検出し得なかつた。試掘調査時や表土除去作業時には、表土に混じって石蓋土壙墓あるいは石棺墓の石材と思われる安山岩の板石を数点確認している。この周辺は、金居塚遺跡、穴ヶ葉山遺跡、大塚本遺跡で調査をされたのをはじめ、崖面に露出しているもの等もあわせて石蓋土壙墓の比較的多い地域である。小松原遺跡でも石材の出土から考えて、石蓋土壙墓の存在した可能性が高いものと思われるが、他の遺構も含めて開墾時等に削平を受けたことも検討する必要がある。今回の調査では遺構の密度に恵まれなかつたものの、5号溝状遺構などは連続する隣接地の調査を待つて意義付けを行うことができるものと考えている。

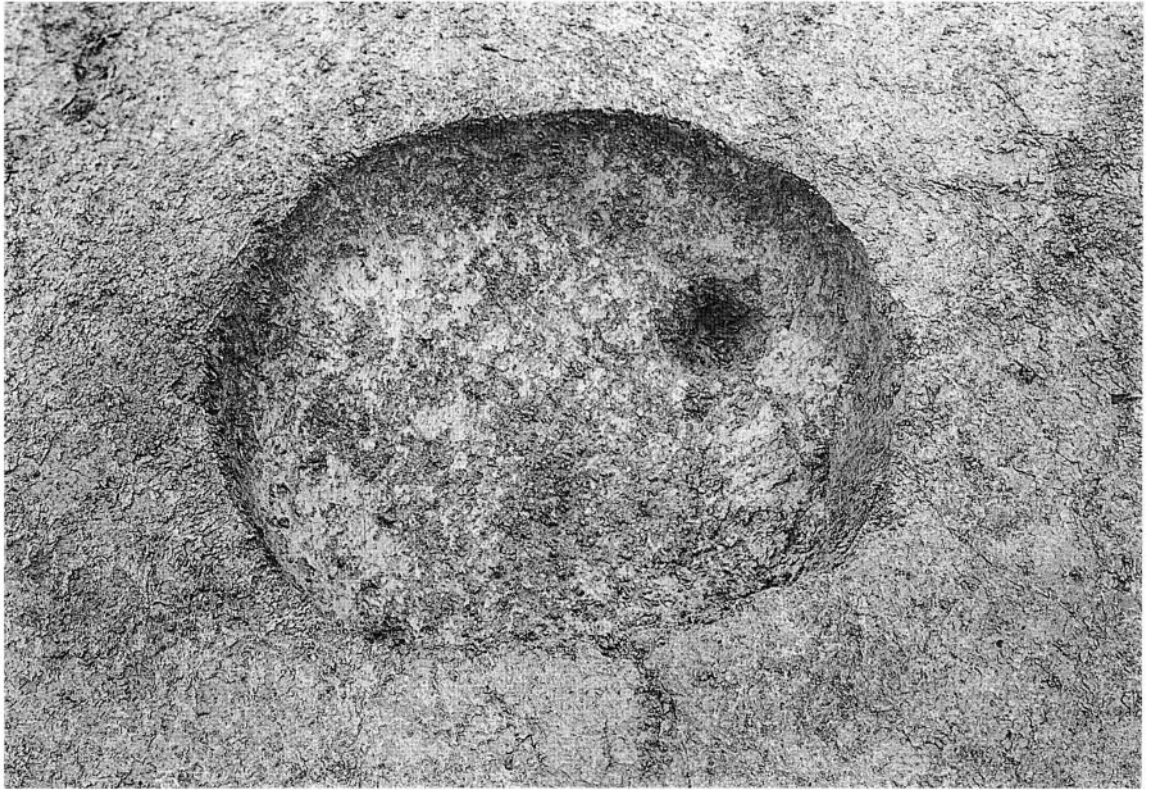
図 版



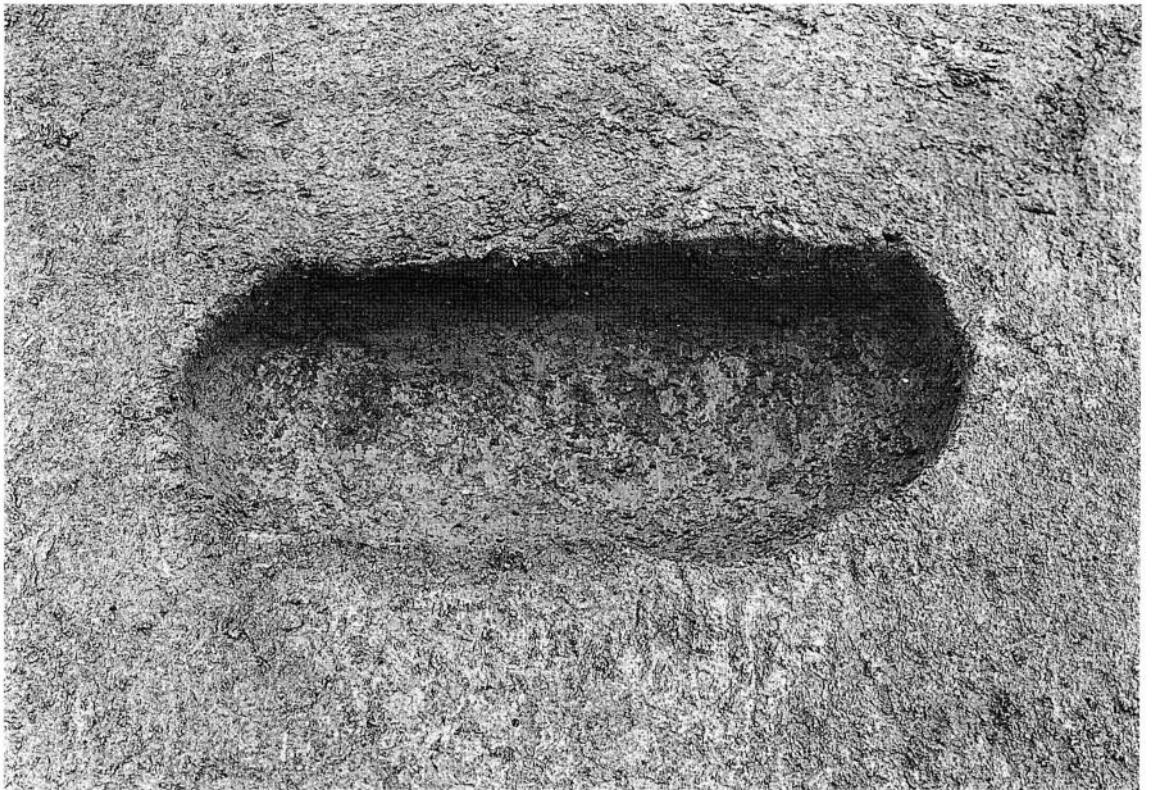
1 小松原遺跡全景（空中写真・北西から）



2 II区全景（空中写真）



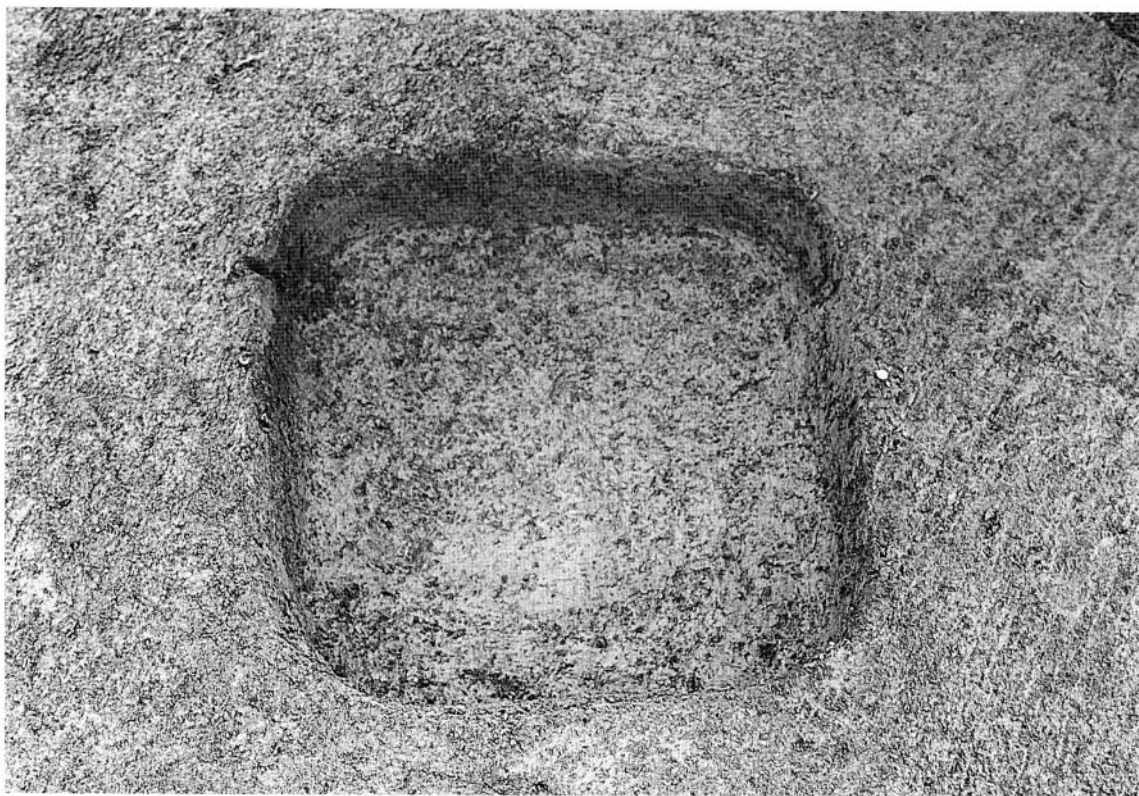
1 1号土坑 (西から)



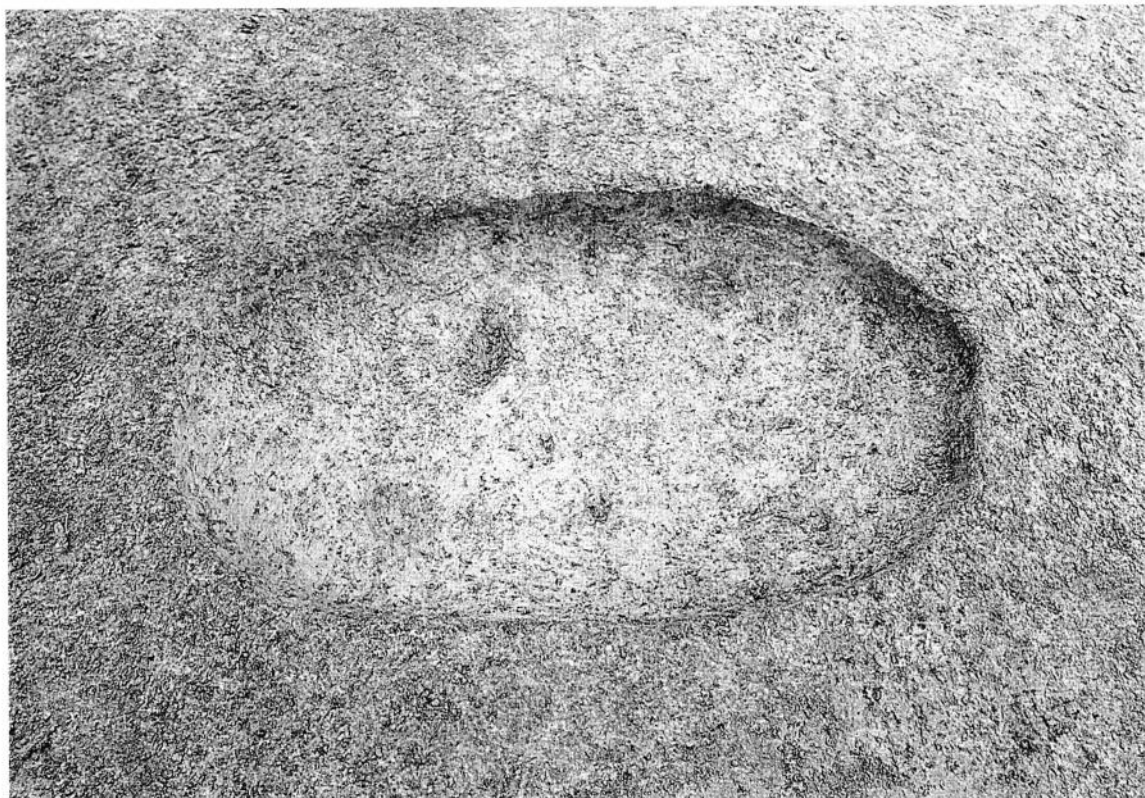
2 2号土坑 (南西から)



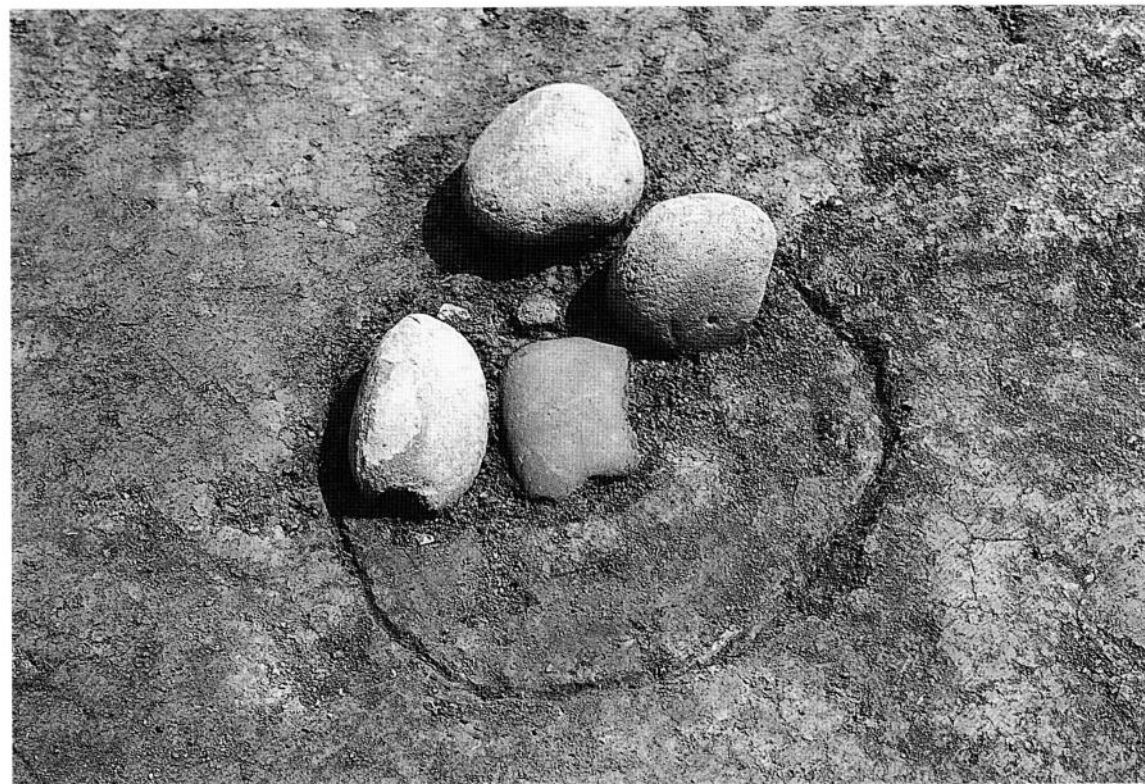
1 3号土坑（東から）



2 4号土坑（北東から）



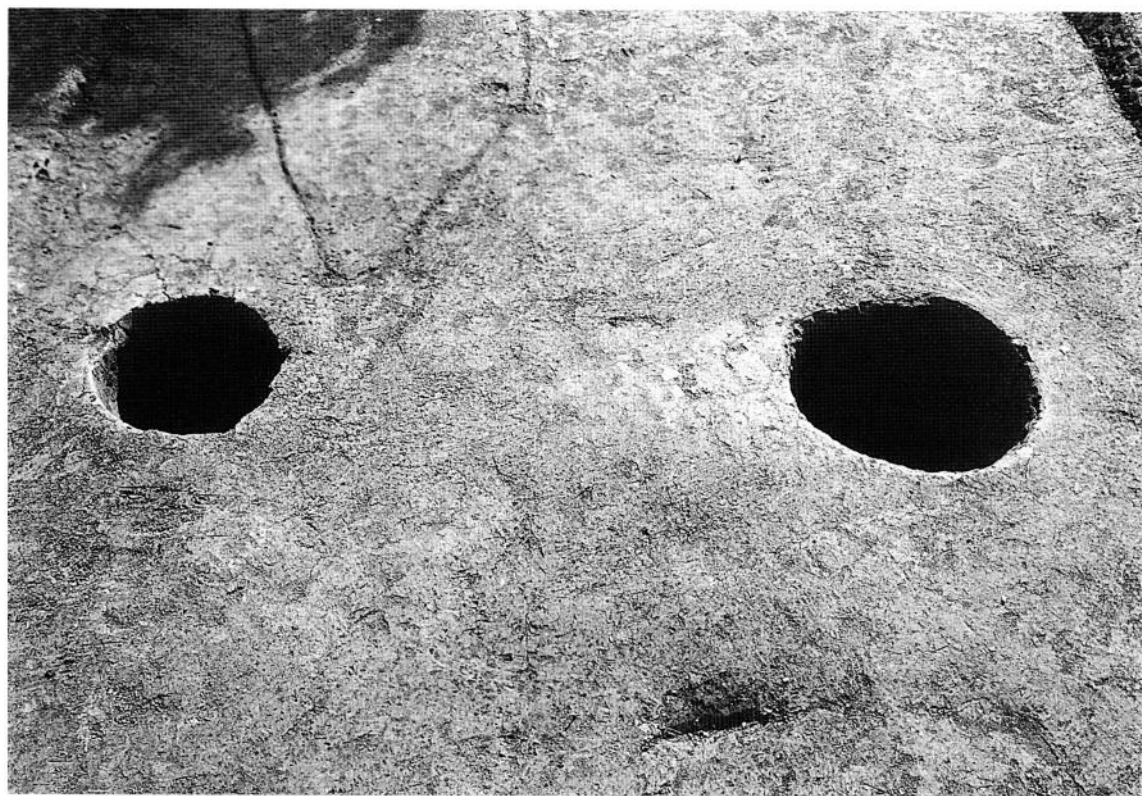
1 5号土坑（南東から）



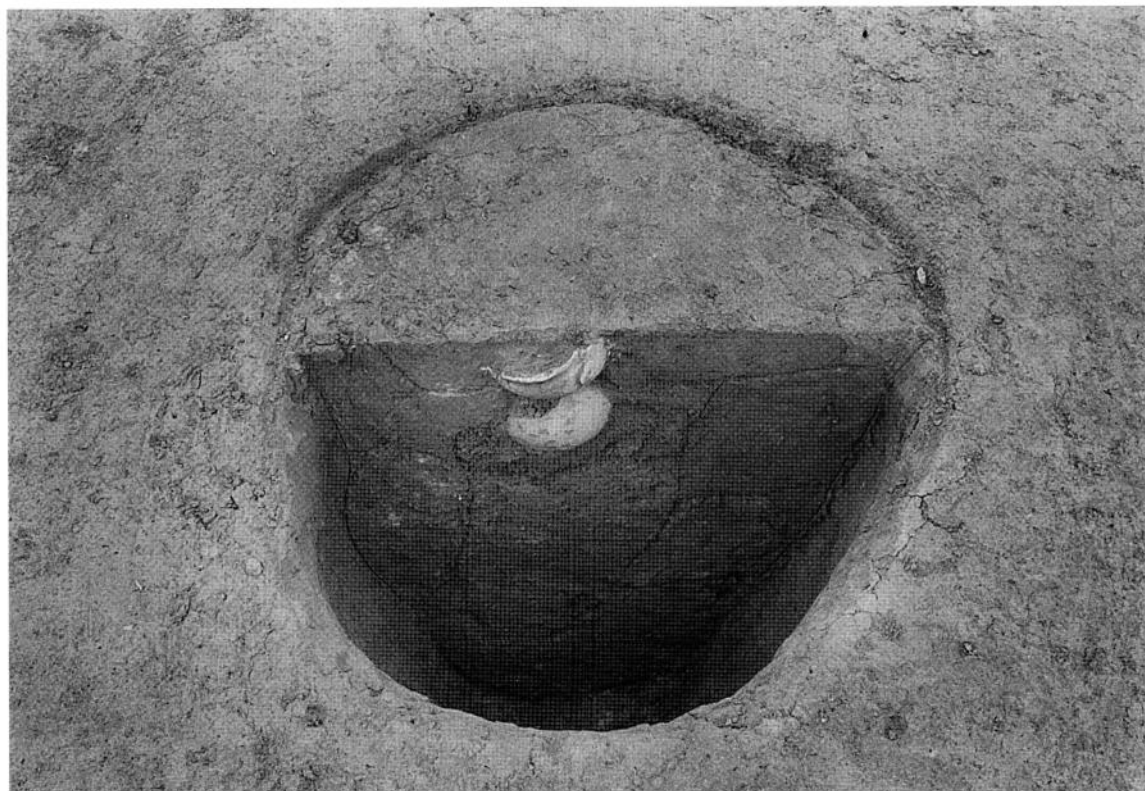
2 6号土坑（南西から）



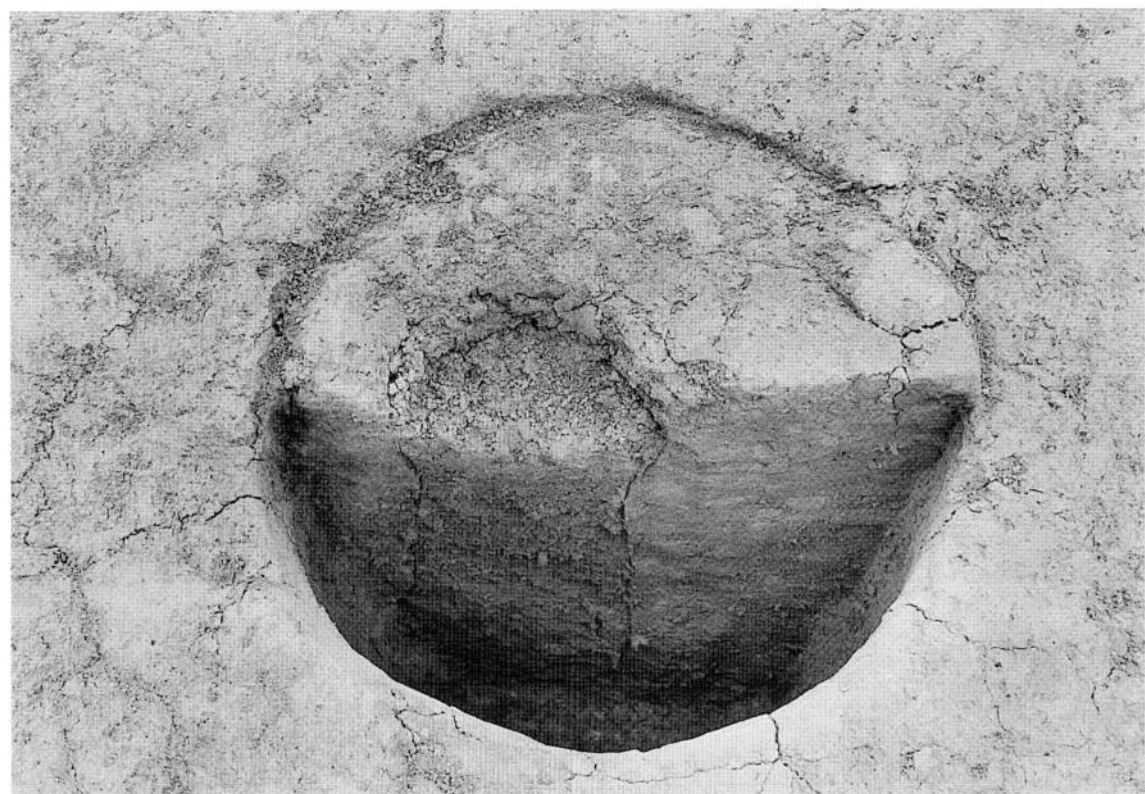
1 6号土坑 (南西から)



2 7・8号土坑 (北東から)



1 7号土坑（北東から）



2 8号土坑（北東から）



1 4~7号溝状遺構 (空中写真)



2 5号溝状遺構 (南東から)



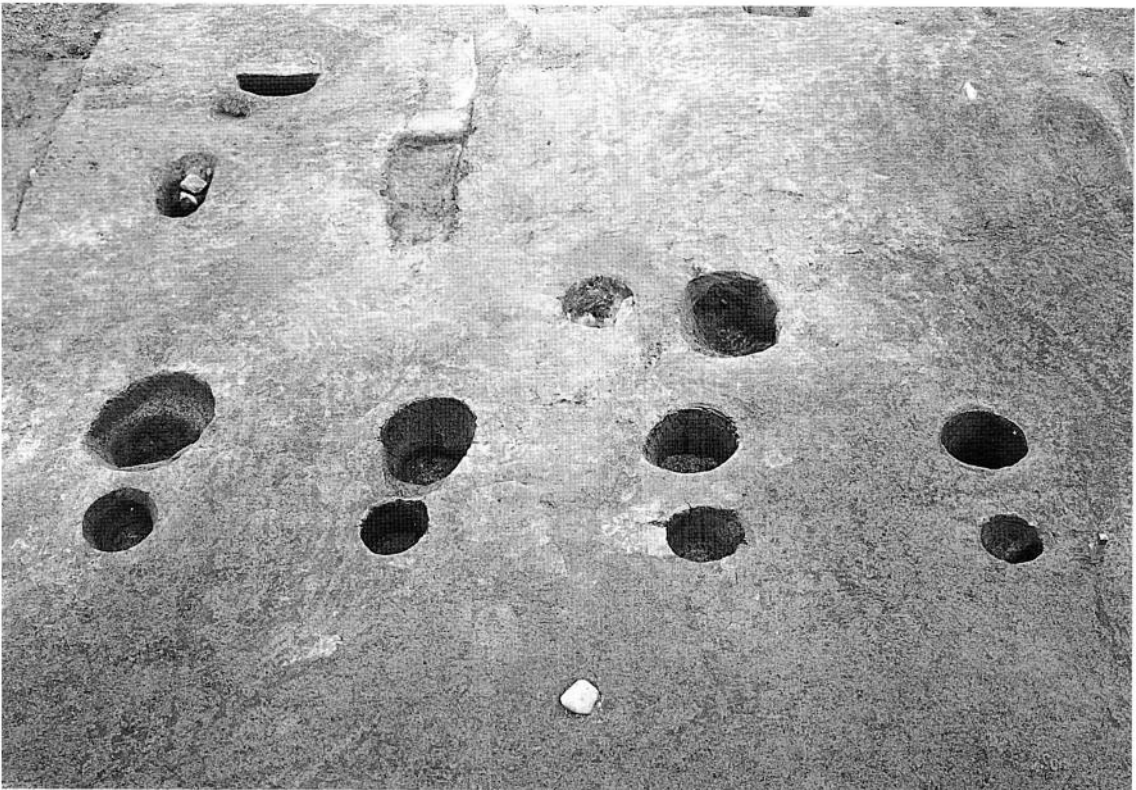
1 5号溝状遺構土層（南東から）



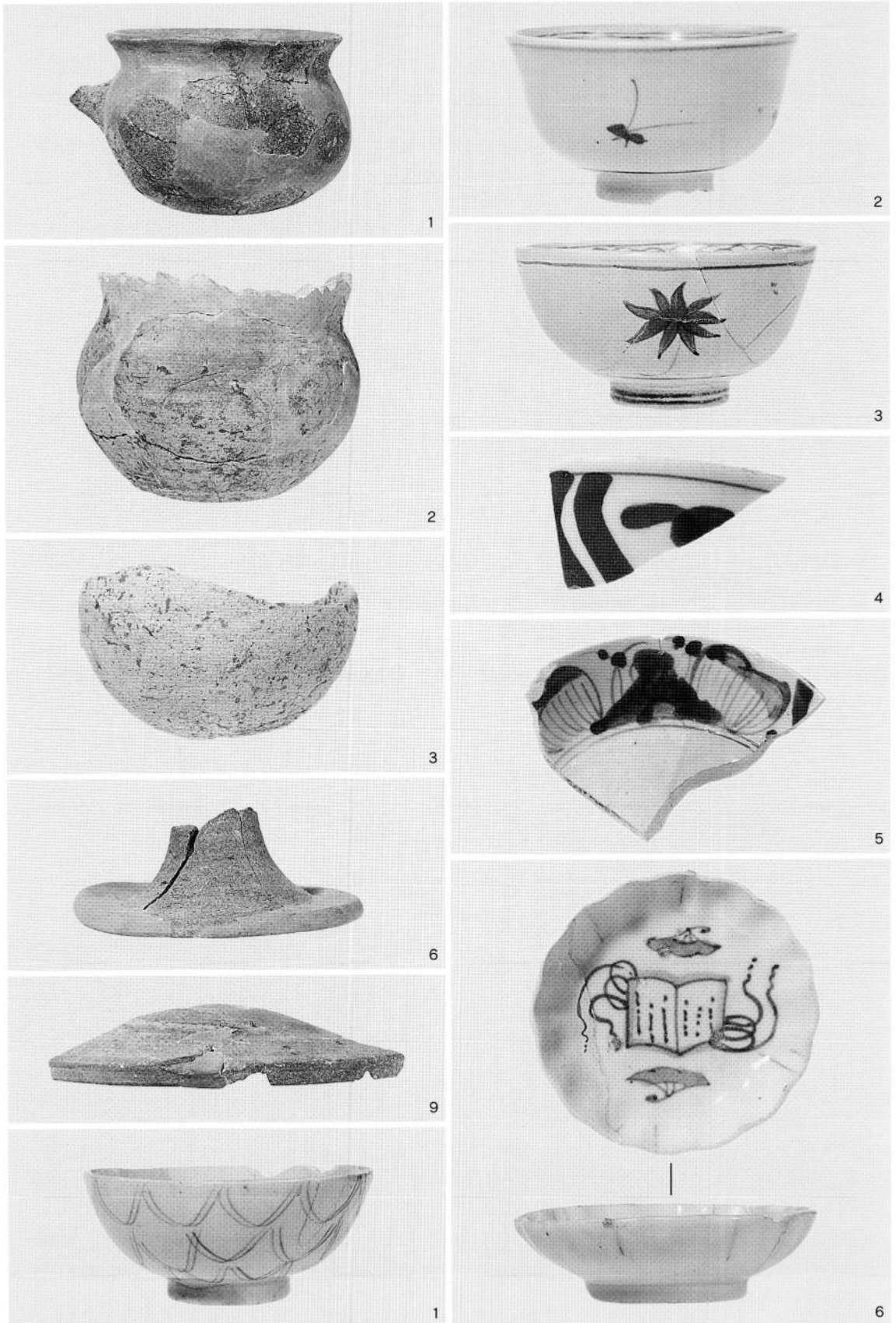
2 屋敷跡（空中写真）



1 1~4号カマド跡 (南東から)



2 柵状遺跡 (南東から)



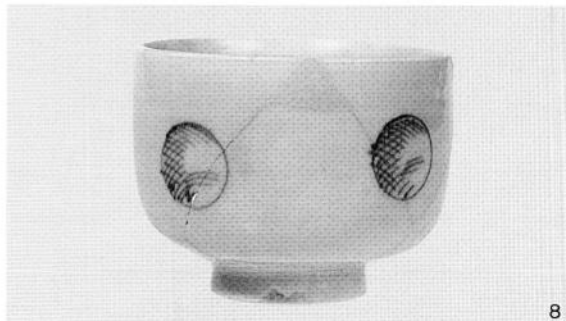
出土遺物1



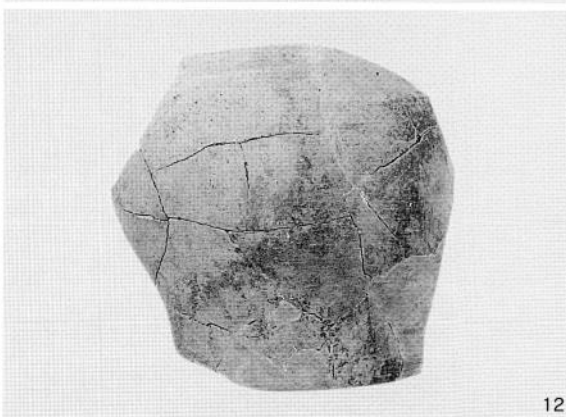
7



13



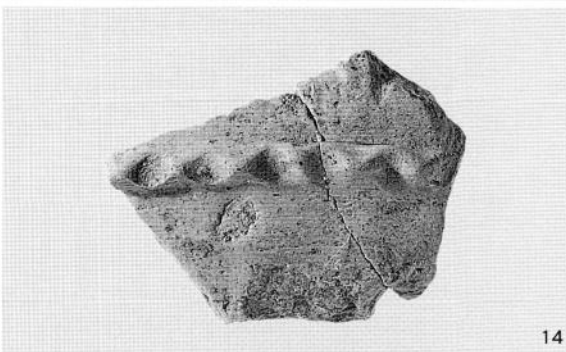
8



12



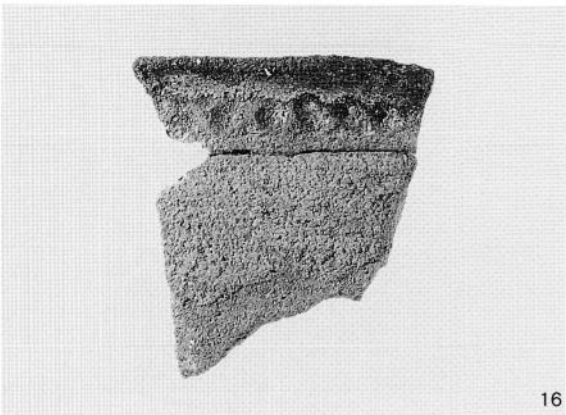
9



14



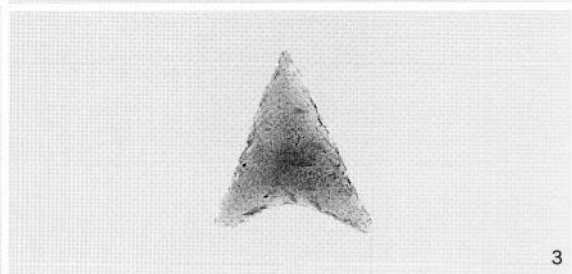
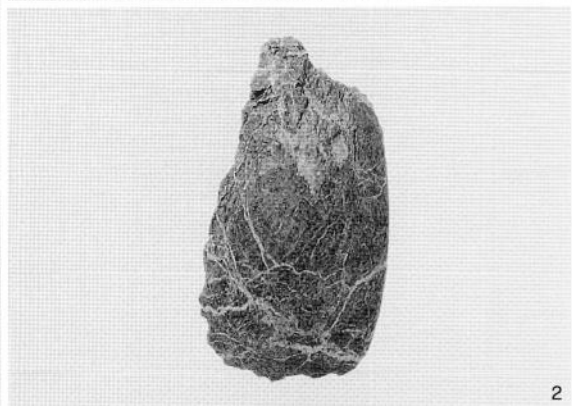
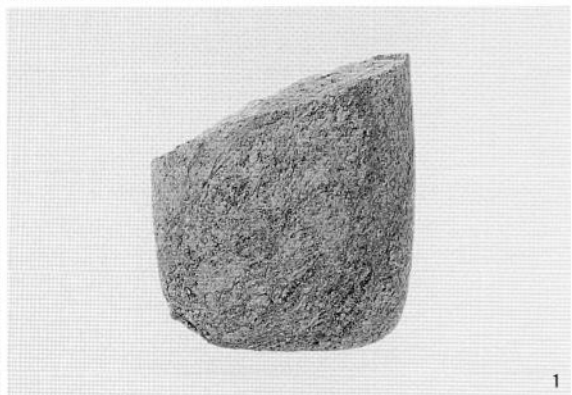
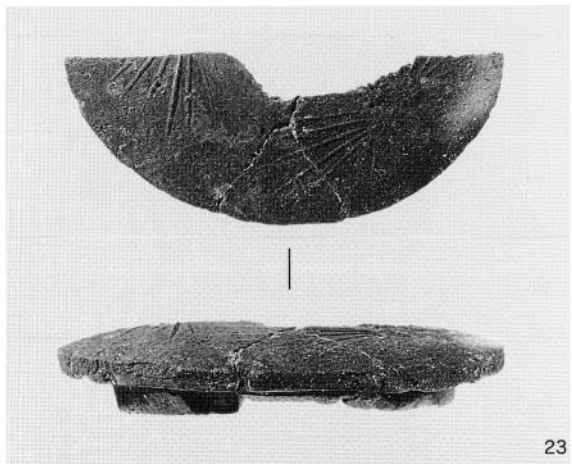
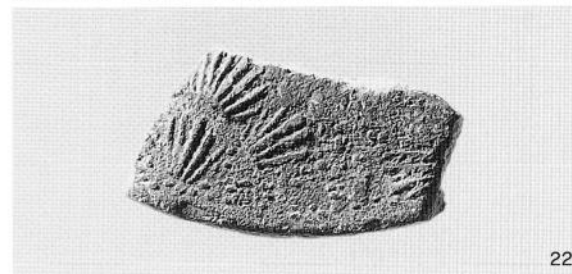
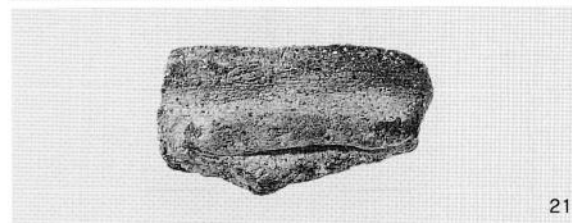
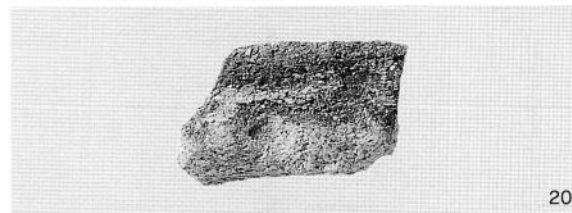
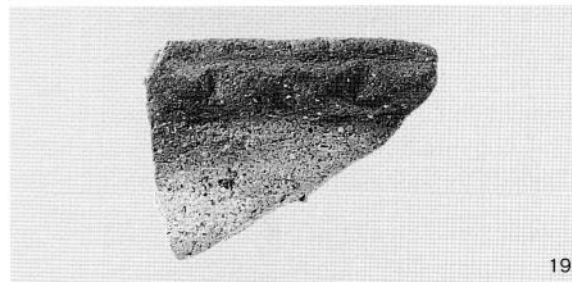
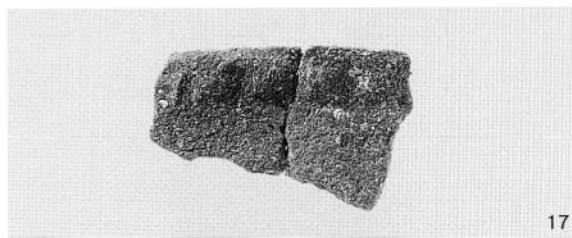
11



16



12



か
桑 の 野 遺 跡

1. はじめに

この調査区は築上郡大平村大字下唐原1296-3番地ほかにあり、地名をとって桑野遺跡と呼称した。

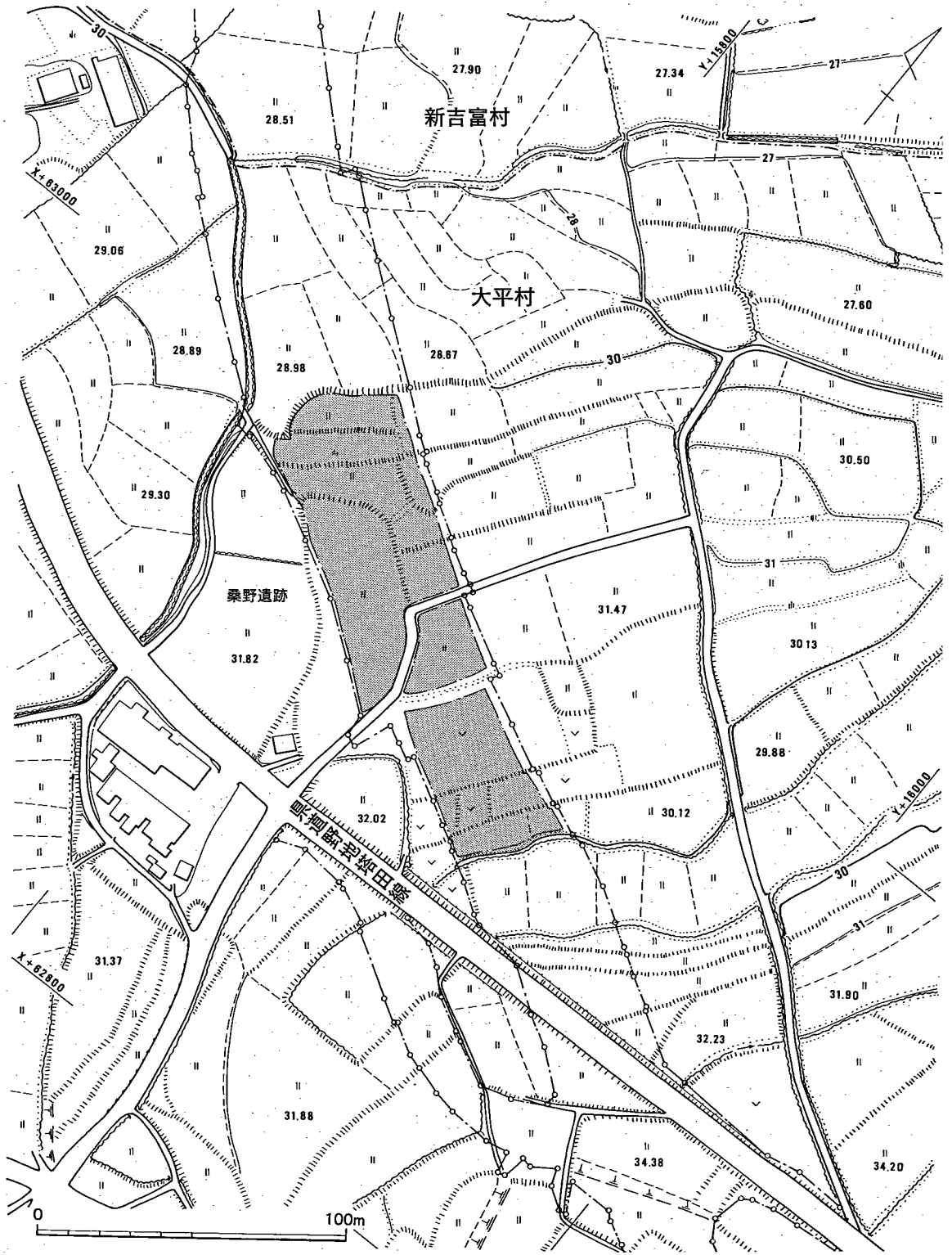
山国川はその左岸において、梶屋地区から下唐原地区にかけて百数十haの沖積地と比高20mほどの河岸段丘を発達させるが、沖積地は友枝川との合流地点の南で終わる。桑野遺跡は合流地点の南、友枝川と山国川とに挟まれた段丘上に位置する。遺跡の西端は野地川という小河川に限られ、この川は段丘を開析して北流する。また、遺跡の東側にも浅い谷状の地形が入っていて、当時は北へ延びる低丘陵上に存在していたようである。しかし、現状では遺跡の南側、丘陵の上位部分は大きく削平されていて、遺跡の広がりを推測するのが困難な状況となっている。

弥生前期～中期の大遺跡と目される牛頭天王（中桑野）遺跡は、この桑野遺跡の北約1kmの位置にあつて、間を野地川が画している。また、次年度報告予定の弥生中期の墓域であつた大塚本遺跡は本遺跡の南東に隣接する。といつても、桑野遺跡の東を限る小規模な谷が間に入り込んで両者を画している。

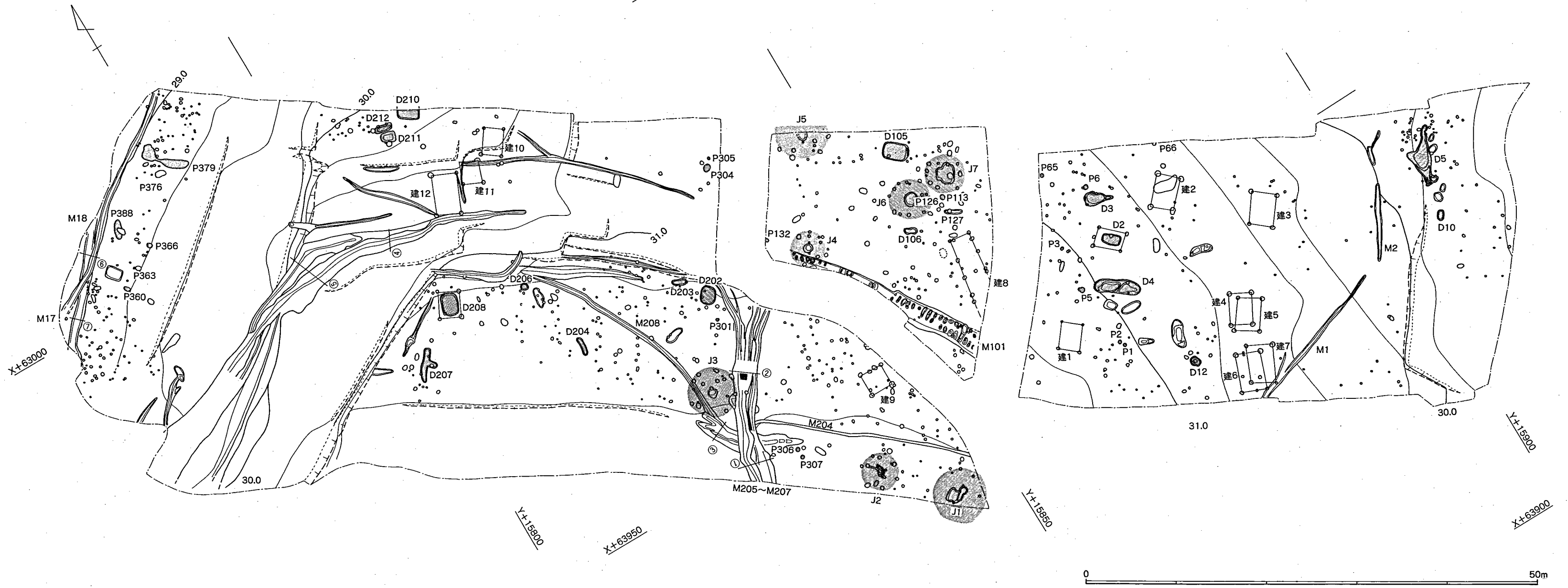
時代が下って天正15（1587）年、旧豊前国六郡を与えられた黒田孝高（如水）に対し、宇都宮鎮房らの抵抗に呼応した在地の土豪が反乱を起こし、この桑野原の地で戦を行ったという記録がある。今回の調査で、わずかに2点であるが、種子島銃の弾丸が発見されており、先の記録の傍証となりうるものであろう。

なお、この調査は、平成3年6月11日～同年9月7日の間に実施し、調査面積は約4,800m²の規模である。あいにくの梅雨・田植え時期に重なり、また調査終了の頃は雨にたたられ、結果、空中写真は水没した状態での撮影となってしまった。

調査では、農道で調査区を便宜的に分けており、東からそれぞれA・B・C地区とした。溝・土坑・柱穴についてはB・C地区についてはそれぞれ100番台、200番台以降の遺構番号を付している。調査中に必ずしも徹底できていなかったために、この報告に際して新たに番号を変更（例；B地区2号土坑→102号土坑、C地区P〈柱穴〉10→P210）したものがあり、注記された遺構名と本報告で使用するものが異なる例があることを記しておく。



第1図 周辺地形図 (1/2000)



第2図 遺構配置図 (1/400)

2. 遺構と遺物

1) 竪穴式住居跡

開墾が進んでいて、壁体を確認できた竪穴式住居跡はまったくない。したがって、不確かな部分もあるが、炭などを出土して炉跡を想定できたものを住居跡として報告する。主柱穴を特定できないものが多い。

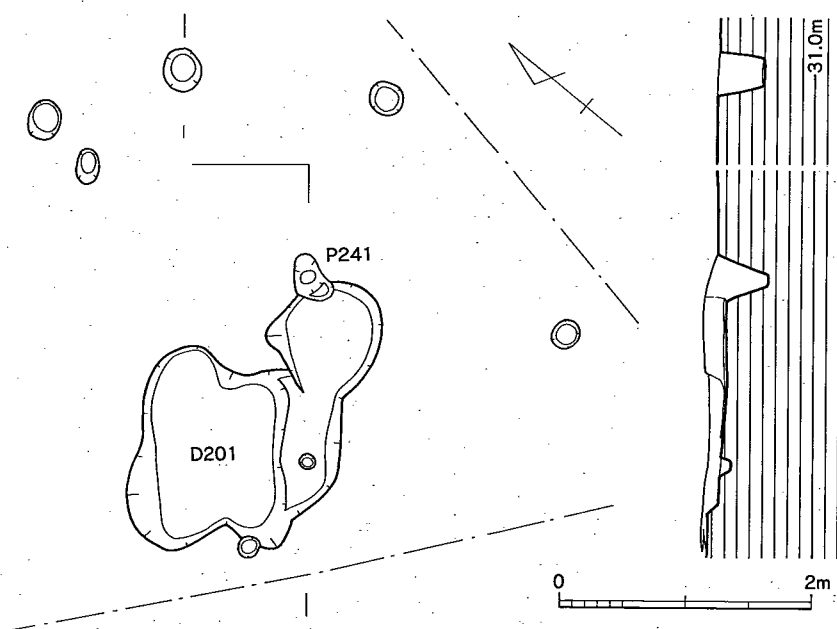
1号竪穴式住居跡 (図版3、第3・5図)

C地区南東隅にあり、壁体はもちろん、柱穴もはっきりしなかったが、炉跡を確認できたことから住居跡であると判断した。炉跡は、壁の一部が焼けて赤変し、埋土に炭の層が見られ、また、内部には図示したような状況で土器片が多く入っていた。

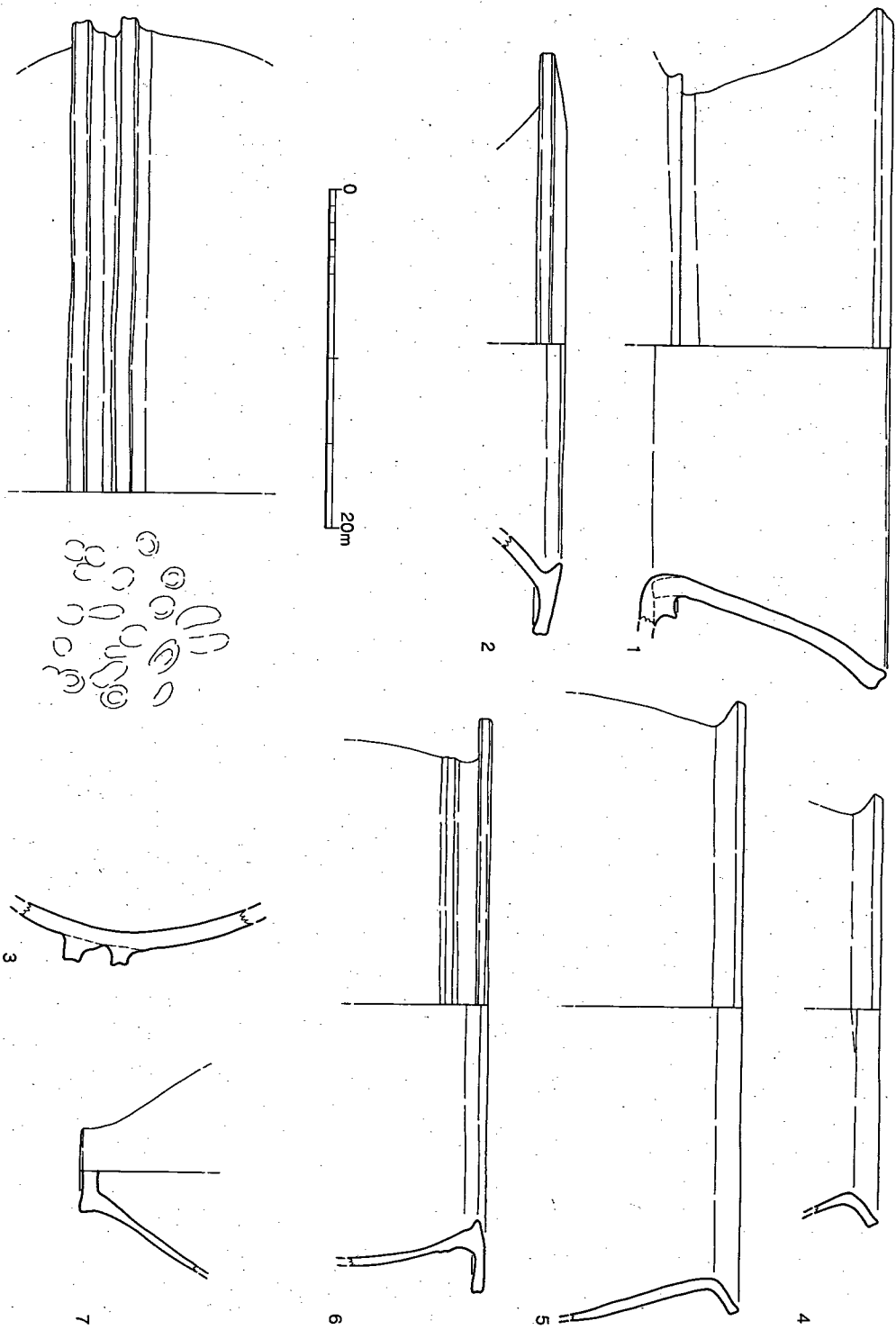
炉跡と切り合うような位置にある201号土坑は、内部に径数cmの小礫を多く含み、黒褐色の埋土を有していたが、両者の切合関係は把握できなかった。

出土遺物

炉跡から比較的まとまった土器が出土した。柱穴出土の土器は小片であり、その時期等は判断できない。図示したものはいずれも炉跡出土。



第3図 1号竪穴式住居跡実測図 (1/60)



第4图 1号竖穴式住居跡出土遺物実測図① (1/4)

土器 (図版28、第4図)

1は頸部に突帯を付す広口壺で、灰黄色を呈するが、全体に煤けて黒くなる。口端部は内側上方に小さく突出し、内面の指撫で痕が顕著である。2は鋤先状口縁部片で、ほぼ1/2が残存する。口縁部は外傾するが、直線的で未発達である。3はやはり煤け、内面の指撫で調整が著しいことから、1の体部であろう。4・5は口頸部がく字形に反転する甕で、口端部内側を小さくつまむが、ほぼ断面方形に作る。6は鋤先状口縁の甕。頸部下に断面梯形の突帯を付すが、磨滅が著しい。7はよく焼けて赤変する。

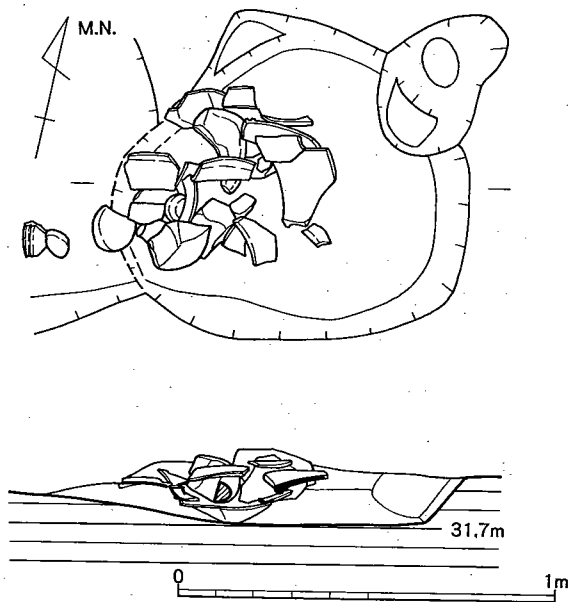
石器 (図版28、第6図)

割れて出土し、1/3は失われている。図上面が平滑化している。図側縁および下面は焼けて赤く変色し、かつ表面がはじけている。安山岩製。

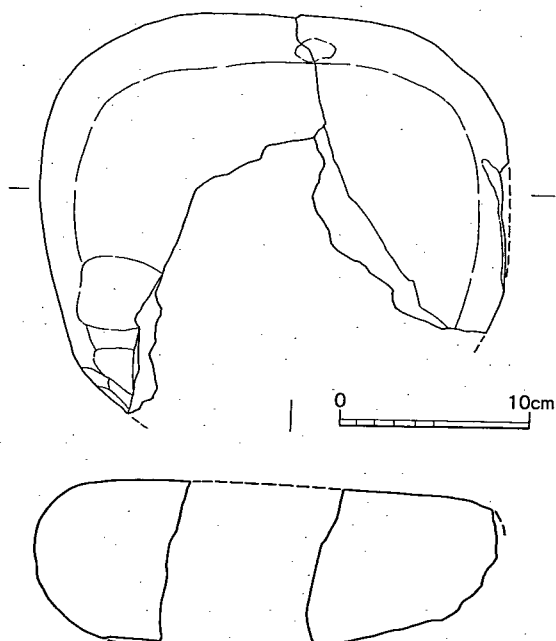
2号竪穴式住居跡 (図版4、第7図)

1号住居跡の北西に近接し、これも壁体はすでに失われていたが、柱穴はよく残存していた。主柱穴は心々でほぼ4mの距離を隔てた7本を想定できる。

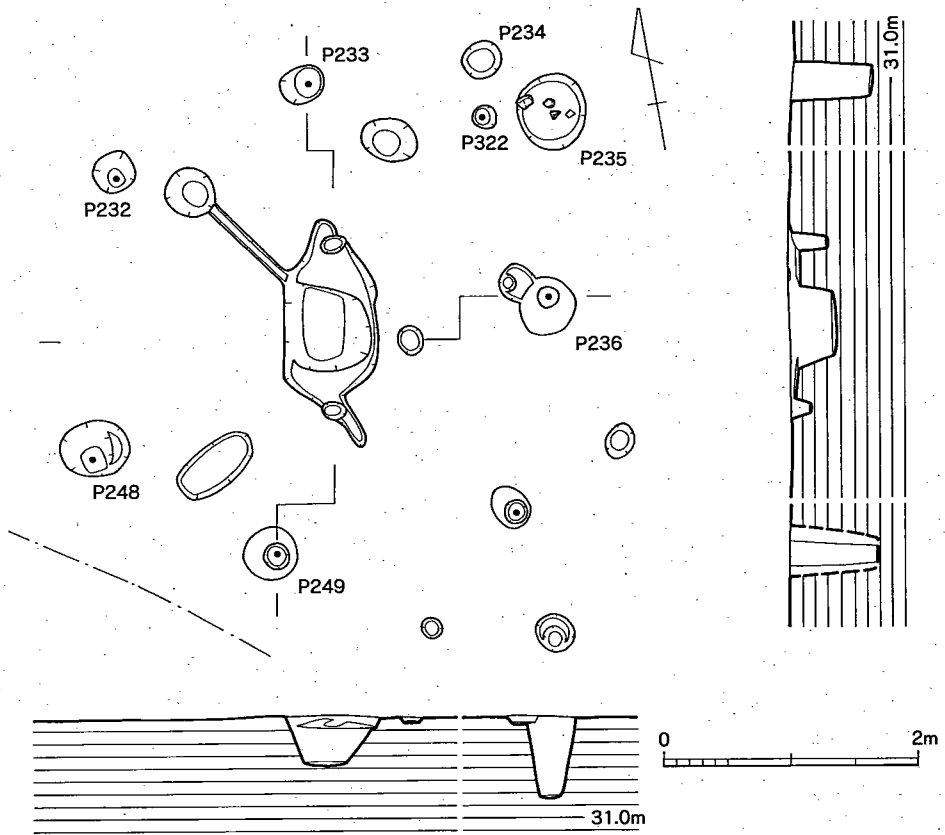
炉跡は中央にあつて隅丸長方形の平面形を有し、最下層に炭層が堆積していた。また、小口部分に浅い掘り込みを付して、そこから小規模な溝が延びていた可能性があり、溝の基部に小ピットがそれぞれ穿たれる。



第5図 1号竪穴式住居跡炉跡実測図 (1/20)



第6図 1号竪穴式住居跡出土遺物実測図② (1/4)



第7図 2号竪穴式住居跡実測図 (1/60)

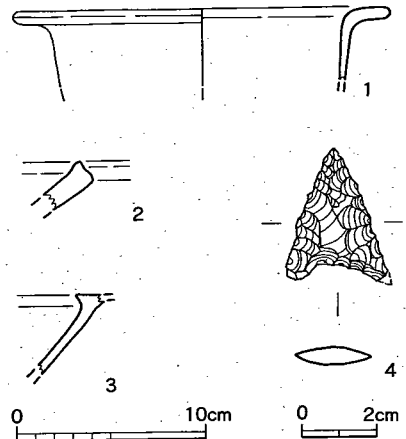
出土遺物

炉跡・P235から土器小片が、そしてP234から石鏃が出土している。2基の柱穴はこの住居跡に伴うものとは断定できないが、参考までに示す。なお、他の柱穴からも土器が出土したが、いずれも小片であり、時期等は判断できない。

土器 (第8図1~3)

1は炉跡出土の甕の小片。口縁部はほぼ直角近く外反し、端部を丸くおさめる。2・3はP235出土の小片。2は広口壺の小片で、口端部内側を小さくつまみ出す。3は鋤先状口縁を有する小片。高杯か。

石器 (第8図4)



第8図 2号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/4、1/2)

姫島産黒曜石で作られた打製石鏃。細部調整が丁寧になされる。

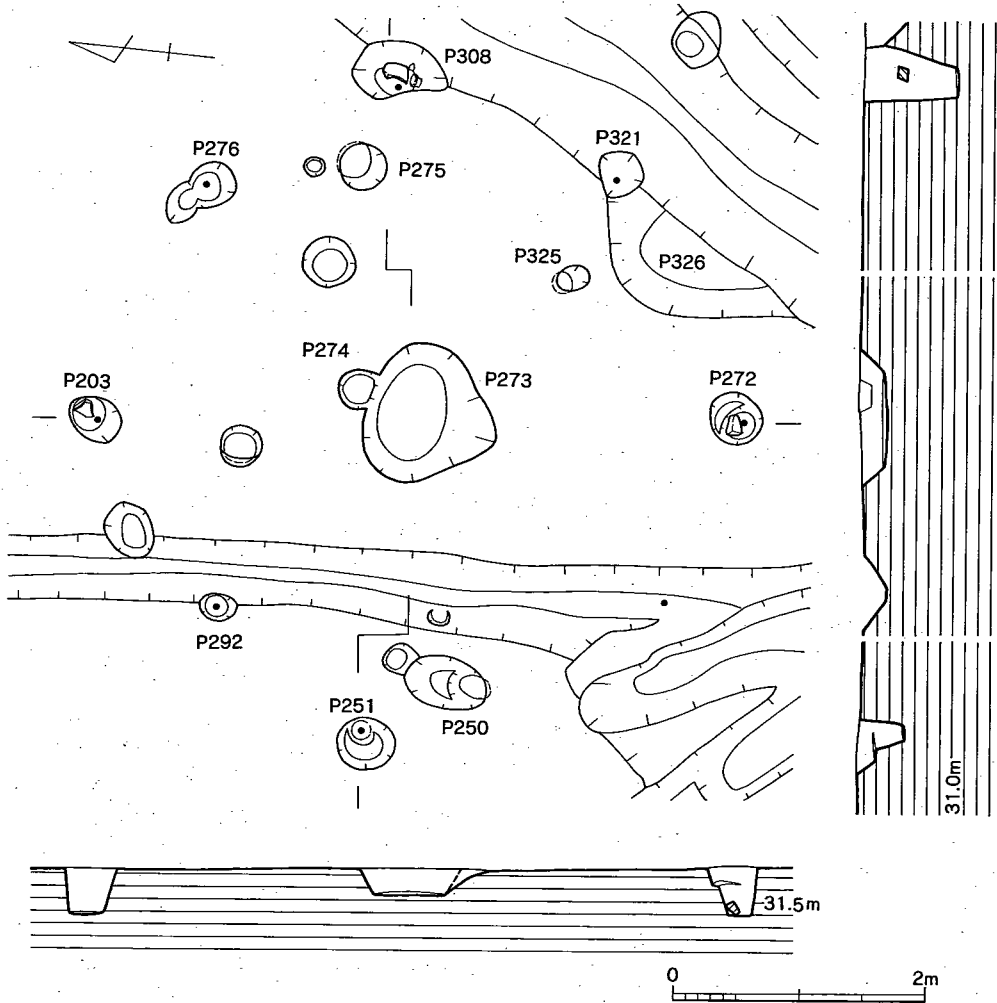
3号竪穴式住居跡 (図版4、第9図)

2号住居跡の北西にあり、これも壁体は残存しない。かつ、後世の溝にも破壊されている。主柱穴の一部は失われていた。

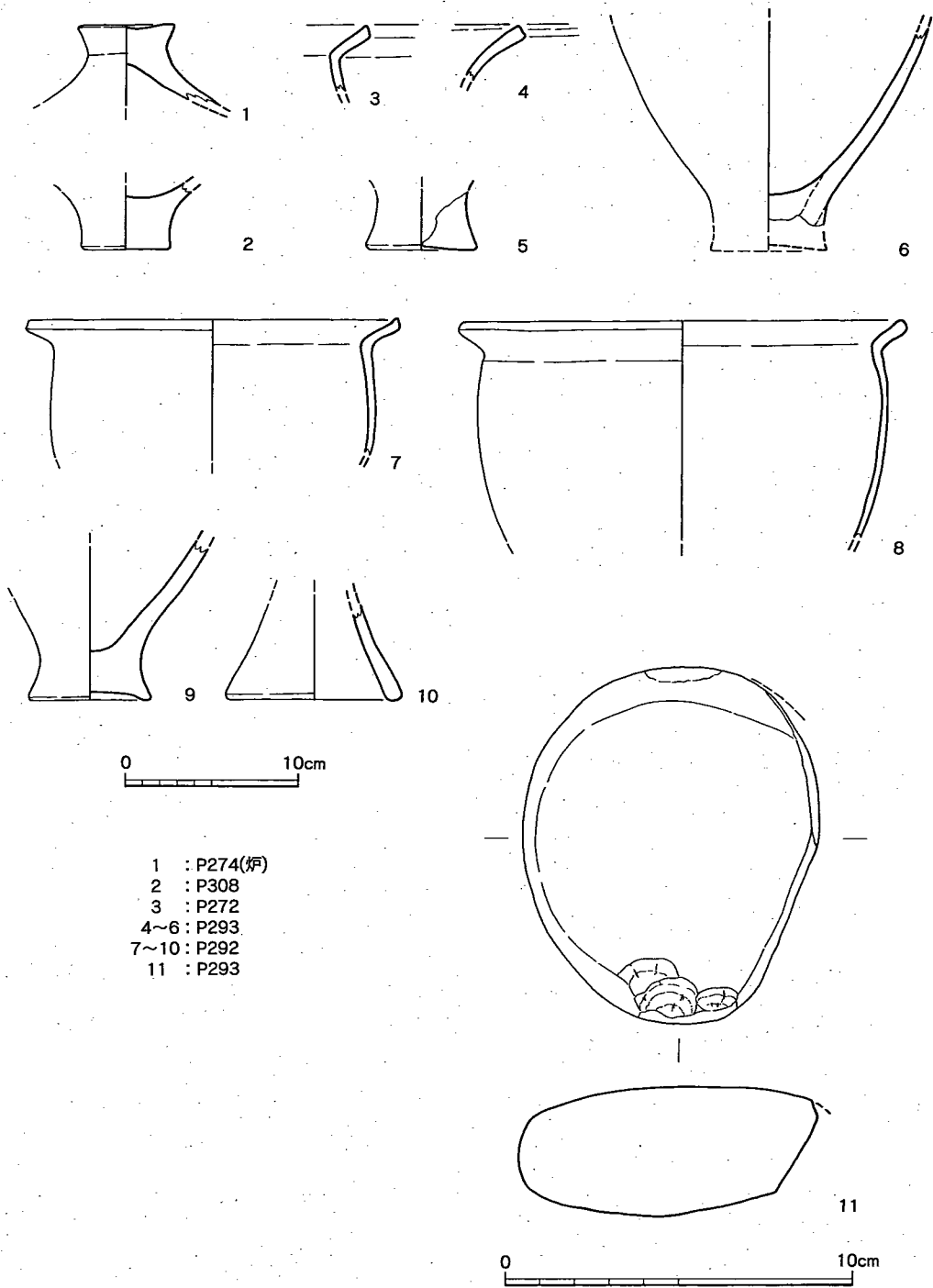
中央に平面楕円形の炉跡があり、周囲に8本の主柱穴が配置されていたようである。それらの心々距離は約5mである。

出土遺物

いくつかの柱穴から出土した遺物を図示したが、特にP292とした小型の主柱穴からややまとまった土器が出土している。



第9図 3号竪穴式住居跡実測図 (1/60)



第10图 3号竖穴式住居跡出土遺物実測図(1/4、1/2)

土器 (図版1、第10図1~10)

1は炉と切合う柱穴P274出土の甕の蓋である。この柱穴自体は住居跡に伴うものか不明であるが、参考までに挙げておく。図示した部分はほぼ完存しているが、器表の荒れが著しい。2は完周する底部。3~5は小片。3はく字形に外折する甕の口縁部で端部は断面方形に近い。4は広口壺の口縁部。端面を強く撫でて窪ませる。6は底部の成形法がよく判る甕で、平底に作った後、内面を充填、外面にも粘度を張り付けて厚底としている。7・8は如意形口縁の端部を小さく肥厚させる甕で、7の内面はごく丁寧な撫でて仕上げる。10は器台の断片。脚部としたが、焼けた痕跡は見えず、受部かも知れない。

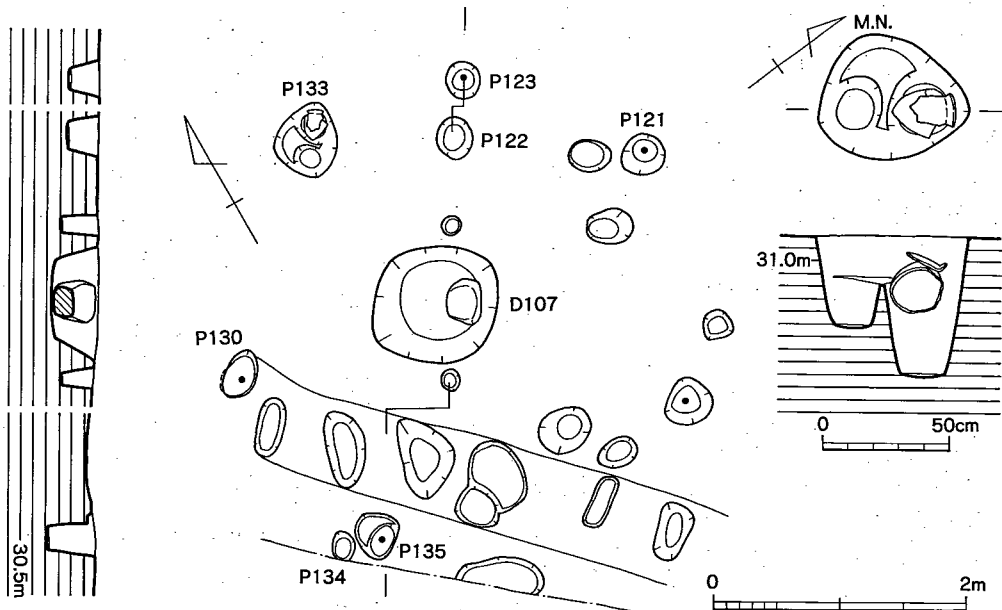
石器 (図版28、第10図11)

破面を除く表面が非常に滑らかになっている。図下方に敲打で生じたような剥離が認められ、上方側縁部も他の部位に比して少しざらざらしていて敲打の痕跡かと思われる。硬質砂岩製のよう。

4号竪穴式住居跡 (図版5・6・27、第11図)

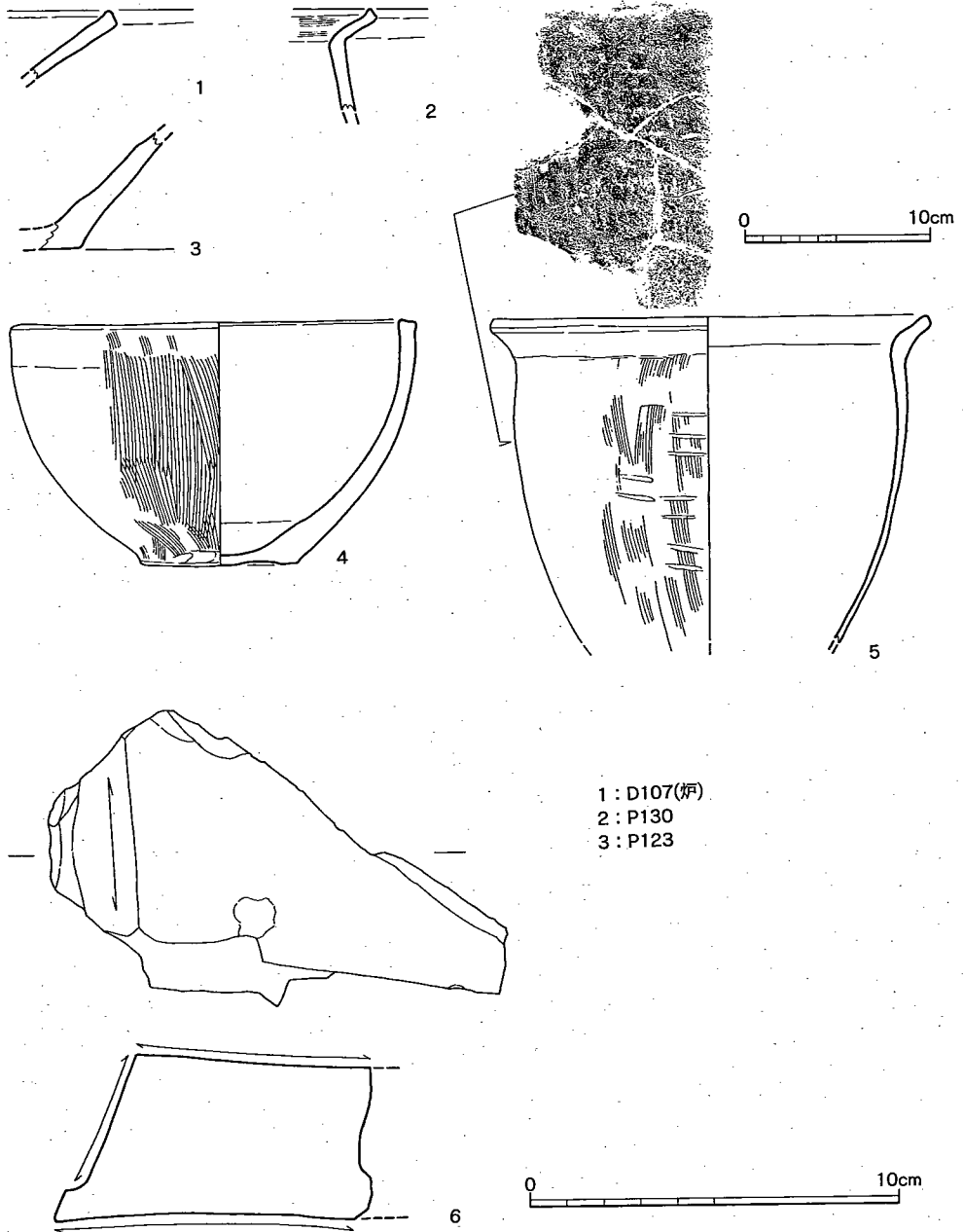
B地区西南隅にあり、やはり壁は残らない。また、後世の道路状遺構が重複しており、これも主柱穴のすべてを特定できていないが、6本を想定している。

中央にある隅丸方形の土坑は炭の小片を埋土に含み、かつ2基1対の小ピットを付設すること



第11図 4号竪穴式住居跡実測図 (1/60)

からこれを炉跡と判断した。炉跡内には大型の石材（台石か？）がおかれていたが、この石材は回収を怠っているようで、整理時に所在が判らなかつた。



第12図 4号竪穴式住居跡出土遺物実測図 (1/4、1/2)

出土遺物

特徴の判るものを図示した。

土器 (図版29、第12図1~5)

1は広口壺の小片で、口端部があまり誇張されず、小さく内側へつまみ出す。2は甕の小片で、口端部をつまみ出す。3は壺底部の小片。4は体部上半のほぼ1/2を欠く鉢。口端部はやや外傾する平坦面となり、丸い体部から薄い平底の底部へ続く。外面は粗い刷毛で、内面はごく丁寧な撫でて仕上げる。5は同じ柱穴から出土した甕。これも内面は丁寧に撫でている。外面には一見叩き状の痕跡が見えるが、刷毛目の後に工具で押捺したもののようなものである。

石器 (図版29、第12図6)

ほぼ同じ厚みをもつ砂岩製の砥石で、目が細かい。4面を使用している。

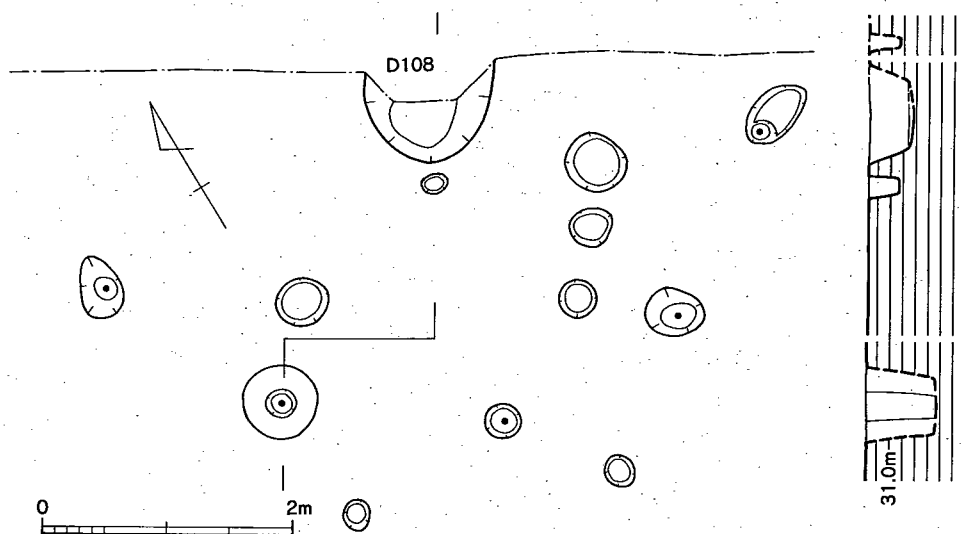
5号竪穴式住居跡 (図版5・6、第13図)

B地区北西隅で検出したもので、これも壁はなく、すべての柱穴が判明していない不完全なものである。ただ、調査区外へ続く208号土坑埋土に若干の炭が混ざっており、かつ土坑の脇に小柱穴が確認されたことから、これが炉跡とその両端にある柱穴であると判断した。

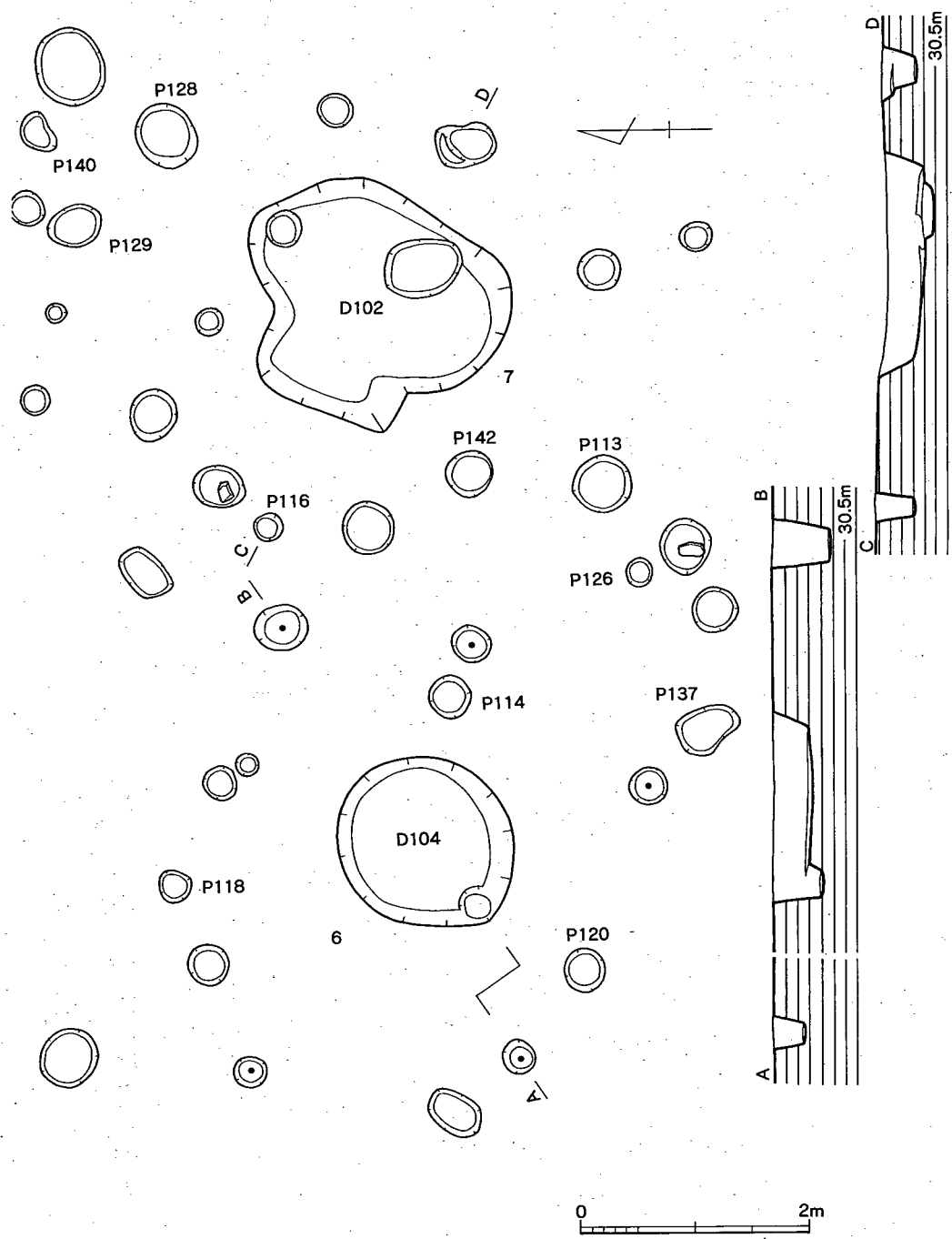
調査区内に5基の支柱穴を想定したが、そうであるならば総数は10基となり、それらの心々距離はおよそ5m強となる。

出土遺物

わずかに炉から数点の土器が出土したが、図化に堪えうるような遺物はない。



第13図 5号竪穴式住居跡実測図 (1/60)



第14图 6·7号竖穴式住居跡実测图 (1/60)

6号竪穴式住居跡（図版6、第14図）

長軸1.5mの比較的大型の土坑（104号）の周囲に、心々で直径4mの円形に近く柱穴が並んでいるように見える。この土坑を炉跡とみなして住居番号を付したが、104号土坑からは炭などの特殊な埋土は検出されず、かつ周囲の柱穴の配置が不規則で、深さも不均等であり確信の持てない住居跡である。

出土遺物

これも特徴を窺えるような土器は出土していない。

7号竪穴式住居跡（図版6・7、第14図）

6号住居跡の西に近接し、これも不確実な遺構である。炉跡を想定した102号土坑には炭の層が観察できたが、大型に過ぎ、かつ支柱穴を特定できない。

出土遺物

確実な住居跡とはいえず、かつ支柱穴もはっきりしないが、6・7号住居跡周辺の出土遺物についてここでまとめて紹介する。

土器（図版29、第15図1～10）

1～4は炉跡と想定した102号土坑出土遺物。1～3はく字状に屈曲する口縁部を有する甕で、1の口端部は小さく肥厚する。2はも口端部を上方につまみ、頸部下に突帯を付す。3は口端部を下方に小さく拡張し、突帯は頸部に取り付く。4は完形に近い器台。上下端ともに内側に小さく巻き込むような形態であるが、脚端部がやや大きくなる。脚端部の一部が熱を受けて赤変。

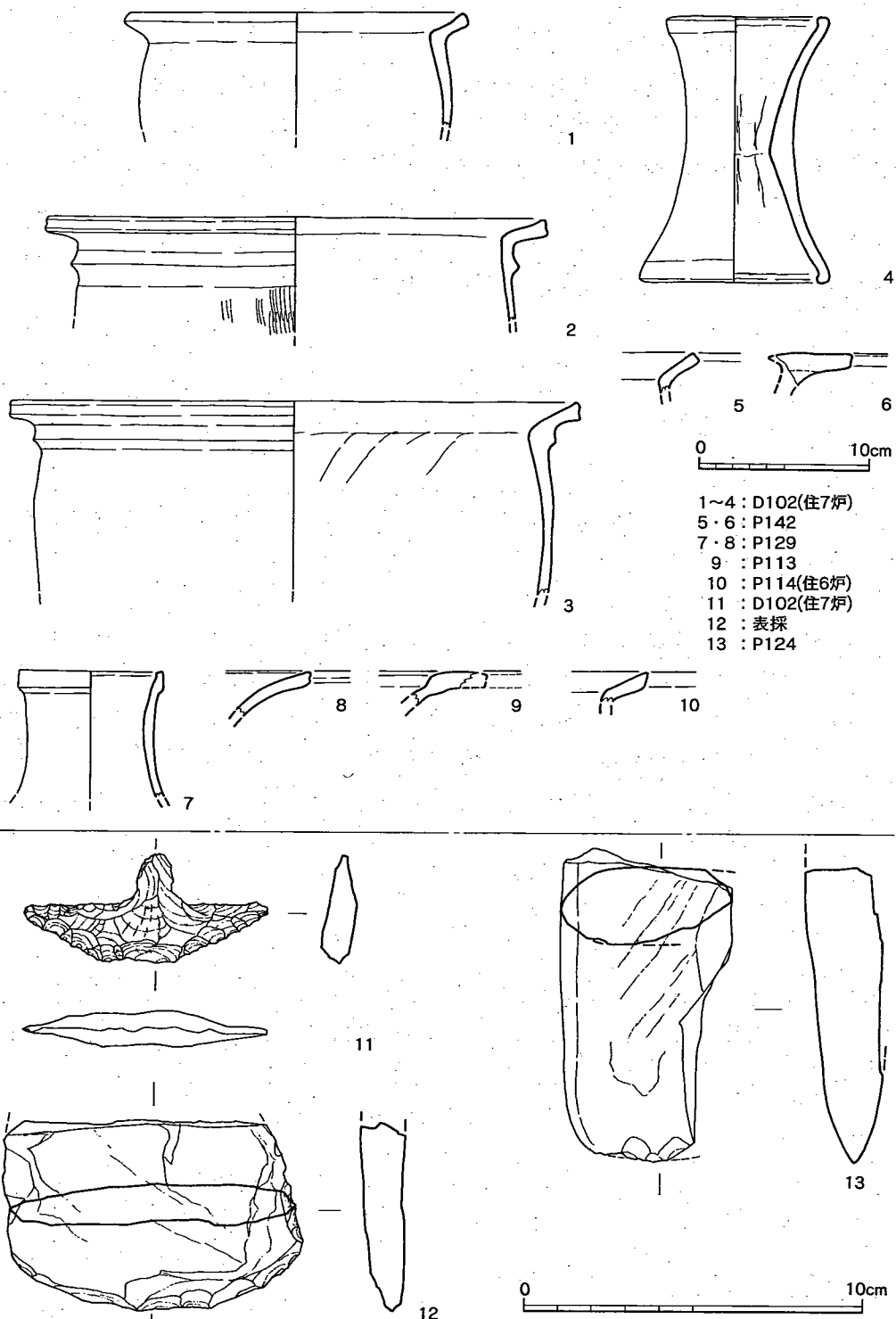
5は口端部を断面方形に作る甕の、6は鋤先状口縁のいずれも小片。

7は口縁部外面に小さな粘土紐を付して段を付け、口端部を内側へややつまむ。8は広口壺の口縁部小片。誇張は弱い。

9・10も小片。

石器（図版29、第15図11～13）

11はサヌカイト製の石匙で、刃部は深く、その他の部位は浅く細部調整を行う。12は周辺で表採した緑泥変岩製の打製石斧片。13は4号住居跡北の柱穴（P124）から出土した磨製石斧で、蛇紋岩であろう。刃部鋭く、側縁にも稜が付く。



第15图 6·7号竖穴式住居跡周辺出土遺物実測図 (1/4、1/2)

2) 掘立柱建物跡

広い調査区の中で、特に東端に集中して1×1間の倉庫群を検出した。付近は柱穴の分布も散漫であり、かつ建物跡を構成する柱穴が他に比して大型であったために容易に認識できた。特に東端（A地区）の建物跡群は、2号土坑を覆うような位置にあるものを除いて、いずれも梁行き方向をほぼ揃え、かつ、ほぼ2棟一対で主軸方位もほぼ揃うなど規則的な配列が窺える。

そのほか、B地区の桁行の長い建物跡や、C地区の柱間の大きな建物跡についてはやや確信を持ってない部分もある。

1号掘立柱建物跡（図版8、第16図）

A地区南西隅付近で検出したもので、他の建物跡に比して柱穴規模が小さい。1×1間の4本柱で、梁行長約2.5m、桁行長約3mである。

出土遺物はない。

2号掘立柱建物跡（図版8、第16図）

A地区西よりの北側にある1×1間の建物跡。梁行長はこれも約2.5mだが、桁行長は約3.5mを測る。柱掘形は0.5～0.6mを測るが、柱当たりの痕跡は0.2mに過ぎない。

出土遺物

それぞれの柱穴から土器の小片が出土している。

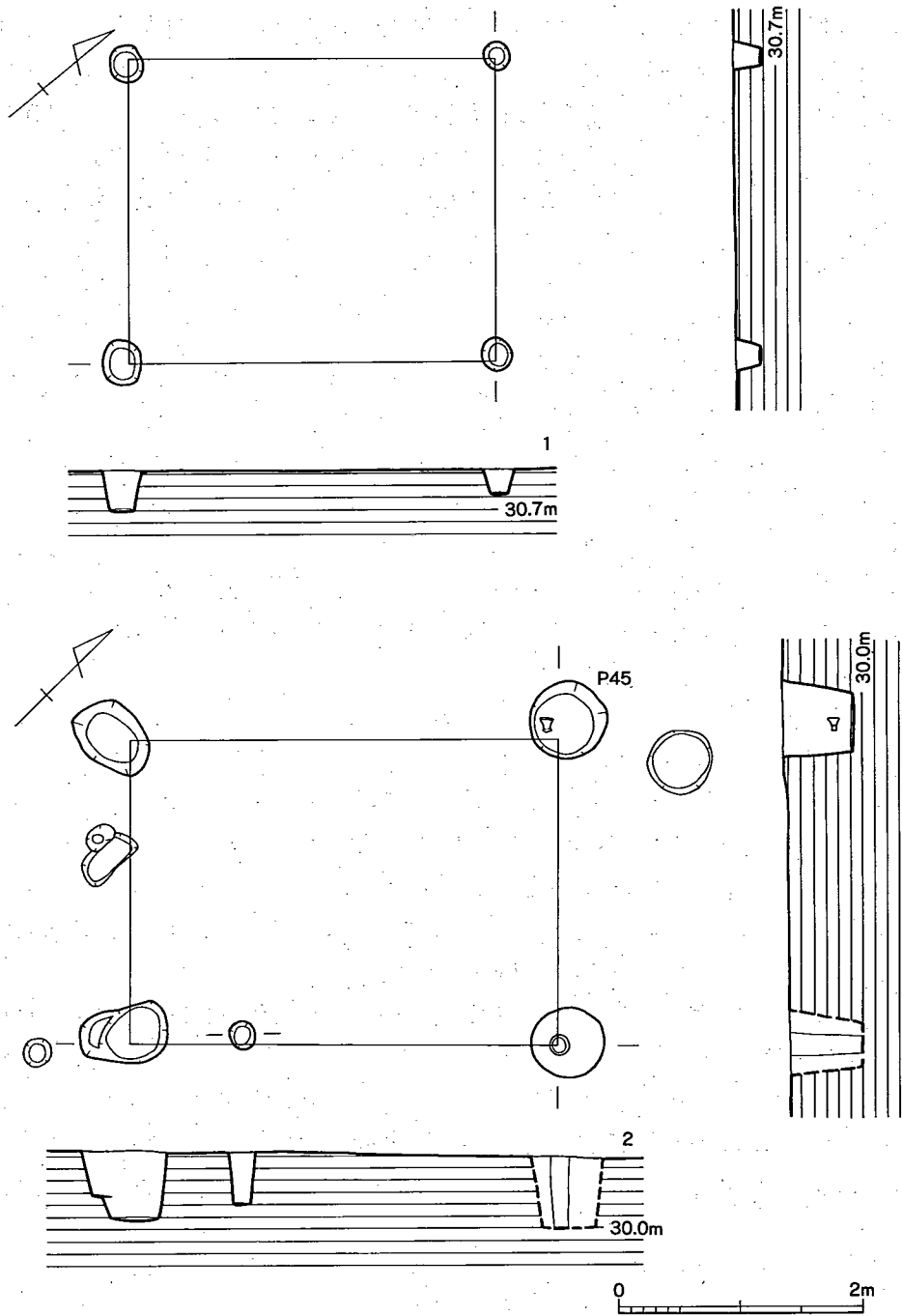
土器（図版29・30、第17図1～11）

1はP45から出土したもので、柱当たりを確認できていないが、掘形中ともどちらともいえる位置から出土した。図示部分はほぼ完存し、全体に焼けて赤く変色する。形態的には脚端部を小さく内側につまむ特徴があるが、外面の調整痕は不明である。

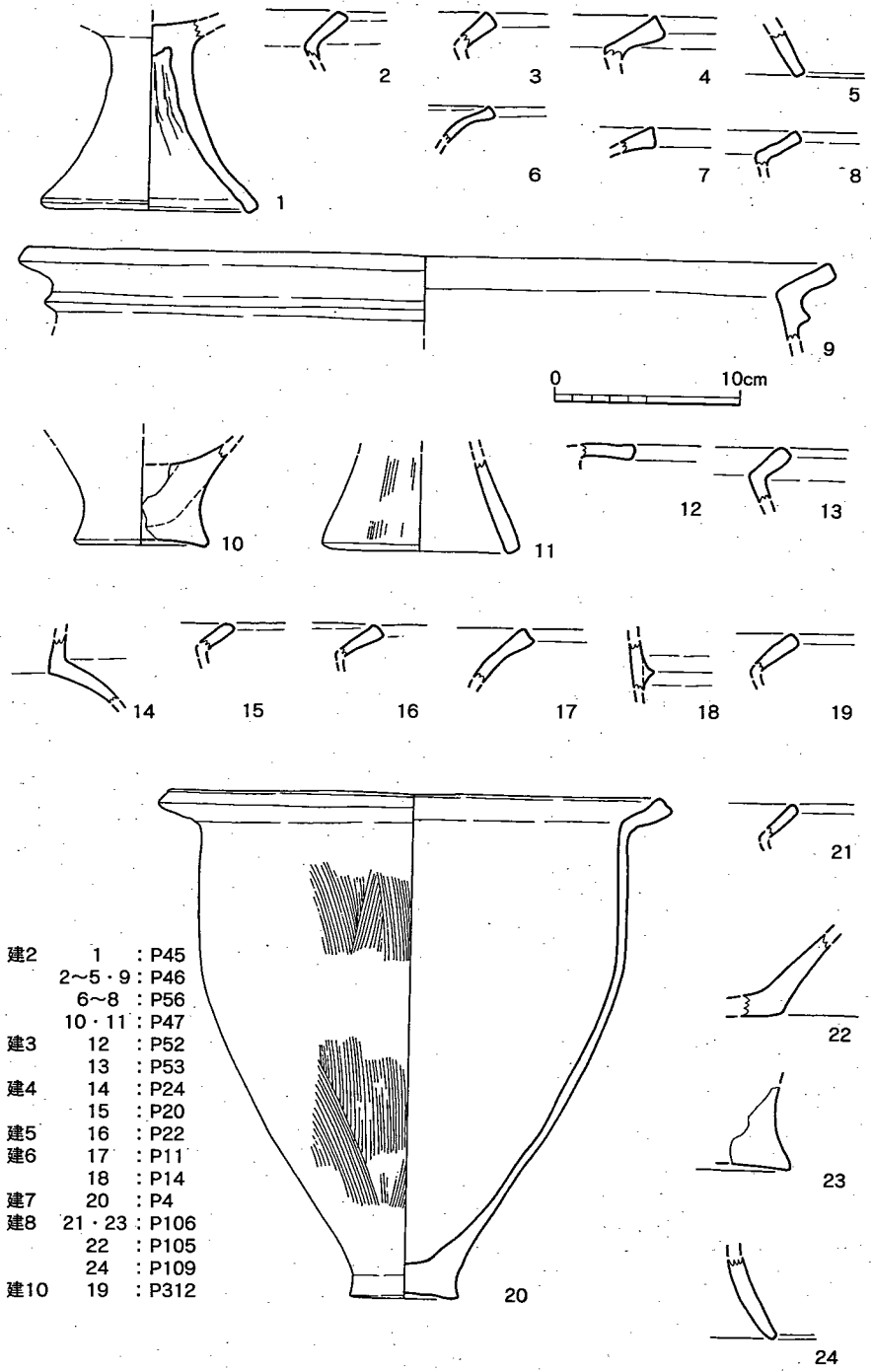
2～4・8・9は甕口縁部。口端部の形状にはバリエーションがあるが、概して強調の度合いは小さい。また、9はほぼ頸部の位置に突帯を付している。

6・7は広口壺の口端部片。6は非常に薄手で、端部を内側へ肥厚させる。7も小さく肥厚させるタイプ。5は器台の小片。

10は甕の底部片で、作り方がよく判る例である。それによれば、丸底に近い形状の底部を作った後に内側へ粘土を充填、そして外側の主に外周に粘土を巻き付けて最終的に厚底の底部としている。11は器台の残片であるが、残存部に焼けた痕跡は見えず、受部である可能性もある。



第16图 1·2号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第17图 掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/4)

3号掘立柱建物跡 (図版9、第18図)

3~6号建物跡はA地区中央付近にあり、地形に沿ってほぼ直線的に並ぶ。これら建物跡の東にも柱穴や土坑、浅い溝などが分布するが、その密度は概して低く、一応遺跡の東限を画するものと思われる。

3号建物跡はそれらの中で最も北に位置し、梁行長2.7m前後、桁行長3.6m前後の1×1間建物跡である。

出土遺物

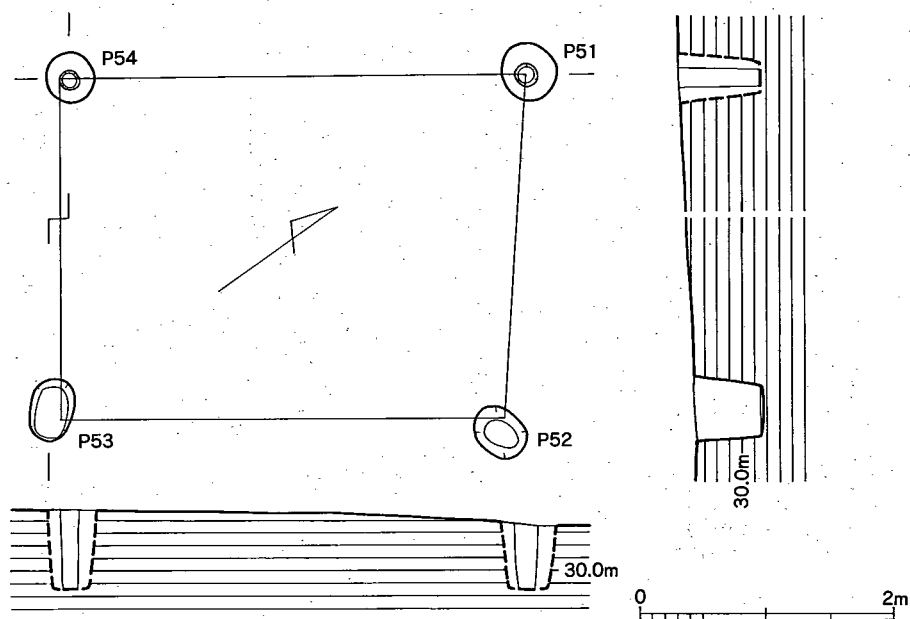
土器 (第17図12・13)

12は鋤先状口縁の小片。ほぼ水平に延び、口端部はわずかに上方へ肥厚する。13はく字形に屈曲する甕の口縁部小片。

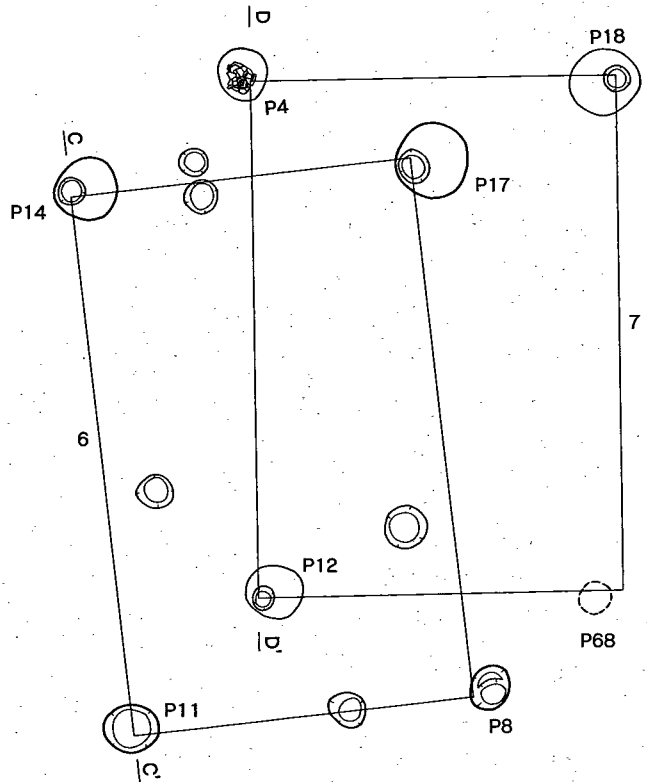
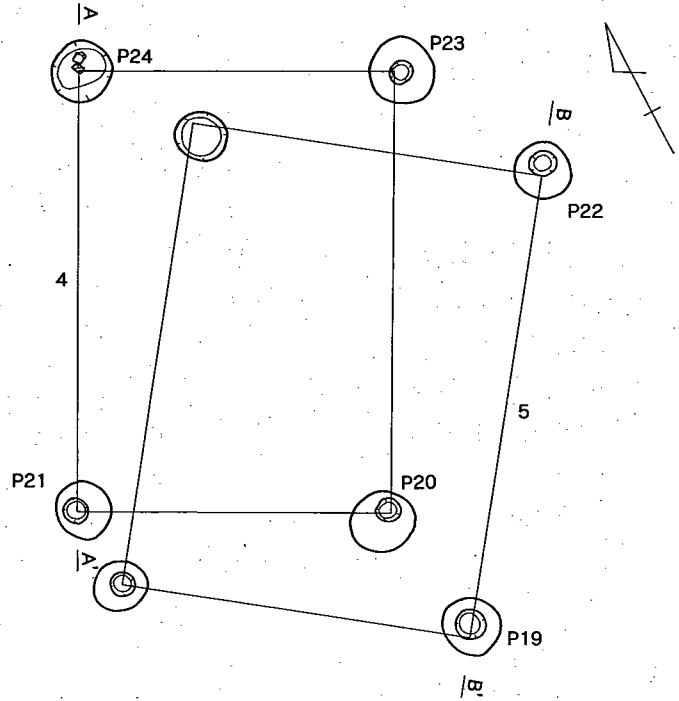
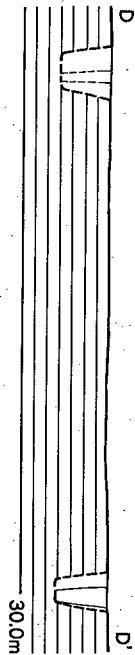
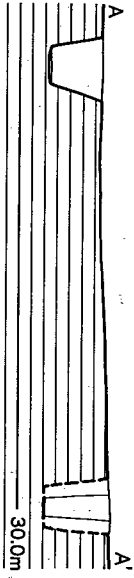
4号掘立柱建物跡 (図版9、第19図)

5号建物跡と重複するが、柱穴そのものは切り合っておらず、先後関係は確認できない。4基の柱穴の中、3基で柱当たりを確認したが、いずれも柱痕は0.2m弱の規模であり、他の建物跡と同様である。

建物跡の規模は梁行長2.5m、桁行長3.5mである。



第18図 3号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第19图 4~7号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

出土遺物 (第17図14・15)

これも土器小片が若干出土したのみである。14は壺の頸部付近の小片で、傾きは不確かである。内面の稜が鋭い。15は甕の口縁部小片で、端部は丸く終わる。

5号掘立柱建物跡 (図版9、第19図)

梁行長2.8m前後、桁行長3.8m前後の規模の1×1間建物跡。3号建物跡と規模・主軸方位がほぼ同じである。

出土遺物 (第17図16)

甕の口縁部小片。口端部がやや肥厚し、上方に小さくつままれる。

6号掘立柱建物跡 (図版10、第19図)

4・5号建物跡の南西に近接する建物跡で、主軸方位は正確には揃わないが4号建物跡に近い。梁行長約2.7m、桁行長約4.2mほどの規模を有し、両者の比率からみて、最も細長い建物跡となる。

出土遺物 (第17図17・18)

17は広口壺口縁部の小片で、口端部を小さく肥厚させて、端面をやや窪ませる。18は壺体部の小片か。

7号掘立柱建物跡 (第19図)

6号建物跡と重複するが、やはり柱穴自体の切合は見られない。南東隅の柱穴の実測を失念しているが、平板を用いた略測図にはP68として妥当な位置に柱穴が記されており、報告にあたって設定したものである。

図化した3基の柱穴では梁行長約3m、桁行長約4.2mの規模となる。

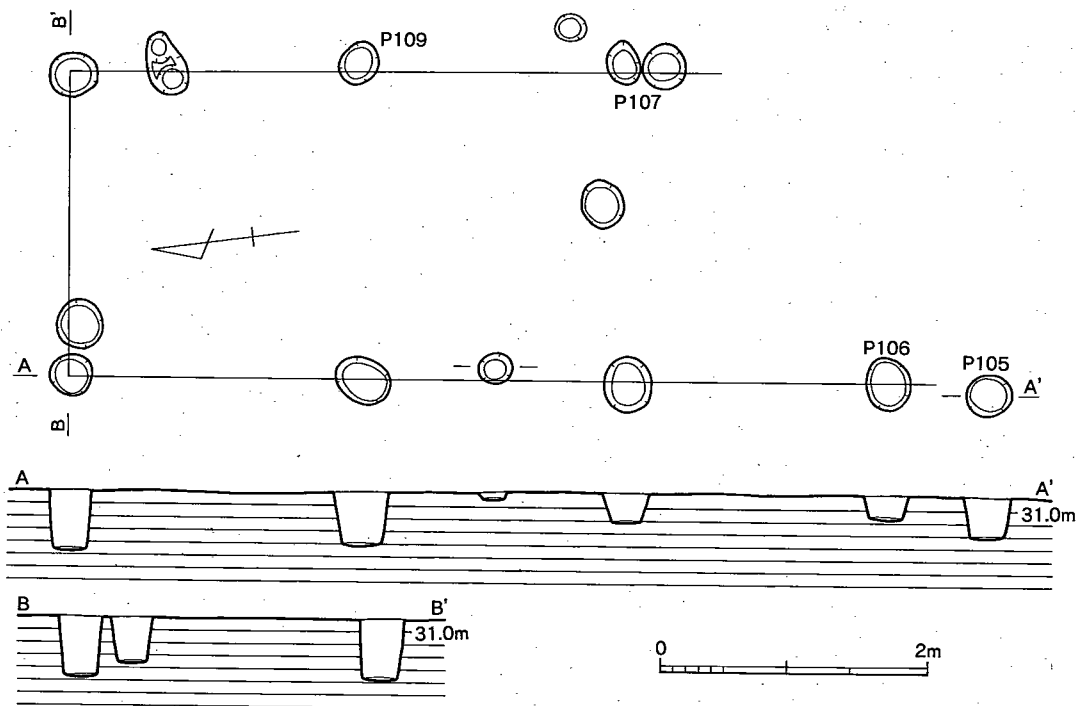
出土遺物

特にP4 (図版24、第47図) とした柱穴で建物廃絶時に遺棄したと断定してよい状態で土器を出土している。

土器 (図版30、第17図)

全体が窺える甕で、器高・口径ともに27cm前後の大きさである。口縁部はく字形に外折し、口端部を肥厚させるが、顕著な跳ね上げ口縁にはならない。頸部内面に稜をもつ。体部はあまり張らずに薄手の底部へと続く。調整は外面を細密な刷毛目で、体部内面を極めて丁寧に撫でて仕上げている。

8号掘立柱建物跡 (図版、第20図)



第20図 8号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

B地区東端にある南北に長い建物跡。これも調査時には確認しておらず報告にあたって設定した遺構で、主軸方位が他の多くと大きく異なることや、規模も特異なもので必ずしも確信はない。ただ、図面上では否定する確たる根拠もないので建物跡として報告しておく。

梁行1間、約2.4m、桁行3間以上で、柱間距離は一定しないがおよそ2.3m前後となる。

出土遺物 (第17図21~24)

甕口縁部、壺・甕の底部、器台の小片である。器台は焼けて一部が赤変することから脚部と思われる。

9号掘立柱建物跡 (図版11、第21図)

C地区東端で検出した建物跡。これは唯一主軸方位が8号建物跡に近い。1×1間の建物跡で、柱間距離は東西長約2.5m、南北長が約2.6mのほぼ正方形プランとなる。

出土遺物には土器小片があるが、特徴を窺えるものはない。

10号掘立柱建物跡 (第22図)

C地区中程の北端にある1×1間の建物跡。梁行長2.2m、桁行長3mの規模を有する。

出土遺物 (第17図19)

土器小片があるが、甕口縁部小片を図示した。く字形に外折し、口端部を断面方形とするタイプ。

11号掘立柱建物跡 (第22図)

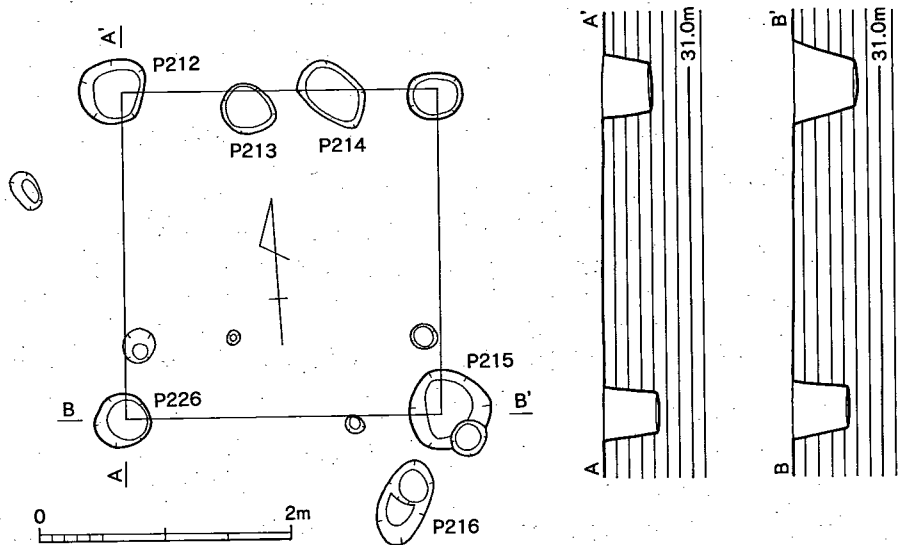
10号建物跡の南西に近接する1×1間の建物跡で、北の隅柱は開墾のために削平されていた。梁行長2.2m、桁行長2.5mを測る。

土器片が少量出土するが図示に堪えない。

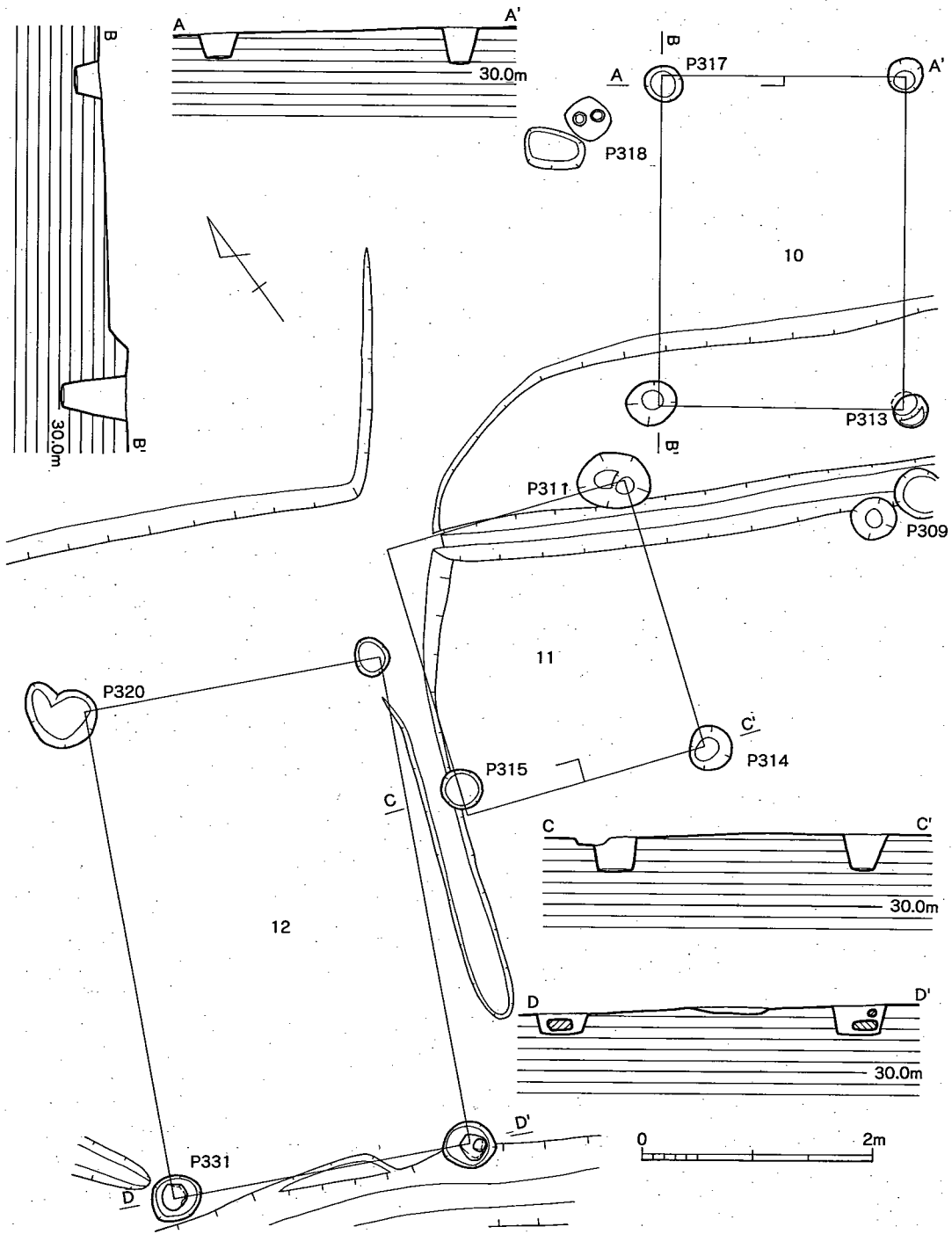
12号掘立柱建物跡 (図版11、第22図)

11号建物跡の南西に近接する1×1間の建物跡。ただ、柱スパンは大きく、梁行長2.7m、桁行長は4.4mである。南側の2基の柱穴には扁平な河原石を据えて礎盤としていた。本遺跡で唯一の例である。

これも土器片が少量出土するが図示に堪えない。



第21図 9号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第22图 10~12号掘立柱建物跡実測图 (1/60)

3) 土 坑

無数の土坑を調査したが、中には不整形かつ無遺物のものも多くあった。また、いくつかは住居跡の炉を想定した。したがって、すべての記述は行わず、一部のみを報告する。

12号土坑 (図版12、第23図)

4号建物跡の西にある、調査区内で検出した唯一の落とし穴状の土坑。

長軸1.25m、短軸1mの楕円形に近い平面形を呈するが、床面は1×0.6m弱の整った隅丸長方形となる。深さは0.5m強が残存し、床面の柱穴は直径0.4m深さ0.5mであった。

埋土は灰褐色を呈し、土層観察を試みたが、分層が困難であり、図化を行っていない。

出土遺物は床面付近から自然礫が出土したのみである。また、床面付近で焼土塊が検出された

2号土坑 (図版12、第24図)

A地区西端付近、1・2号建物跡の間に位置する。

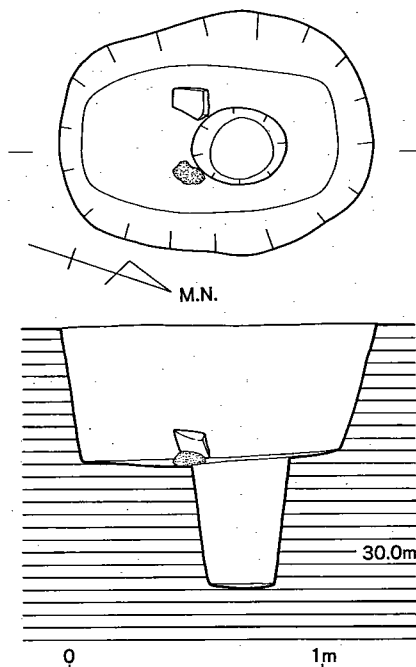
長軸2m、短軸約1.1mの整った隅丸長方形の平面プランをなすが、深さはわずか0.1mにも満たない浅い土坑である。長辺に接して位置するピットは浅いもので、遺構との確証はない。

この土坑で注目すべきは周囲に位置する柱穴である。短辺2.1m、長辺3.1mの距離を隔てて、やや菱形に近い形で各隅角の外側に4本の柱が配列されている。また、それらはいずれも土坑本体に比して深く、残存する深さはほぼ0.6mを測る。なお、一方の短辺の中央付近に位置する柱穴については確実に伴うものかどうかはつきりしない。

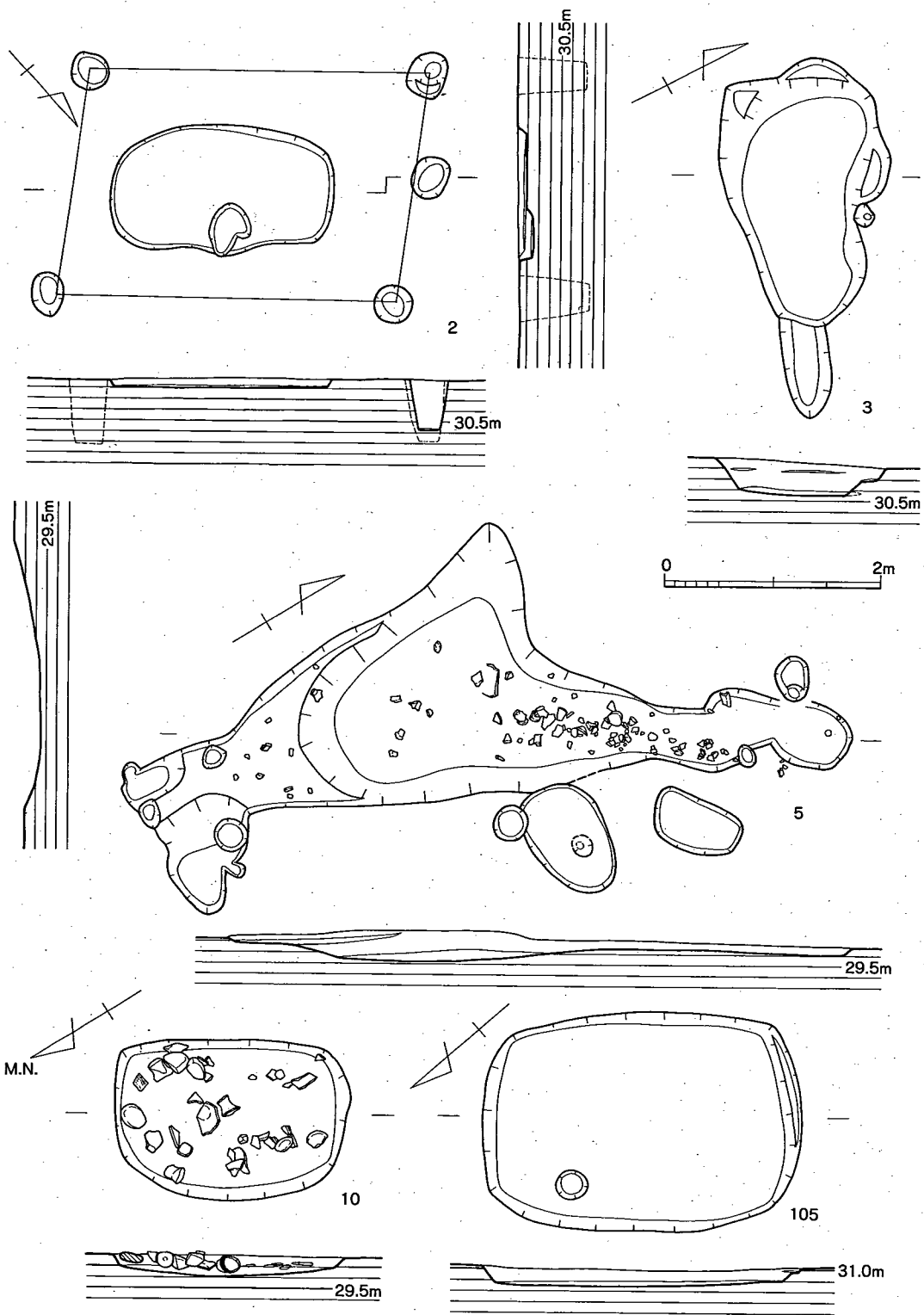
出土遺物

土器 (第50図21・22)

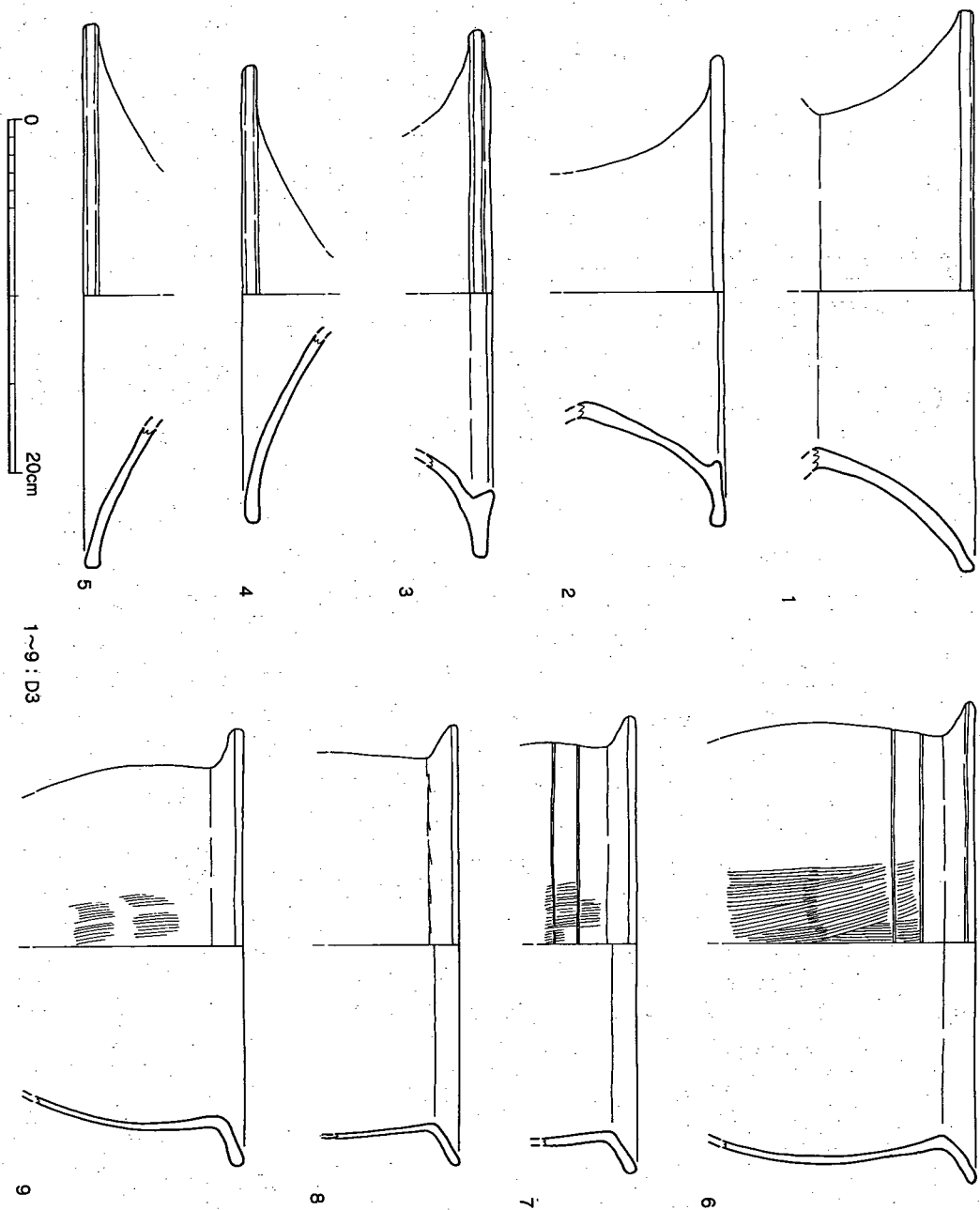
土坑からは図示に堪える遺物は出土していないが、周囲の柱穴の中、P67としたものから小片が出土している。21は跳上げ口縁となる口端部の誇張が顕著な甕の小片。22は同じく甕の底部小片である。側縁のくびれ具合が弱いものの、肉厚となる。ただし、内定面および外底面の粘土充填部分は剝離する。



第23図 土坑実測図① (1/30)



第24图 土坑实测图② (1/60)



第25图 土坑出土器物实测图① (1/4)

3号土坑 (図版13、第24図)

2号土坑の北に近接する。長軸2.5m、短軸1.5mの不定形な土坑であるが、細片化した土器や石器などが多く出土している。深さは最も深い部分で0.3mほどとなる。

出土遺物

特に検出面近くで大量の細片化した土器を出土し、床面近くで比較的大型の土器片を出土した。

土器 (図版30・31、第25図1～第26図15)

3は出土層位が落ちているが、4・7・8・14・15が上層から、他は下層から出土したもの。

1～3は広口壺で、1は口端部が外傾する面をなす小片。2はほぼ完周する鋤先状口縁をもつ。口縁部はほぼ水平で未発達なものである。3は小片で、口縁部が若干外傾するものの、長さが短い。3は内面の一部に灰褐色を呈するスリップ(?)の痕跡が残るが、その他の大部分はいずれも器表が荒れる。

4・5は甕の蓋。いずれも小片であるが、4では口縁部内面が煤けている。調整痕は不明。

6～9は如意形に外反する甕で、6・7では非常に細く浅い沈線が2条見える。8にも沈線があるように見えるが、器表が荒れていて確認できない。10は鉢であろうか。口端部が小さく肥厚し、内面に黒色の付着物がある。11・13は頸部直下に断面三角突帯を付すやや大振りの甕で、11・12は同一個体と思われる。11の口端部は小さくつままれて、いわゆる跳上げ口縁となる。外面を細かい刷毛目で調整し、内面は撫でて仕上げる。なお、底部は非常によく焼けている。15は鋤先状になる甕の口縁と思われる。細線で複線鋸歯文が刻まれる。

14は透孔をもつ高杯であるが、後から充填した底部が剝離している。すぐ北に隣接する柱穴P6出土品と同一のようである。

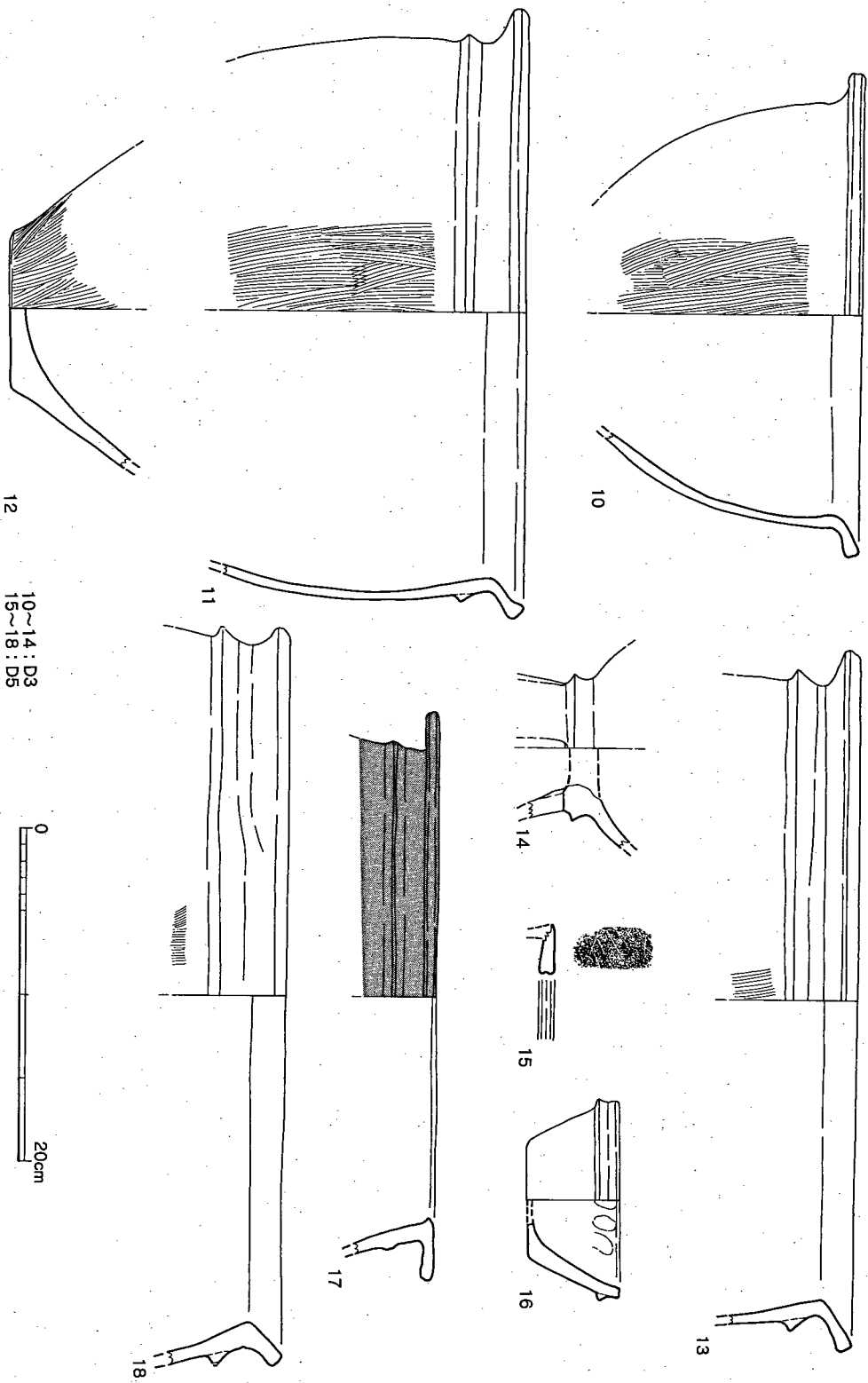
石器 (図版34・35、第34図63～70)

64の石庖丁と67の凹石のみが下層から、他はすべて上層から出土した。

63は緑泥変岩製打製石斧の頭部。64は長方形の石庖丁残欠。残存長約11cm、身幅約3.5cmで、両面から穿孔されている。背より刃部の方が肉厚となり、図右側の孔下付近の刃部は潰されている。65は長さ6.5cm、直径3.3～4.2cmの断面楕円形を呈する投弾状の石器。石材は地山中に含まれる風化の著しい安山岩を使用しており、表面は荒れて脆い。66は安山岩製の乳棒状石製品で、石杵かと思われる。全長23cmで、断面形は方形に近く、頭部が小さい。図下端の使用部分は曲面となるが、摺ったというよりは敲打したような痕跡である。

67・68は凹石で、これらも安山岩製。いずれも図下面もわずかに窪み、特に67は側縁が粗いものの、他の部位はよく平滑化する。

69・70・72・73は磨石。いずれも安山岩を使用し、全体がよく平滑化する。いずれも一方の面に赤色顔料かと思われるものがわずかに付着し、69では反対側に煤らしき付着物が、70では



第26图 土坑出土器物实测图② (1/4)

焼けたものか灰黒色に変色した部分が同じ面にある。

4号土坑

1号土坑の北に隣接する不整形の大型土坑で、確実な遺構とは思えないものであり、図は略した。あるいは風倒木痕か。

出土遺物

土坑のほぼ検出面肩から石匙が出土したが、他の遺物はまったくない。

石器 (図版35、第34図74)

姫島産黒曜石を使用した石匙。図示しない面は大きな剝離面のまま、刃部にのみ細部調整を行っている。図示した面ではつまみ部の剝離は浅く、身の部分では深く剝離を行う。

5号土坑 (図版14、第24図)

A地区東端近くにある不整形土坑。谷部へと下降する緩斜面にあり、遺構の密度はおおむね疎であるが、この土坑付近には小規模な土坑・落ち込みがいくつか集中して検出された。

土坑は長軸約7m、短軸2.5mの規模を有するが、深さは最大で0.2mに過ぎない。埋土は灰黒色粘質土であり、地山とは明瞭に区別されるが、出土遺物の多くは浮いた状態で検出されている。遺構というよりは流れ込み、あるいは包含層のような性格かも知れない。

出土遺物

上記したように、良好な状態で出土したものではないが、小片化した土器が出土している。

土器 (図版31、第26図15~18)

15は約1/3が残るミニチュアの鉢。口端部は水平面をなし、断面方形とする。わずかに下に断面三角突帯を付す。器表は荒れる。16は甕底部。17は鋤先状口縁部を有する甕で、器表が非常に荒れるが赤色顔料が一部に見える。18はく字に外折する甕で、口端部は断面方形に作る。頸部内面に稜を有し、細部はシャープである。

石器 (図版35、第34図75)

緑泥変岩製の磨製石鏃で、基部を欠く。研磨は非常に丁寧で、鏃ははつきりしない。

10号土坑 (図版14、第24図)

5号土坑の南に近接する隅丸長方形の土坑。長軸2.2m、短軸1.5mの規模を有するが、深さは約0.2mに満たない。

出土遺物

図示したような状態で遺物が出土するが、浅いこともあつて量は多くない。

土器 (第27図19~21)

19は小片であるが、壺の口縁部であろう。鋤先状を呈するが、上方に彎曲する。20は壺の、21は肉厚の甕の底部。

石器（第33図71）

安山岩製の凹石で、両面の中央部が浅く窪む。側縁の一部を除いてよく平滑化しており、手で触ると非常に滑らかである。

105号土坑（図版15、第24図）

B地区北側の東寄りにある隅丸長方形の土坑。2×2.9mの平面規模を有し、深さは0.1mほどである。

出土遺物

図示していないが、土器・石器は南半に集中して出土した。

土器（図版31・32、第27図22～第29図36）

22・23は鋤先状口縁を有する壺。22は小片で器表が荒れる。23の口頸部はほぼ完存する。口縁部上面がやや匙面状となり、口端部が小さく肥厚する。頸部に断面三角の、肩部および最大径部に断面梯形の突帯を各1・2条付す。器表の遺存状態のよい頸部内面では非常に密な篋磨きが観察でき、かつその付近には茶褐色の化粧土様の痕跡も残る。24は略完形の壺底部。

25は約1/4が残る甕用蓋。口端部が若干肥厚し、その内面に煤が付着する。器表は全体に荒れがひどく、調整痕等の細部は不明。

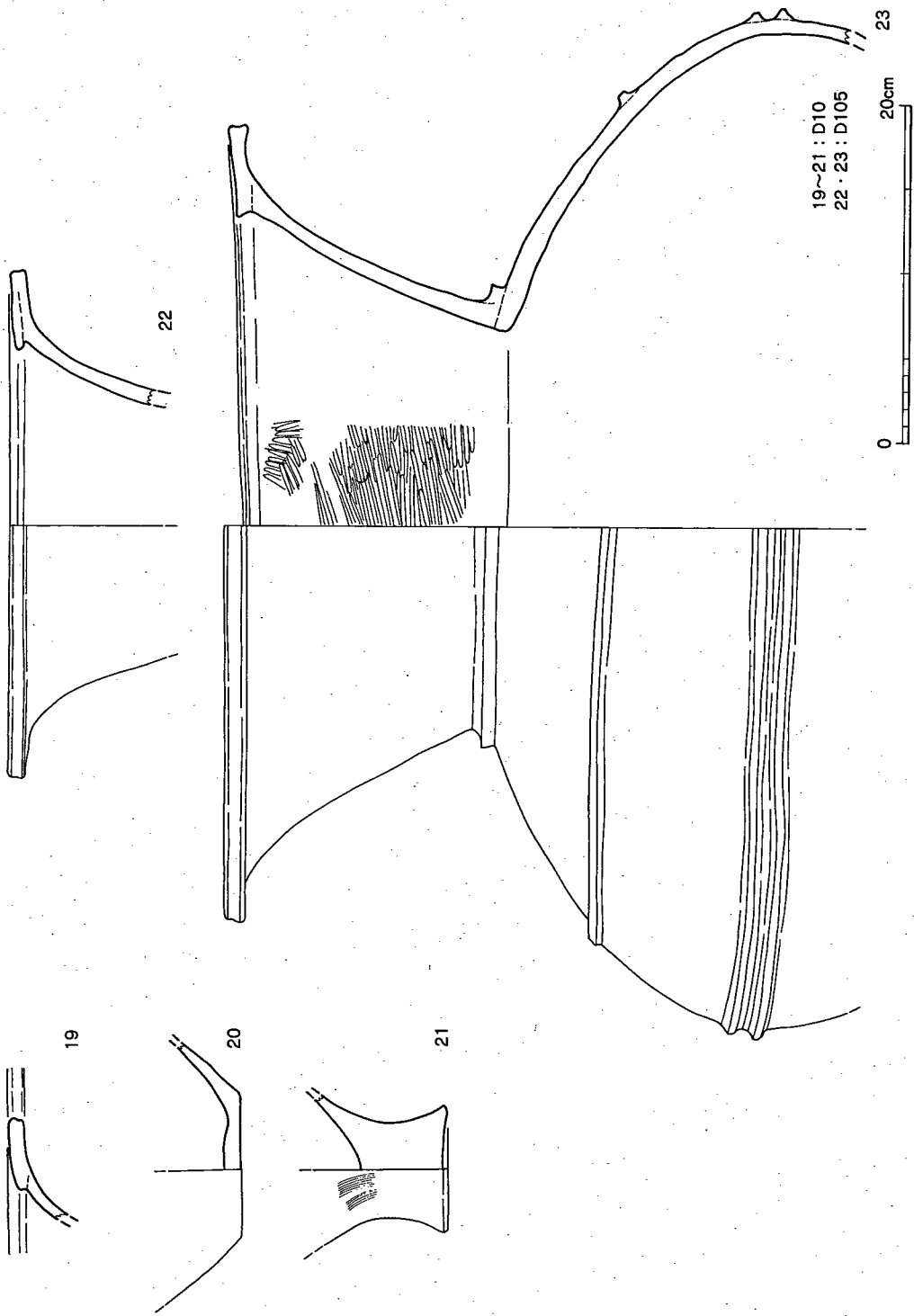
26・27は口縁部が直角に近く外折し、頸部下に2条の沈線を付すもので、沈線はやはり細く浅い。28・29はく字形に外折する口縁部付近の小片。30・31は頸部やや下方に断面三角突帯を付すもので、いずれも口端部を小さく肥厚させる。器表がよく残る31では外面を細密な横刷毛で、内面を丁寧な撫でで仕上げる。

32は柱状部がほぼ完存する高杯で、脚部上端に甘い三角突帯を2条付す。脚部の高さに比して脚端部の広がり小さい。

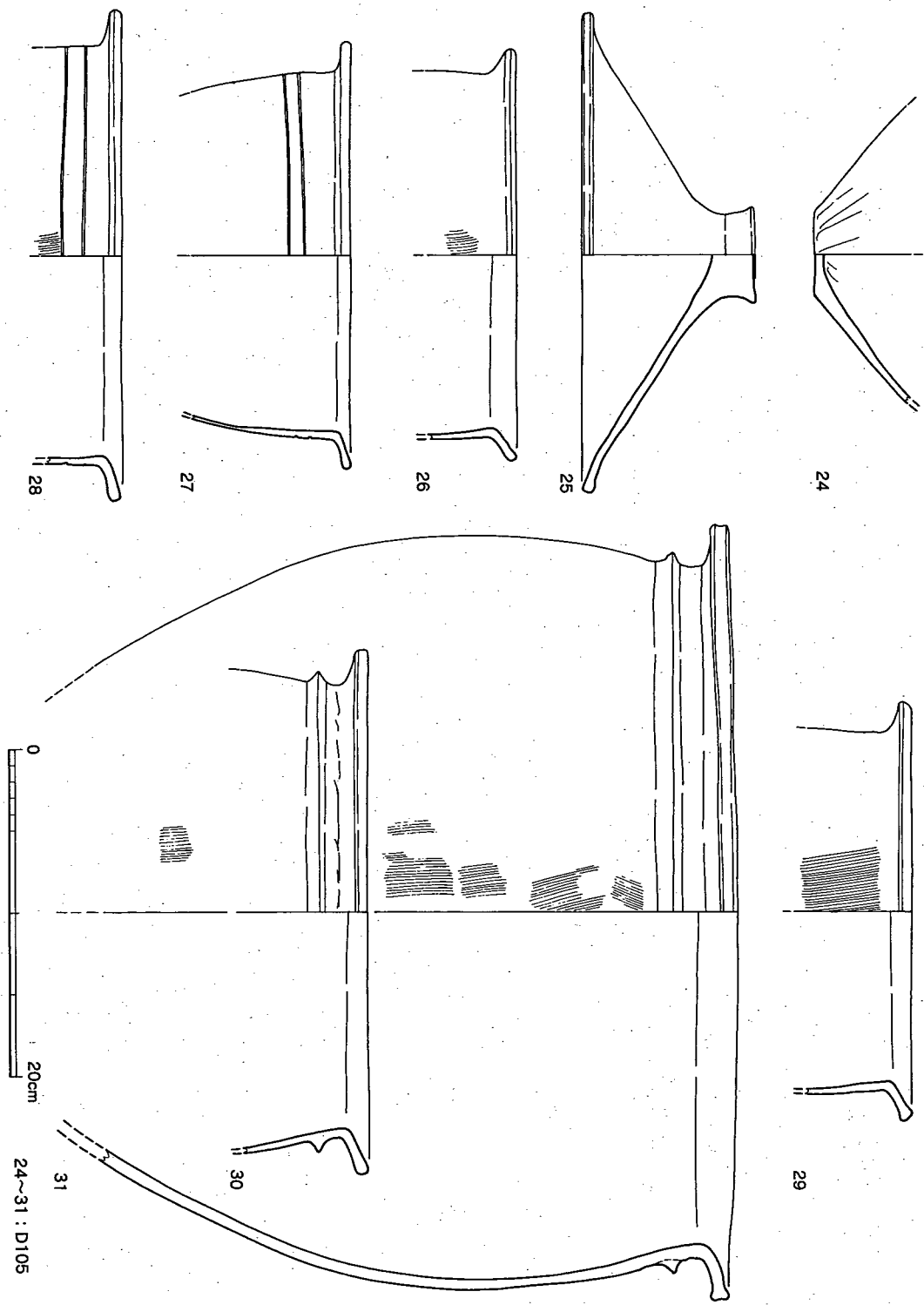
33～36は図示部分が完存する甕の底部。いずれも肉厚で、二次的な火熱をよく受けて赤変する。図示していないが同様な底部がもう1点存在する。

石器（図版35・36、第34図76～79）

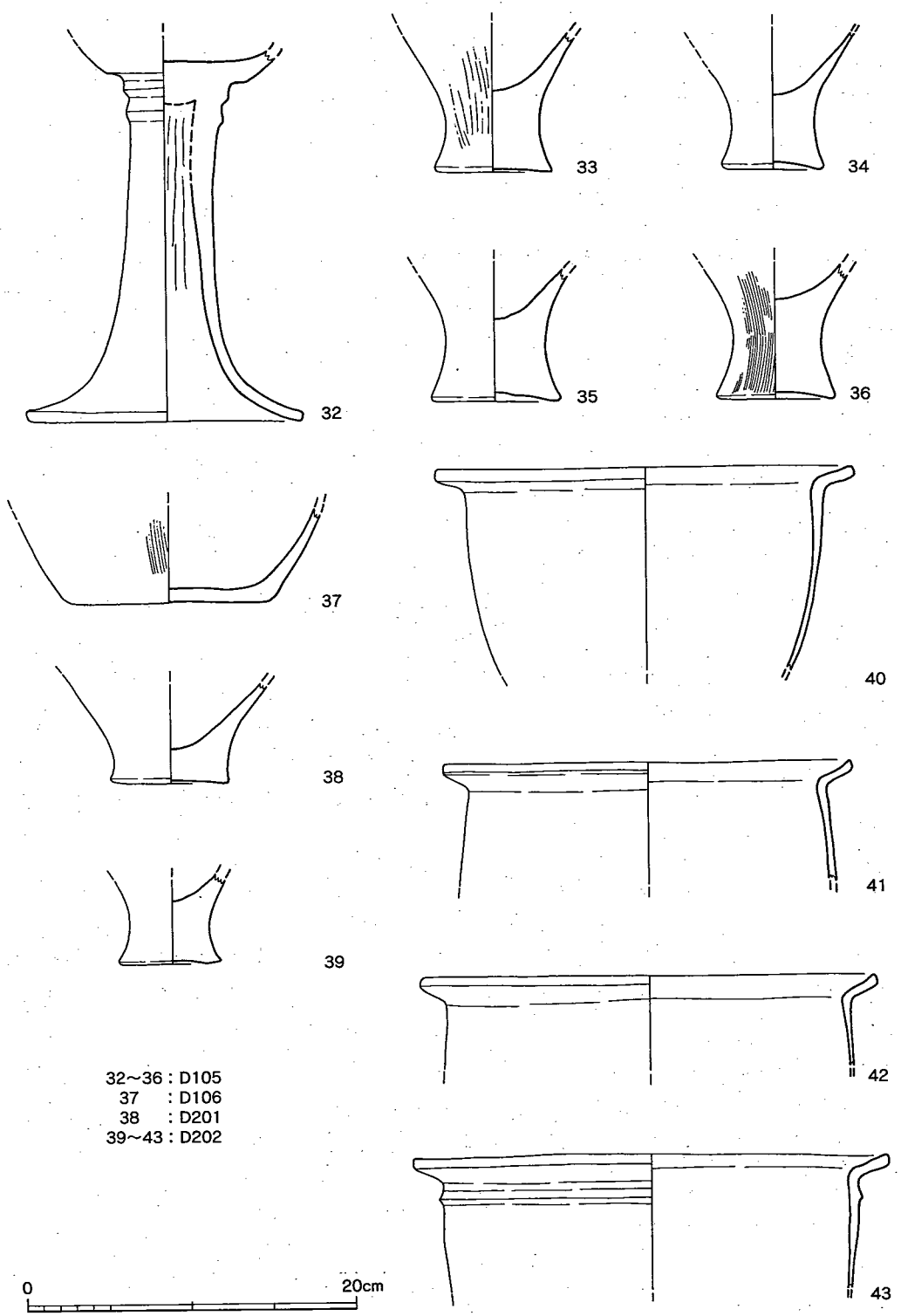
いずれも安山岩製のようで、磨石あるいは石皿であろう。76は折損するが、その破面以外の全体が非常に滑らかとなっている。77は平面形が方形に近かったようであるが、多くが失われていると思われる。図上面および側縁の一部あるいはすべてが滑らかな面となる。78は上下面が滑らかとなるが、側縁はそうではない。79は78と同程度の大きさであるが、側縁も含め、全体が滑らかとなる。



第27图 土坑出土遺物実測図③ (1/4)



第28图 土坑出土遺物実測図④ (1/4)



32~36 : D105
 37 : D106
 38 : D201
 39~43 : D202

第29图 土坑出土遗物实测图⑤ (1/4)

106号土坑

B地区中程にある小型の土坑。長軸1.4m、短軸0.7mほどの隅丸長方形平面を呈し、深さは0.2m弱である。

出土遺物

土器（図版32、第29図37）

底径16cmほどの大きな底部で、形態から寸胴となる形態の甕あるいは鉢となろう。約1/4が残存するが、器表の荒れが著しい。

201号土坑（図版3、第3図）

C地区東南隅、1号住居跡の炉に接する土坑。平面形は各辺の中央付近がくびれる隅丸長方形に近く、規模は辺長1.3～1.6m、深さ0.2mほどである。

埋土には黒褐色土が入り、内部に小礫を多く含んでいた。

出土遺物

土器（図版32、第29図38）

甕の底部。二次的な火熱を受けてよく焼けている。そのために器表が荒れる。

202号土坑（図版15、第31図）

2号住居跡の北に位置する、ほぼ円形の土坑。長軸2m、短軸1.8m弱の規模を有し、深さは0.1m強が残存する。

黒褐色の埋土が入り、床面に2基の柱穴を検出したが、この土坑に伴うものか確認できていない。

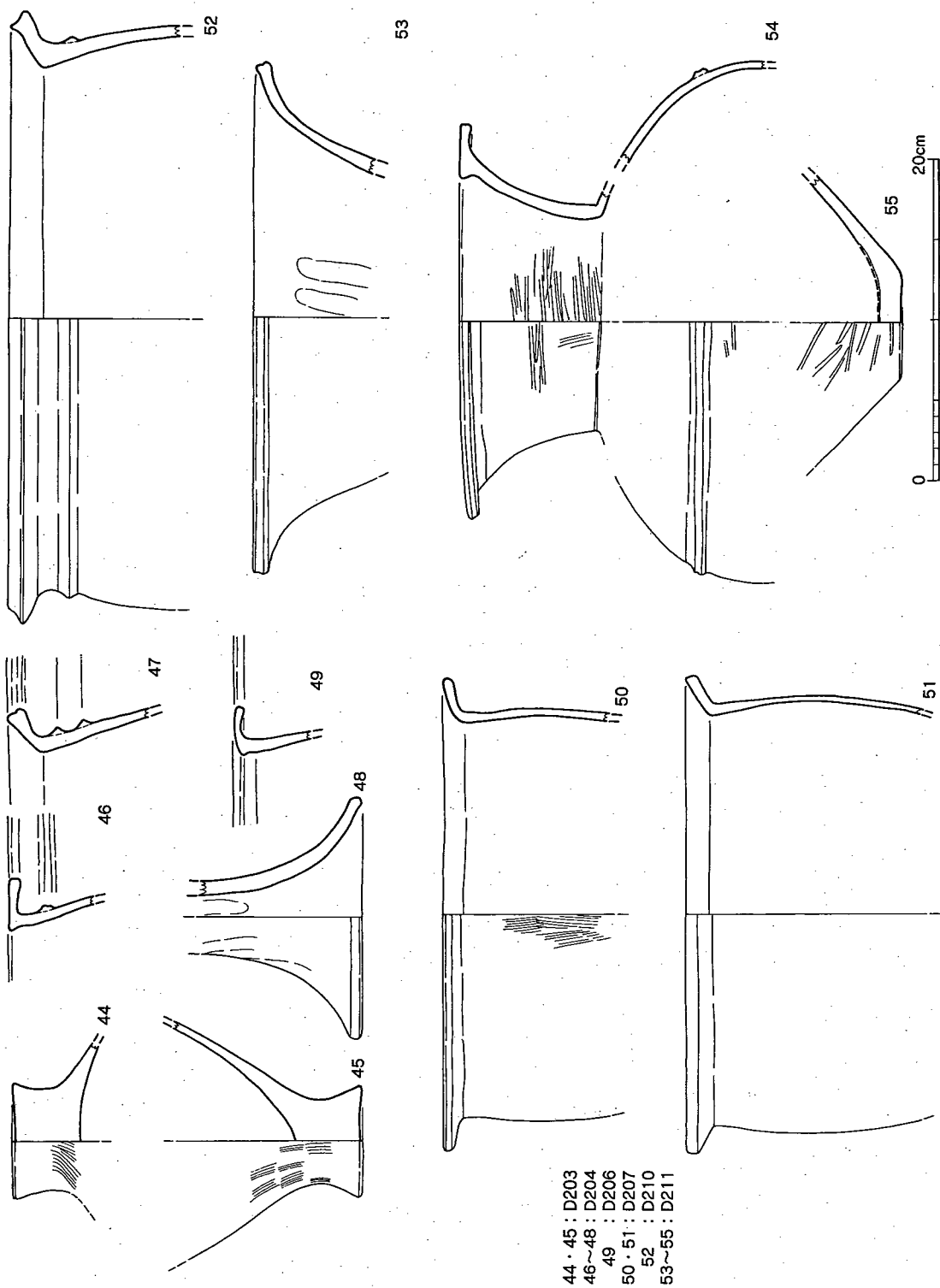
出土遺物

土器（図版33、第29図39～43）

いずれも甕の残片。40～42は口端部が小さく肥厚し、上方に拡張する傾向がある。43も口縁部形態は同様であるが、頸部下位に断面三角突帯を付す点で異なる。いずれも体部の張りは小さいようである。

石器（図版36、第34図80・81）

80は安山岩製の凹石。他例に比して器表は滑らかさを欠き、側縁の一部は敲打に使用されたような痕跡を残す。81も安山岩製の磨石残穴。これは全体に平滑化するが、器表の風化が進んでいる。



44·45 : D203
 46~48 : D204
 49 : D206
 50·51 : D207
 52 : D210
 53~55 : D211

第30图 土坑出土遗物美溯区⑥ (1/4)

203号土坑

202号土坑の北に隣接する。長軸1.8m、短軸0.6~0.7mの長円形を呈し、深さは0.1mに満たない。一見土壇墓状の形態を見せるが、床面が不揃いである。暗茶褐色の埋土が入る。

出土遺物

土器（図版33、第30図44・45）

44は体部の立ち上がりが浅く、甕の蓋と思われるもので、図示部分は完存する。器表は荒れる。45も図示部分が完周する甕。肉厚で、これも非常によく焼けている。

204号土坑（図版16）

C地区中央付近のやや南よりに位置する。長さ2.1m、幅0.4~0.6mの南北に長い土坑で、深さは0.1mほどである。

出土遺物

かなりの土器が出土したが、多くが細片化していた。

土器（図版33、第30図46~48）

いずれも小片かつ器表が荒れる。46は鋤先状口縁の甕で、頸部下に断面梯形の突帯を付す。赤色顔料は見えないが、体部内面が灰白~黄白色を呈するのに対して、同外面は赤色となる。47はく字形に外反し、口端部を誇張する甕で、断面三角突帯を2条付す。48は高杯の脚部で、外面に縦方向の篋磨き痕が微かに見える。

206号土坑

204号土坑の北にある小土坑。平面形は軸長0.6~0.9mの不整円形で、深さは0.2m。

出土遺物

土器片がかなり出土したが、やはり細片化しており図示に堪えるものは少ない。

土器（第30図49）

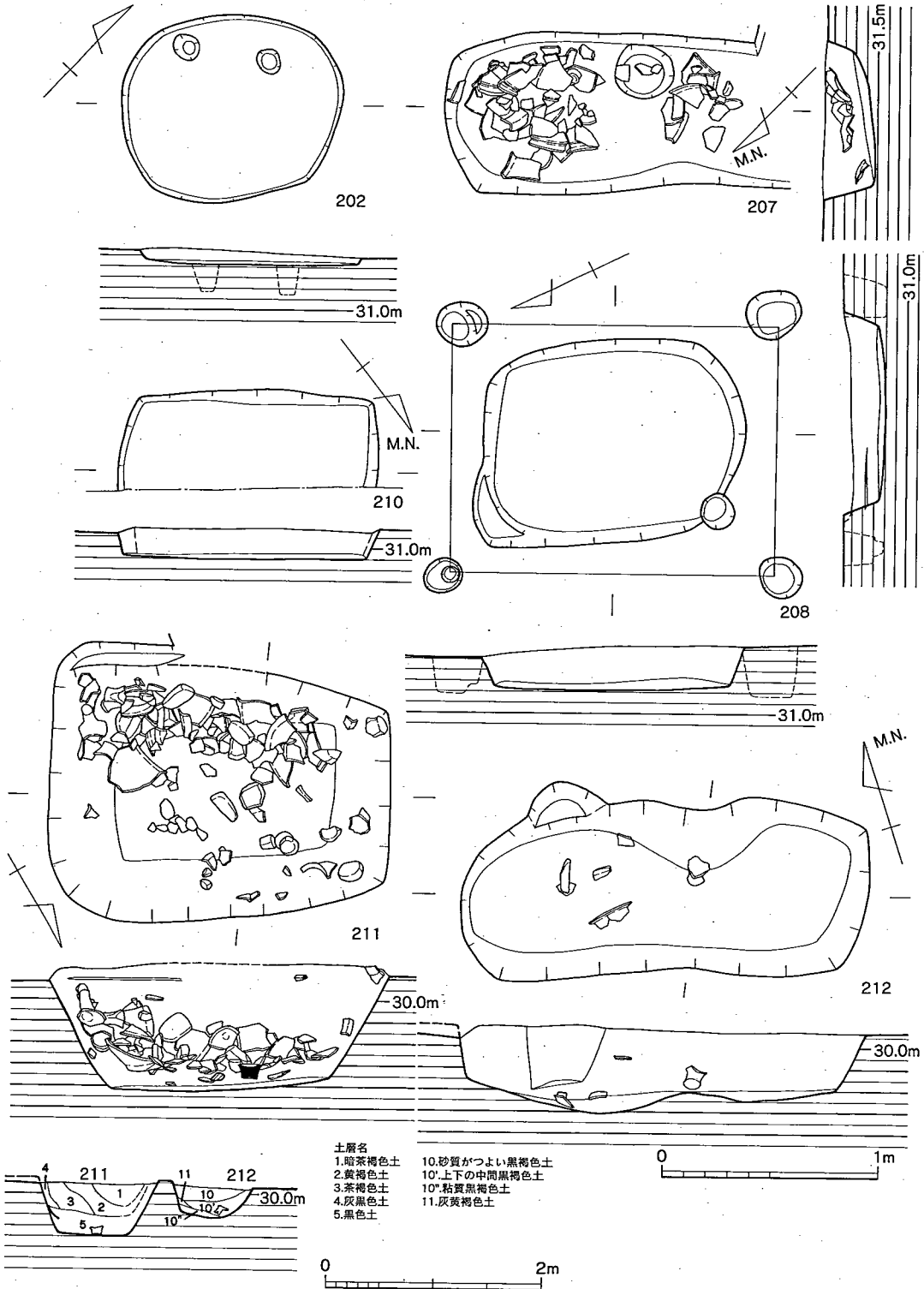
鋤先状口縁部を有する甕。口縁部の長さは未発達であるが、反りが強い。器表は荒れる。

207号土坑（図版16、第31図）

C地区高台部分の西端にある、長さ4m弱、幅0.8mの細長い土坑で深さは約0.2m。一部がT字状に突出する。すべてが一連の遺構とは思えないが、その北東端で土器がまとまって出土しており、その部分のみを図示した。

出土遺物

個体数は少ないが、かなりのまとまりをもって土器が出土した。しかし、遺存状態が非常に悪く、取り上げる端から細片化し、図化できたものは僅かであった。



第31図 土坑実測図③ (1/30、1/60)

土器（図版33、第30図50・51）

両者ともに体部の張りの小さな甕であるが、口縁部の形態が若干異なる。50は外反の度合いが強いものの、まだ如意形の形態を留めているが、51はく字形に外折し、口端部を方形に整形している。いずれも器表が荒れる。

208号土坑（図版17、第31図）

207号土坑の北東に近接する土坑で、2号土坑と同様に4本の柱を付設する。土坑自体は隅丸長方形に近い平面形を有し、長軸2.2m、短軸1.9m、深さ0.3~0.4mの規模である。

埋土は下層に灰黒色土、上層に灰赤褐色土が略水平に堆積していたが、土墳墓とした場合に想定される立ち上がり等の土層変化を確認できなかったために図化を行っていない。

なお、図に見るように、土坑の深さが柱穴の深さとほぼ等しい点は2号土坑とは異なる。

出土遺物

弥生土器のみが出土したが、いずれも小片で図化に堪えず、かつ浮いた状態で出土。

210土坑（図版17、第31図）

C地区中程の北端、3棟の建物跡が集中する付近にあつて、一部が調査区外へ続く。検出した部分は長軸2.4m、短軸1m以上、深さ0.2mの規模で、平面形はほぼ長方形である。

埋土は、黒色土と暗褐色土が混ざるが、分層は困難で、かつ木棺等を想定させるような痕跡は見られなかった。

出土遺物

出土遺物はほとんどなかったが、そのうちの一つを図示した。

土器（第30図52）

口縁部が全体に厚く作られ、端部がいわゆる跳上げ口縁となるもの。頸部下に断面三角突帯を1条付す。器表の荒れが甚だしい。

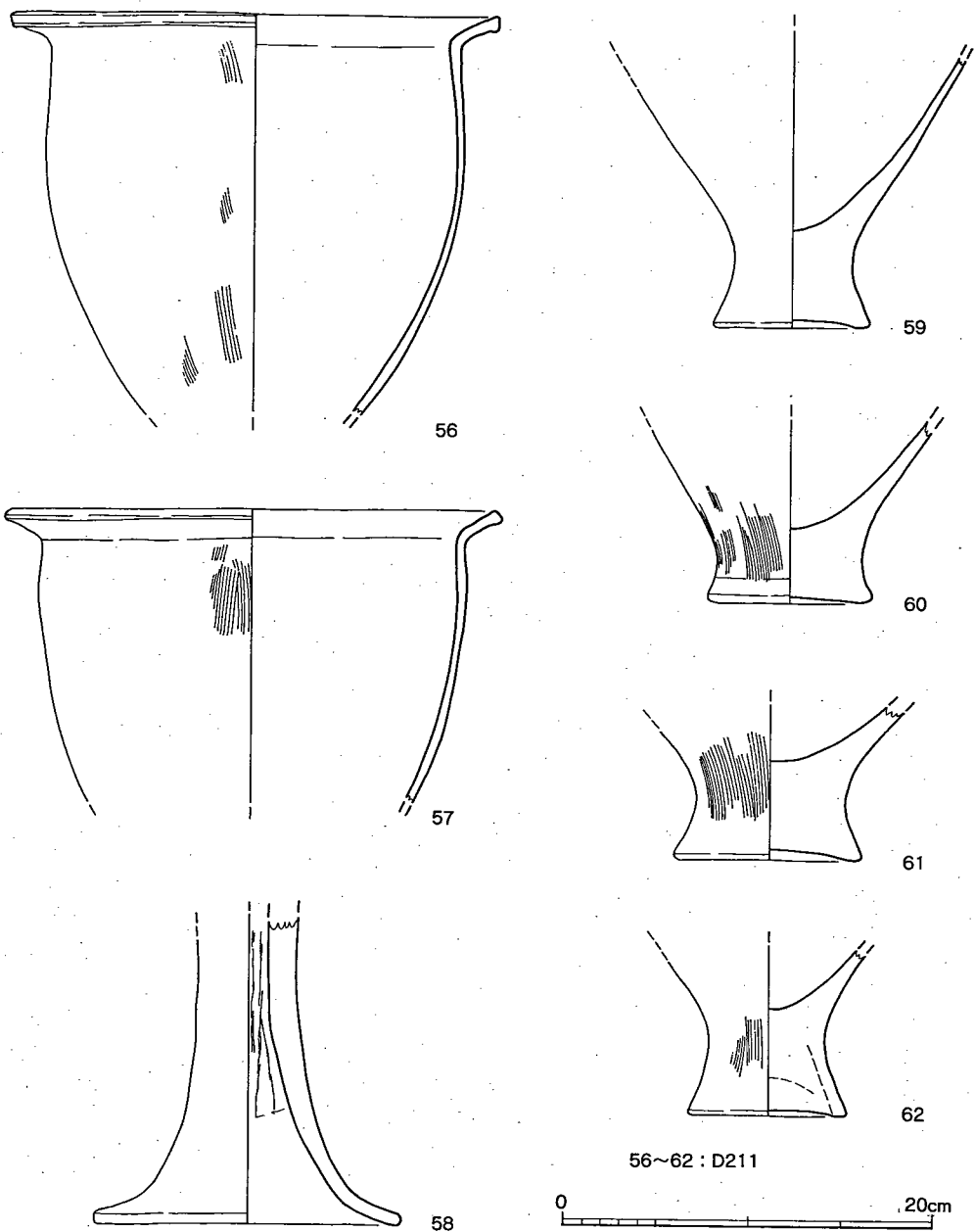
211号土坑（図版18、第31図）

210号土坑に近接する。上端の規模は長軸1.6m、幅1.5mで略隅丸長方形プランを有するが、床面形態は1×0.6mの長方形を呈する。深さは約0.5m。

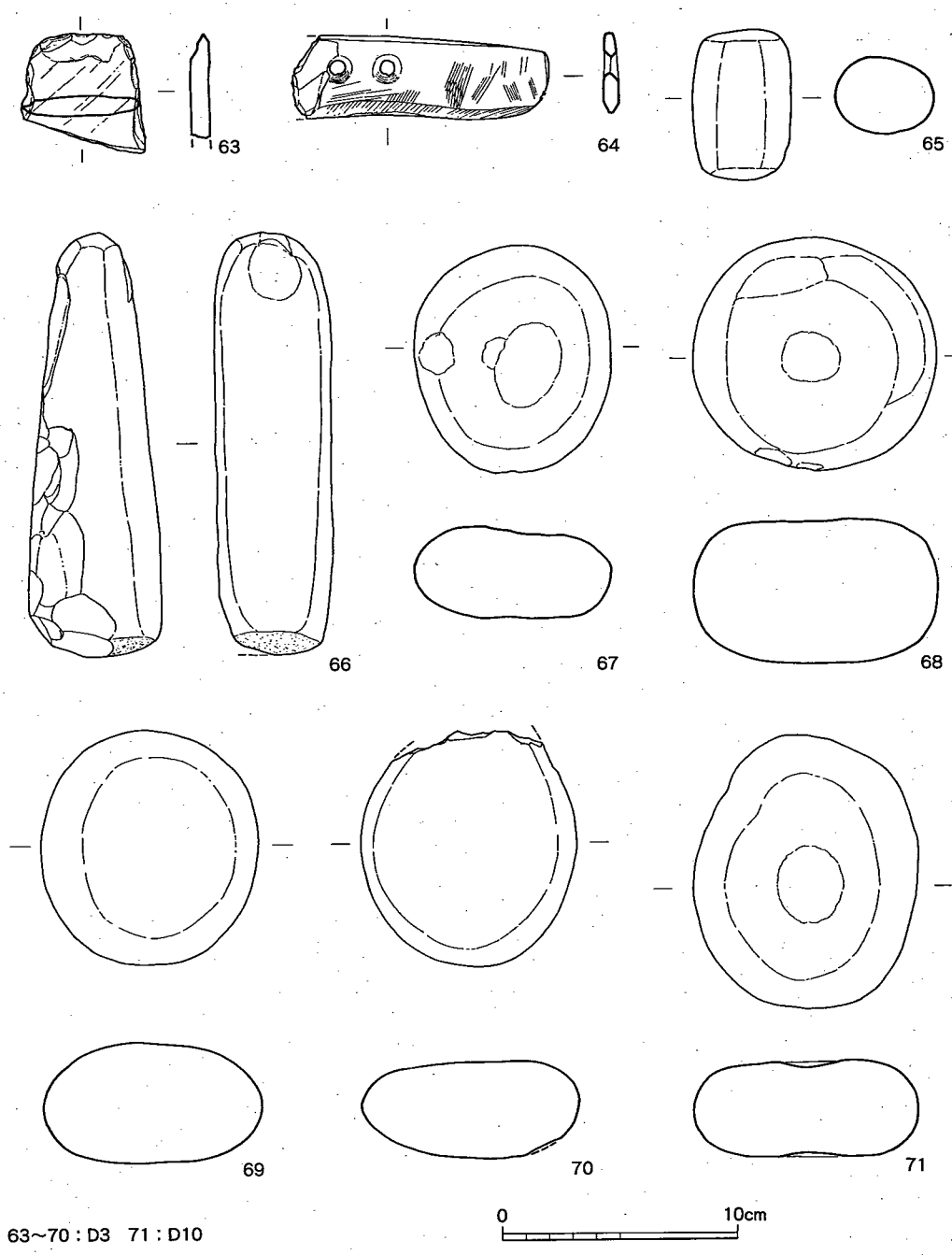
埋土には全体に黒色系の土が入り、炭小片が少々混ざっていた。

出土遺物

図示したような状態で、床面付近に集中して土器が出土した。また、平面的には南側から投棄されたような状態を呈している。



第32图 土坑出土遗物实测图⑦ (1/4)



63~70 : D3 71 : D10

第33图 土坑出土遺物実測図⑧ (1/3)



第34图 土坑出土遗物实测图⑨ (1/3、2/3)

土器 (図版33・34、第30図53～第32図62)

53～55は壺で、54・55は同一個体のようなものである。53は広口壺で、口縁部付近で傾きが変わってより大きく開き、口端部は小さく上方につままれる。二次的に焼けて器表が荒れる。54は鋤先状口縁の壺で、口縁部は水平な面をなし、さほど誇張されていない。体部には断面口唇状の突帯を付す。図示した状態より肩が張るかと思われる。これらには口縁部内面から体部外面にかけて赤色顔料が塗布された痕跡が残る。

甕では口縁部がく字形に外折し、口端部がやや肥厚するタイプが出土している。体部の張りは小さく、口縁部が最大径部分である。底部は4点を図示したが、極度に肉厚となって側縁が大きくくびれるものと、側縁のくびれが小さく、厚みが抑えられたものの2種がある。

58は高杯で、柱状部は完周する。脚裾の開きが小さく、不安定な感を与えるもので、器表はひどく荒れる。

石器 (図版36、第34図82)

青灰色を呈する砂岩製の砥石で、目が細かいもの。細くなった部分で折損するが、長側面の4面を使用する。

212号土坑 (図版18、第31図)

211号土坑と並列するような位置にある土坑で、切合関係はない。平面形は不整長方形というようなもので、長軸1.9m、短軸0.9m、深さ0.4mの規模であるが、床面は水平でない。

埋土にはやはり黒色系の土が入る。

出土遺物

床面近くで若干の土器・石器を出土したが、図示していない。

4) 溝状遺構

調査区内の各所で大小の溝状遺構を検出した。この報告にあたって土坑・柱穴と同様に3桁の番号に振り替えたが、調査時には一連の遺構番号を付していたために一部が欠番となっている。

また、101号溝状遺構はいわゆる道路状遺構であるが、ここでは溝状遺構の番号を付したままにしておく。

1号溝状遺構

A地区6・7号建物跡南から北東へ向かって延びる小規模な溝状遺構。幅0.5m強、深さ0.1mほどの規模で、内部には青灰色土が入っていて、一見して近・現代の遺構とわかるものであった。ただ、現行の畦畔にはのらないようである。

出土遺物

磁器 (第36図1・2)

陶器のようにも見えるが、生焼けの磁器であろう。昼付を除く全面に灰黄色の濁った釉が掛かる。胎土は黄白色。2は染付磁器の小片。

2号溝状遺構

1号溝状遺構に連続するような位置にある、やはり小規模な遺構。幅0.5m、深さは0.1mほどである。

101号溝状遺構 (図版19)

B地区でのみ検出した遺構で、現行の農道にはほぼ並行する。隣接するA・C地区では検出しておらず、農道の下を走っている可能性がある。

遺構は幅2.4m前後、深さ0.2mほどの浅い溝状遺構の床面に、円形あるいは長円形の深さ0.1～0.2mのピット状の掘り込みを比較的規則的に配するものである。

埋土の記録を怠っているが、出土遺物もほとんどなかった。

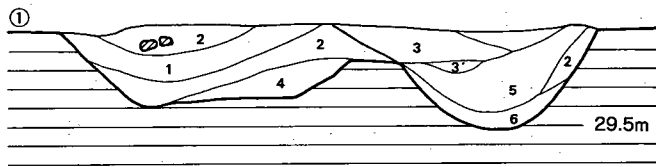
出土遺物

金属器 (図版41、第36図14)

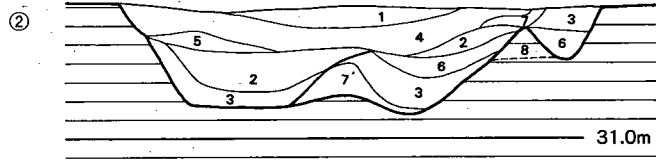
いわゆる種子島銃の弾丸で、鉛製。全体に白く錆を吹くが、部分的に鉄錆が見えており、窪み・亀裂が走るなどいびつな形状となる。直径はおおよそ1cm強。

石器 (図版42、第46図91)

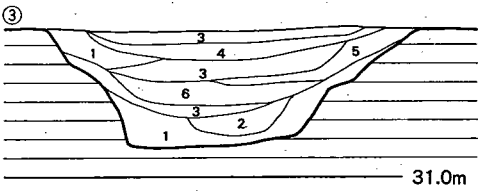
泥岩製と思われる磨石。器面が風化するが、全体に滑らかとなっている。



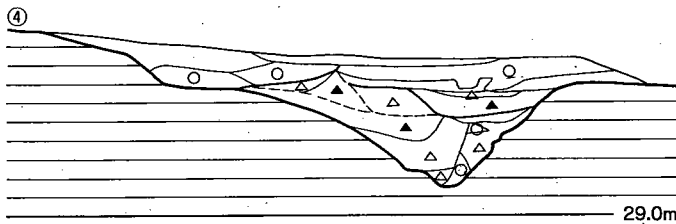
- 土層名
 1.黄褐色土
 2.茶褐色土
 3.黒黄褐色土
 3'.黄色粒混入
 4.暗茶褐色土(黒色粒混入)
 5.黒褐色土
 6.灰黒褐色土



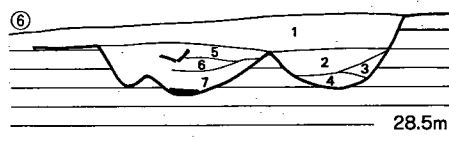
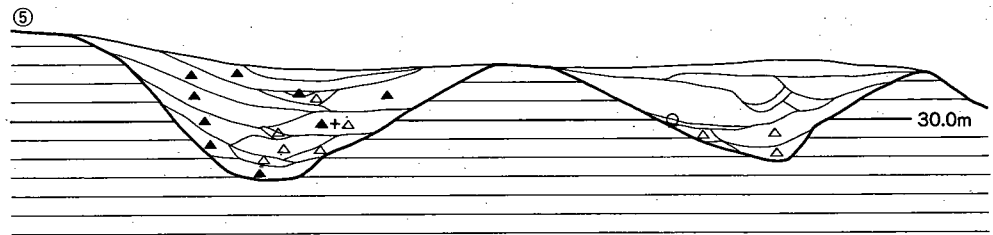
- 土層名
 1.黄褐色土
 2.黒褐色土
 3.茶褐色土
 4.暗茶褐色土
 5.明褐色土
 6.淡茶褐色土
 7.暗黄褐色土
 8.明黄褐色土
 9.暗黄褐色土(黒色粒混入)



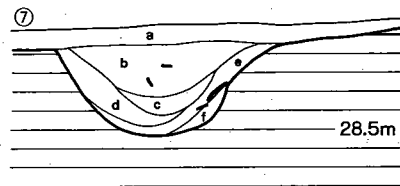
- 土層名
 1.黄褐色土
 2.暗黄褐色土
 3.褐色土
 4.暗褐色土
 5.黒褐色土
 6.淡黄褐色土



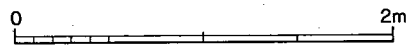
- 土層名
 ○黒色粘質土
 ▲黄褐色砂質土
 △黄褐色粘質土
 ▲+△硬：層状に堆積。非常にしまる
 軟：しまりない



- 土層名
 1.茶褐色土
 2.灰黒褐色土
 3.茶褐色土
 4.2に似る。炭小片等をかむ
 5.暗茶褐色土
 6.暗茶褐色土
 7.下方になるほど順次暗くなる
 8.黄褐色土



- 土層名
 a=1
 b=5 炭小片を含む
 c=6
 d=灰黄褐色土
 e=7
 f=d



第35図 溝状遺構土層実測図 (1/40)

204号溝状遺構 (図版4・21)

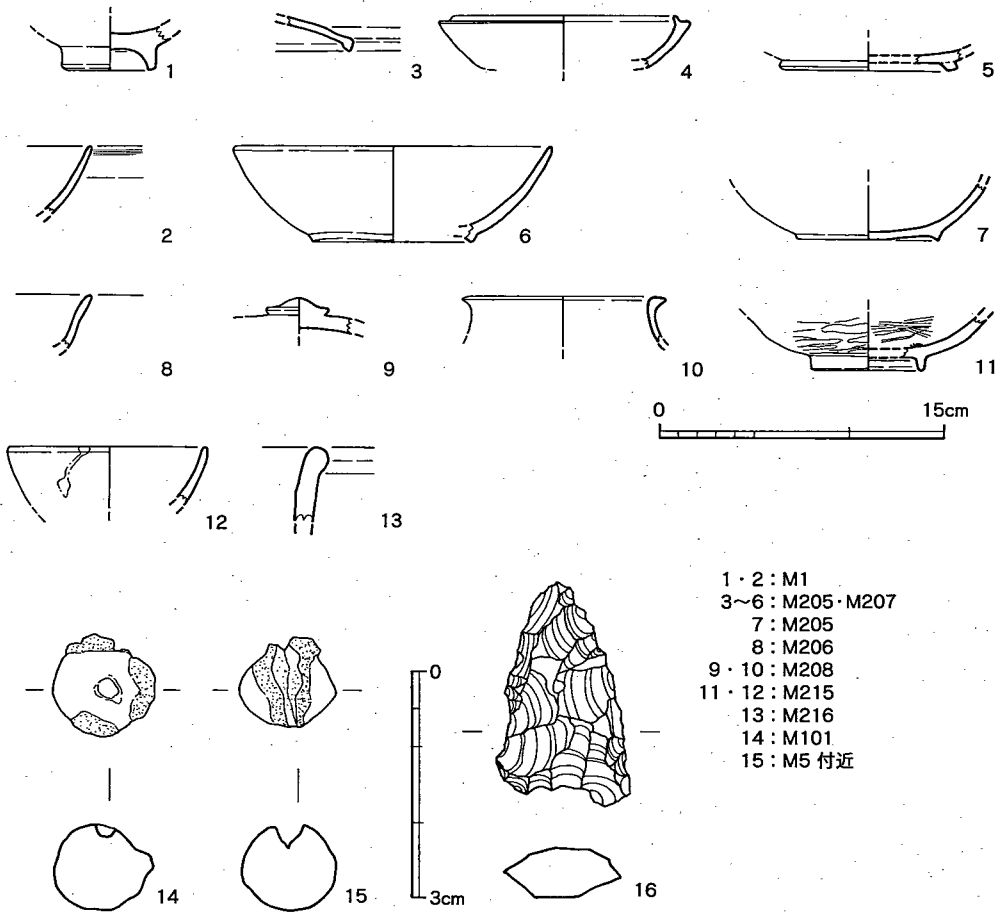
C地区南東部に位置する。東端は農道下に入って、B地区には現れない。西端は205号溝状遺構と交わり、そこで途切れている。幅0.3m、深さ0.1mほどの規模で、約24m続く。

内部には茶褐色粘質土が入っていた。また、東西両端の床面レベルはほとんど同じである。
出土遺物

弥生土器の小片が出土したが図化を行っていない。

石器 (図版42、第46図92)

安山岩製の磨石残片。肉厚で、破面を除く全体が平滑化する。



第36図 溝状遺構出土遺物実測図 (1/4、1/1)

205～207号溝状遺構（図版20・21、第35図）

C地区3号住居跡を切るような位置にあり、調査区北端付近で3条に分かれるが、大部分で重複していて、識別が困難であった。東端に位置する205号溝状遺構が最も早くに掘削されており、後続する206・207号溝状遺構との判別は漸く可能であったが、後二者の弁別は土層観察でも困難であった。

205号：土層にも表れているように、各溝状遺構の中で最も東端に位置し、最も古い。南端付近では幅1.6m、深さ0.4mの断面逆台形の形状を呈している。調査区中程では幅0.4m、深さ0.3mで断面形状はU字形となり、極端に形状が変化している。しかし、床面レベルを比較すれば、両者はほぼ同じである。北端では幅0.6m、深さ0.2mとより浅くなるが、床面は確実に低くなり、地形から見て当然ではあるが北流していたことがわかる。

206号：南端土層では207号溝状遺構と識別できないが、中程でそれに切られる様子が漸くわかる。そこでの形状は断面U字形で、幅は推定1m以上、深さ0.5m強である。北端では規模を減じ、幅0.6m、深さ0.4mほどとなる。

207号：中程の土層では幅2m強かと思われる断面逆台形の形状を呈するが、北端では段落ちとなる部分で消失する。その付近では幅0.5m、深さ0.3mの規模となっている。なお、この溝は段落ち付近でそれと平行に走り、10号溝状遺構とする遺構に連なるようである。

出土遺物

上記したような不確かな状況であったために所属を確定できないものがあるが、実測可能なものを図示した。中で、遺構番号を特定したものは各遺構が分離した箇所から出土したものである。

土器（図版36、第36図3～8）

3～6は分離できない箇所から出土したもの。3は須恵器杯蓋、4・5はやはり須恵器の杯身である。6は瓦器椀。体部の大部分は黄褐色を呈し、口端部付近のみが黒色化する。これらの土器が示す時期の土器は溝から出土したのみで、確実な遺構は検出していない。

7は205号溝状遺構出土の瓦器椀。底部付近のみ黒色となるが、体部はやはり灰黄色を呈する。8は須恵器杯身の小片で、6号溝状遺構出土である。

石器（図版41、第36図16、第46図93）

第図16は姫島産黒曜石を用いた石鏃。形状は整わず、剝離も雑な感じを受ける。93は206号溝状遺構出土の太型蛤刃石斧。表面の荒れが甚だしく、重量感がある。安山岩質凝灰岩か。

金属器（図版41、第36図15）

敵密には溝出土ではなく、205号溝状遺構東横の浅い落ち込みから出土したものである。先の101号溝状遺構出土品と同じく種子島銃の弾丸である。形状、錆化の様子も同様で、これは大きく裂ける。

208号溝状遺構

205～207号溝状遺構の南端付近でそれらと交錯し、そこから北西へ約30m続く。ただし、この208号溝状遺構の東端部は幅2m、深さ0.6m強の規模を有し、複数の溝が重複するような状況を見せているのに対し、それ以外の部分では幅0.5m、深さ0.2mほどの規模であり、両者が必ずしも同一の遺構であるとの確信はない。

なお、この溝は3号住居跡などの弥生時代の遺構を切って掘られている。

出土遺物

3号住居跡と重複する付近で弥生土器が多く出土したが、細片化していて図示していない。

土器（第36図9・10）

9は須恵器蓋のつまみ。10は舶載の褐釉陶器片。口縁部を断面三角形に近い形とする。

石器（図版42、第46図94・95）

いずれも安山岩製の磨石。

215号溝状遺構（図版22、第35図）

C地区はその南東が最高所となり、大きく削平を受けているが、北側および西端付近は地形的に下降していて幾分遺構の残り具合がよい。この溝状遺構はその両者の境を曲線を描いて走り、本来はちょうど丘陵裾を巡っていたものと思われる。

平面的にはC地区建物跡群付近から始まって、徐々に規模を大きくして曲線を描く。途中で216号溝状遺構と重複し、それに切られるようである。

出土遺物

土器（第36図11・12）

11は灰色を呈する瓦器椀。高台は径が小さく、断面方形に近く、高い。残存部の内外全面に太い暗紋が密に施される。12は焼けたものか、文様が不明瞭であるが染付磁器のようである。形態はいわゆるくらわんか手。

216号溝状遺構（図版22、第35図）

この遺構の土層観察では中位以上に黄白～灰白色粘土ブロックと黒みを帯びる黄褐色粘質土が混ざる締まりのない土が見え、いかにも新しく埋没した様を思わせた。215号溝状遺構と重複する。

出土遺物

土器（第36図13）

備前焼の壺小片である。口縁部の玉縁はまだ小さい。

217号溝状遺構（第35図）

後述する218号溝状遺構と一部で重複し、それを切る。この遺構以西は小河川の野地川が北流し、湿地帯となるようで、掘削すると湧水が甚だしく発掘を行っていないが、ほぼ遺跡の西を限る遺構と思われる。幅0.7m前後、深さ0.4m前後の規模で、北へ傾斜する。

出土遺物

若干の弥生土器が出土したのみである。

土器（第36図1・2）

いずれもよく似た甕の小片。口縁部はく字形に外折し、頸部やや下方に断面三角突帯を付す。器表はいずれも荒れる。

218号溝状遺構（図版23、第35図）

217号溝状遺構に切られる。幅1m前後、深さ0.4m前後の小規模な遺構であるが、特にその南端付近で多くの遺物を出土した。埋土は暗茶褐色土で、下層へ行くほどに暗くなる。

出土遺物

特に調査区南端付近に土器が集中していた。その付近の観察では、層位に関係なく、万偏なく出土している。

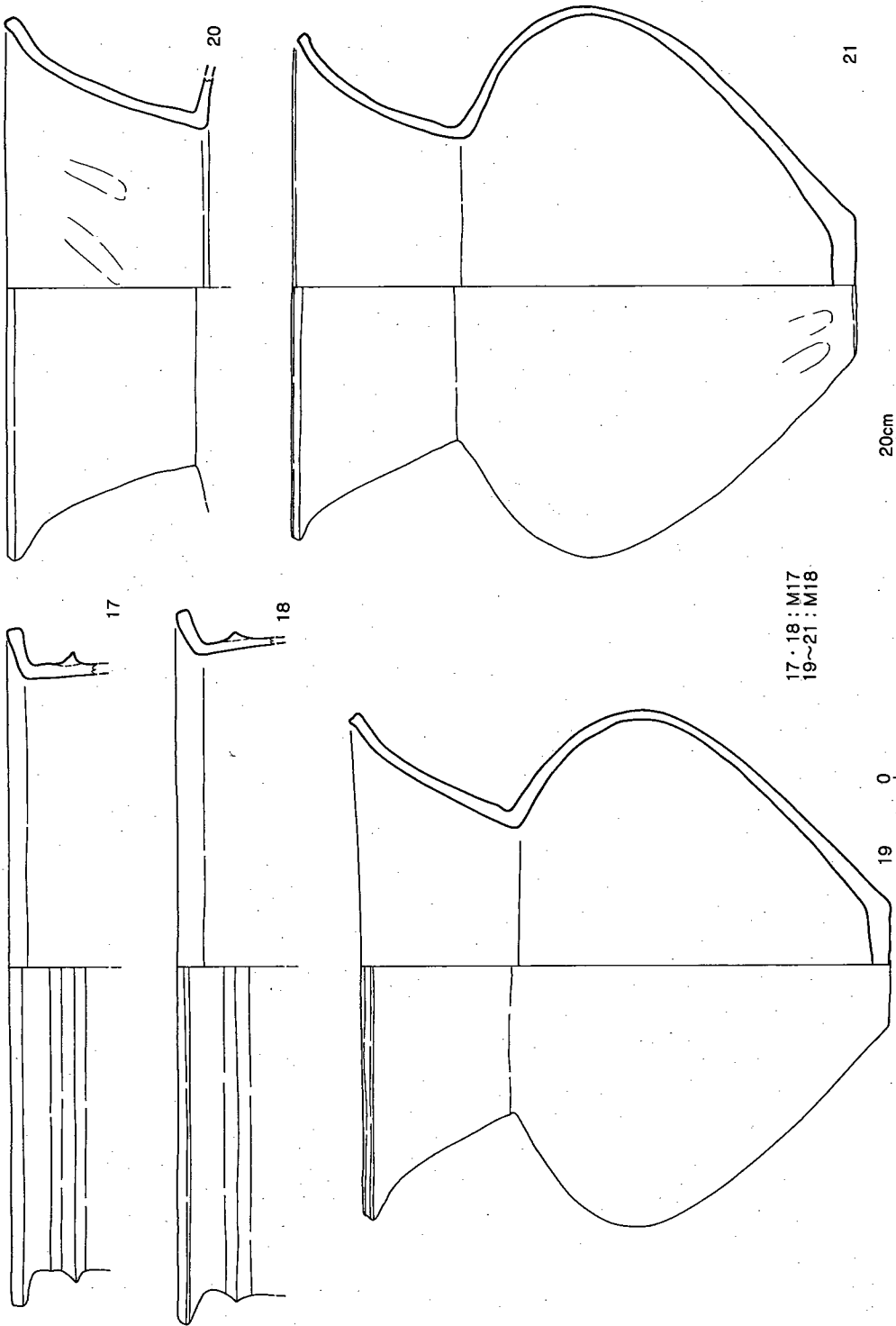
土器（図版36～41、第37図19～第45図90）

19～21は広口壺。口頸部の開きは概して小さく、高い。口端部は小さく内側へつままれる。体部は張りを有し、最大径部が口径より大きく、上位にある。以上の土器は器表が非常に荒れていて、調整痕等のはつきりしない。22～24は鋤先状口縁部を有する壺で、いずれも小片。内側への突出が大きく、平坦面も大きいが、まだ直線的でかつ水平を保つ。25は断面三角突帯を2条付す壺の体部。26～30は薄底で小さな壺の底部。31は図上復原したもので、32も同一個体のよう。頸部に三角突帯を付し、端部は非常にシャープに作られる。

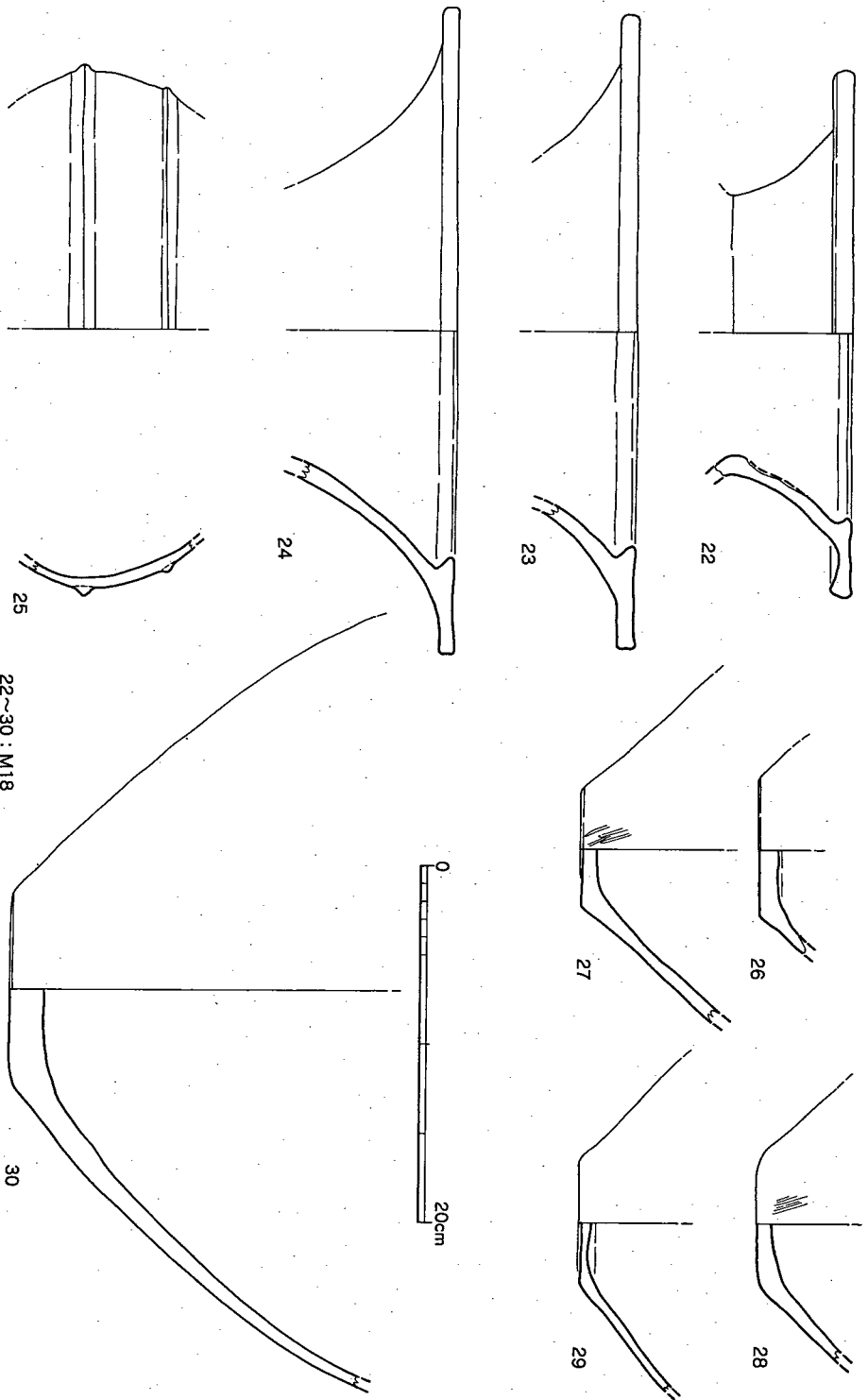
33は長頸壺。頸部はあまり締まりを有さず、口縁部の開きも小さい。口端部は断面方形に作り、やや下位に三角突帯を付すが、雑なもので波打つ。34は無頸壺か。35は鉢型のミニチュア。断面方形とする口縁部下に三角突帯を付す。

36は器台の残片で、脚端部がよく焼けて赤変する。

37～39は高杯であるが、それぞれ形態を異にする。37は脚部が低く、それに対して脚端部の開きが大きい。また、製作技法は杯・脚部を一連で作って後に杯底部を充填したようである。38は脚部が低く、裾の開きも小さい。杯・脚接合部に三角突帯を付すが、杯底部が厚く、37とは異なる製作技法が用いられたようである。39は前二者に比して脚が高く、しかし裾の開きは小さい。接合部付近の杯・脚部の器肉の厚さが随分異なっており、脚部を製作した後に杯部を接合したようである。なお、この外面には全体に赤色顔料を塗布したようであるが、二次的な

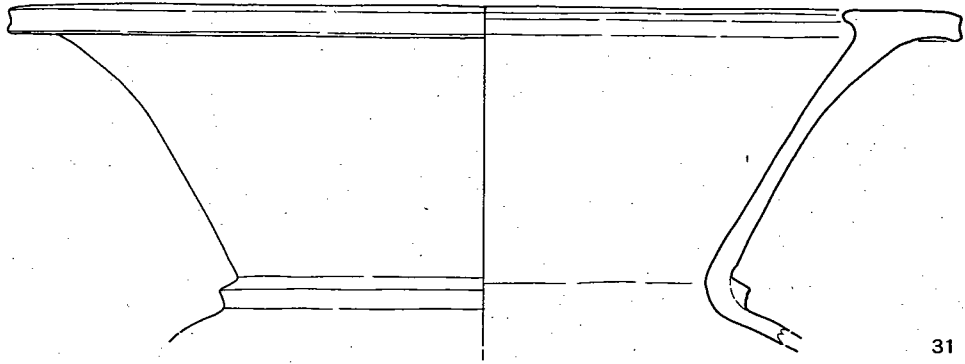


第37図 溝状遺構出土遺物実測図② (1/4)

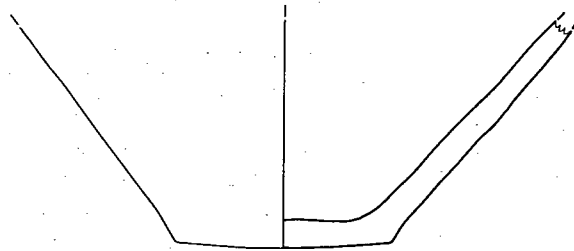


22~30 : M18

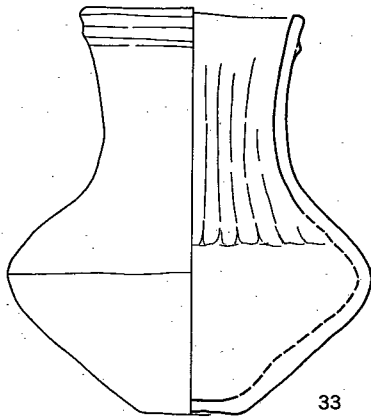
第38图 溝状遺構出土遺物実測图③ (1/4)



31



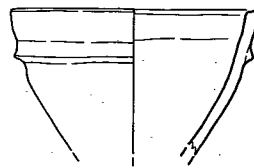
32



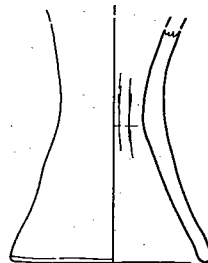
33



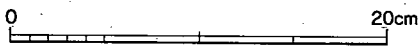
34



35

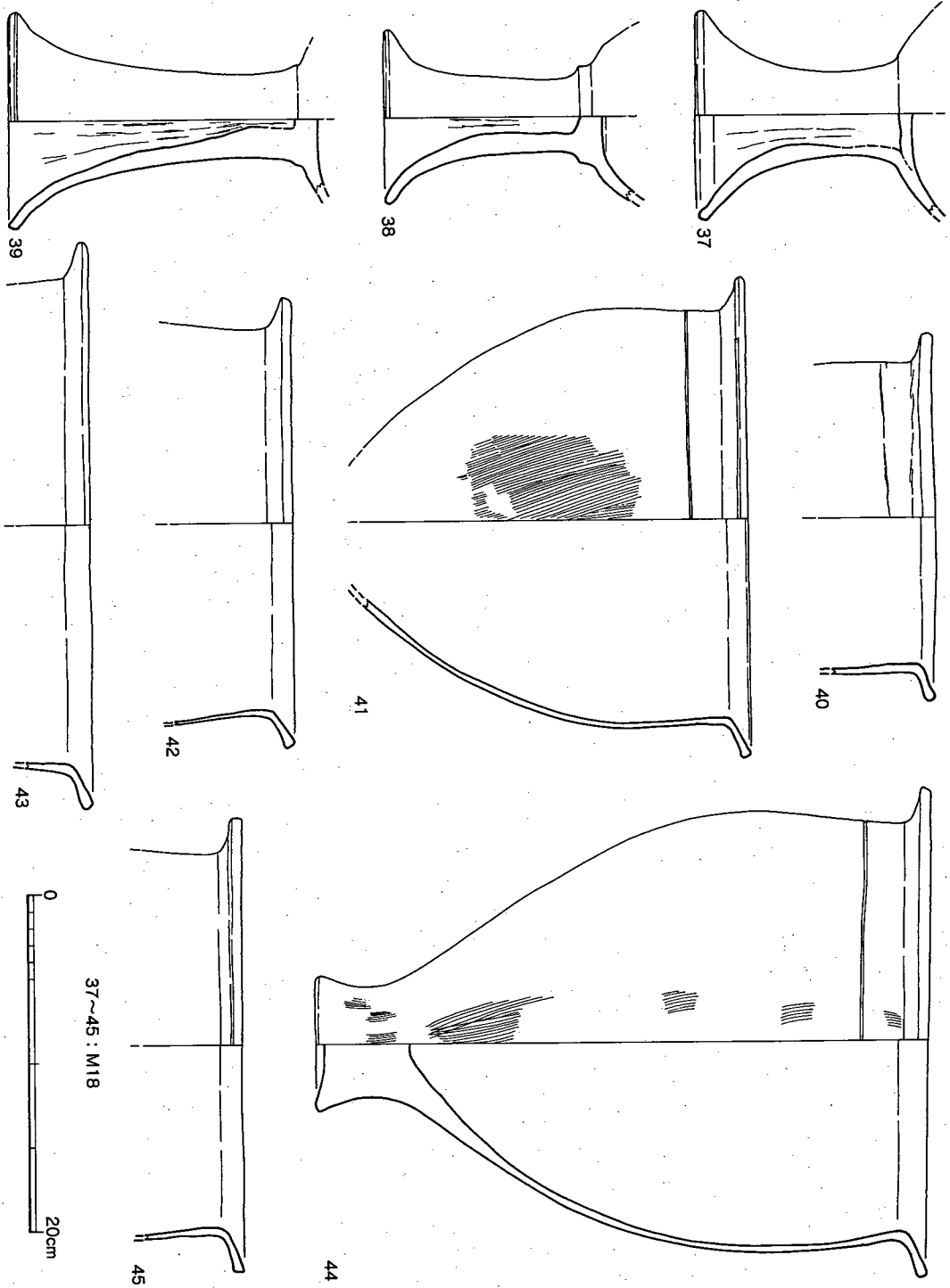


36

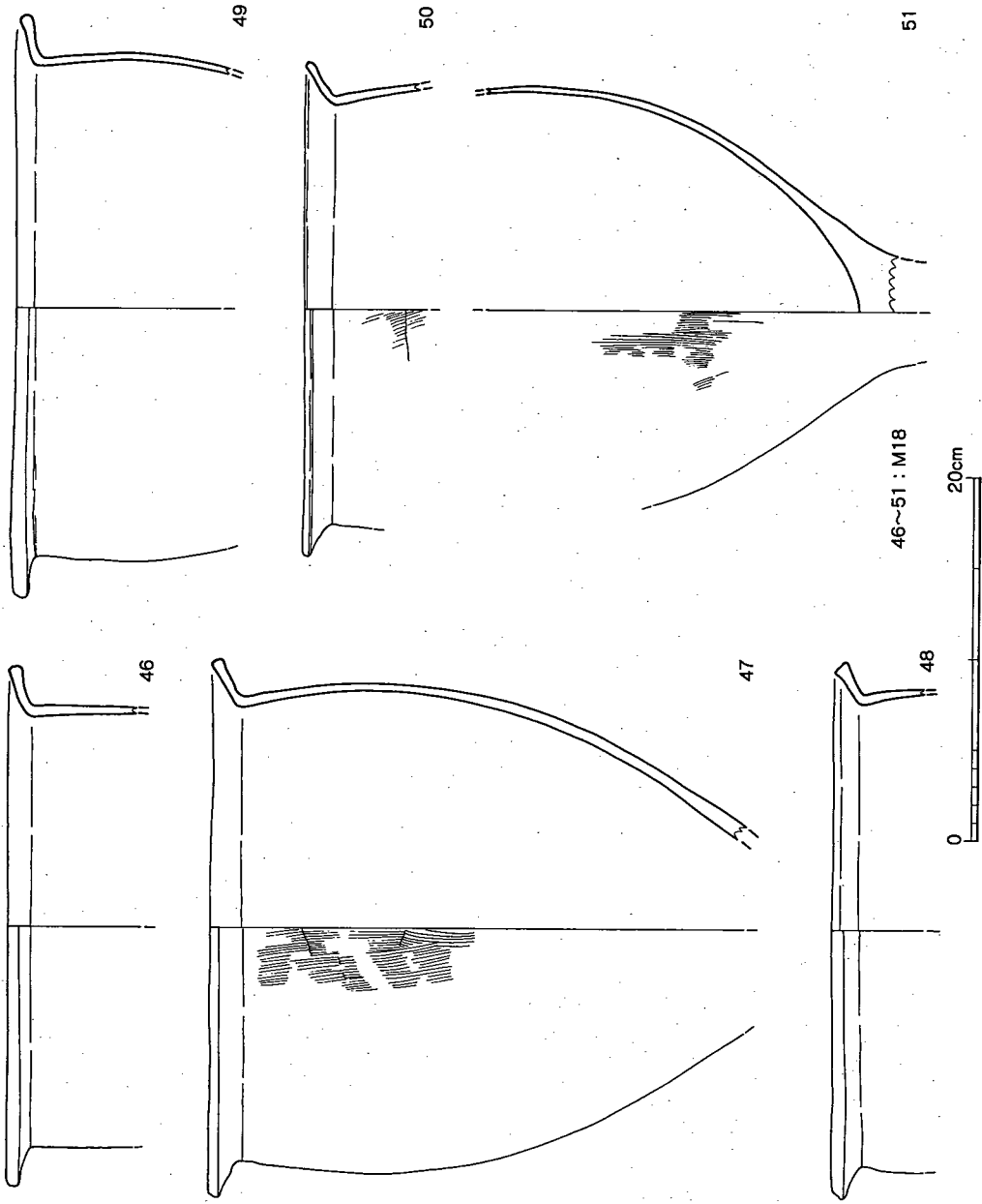


31~36 : M18

第39图 溝状遺構出土遺物実測図④ (1/4)

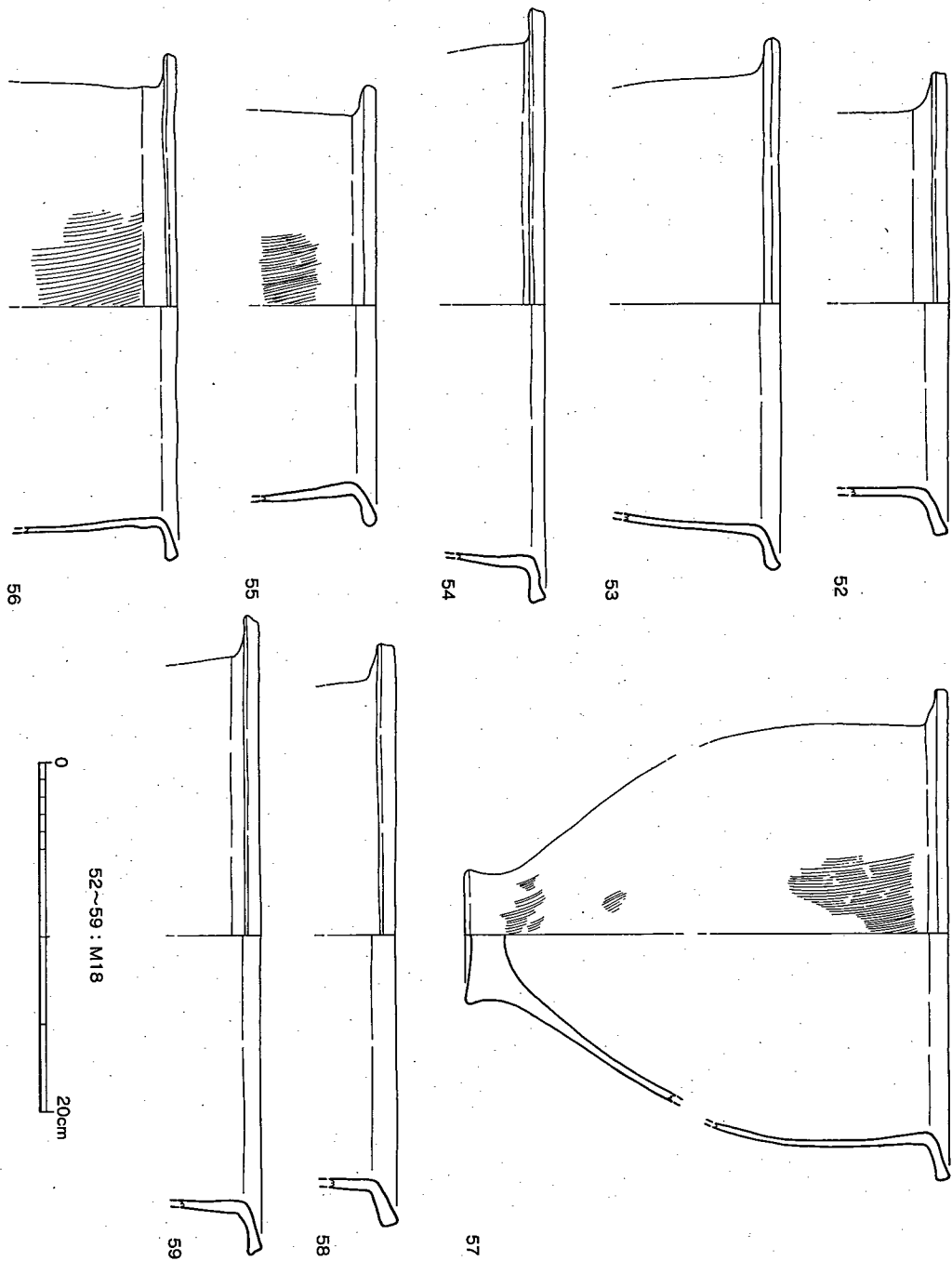


第40图 薄状遺構出土遺物実測図⑤ (1/4)

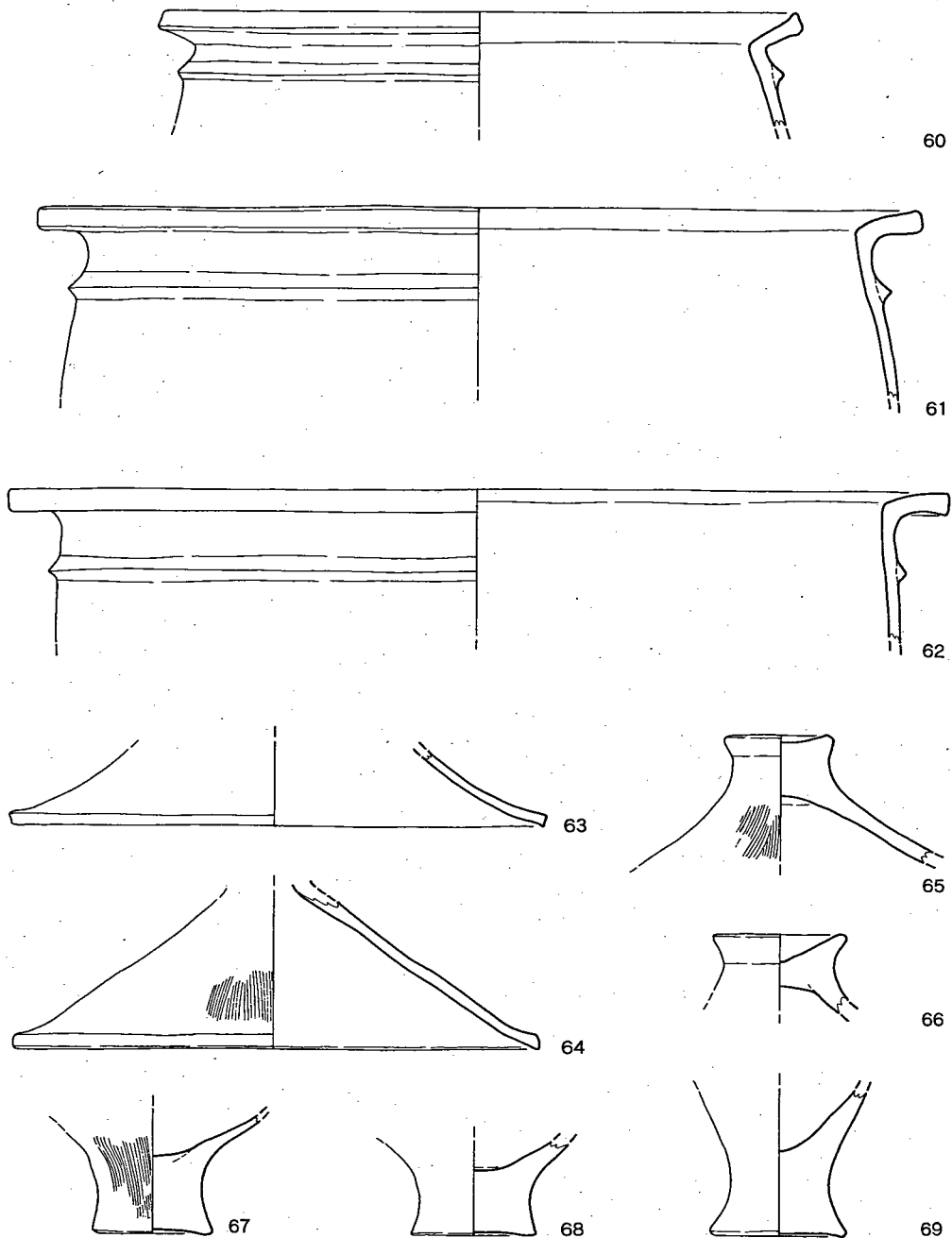


46~51 : M18

第41図 溝状遺構出土遺物実測図⑥ (1/4)



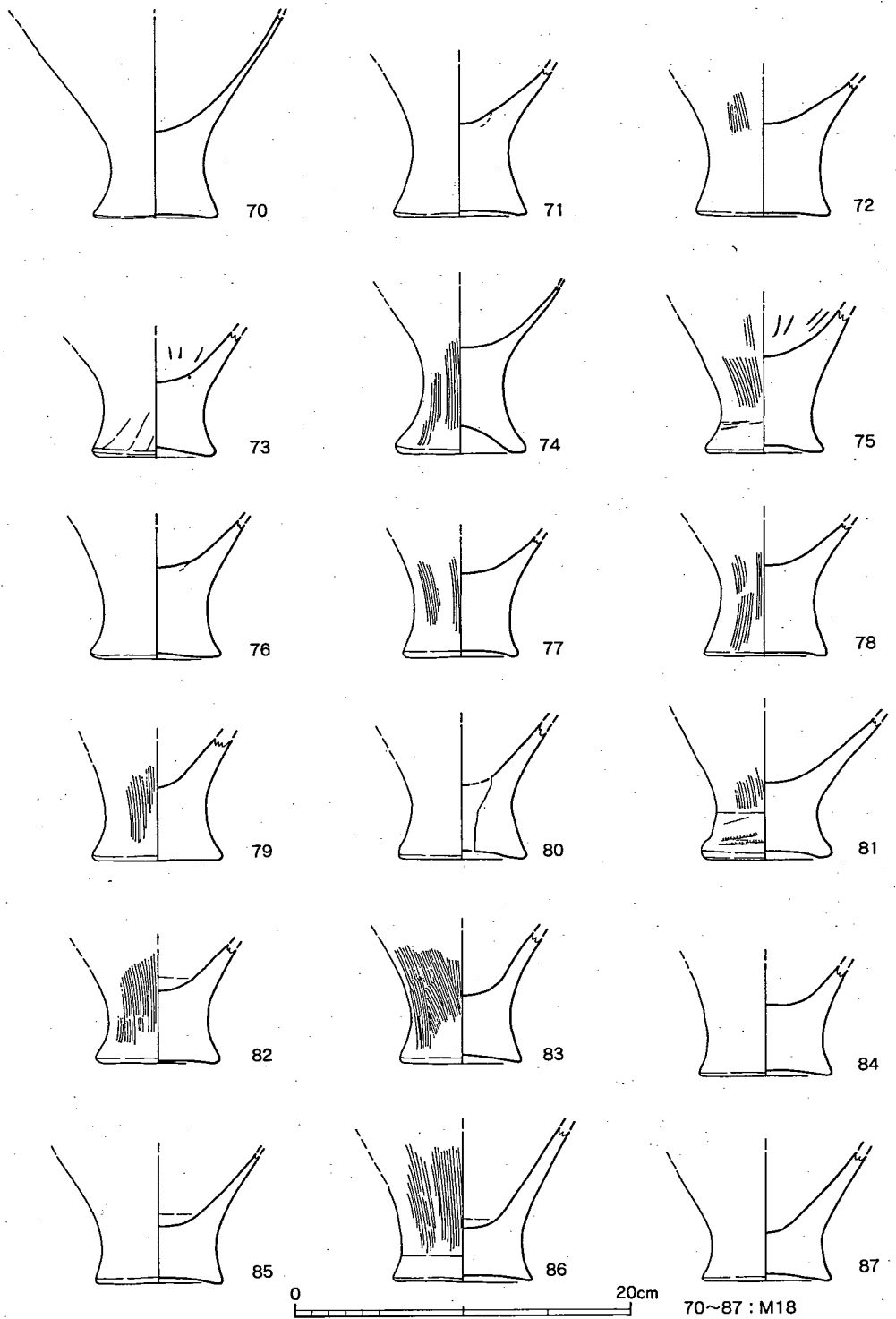
第42図 溝状遺構出土遺物実測図⑦ (1/4)



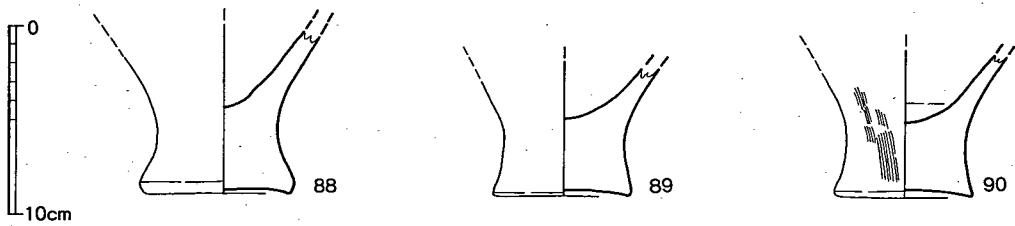
60~69 : M18

0 20cm

第43图 沟状遺構出土遺物実測図⑧ (1/4)



第44图 沟状遺構出土遺物実測図⑨ (1/4)



第45図 溝状遺構出土遺物実測図⑩ (1/4)

火熱を受けて剝落、赤変する。

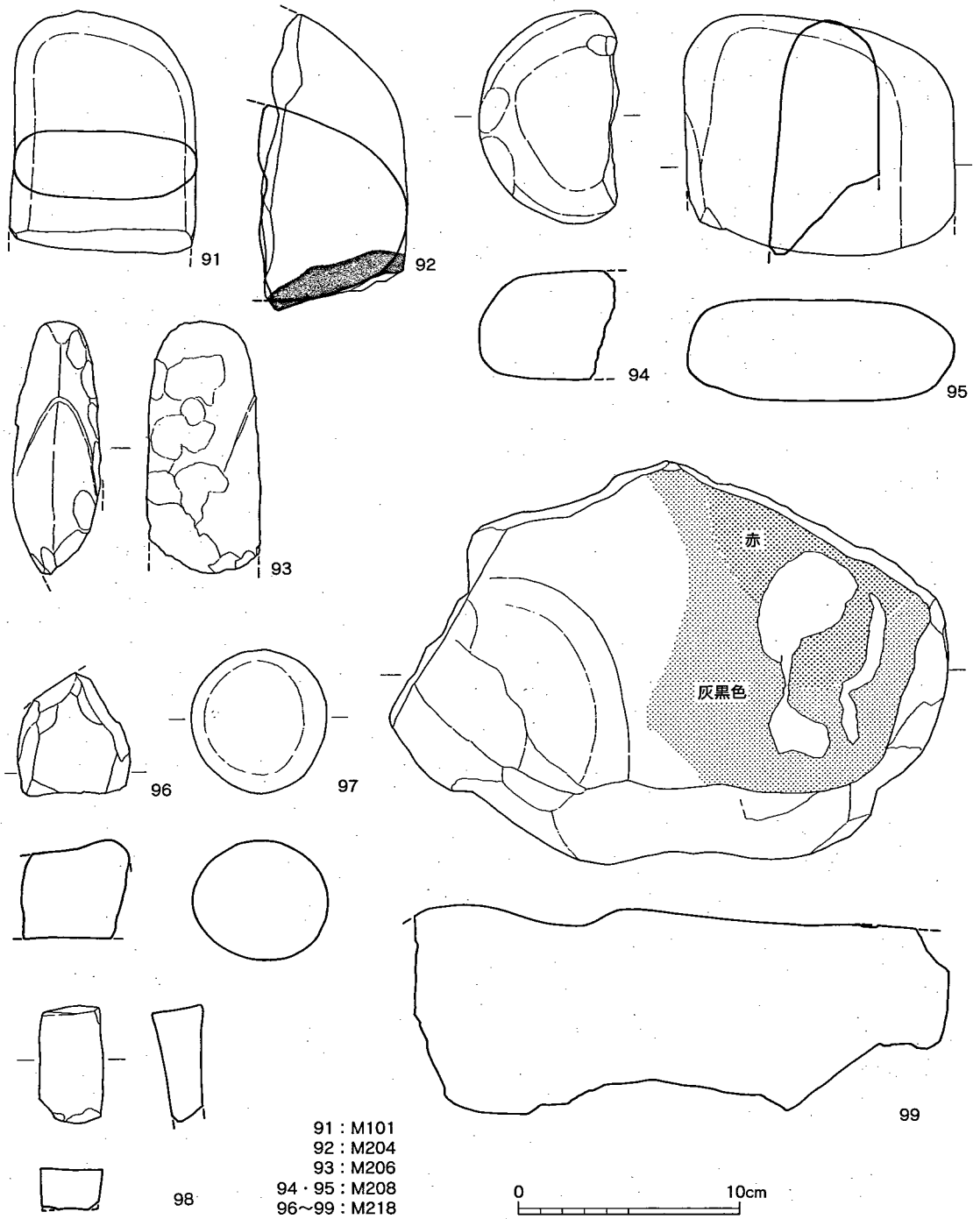
40～62は甕。40～59は如意形あるいはく字形の口縁を有し、篋描沈線を有する(40・41・44)、あるいは無文のもの。口端部は小さく肥厚またはつまみ出す傾向がある。60～62は頸部やや下位に断面三角突帯を付すもので、口端部をつまみ出すあるいは口縁部が直角近くに外折する。いずれも器表は荒れる。

63～66は甕用蓋。63は口縁部内面から外面の全体が非常に焼けて赤変し、それより内側内面には焦げ付きが著しい。64は口縁部内面に煤かと思われる黒色付着物が見える。

67～90は甕の底部であるが、一部には蓋のつまみかと思われるものも存する。おおむね、肉厚の底部を有し、側縁が強く撫でられてくびれる通有の形態である。

石器(図版42、第46図96～99)

96・98は砂岩製砥石。いずれも軟質で、表面が荒れる。97は投弾であろう。直径5～6cmの球形を呈し、表面は滑らかである。安山岩製。99はやはり安山岩製の石皿か。図上面は焼けて黒色ないし赤色に変色し、そこかしこで剝離している。剝離を免れた部分は非常に平滑化する。



第46図 溝状遺構出土遺物実測図① (1/3)

5) その他の遺構と遺物

ここでは柱穴から出土した遺物を中心に紹介する。ただし、ここで柱穴としたものの中には、あるいは土坑と称した方がふさわしいと思われるものも存するが、規模が小さいために調査時に柱穴と呼称したものをそのまま使用している。

なお、建物跡を構成する柱穴についてはその項にまとめて示したが、2号土坑の四周に配された柱穴（P67）出土遺物については、説明を土坑の項で行ったが、図はこの項に示した。

P1（図版24、第47図）

1号建物跡の南東に位置する、直径0.3m、深さ0.2mほどの規模の柱穴。

出土遺物

土器（図版43、第48図1）

ほぼ完形近くに復された甕。口縁部はく字形に外折し、口端部が小さくつまみ出される。体部は丸みをもって厚底の底部へ続く。体部外面は細密な縦刷毛、同内面はごく丁寧な撫でて調整される。

P2（図版24、第47図）

P1に隣接する柱穴で、規模は径0.35～0.45m、深さ0.3m弱。

出土遺物

柱当たりを塞ぐような位置で約1/2個体の壺を検出した。上下が割れていたが、本来は立てられていたものかと思われる。

土器（図版43、第48図2）

体部最大径が中位にあつて、胴張りが著しい壺でやや特異な形態である。底部の形状は中期須玖式のものそれである。また、内外全面に黒色顔料を塗布していた可能性がある。

P3

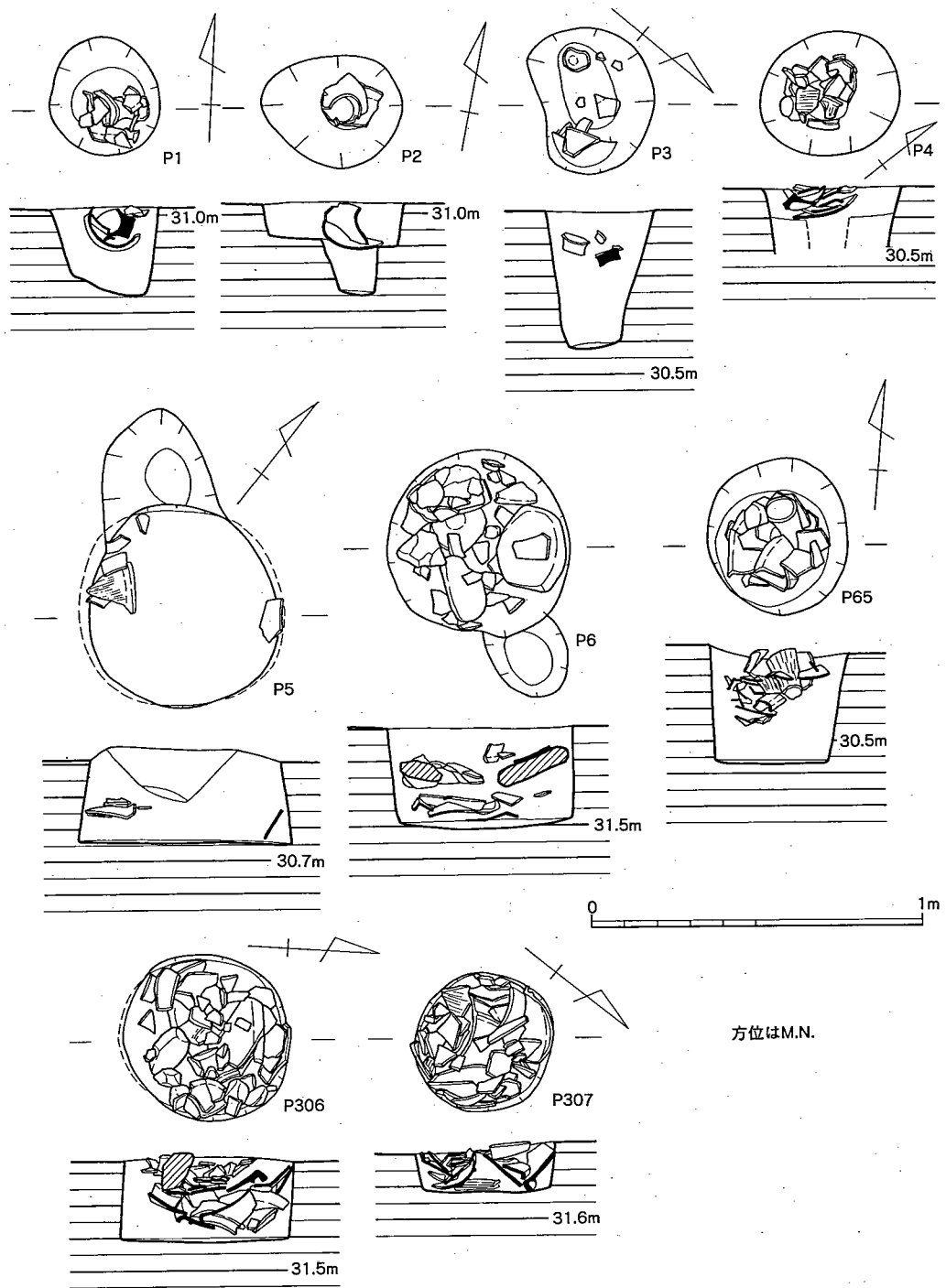
2号土坑の西にあり、径0.3～0.4m、深さ0.4mの規模を有する。平面形はいびつである。

出土遺物

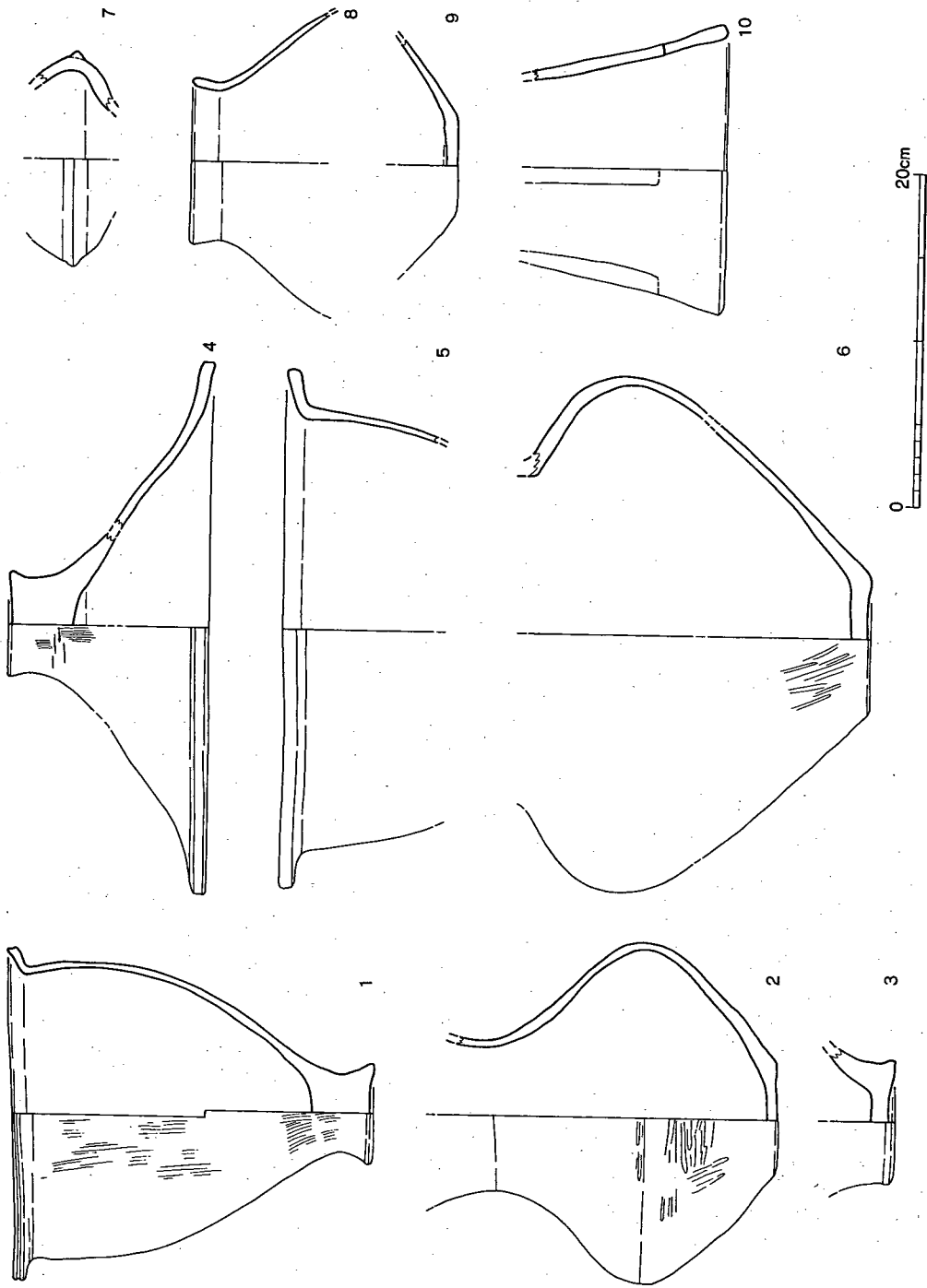
若干の土器が上層で検出されたが、その中の底部を図示した。

土器（図版43、第48図3）

壺の底部であろう。薄手で、上げ底状になる。



第47図 土器等出土柱穴実測図 (1/20)



第48图 柱穴出土遗物美测图① (1/4)

P4 (図版24、第47図)

7号建物跡を構成する柱穴で、その北隅に位置する。上端形は直径0.4m前後の大きさで、柱当たりを塞ぐような位置に土器が置かれていた。土器の説明は建物跡の項に譲る。

P5 (図版25、第47図)

1号建物跡と2号土坑の間にあり、径0.6m、深さ0.3mの規模を有する。大きさは柱穴としてはやや大きく、形状が袋状を呈することから小型のいわゆる貯蔵穴であったものと思われる。こうした小型の例はまだ乏しく、通常複数基が隣接することを考えればいささか疑問もある。なお、通常の柱穴として発掘しており、土層断面図は作製していない。

出土遺物

図示したような状態で若干の土器が出土している。

土器 (図版43、第48図4・5)

4は甕の蓋で、つまみは完存し、体部から口縁にかけてはほぼ1/2が残存する。器表の荒れがひどいが、口縁部内面に付着した煤が観察できる。5は如意形口縁の甕。

P6 (図版25、第47図)

3号土坑の北に隣接し、直径0.55m、深さ0.3mの整った円形を呈する。図示したように柱当たり・裏込を想定できないような状態で土器や石器が出土しており、これも柱穴とするよりは土坑とした方がよいのかも知れない。

出土遺物

土器・石器がほぼ全面に詰まったような状態で出土した。

土器 (図版43、第48図6～第49図11)

6は体部の張りが著しい壺で、図上復原したもの。7はミニチュア壺で、突帯の形状で天地を判断した。8はやや特異な壺の小片である。

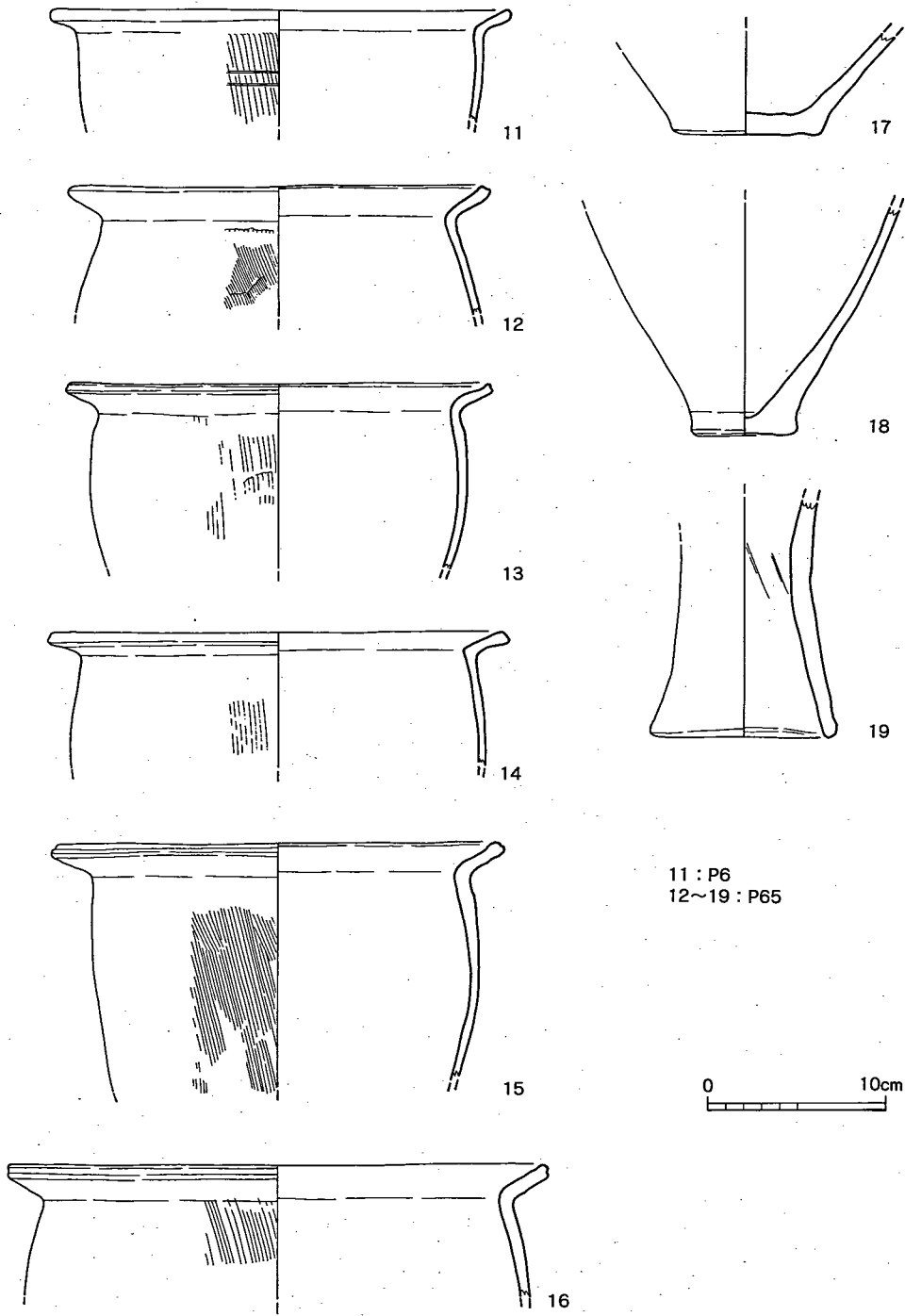
10は3号土坑出土品と同一のようで、長方形透孔を有する高杯の破片。脚部の開きが小さく、直線的である。透孔の数は不明。

11は口縁部がく字形に外折する甕で、頸部下に浅く細い2状の沈線を刻む。

石器 (図版46、第53図9・10)

9は安山岩製の石皿か。長軸約25cm、厚さ5.5cmの大きなものである。全体に焼けて赤味を帯びるが、図示した面の中央付近、および図下面の所々などはじけて剝離した部分のみ変色が見られない。他の部位は全体に滑らかな面となっている。

10は磨石で、全体に滑らかな面となる。やはり安山岩製。



第49図 柱穴出土遺物実測図② (1/4)

P65 (図版26、第47図)

A地区北西隅にある柱穴で、直径0.4m前後、深さ0.4m弱の規模である。柱当たりを確認できていないが、土器の出土状態は柱抜き取り跡に落ち込んだような状態であった。

出土遺物

規模のわりには多くの土器が密集して出土した。

土器 (図版43・44、第49図12~19)

12は小片で、傾きに不安がある。13とともに口端部を上方へ小さくつまむ。13は約1/4が残存するが、体部内面を非常に丁寧に撫でて仕上げる。外面は粗い縦刷毛。14は口端部を外方へ肥厚させるもの。頸部内面の稜は鋭い。15・16は口端部をあまり変化させないもので、15の口縁部はほぼ完周、16はほぼ1/4が残る。15も内面はごく丁寧に撫でる。

17は壺の底部。18は薄手で、体部の立ち上がり急な甕。

19は図示部分がほぼ完全な器台で、脚部はよく焼けている。

P66

A地区北隅近くで、ほぼ1/2を発掘したものである。直径は0.4mほどを測る。

出土遺物

土器 (図版44、第50図21)

口縁部が完周する甕。口縁部は短く外折し、端部が肥厚する。頸部下の断面三角突帯も含め、細部の作りがシャープである。

P113

B地区東端近く、6号住居跡の東、7号住居跡の南にある柱穴で、後者に伴うものかも知れない。直径0.5m、深さ0.2mの円形平面を呈する。

出土遺物

石器 (図版46、第53図5)

磨石の残穴。安山岩製で、側縁・剝離面・破面を除く全体が平滑化する。

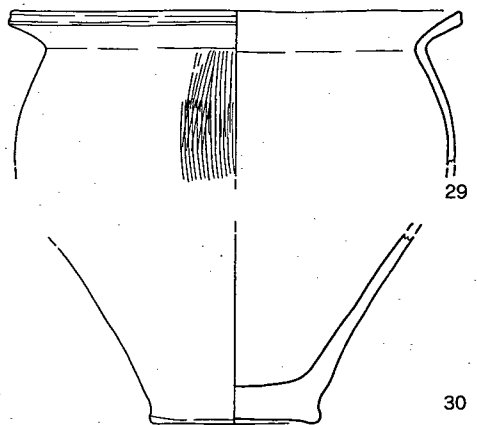
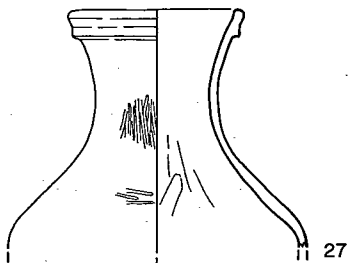
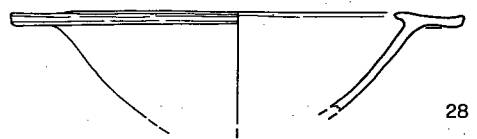
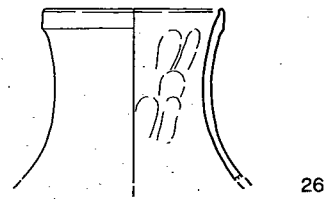
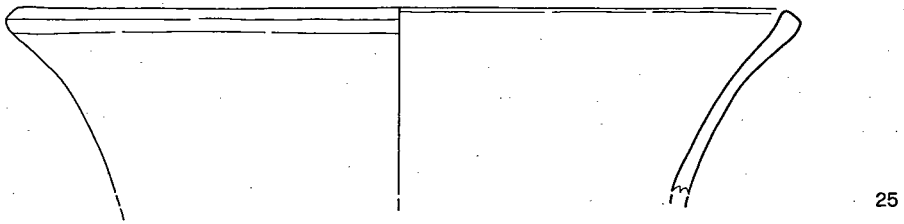
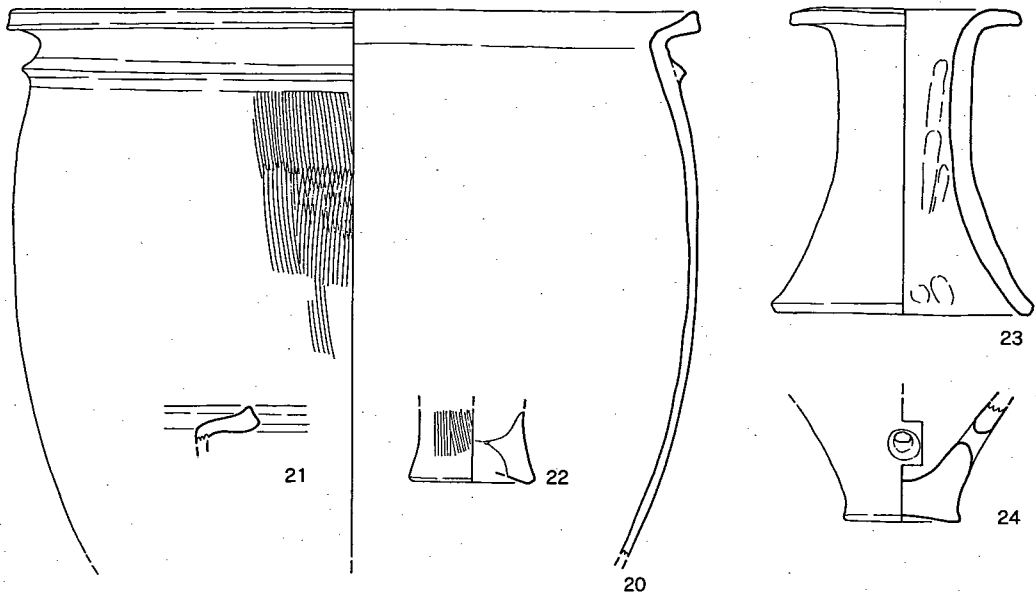
P126

P113の西に隣接する小柱穴で、規模は直径0.2m、深さ0.2m強である。

出土遺物

土器 (図版44、第50図23)

約1/2が残存する器台。受部が大きく外反する点で特異な形態を見せる。脚部付近は二次的な火熱を受けて赤変する。



20 : P66 23 : P126
 21 · 22 : P67 24 : P127
 25~30 : P129

0 20cm

第50図 柱穴出土遺物実測図③ (1/4)

P127

P126の南に近接する柱穴で、直径0.5m、深さ0.2mに満たない規模である。

出土遺物

土器（図版、第50図24）

肉薄の底部となる甕で、体部下端に焼成前になされたかと思われる穿孔がある。残存部の全体が非常によく焼けて赤く変色する。

P129

7号住居跡の炉を想定した102号土坑の北に近接する。直径0.4m前後、深さ0.4m弱で、平面形は扁円形に近い。

出土遺物

出土状態を記録していないが、規模に比して多くの土器が出土している。

土器（図版44、第50図25～30）

25は約1/4が残存する広口壺で、頸部の立ち上がりが急である。口端部は小さく肥厚する。26・27は長頸壺。26は約1/2が残存するが、頸部のくびれが弱い。口端部下に低い突帯を付して、口端部断面が楔状を呈する。27は口縁部下に明瞭な断面三角突帯を付すもの。赤色顔料を塗布する。

28は薄手の高杯で、これも約1/2が残存する。口縁部は鋤先状を呈するが、内側への突出、外方への拡張など発達した形態を示す。

29はく字形に外反する甕で、口端部の肥厚の度合いは小さいが、体部が張る。30は薄手の甕底部。図示部分はほぼ完存し、よく焼けている。

P132

B地区西端で検出したが、一部が農道下へ入っている。検出した部分では直径0.5m、深さ0.1mの円形を呈する。

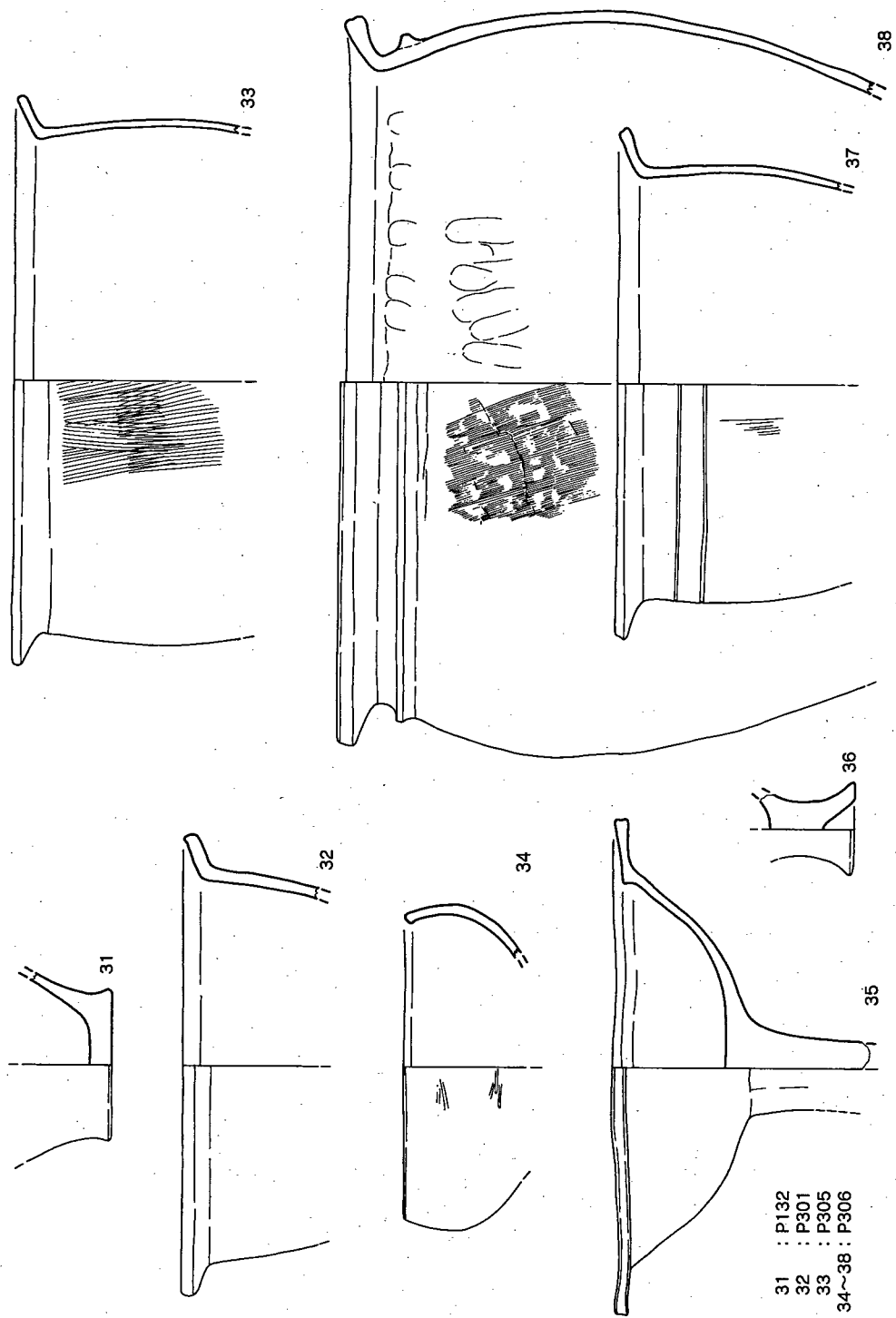
出土遺物

土器（図版45、第51図31）

甕の底部であろう。薄手で、よく焼けている。

石器（図版46、第53図6）

器表が風化するせいか、多孔質となる凹石で、表裏が浅く窪んでいる。



第51图 柱穴出土遺物実測図④ (1/4)

P301

3号住居跡の北にある。直径20cmほどの大きさであるが、1/20遺構実測図への記録がない。

出土遺物

土器（図版45、第51図32）

く字形に外折する口縁部をもつ甕の小片。器表が荒れる。

P304

C地区北東隅近くに位置する。平面形は軸長0.6~0.8mの扁円形を呈し、深さは0.1m。

出土遺物

石器（図版46、第53図7）

磨石の残片で、多孔質の安山岩を使用する。全面が平滑化する。

P305

P304に隣接する。直径0.2~0.3m、深さ0.3m弱の小柱穴。

出土遺物

土器（第51図33）

く字形に外折する甕で、口端部が誇張されないもの。体部内面は丁寧な撫でで調整される。

P306（図版26、第47図）

直径0.5m、深さ0.2mほどの円形平面を有するピット中に土器が詰まっていたもので、柱穴ではなかろう。埋土中にかなりの炭片を交えており、供伴した石材はすべて焼けていた。

出土遺物

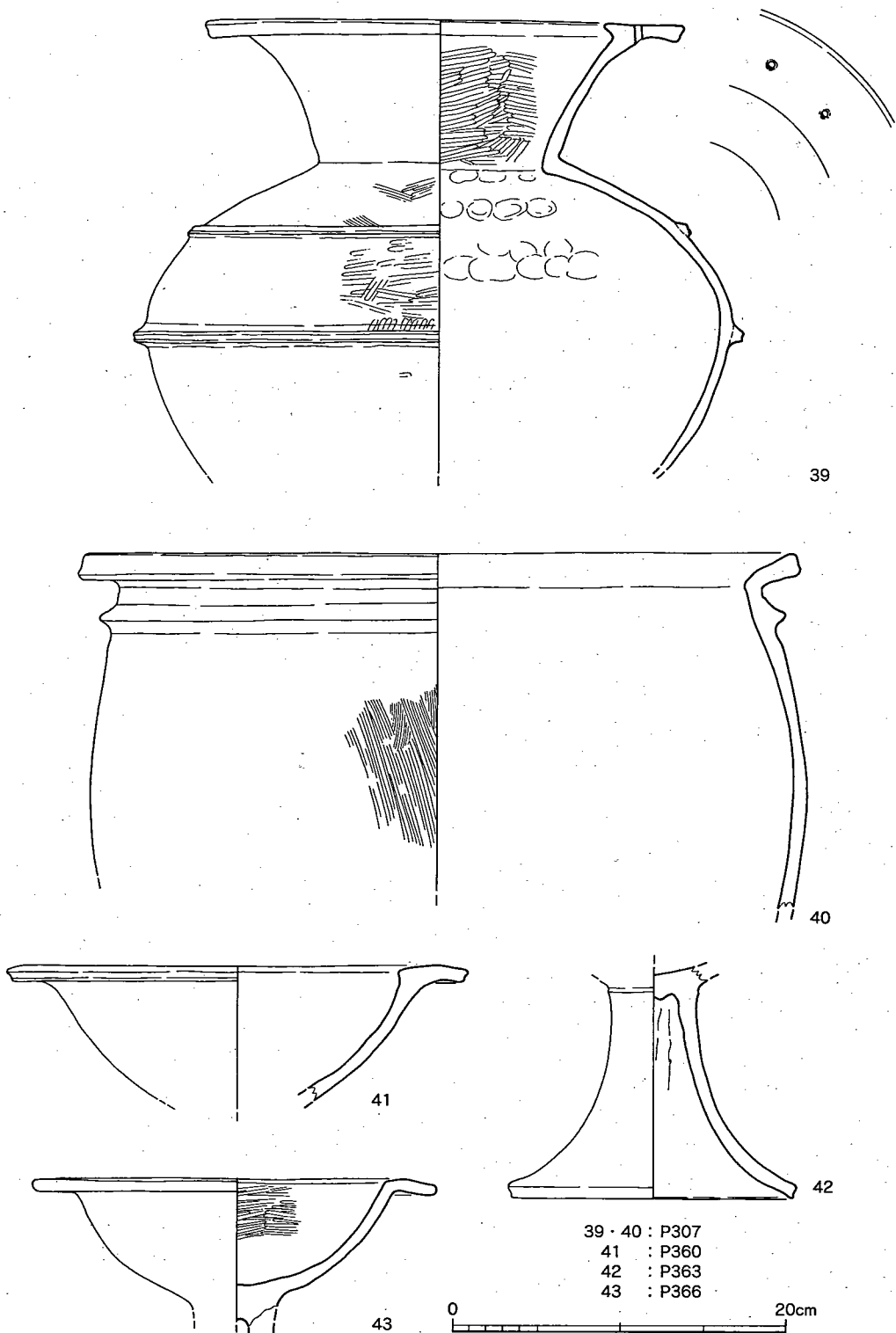
第47図にみるように、規則性もなく土器などが密集して詰まっていた。

土器（図版45、第51図34~38）

34は高杯であろうか。椀形を呈するが、器表は風化が著しい。35は鋤先状口縁を有する高杯。内側への突出は小さく、口縁部は水平な面を成す。一部に赤色顔料が観察でき、本来は全面に塗布されていたことが判る。

36は特殊な土器。

37はく字形に外折する口縁部を有する甕で、頸部下に2条の浅く細い沈線を刻む。体部内面はごく丁寧な撫でで仕上げる。38も同様に外折する口縁部を有するが、口端部は外側に肥厚する。頸部下に断面梯形の突帯を付す。これも内面は極めて丁寧な撫で、外面は細密な縦刷毛で仕上げる。



第52图 柱穴出土遺物実測図⑤ (1/4)

P307 (図版26、第47図)

P306に隣接する、直径0.4m、深さ0.2mの円形ピット。

出土遺物

これも全面に土器が出土した。やはりP306同様、その状態に規則性はなく、口縁部が下位で倒立し、細片化するといった状況である。ほぼ2個体分であった。

土器 (図版45、第52図39・40)

39は鋤先状口縁を有する大型の壺で、口縁部はほぼ完周する。口縁部はかなり発達した段階を示し、2孔1対の紐孔がある。体部最大径は中位にあつて、肩および最大径部分に断面梯形の突帯を付す。なお、頸部内面から体部外面にかけて灰赤褐色の化粧土を付すよう。

40はほぼ1/2を残す甕で、これも比較的大型品。口縁部はく字形に短く外反し、端部は肥厚する。頸部下に断面三角突帯を付し、体部は張りをもつ。

P360

C地区西端の中程にある。長軸0.7m強、短軸0.5mの長円形に近い平面形をもち、深さは0.5m強を測る、比較的大型の柱穴。後述するP366とともに3基の同様な柱穴が約2.6mの距離をもつて並ぶことから柵列状の遺構を想定できる。建物跡にはならないようである。

出土遺物

土器 (図版46、第52図41)

鋤先状口縁を有する高杯の残片で、約1/4が残る。後円部は上方へ湾曲するが、内側への突出は小さい。器表の荒れが著しい。

石器 (図版46、第53図3)

透明度の高い腰岳山黒曜石を用いた石鏃。基部を欠損するが、肉厚で、細部調整が丁寧。

P363

P360の北に隣接する。直径0.2m弱、深さ0.1mの小柱穴。

出土遺物

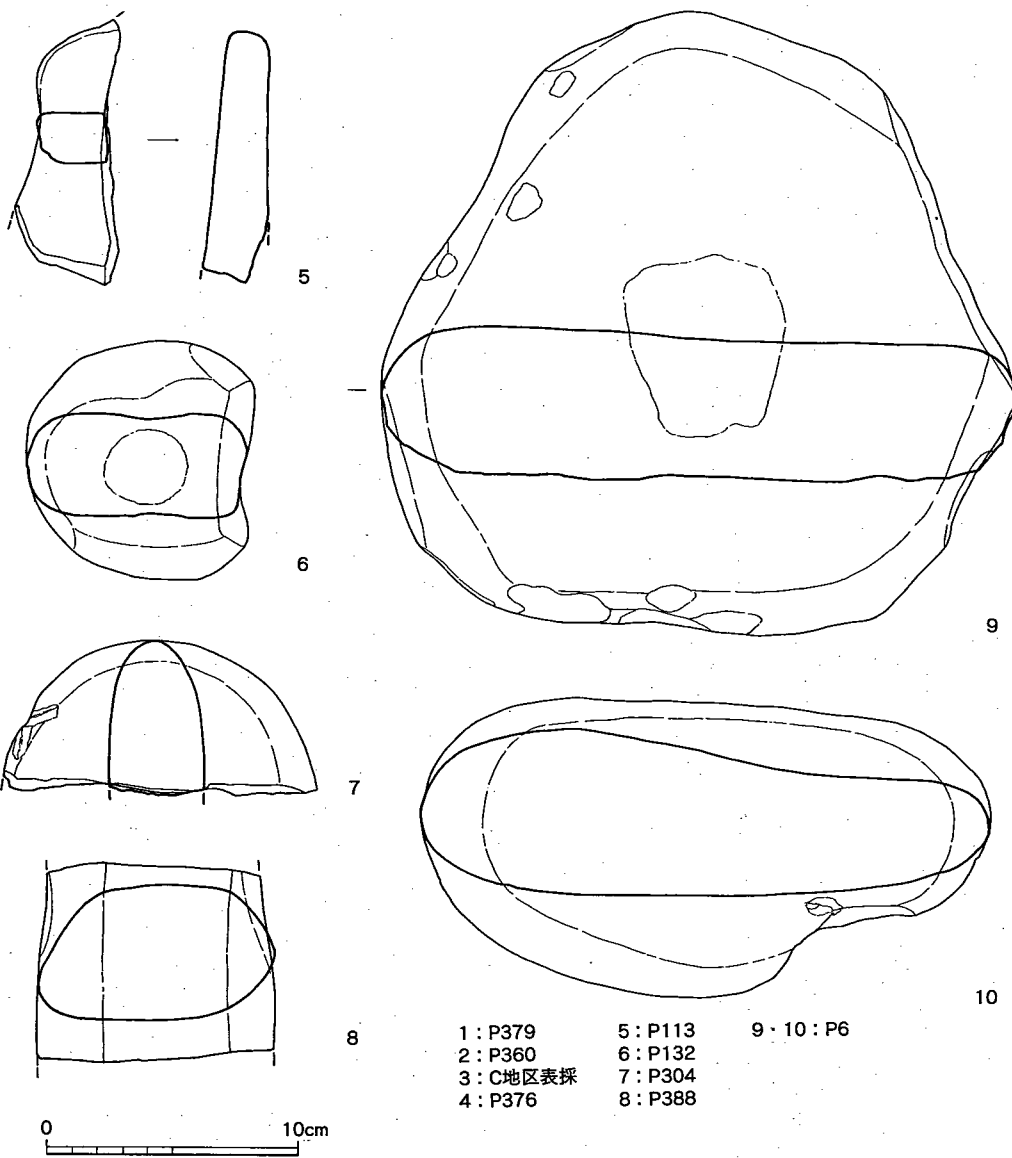
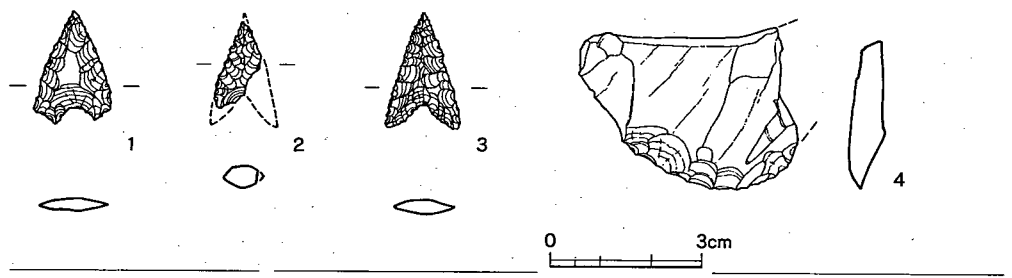
土器 (図版46、第52図42)

約1/2が残る高杯片。脚部が短く、それに比して裾の広がり大きい。脚端部付近はよく焼けて、赤変する。

P366

上述したP360と並ぶ柱穴。長軸0.6m、短軸0.4mの長円形を呈し、深さは0.7m近い。

出土遺物



- | | | |
|----------|---------|----------|
| 1: P379 | 5: P113 | 9·10: P6 |
| 2: P360 | 6: P132 | |
| 3: C地区表探 | 7: P304 | |
| 4: P376 | 8: P388 | |

第53图 柱穴等出土遗物实测图 (1/1、1/3)

土器・小石が検出面近くで検出された。

土器 (図版46、第52図43)

鋤先状口縁を有する高杯であるが、鋤先状というよりは口縁部を屈曲させて水平面を作ったような形状を見せる。屈曲部は丸くなっている。器表外面は荒れるが、内面には丁寧な篋磨きの痕跡が残る。なお、内外全面に赤色顔料が塗布された痕跡が残る。

P376

P366の北東に位置する小柱穴。直径0.2m弱、深さ0.1mの規模である。

出土遺物

石器 (図版46、第53図4)

サヌカイト製スクレイパーの残欠。図上面の背は丸く磨かれたようになり、刃部のみを加工する。加工痕はかなり風化するようである。

P379

P376の北に位置する不定形の落ち込みで、長軸約2m、短軸1.6mを測る。発掘時の所見では遺構ではなく、シミ状の変色域であった。

出土遺物

石器 (図版46、第53図2)

姫島産黒曜石製の打製石鏃。細部調整は丁寧。

P388

P366の北西にある、長軸約2m、短軸0.8mの長円形の遺構とは思えない落ち込み。

出土遺物

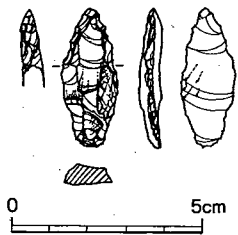
石器 (図版、第53図8)

泥岩製かと思われる磨石の残欠。目が細かく軟質で、破損面を除く全体が滑らかとなる。

表採遺物

石器 (巻頭図版、第54図)

ホルンフェルス製の縦長状剥片を素材とするナイフ形石器。ブランテイングは右側縁全体と左側縁の先端部に認められ、いわゆる二側縁加工のタイプである。剥片剥離は縦方向を基本としており、丁寧な仕上げを行っている。長さ37mm、幅14mm、厚さ5.5mmの大きさである。(栗焼憲児)



第54図 表採遺物実測図
(1/2)

3. おわりに

以上が桑野遺跡の調査でえた内容である。この周辺では卑近な位置にある新吉富村牛頭天王（中桑野）遺跡でまとまった弥生時代の遺構・遺物があるが、それに次ぐ規模の調査となった。また、遺跡の性格を推測する場合にも、牛頭天王遺跡との関係は切り離せない。遺跡総体としては、次年度に報告が予定されている墓域としての大塚本遺跡の存在を抜きに考えられないが、当面のまとめをして次年度へ譲りたい。

1) 桑野遺跡周辺の弥生土器

ここでは律令期に成立した「豊前国」の中部付近の弥生土器について若干の整理を行ってみたい。範囲としては旧上毛郡—現行の行政区でいえば豊前市の西端の一部を除いた同市以東唐大分県境の山国川までの範囲を対象とするが、すでに記したように、同地域での弥生時代遺跡の発掘調査例は後期後半以降の遺跡が多く、それ以前のは乏しい。内容的に最も充実する遺跡は牛頭天王（中桑野）遺跡である。狭小な調査範囲であるが、提示された遺物量とそれが示す時間幅は他遺跡の追従を許さないものである。それはまたこの遺跡の性格の一端を反映するものである。ここでは、そこで紹介された資料を中心とし、併せて他遺跡出土資料で補完して、この地域の弥生時代前期～中期の土器を概観したい。

なお、資料が乏しいために壺・甕を中心とし、基準は小田富士雄氏が行った編年に準拠する。

I c期（板付Ⅱb式併行）

中桑野遺跡P59を標識とするもので、まとまった資料としては地域で最も古い様相を示し、ほかの遺跡では未発見である。

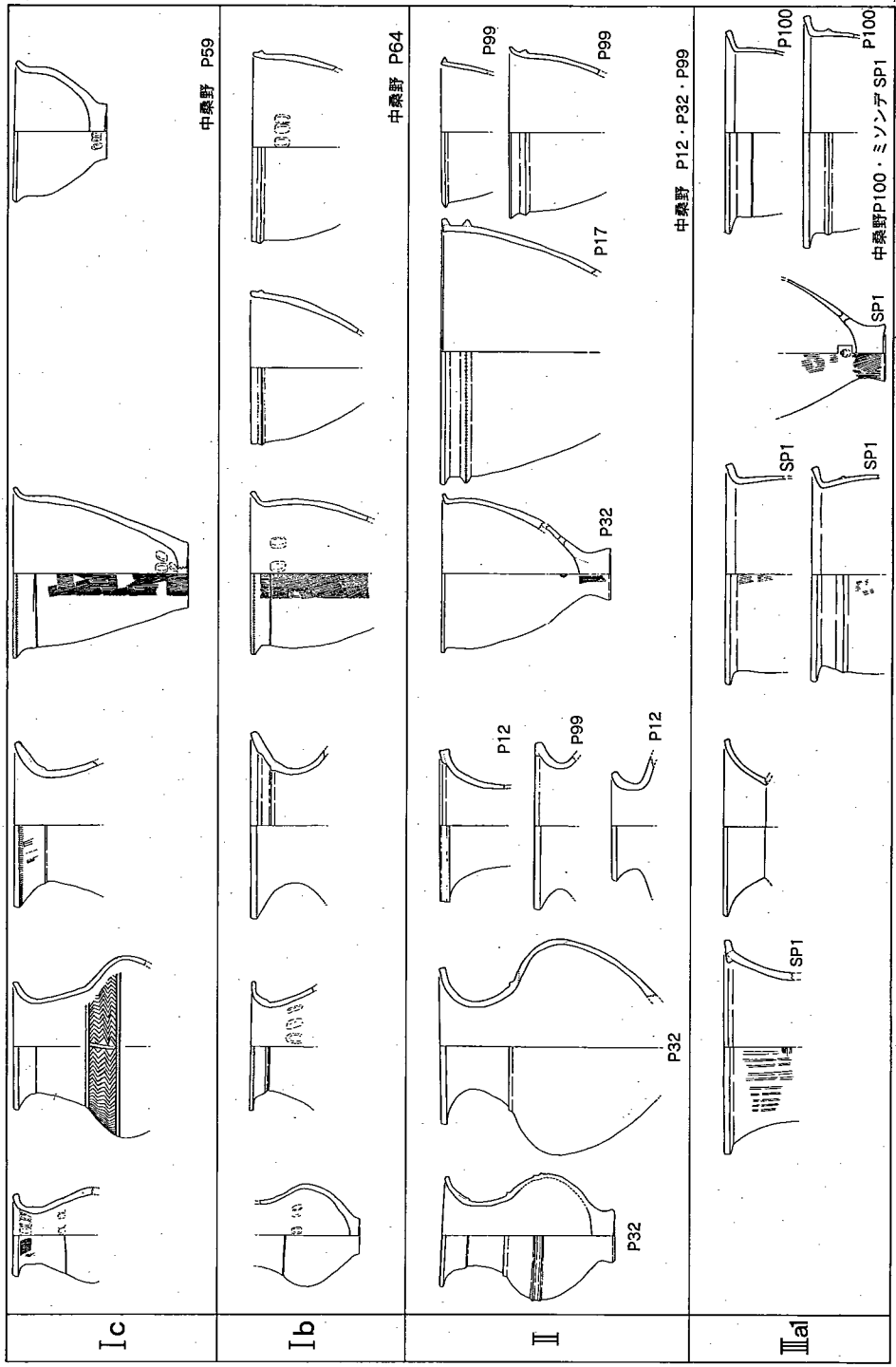
壺は体部・頸部・口縁部が明瞭に区別でき、体部上半に文様帯を付す。頸部は上方に行くほどに径が小さくなり、口縁部の反転の度合いはまだ小さい。

甕は薄手の比較的大きい底部から直線的に立ち上がり、頸部下で小さくすぼんで如意形の口縁部へ続く。

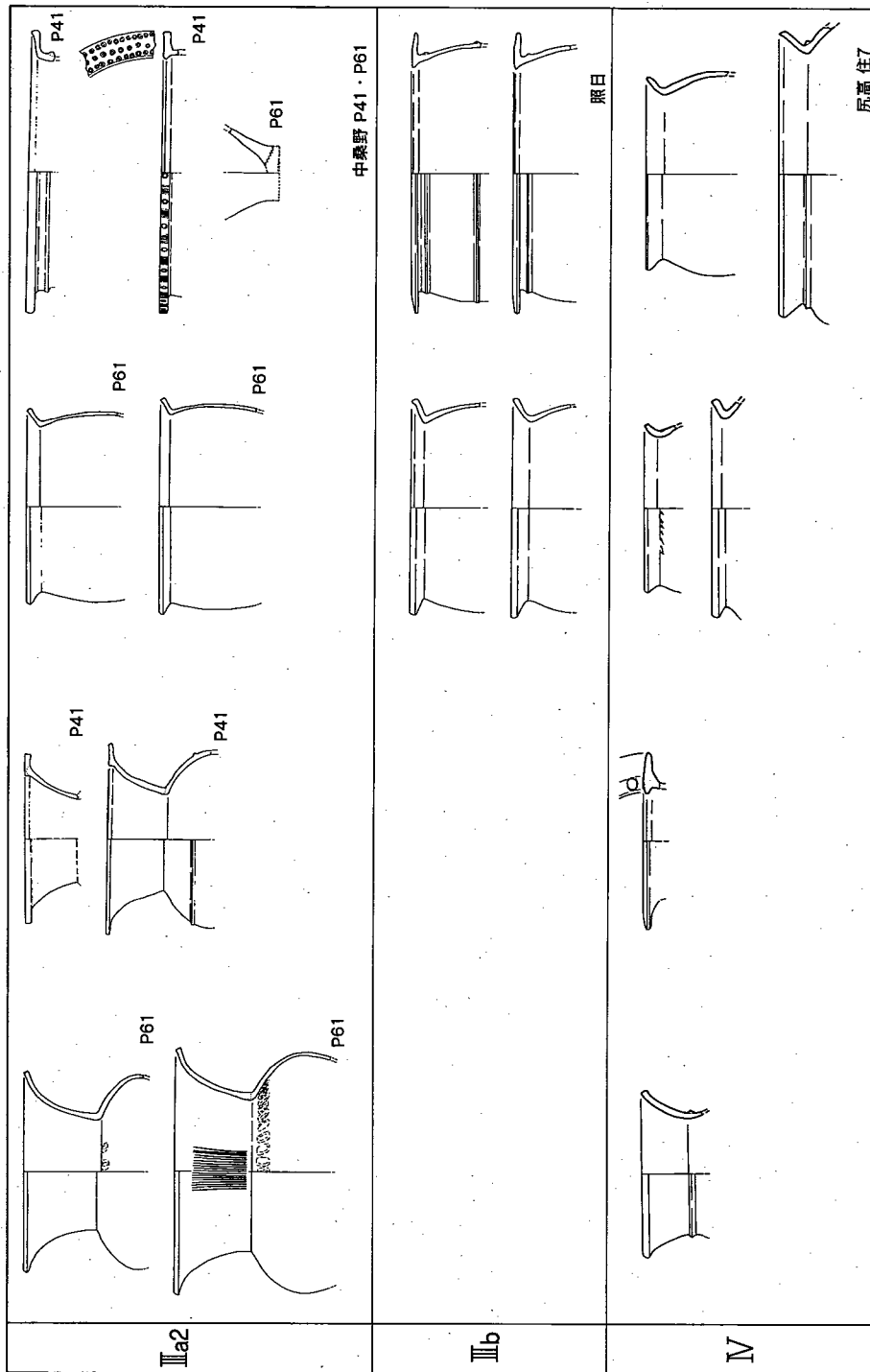
I d期（板付Ⅱc式併行）

中桑野遺跡P64を標識とし、個別にはI c期、後述のⅡ期資料とは区別しがたく、過渡的な様相をもつ。

壺は前代以来の各部位が明瞭に区別しうるものと、口縁部から体部上半にかけて大きくC字形に弧を描くものがある。前者はしかし、口縁部の外反がより大きくなり、後者では内面に装飾を付す。



第55図 桑野遺跡周辺弥生土器変遷図I (1/8)



第56图 桑野遺跡周边弥生土器変遷図2 (1/8)

甕は体部が丸みを増し、直口縁の下位に突帯を付すいわゆる下城式を伴う。

Ⅱ期（城ノ越式併行）

この時期の資料は多くなり、中桑野遺跡P12・32・92・99、牛頭天王遺跡201・202号土坑、新吉富村垂水廃寺・同垂水高木遺跡、大平村能満寺古墳群下層などで発見されている。

壺は前代と同様のC字形に大きく外彎するものに加え、中期土器の指標となる広口壺が表れる。鋤先状口縁の祖形となる形態もこの時期のものであろう。

甕は口縁部が逆L字状に屈曲するもの、あるいは口端部に粘土帯を貼付して断面三角形に変形させるものが新たに出現する。前代以来の如意形口縁を有するものでは口縁部が矮小化する。また、底部が小型化、厚底化する。

Ⅲa1期（須玖Ⅰ式併行）

中桑野遺跡P100、土佐井ミソンデ遺跡を指標とするもので、壺は前期的な形態を失う。

広口壺の口縁部が大型化するが、まだ短く、開きも概して小さい。鋤先状口縁部も上端が水平で、内側への突出も弱い。

甕は口縁部がく字形に外折し、口端部を肥厚させるが、「跳ね上げ」は小さい。頸部のやや下位に断面三角突帯を付す、あるいは浅く細い沈線を付すものもある。

Ⅲa2期（須玖Ⅰ式併行）

資料が断片的であり、Ⅲa1期との違いが曖昧であるが、壺では明らかな変化が窺えることから設定した。

広口壺では口縁部が発達して高く、大きく開き、口径と体部最大径がほぼ等しい。

甕も口径がほぼ体部最大径に等しく、底部が薄くなる。

Ⅲb期（須玖Ⅱ式併行）

この時期の良好な土器群はないようであるが、新吉富村照日窯跡群で出土した資料を充てる。ただし、これは明確な遺構ではなく、窯跡灰原中から出土したものである。

壺の資料はないが、く字形口縁甕では口端部の跳ね上げが顕著となり、ここにはないが、突帯が頸部に取り付く。鋤先状口縁は長く延びて、外傾する。

Ⅳ期（後期初頭）

豊前地方では一般に中期後半から後期中頃にかけての資料が乏しく、福岡地方でいうような

後期の指標がないといってもよい状況である。ここでは乏しい資料の中から新吉富村尻高畑田遺跡7号竪穴式住居跡の遺物を充てた。

壺は再び口頸部が小型化し、傾きも小さくなる。体部は長胴化するようである。鋤先状口縁も小型化し、肉厚となる。

甕はやはり口縁部が小型化し、体部の張りが増す。また、断面三角突帯を頸部に付す。

以上に当地域の弥生土器を概観したが、前期後半から中期前半ないし中頃にかけての資料は比較的揃うが、それ以降は質・量とも甚だ心許ない。今後の発見によって加筆修正を行い、充実させる必要がある。

2) 遺跡の年代

竪穴式住居跡

1号竪穴式住居跡は炉内から比較的まとまった土器が出土しており、それらは外傾あるいは端部が垂れ気味となる鋤先状口縁の形態や、長さの短いく字形口縁の形態からみてⅢb期に属するものと思われる。7号竪穴式住居跡も炉出土の甕もⅢb期のものである。

3・4号竪穴式住居跡出土遺物はⅢa1期に属するもので、その他の住居跡では時期比定は困難である。

掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡のP46出土土器はⅢb期、7号掘立柱建物跡P4出土の甕はⅢa2期に属するものであろう。ほかの建物跡出土土器は小片であり、根拠が弱いがおおむねⅢa～Ⅲb期の間に収まるものである。

その他の遺構

そのほか遺物を図示した土坑・柱穴の多くはⅢa1・Ⅲa2期のものである。

最も大量の遺物を出土した218号溝状遺構はⅢa1～Ⅲa2にかけての内容をもつが、前者の要素が強い。溝状遺構といいながらも混入はあまり考えなくてよいようである。それを切る217号溝状遺構は遺物が乏しいが、内容は218号溝状遺構とほぼ同じであり、これは混入であるかも知れない。

以上のように、この遺跡の弥生時代以降はほぼⅢa1期からⅢb期の間に集中し、かつⅢa1・

Ⅲa2期が主体となる。別の言い方をすれば中期前半から後半という比較的短期間で廃絶したようである。

古代以降の遺物も散見するが確実な遺構は確認できなかった。

3) 遺跡の性格

この桑野遺跡は低丘陵上にある。西側は小規模ではあるが217・218号溝状遺構が遺跡を画すようで、東は掘立柱建物跡群が等高線とほぼ平行に配置され、それ以东は若干の遺構があるもの希薄となり、谷部分には及ばないようである。南北方向にはもちろん広がるのであろうが、南側は大きく削平（開墾）されている。

今回の調査では不確かなものを含めて7軒の竪穴式住居跡、12棟の掘立柱建物跡、そして土坑・溝などを検出した。遺構の残存状況を考えれば、本来はより多くの竪穴式住居跡や建物跡が存在したものと思われる。

主要な遺構のうち、竪穴式住居跡は遺跡中央部、地形的には丘陵尾根線付近に配置し、掘立柱建物跡は遺跡の東限付近に集中する傾向が窺える。特に掘立柱建物跡のうち、2～7号建物跡は重複しながら規則的な配列をとっており、明確な意志をもってそこに継続的に営まれたことを示している。ここに収納されたものは共同体の管理下にあったものであろう。

掘立柱建物跡の多くは1×1間の4本柱で、倉庫と思われるものであるが、その存在とともに通有北部九州の中期前半まで盛行するいわゆる大型の袋状竪穴（貯蔵穴）がまったく発見されなかったことも注目すべきであろう。その理由の一つには調査時にも悩まされた不透水性の土質が関係しているのであろうが、加えて高床式建物に対する技術的裏付けを保有していたことが想像される。桑野遺跡の母村と考えている牛頭天王遺跡ではすでに中期前半に、5.2×5.7mの1×1間建物、5×9.2mもの規模の1×2間建物跡などを建設する技術を擁していた。高床式建物を建設する技術的困難さについてはよく知らないが、近隣の大遺跡である行橋市下稗田遺跡ではほとんど倉庫をもたず、長く貯蔵穴を利用し続けたことからわかるように、機能的には容易に掘削できる貯蔵穴で補うことができたのである。

また、2・208号土坑のように四隅に柱穴を伴う土坑が2基確認できたが、これは高床式建物跡に保管するまでもないようなものを入れる貯蔵穴であったと思われる。これが散在していることは管理が共同体レベルではなく、住居跡に表象される家族レベルで行われていたことを示すのであろう。1号掘立柱建物跡など、分散して存在する掘立柱建物跡にも同様の管理形態がいえるのかも知れない。

いずれにしても、先述したように牛頭天王遺跡・大塚本遺跡を中心として小地域を形成する一集落であり、次年度報告予定の上桑野遺跡や未発見の近隣の遺跡との総合的評価が必要である。

圖 版

1
2
3
4
5



1 調査区全景 (東上空から)



2 調査区全景 (西上空から)



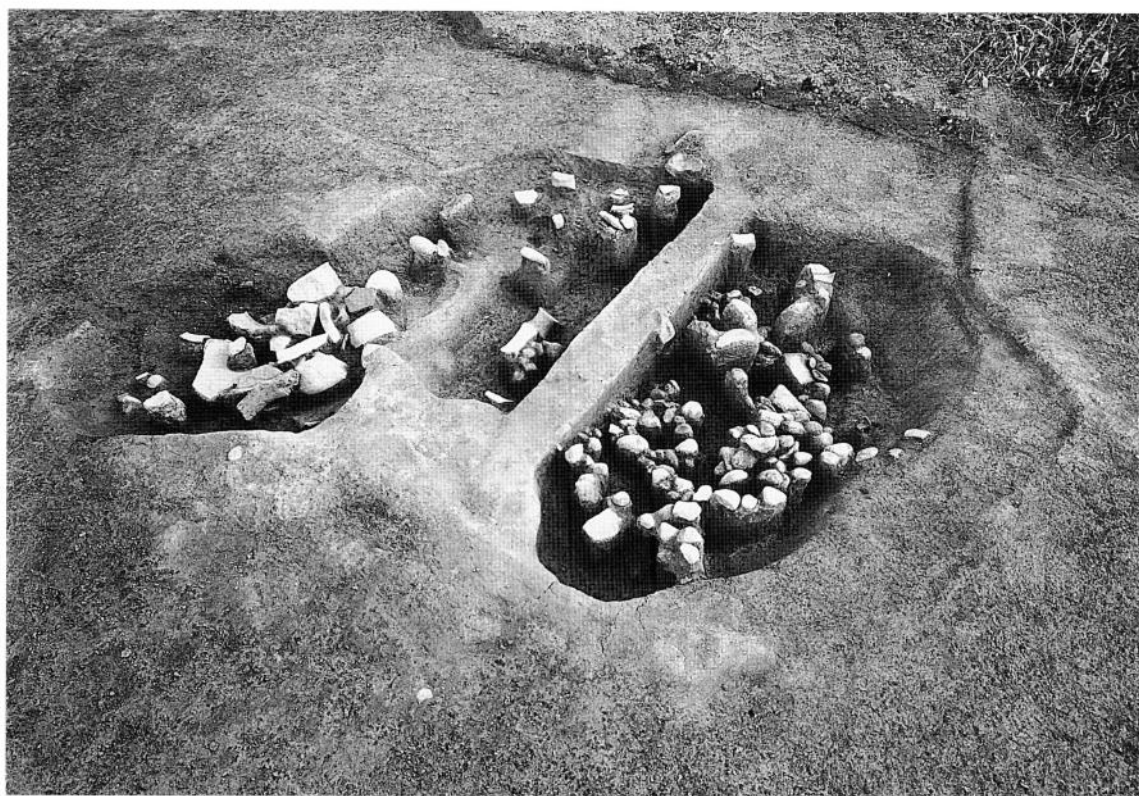
1 A・B地区（上空から）



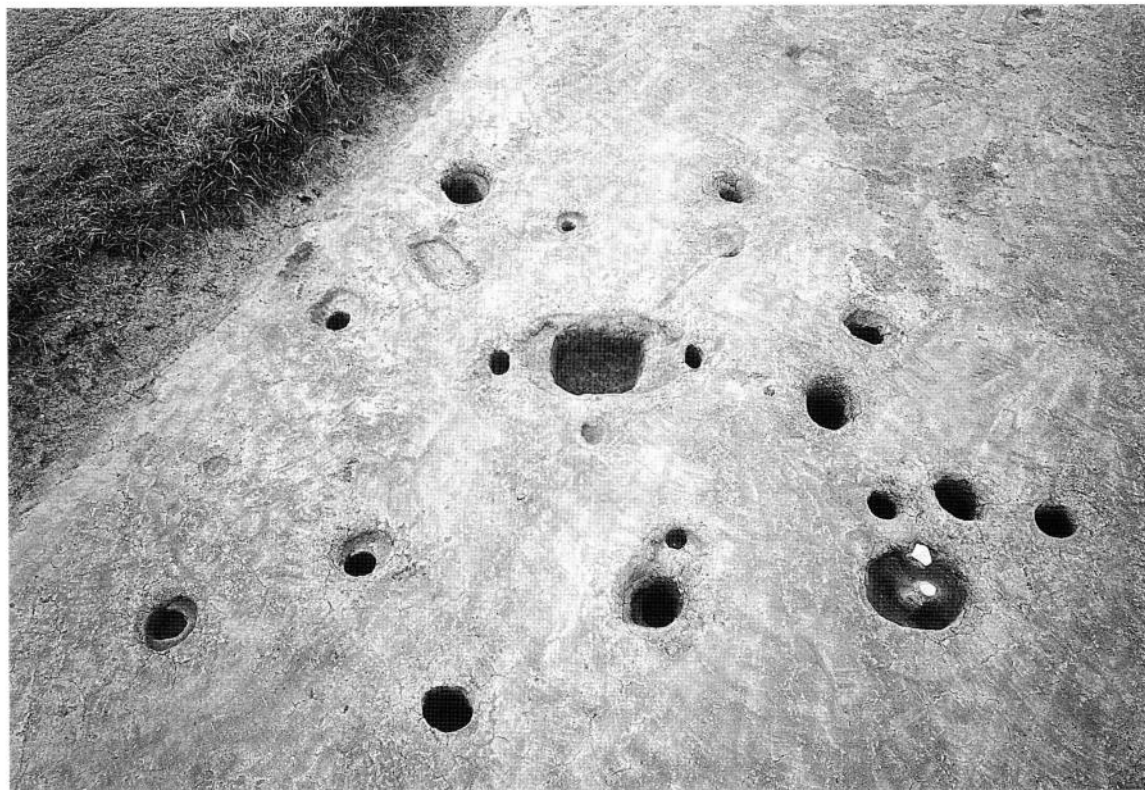
2 C地区（上空から）



1 1号竪穴式住居跡（北から）



2 1号竪穴式住居跡（北から）



1 2号竪穴式住居跡 (東から)



2 2・3号竪穴式住居跡 (東から)



1 4号竪穴式住居跡（東から）



2 5号竪穴式住居跡（南から）



1 4~7号竪穴式住居跡（東から）



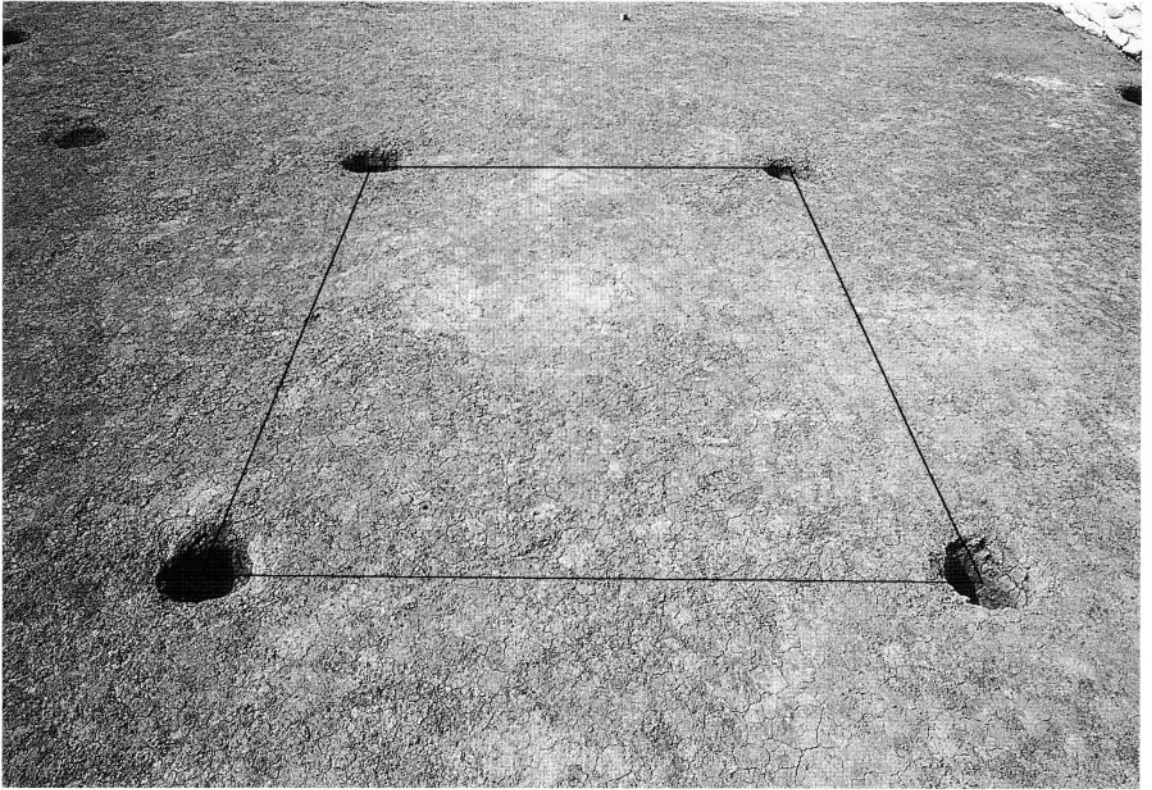
2 6号竪穴式住居跡周辺（東から）



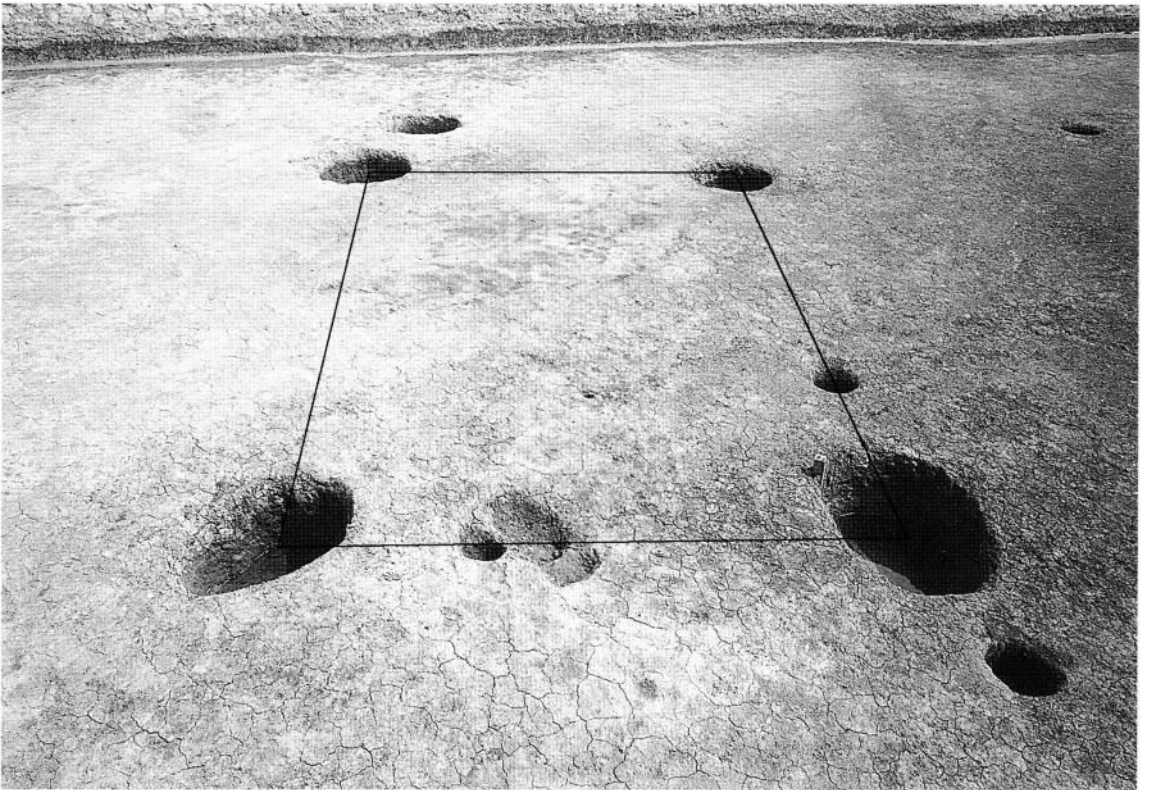
1 7号竪穴式住居跡周辺（東から）



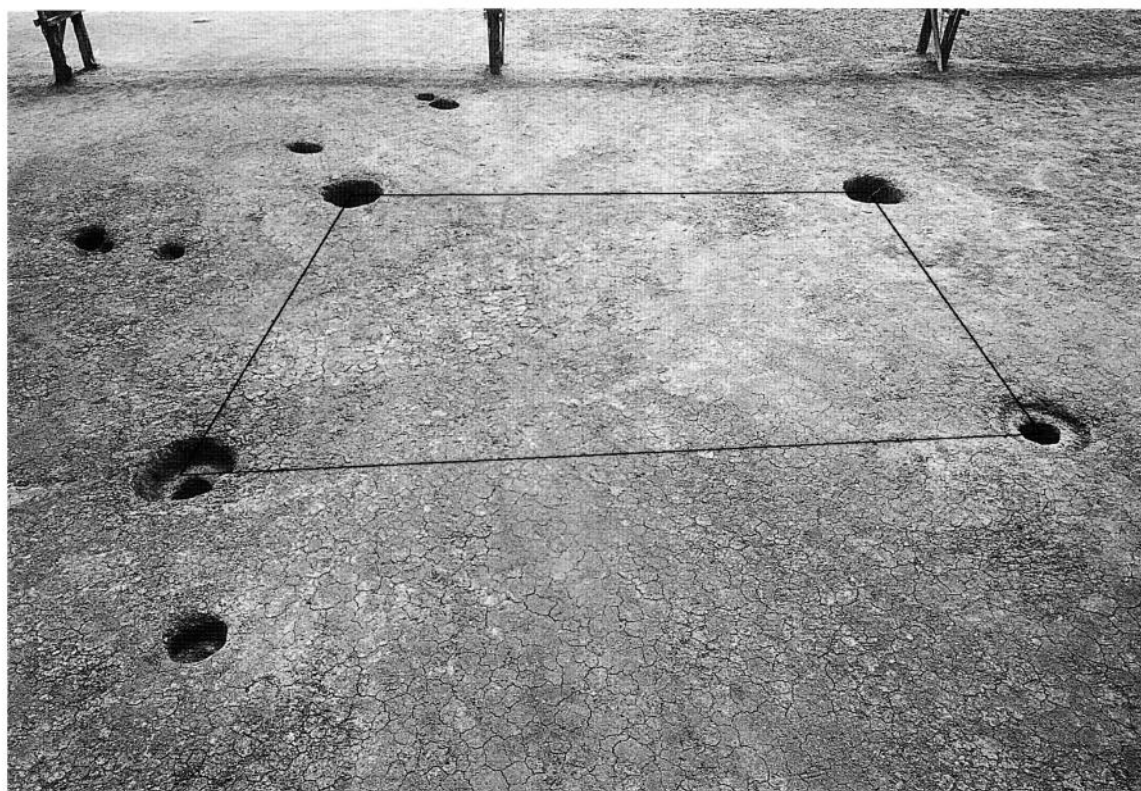
2 7号竪穴式住居跡炉遺物出土状態（東から）



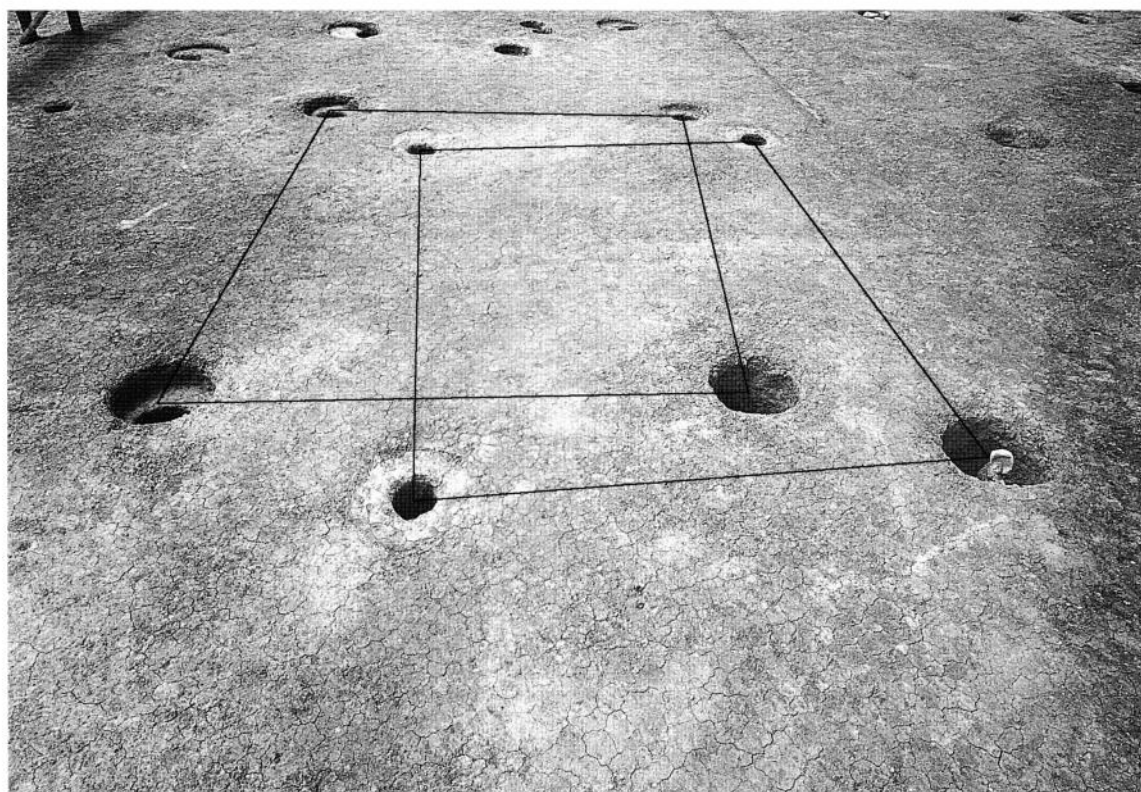
1 1号掘立柱建物跡（北から）



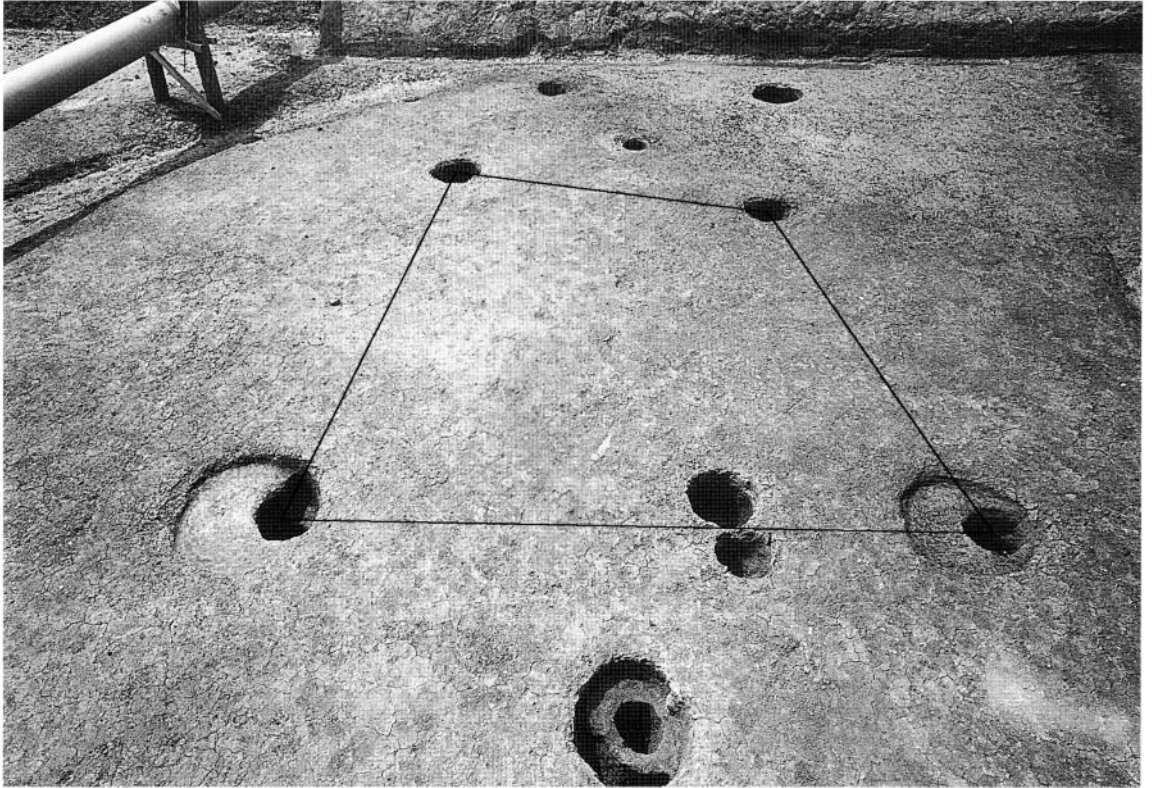
2 2号掘立柱建物跡（南から）



1 3号掘立柱建物跡（西から）



2 4・5号掘立柱建物跡（北から）



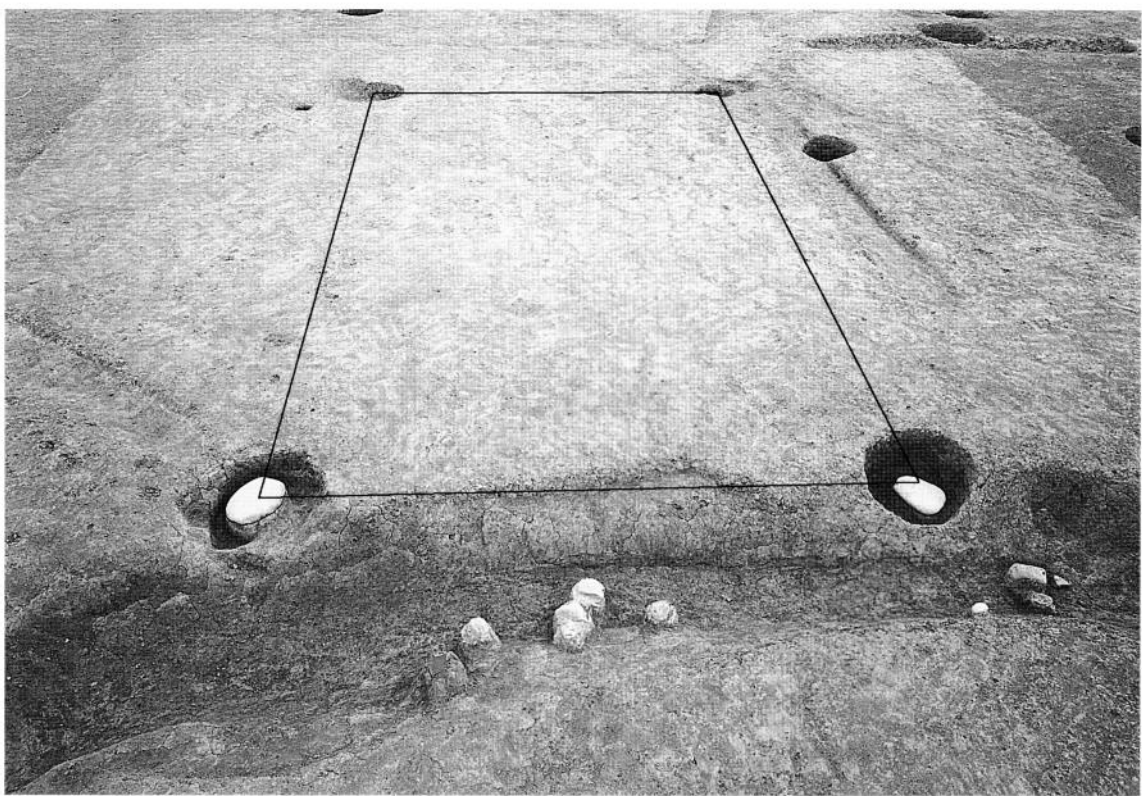
1 6号掘立柱建物跡（北から）



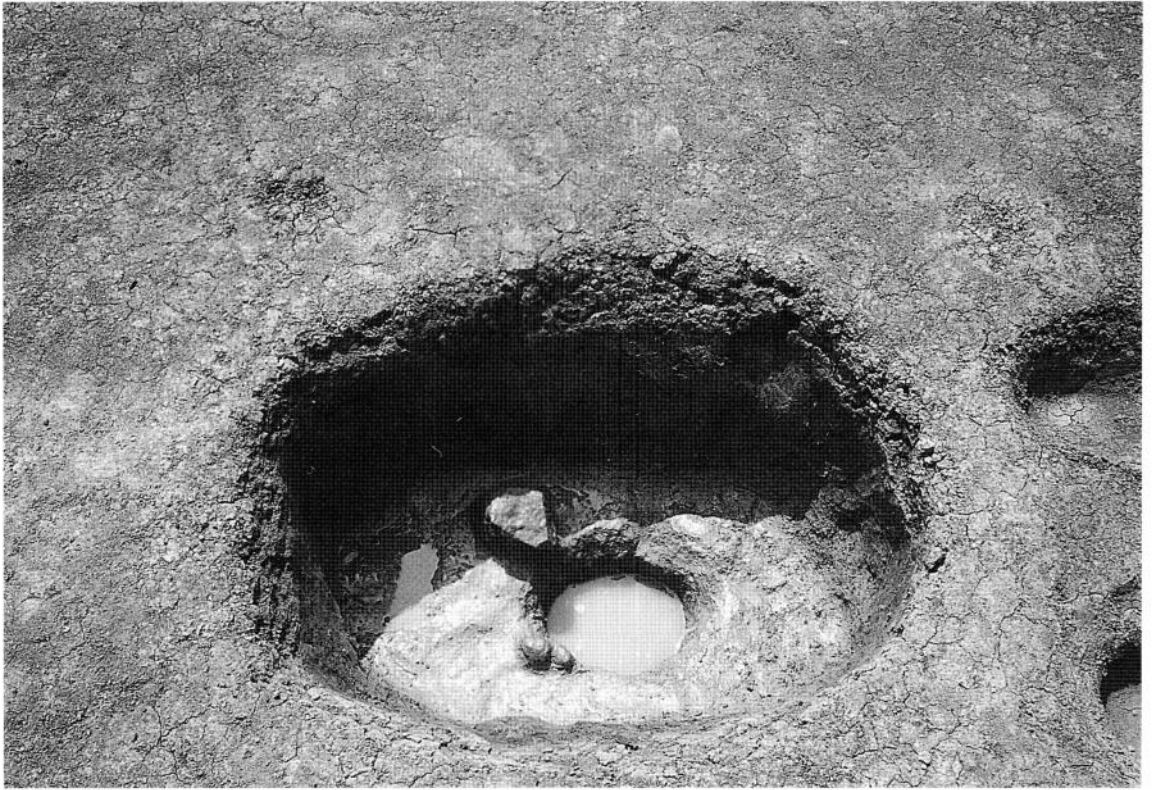
2 A地区東半掘立柱建物跡群（西から）



1 9号掘立柱建物跡 (西から)



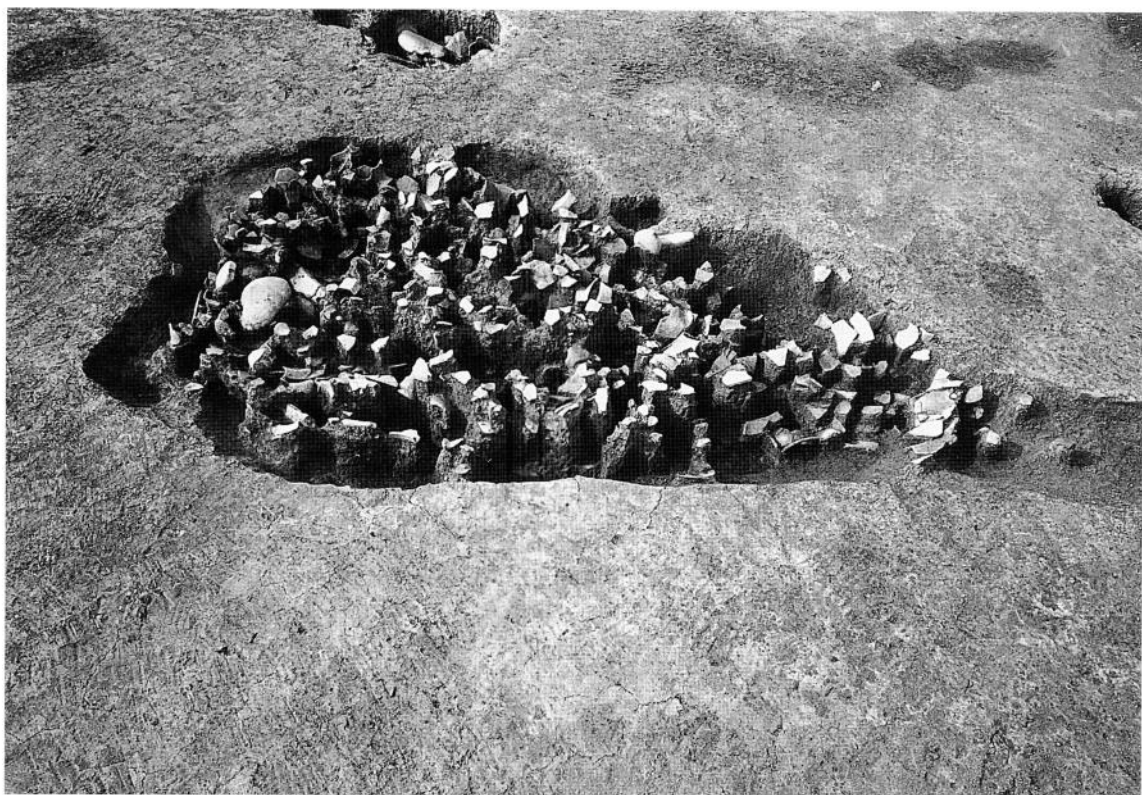
2 12号掘立柱建物跡 (南から)



1 12号土坑（北から）



2 2号土坑（南から）



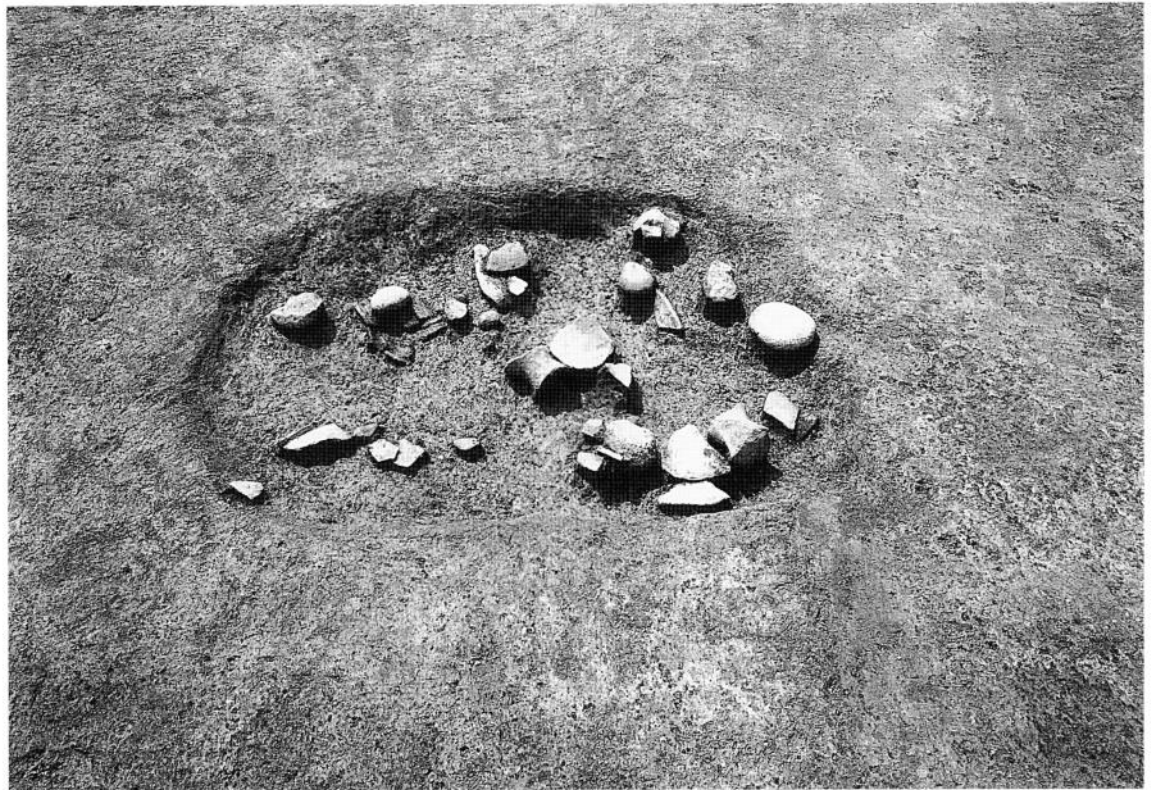
1 3号土坑上層 (南から)



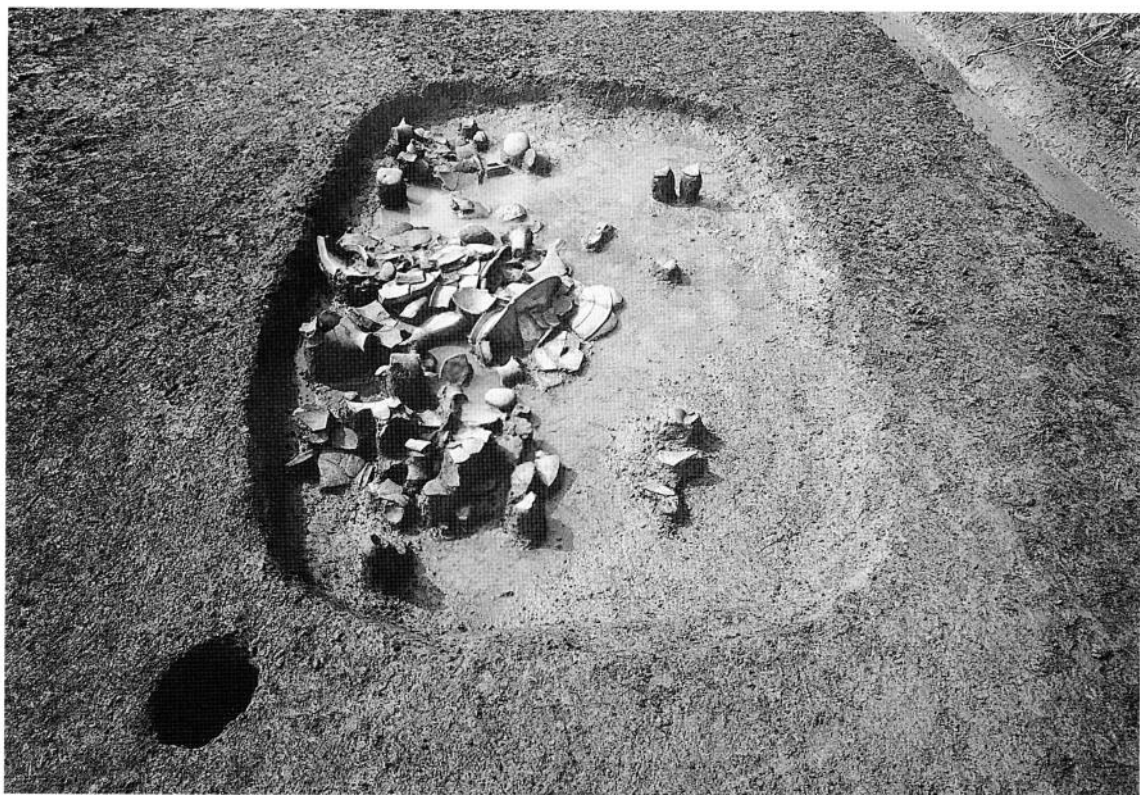
2 3号土坑下層 (南から)



1 5号土坑 (南東から)



2 10号土坑 (南東から)



1 105号土坑 (南西から)



2 202号土坑 (南から)



1 204号土坑（東から）



2 207号土坑（北西から）



1 208号土坑（南東から）



2 210号土坑（南西から）



1 211・212号土坑（東から）



2 211・212号土坑（北から）



1 101号溝状遺構周辺（南から）



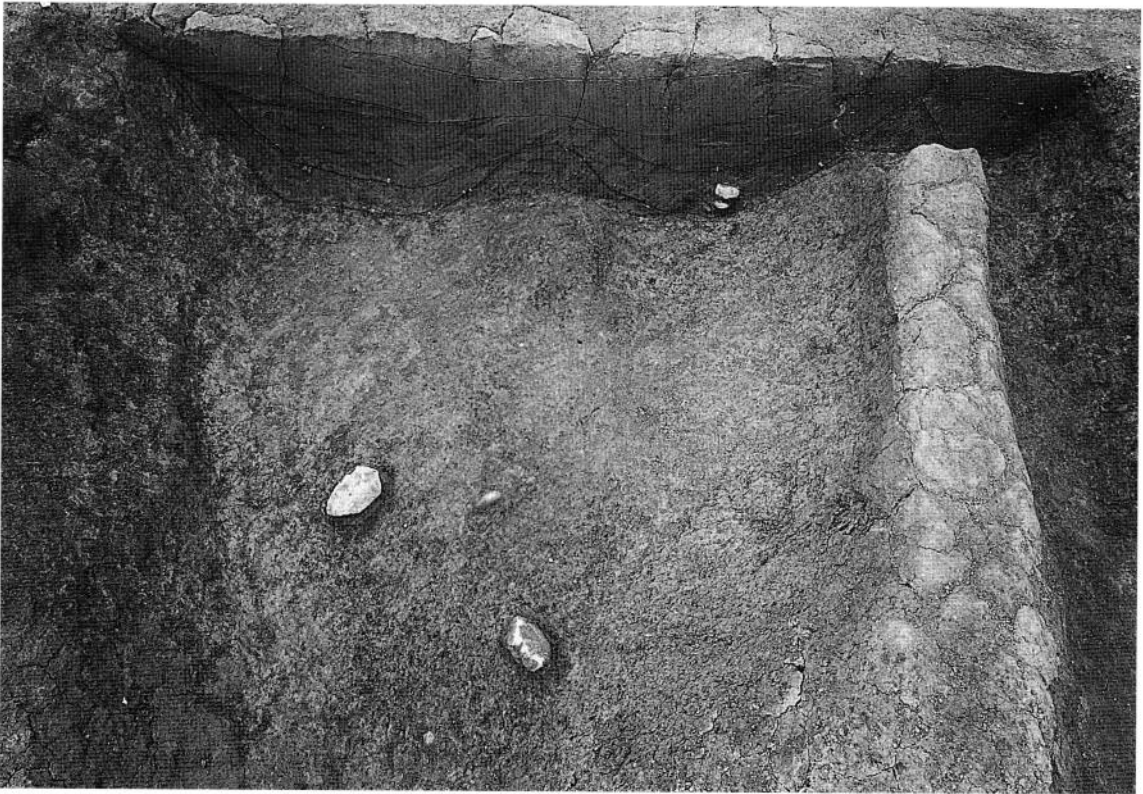
2 101号溝状遺構（東から）



1 5~7号溝状遺構周辺（西から）



2 5~7号溝状遺構（南から）



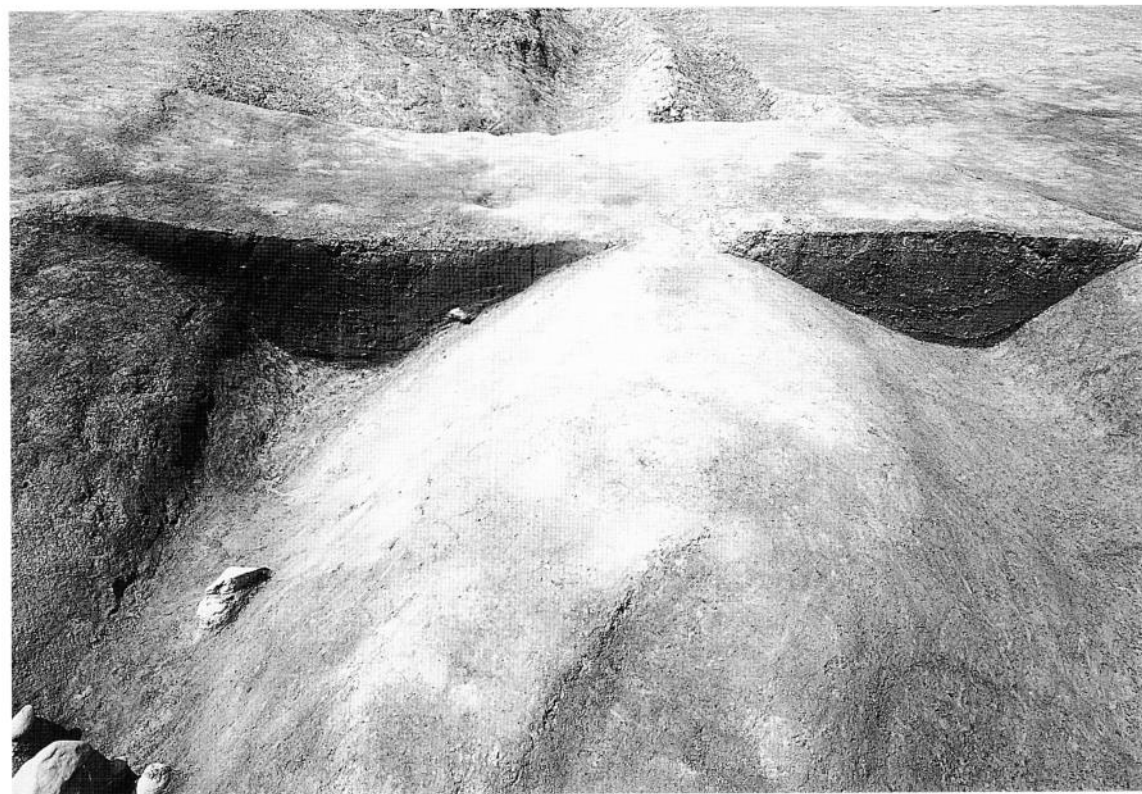
1 5~7号溝状遺構土層（南から）



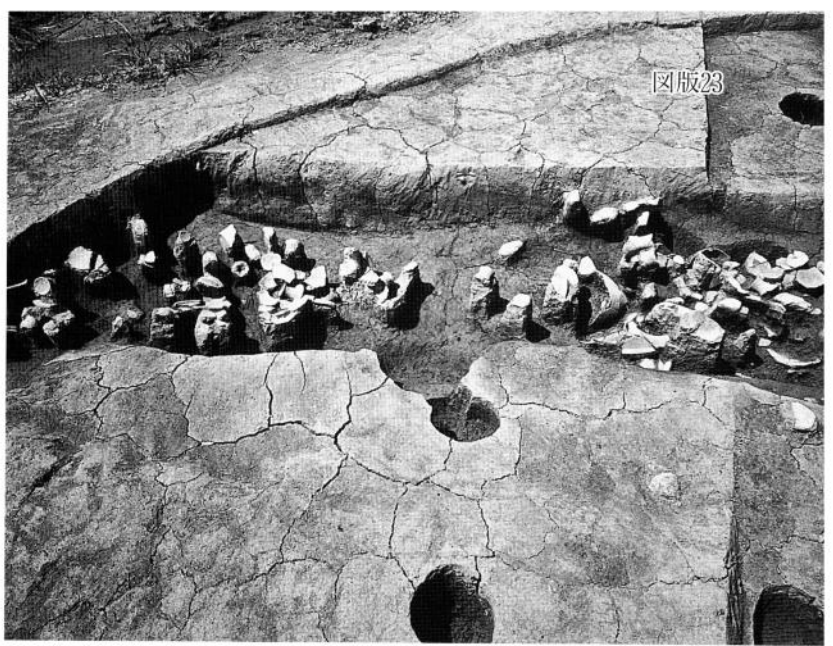
2 5~7号溝状遺構土層（南から）



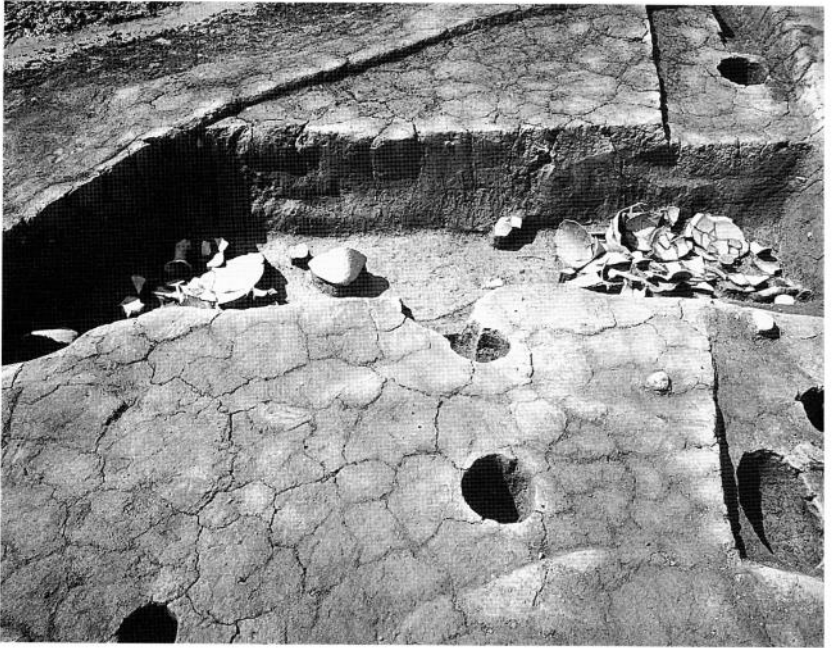
1 215・216号溝状遺構土層（南東から）



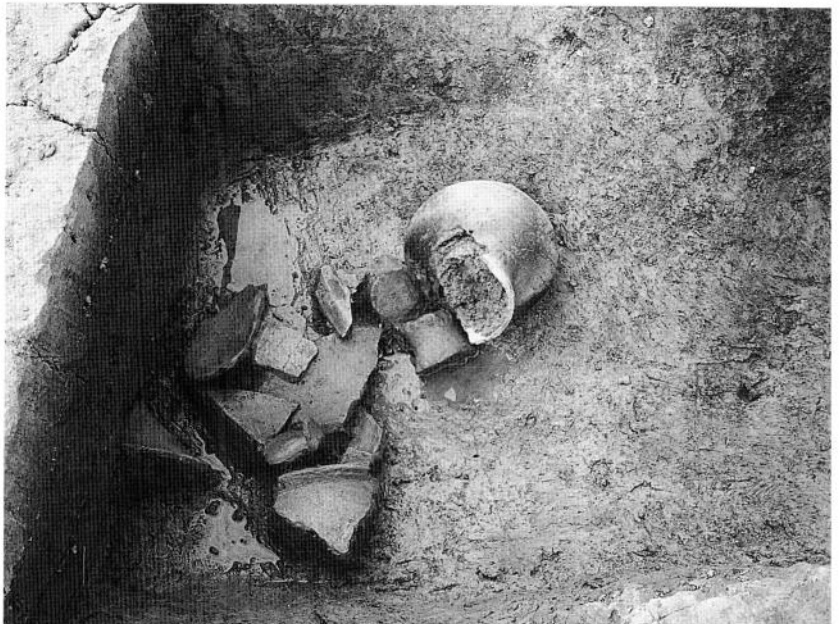
2 215・216号溝状遺構土層（東から）



1 218号溝状遺構南端上層 (東から)



2 218号溝状遺構南端下層 (東から)



3 218号溝状遺構北端上層 (東から)



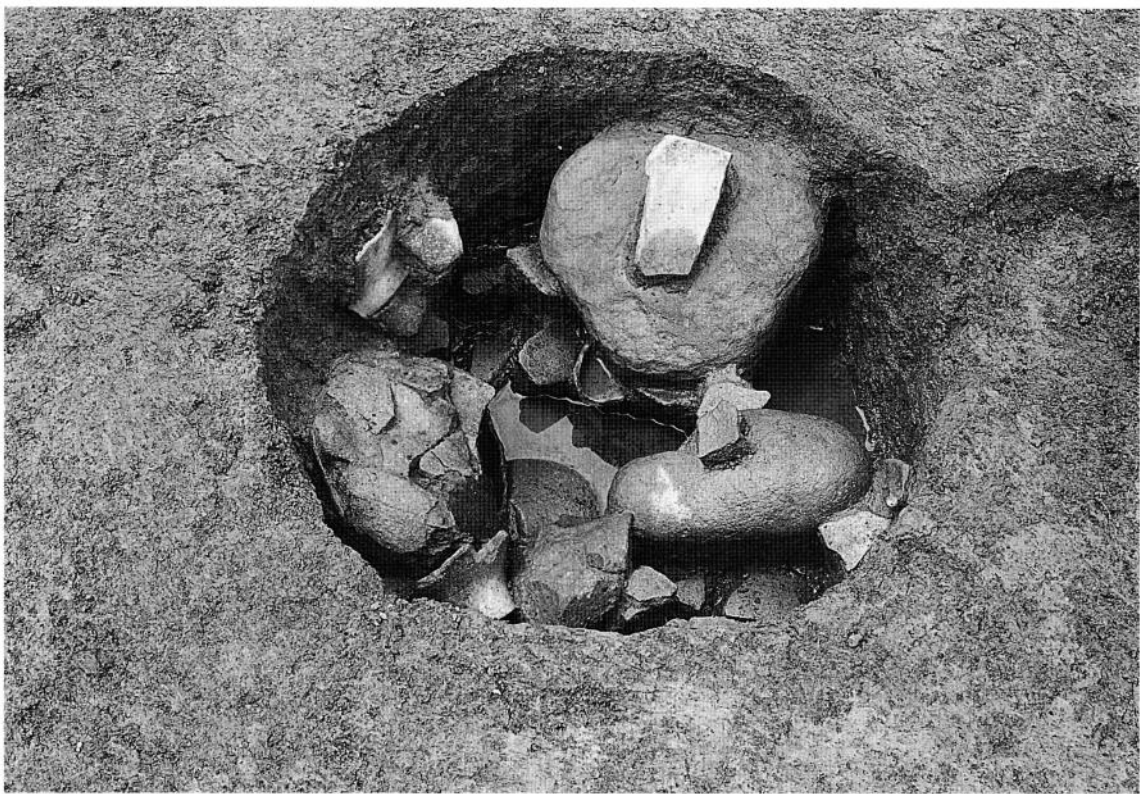
1 P1・2遺物出土状態（東から）



2 P4遺物出土状態（南東から）



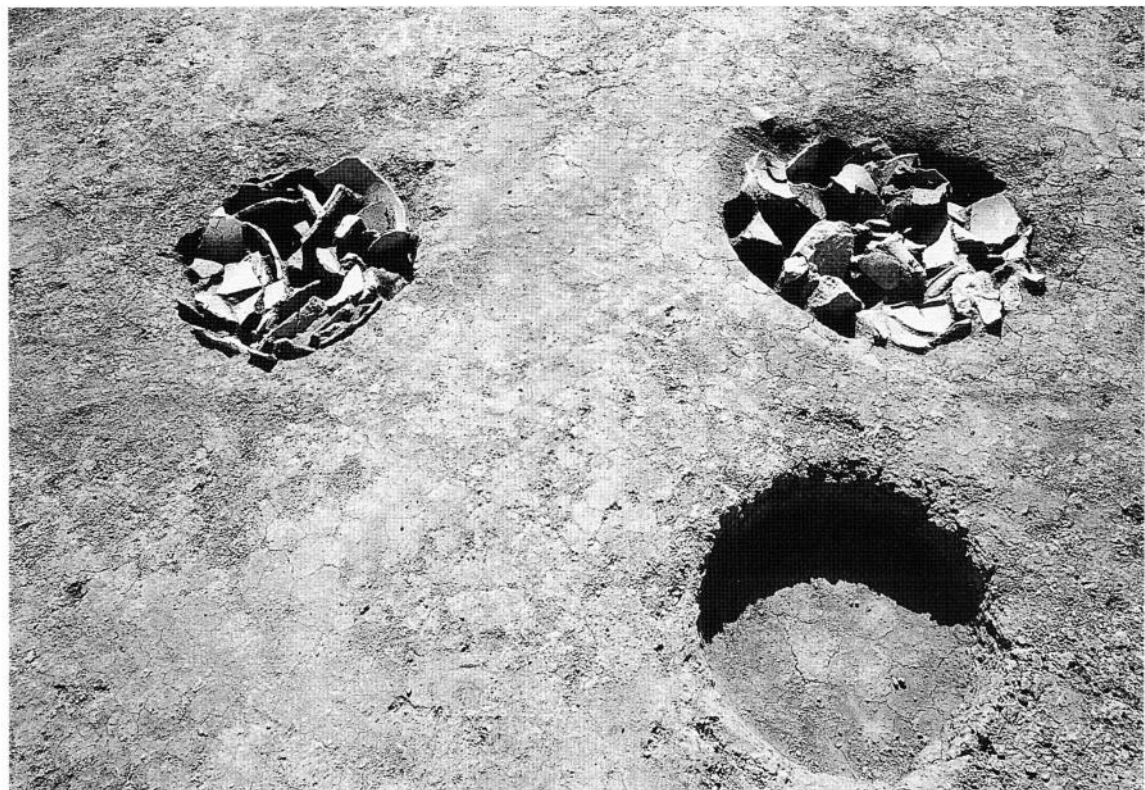
1 P5遺物出土状態（南から）



2 P6遺物出土状態（東から）



1 P65遺物出土状態（東から）



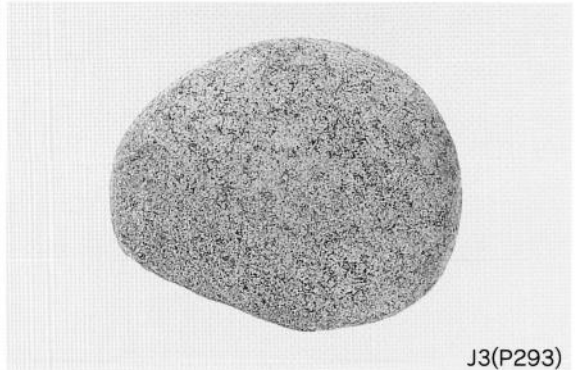
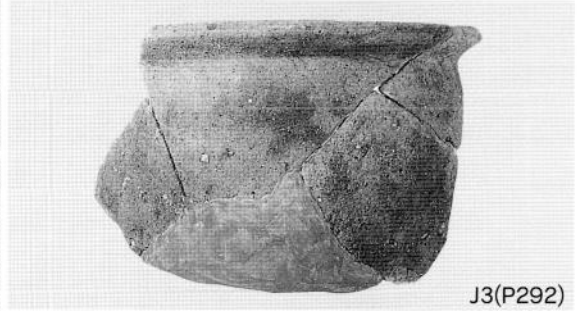
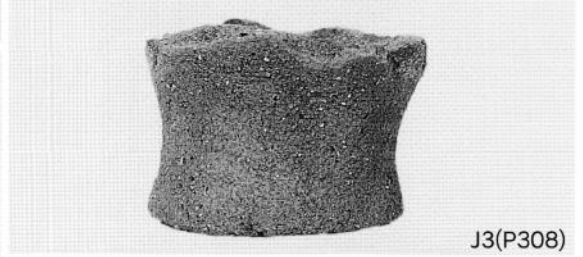
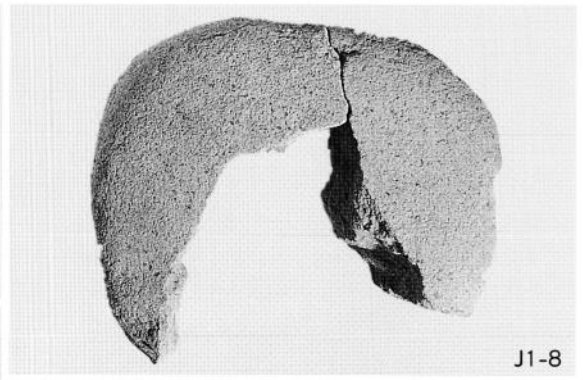
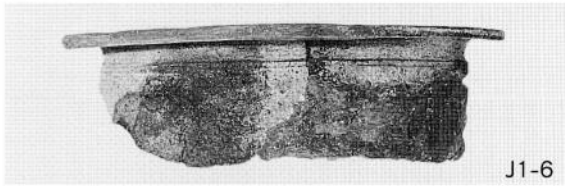
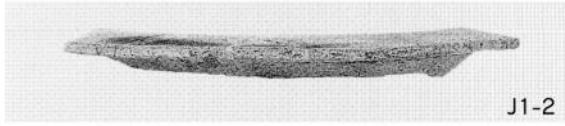
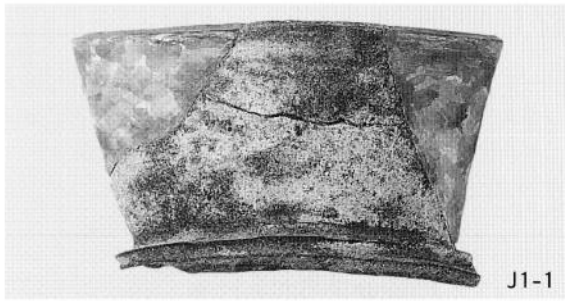
2 P307・306遺物出土状態（東から）



1 PI33 (住4) 遺物出土状態 (北東から)



2 遺跡全景 (西から)



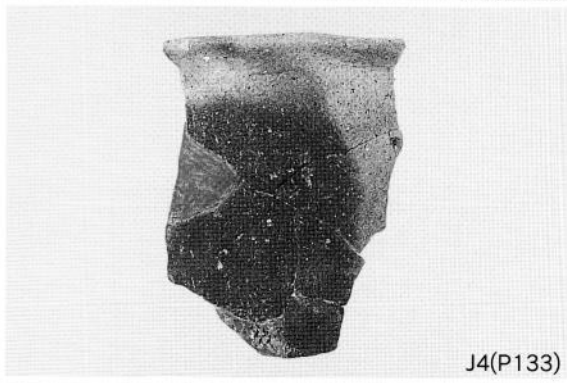
出土遺物I (J1・J3)



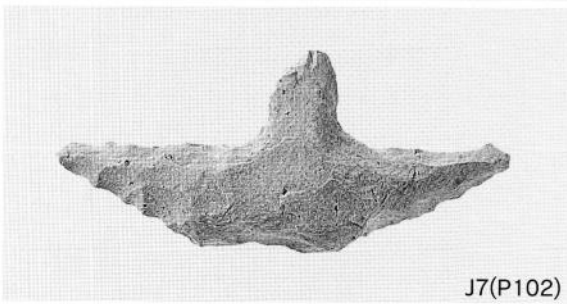
J4(P133)



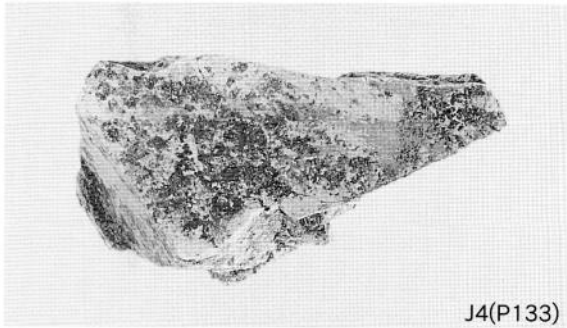
J7(P102)



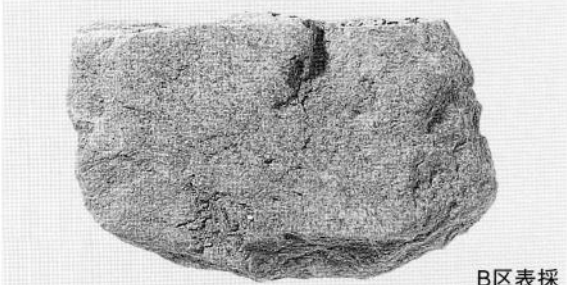
J4(P133)



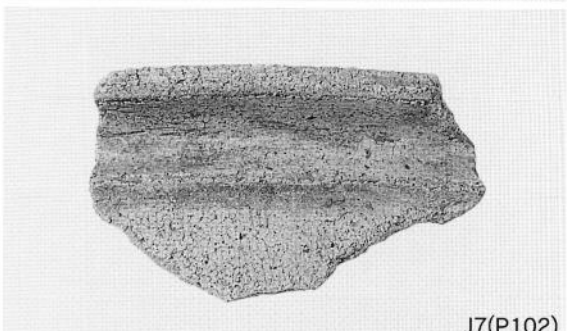
J7(P102)



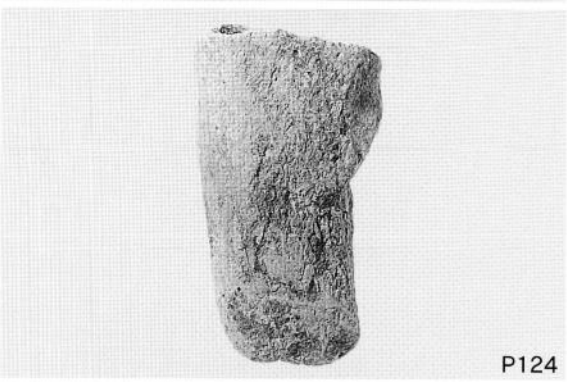
J4(P133)



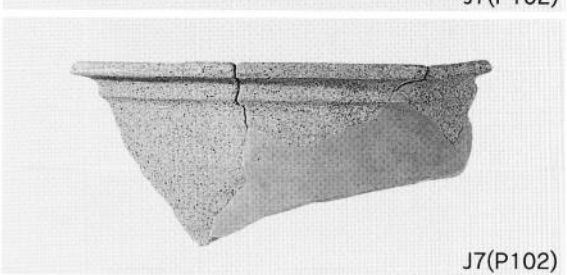
B区表採



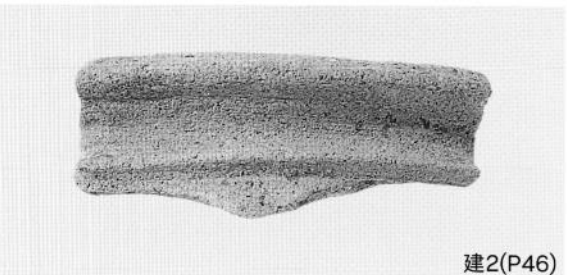
J7(P102)



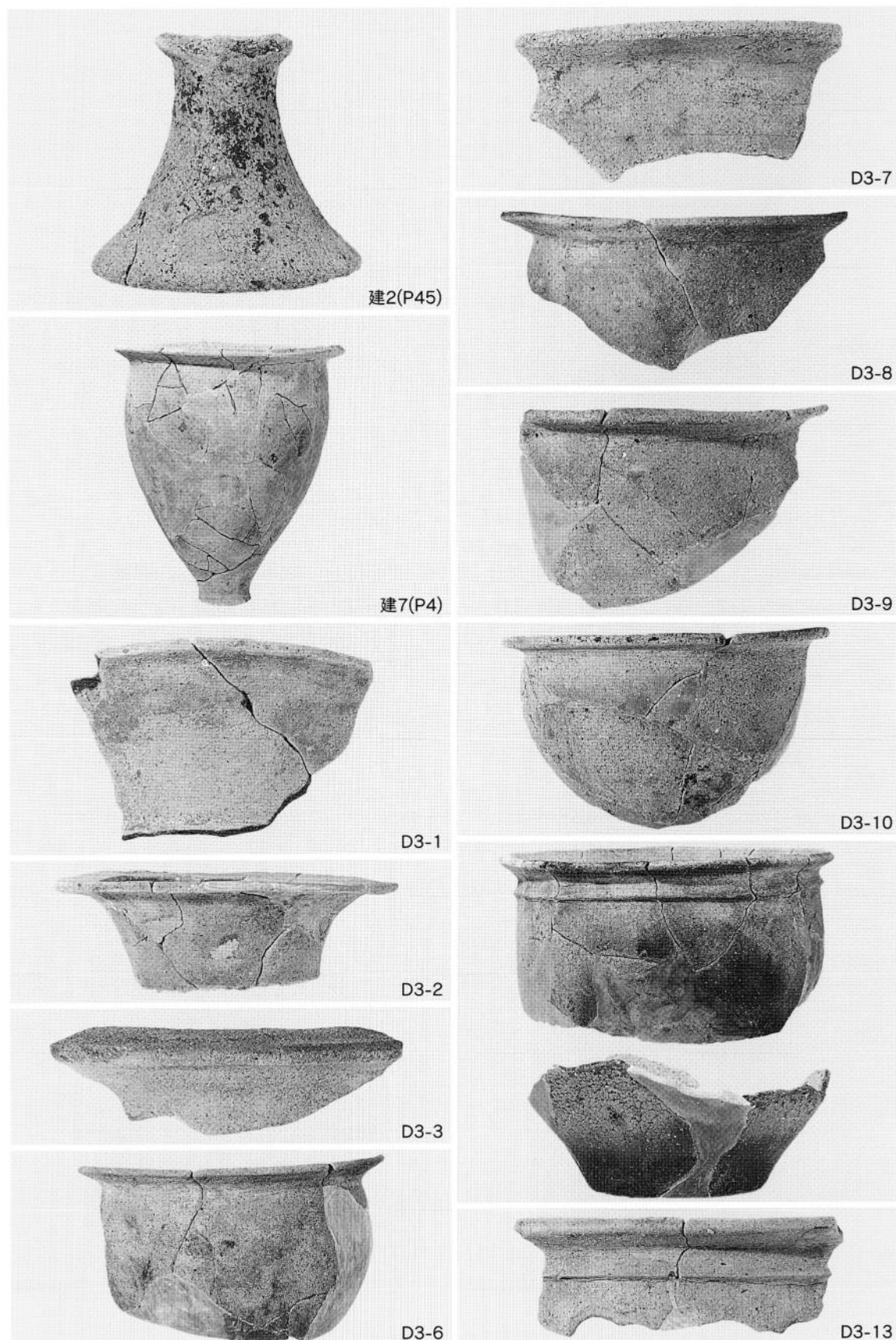
P124



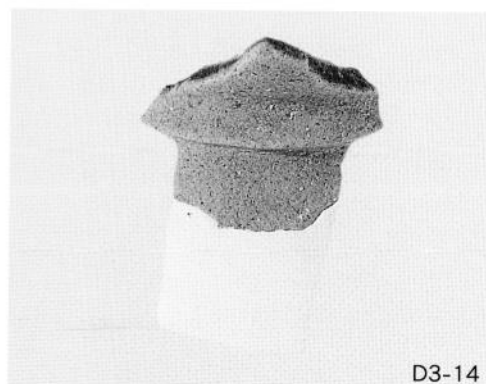
J7(P102)



建2(P46)



出土遺物3 (建2・7、D3)



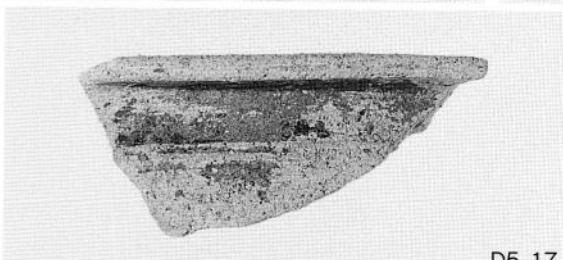
D3-14



D5-16



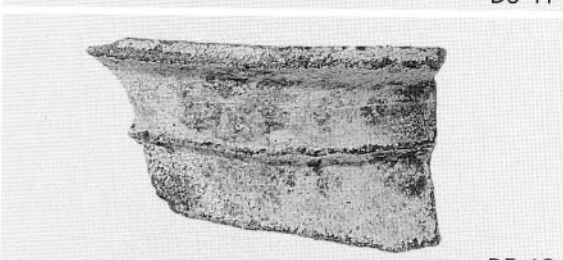
D105-23



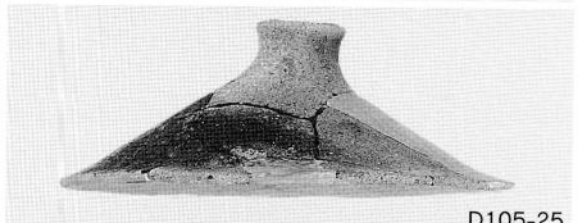
D5-17



D105-24



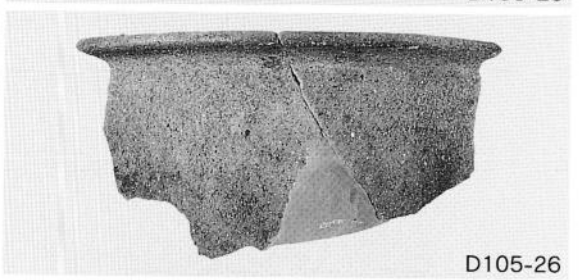
D5-18



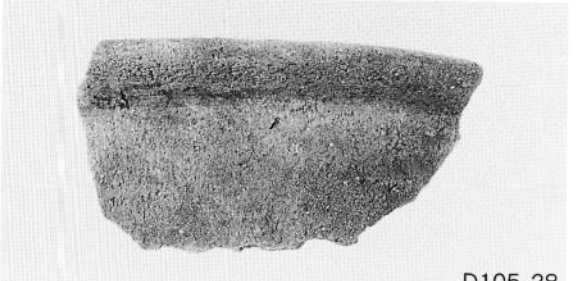
D105-25



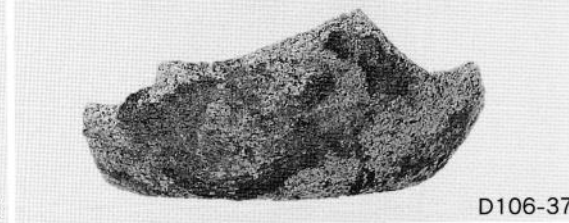
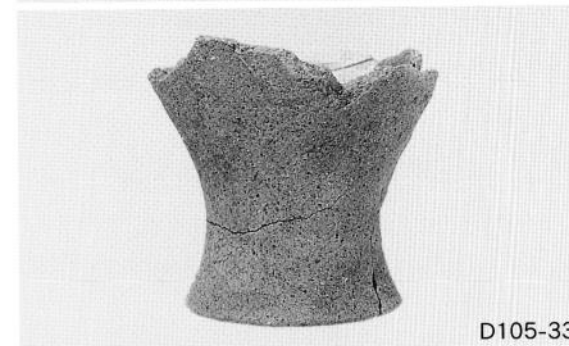
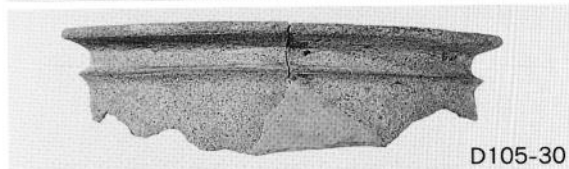
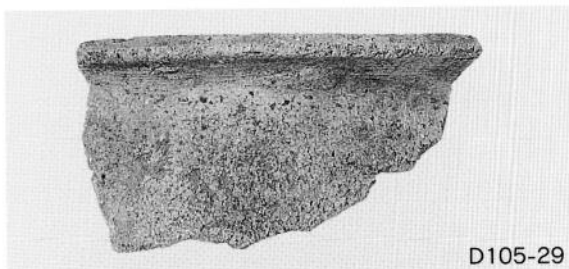
D105-22

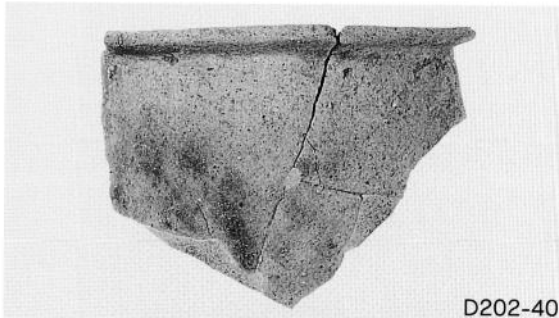


D105-26

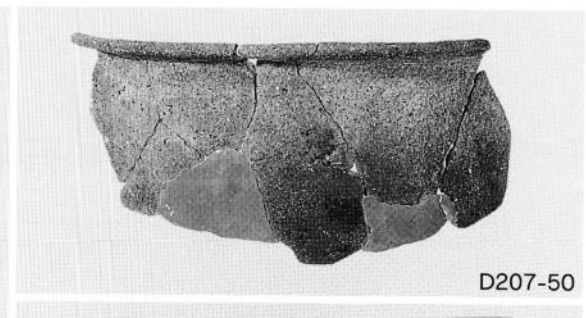


D105-28

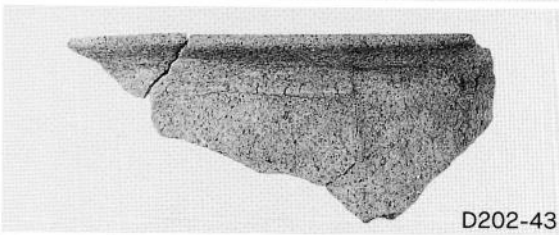




D202-40



D207-50



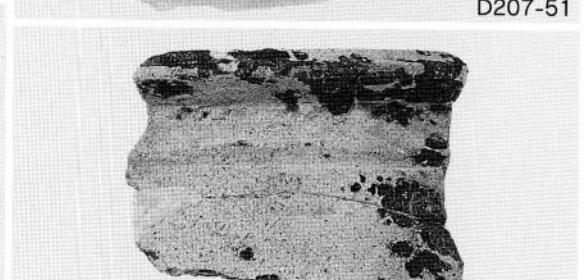
D202-43



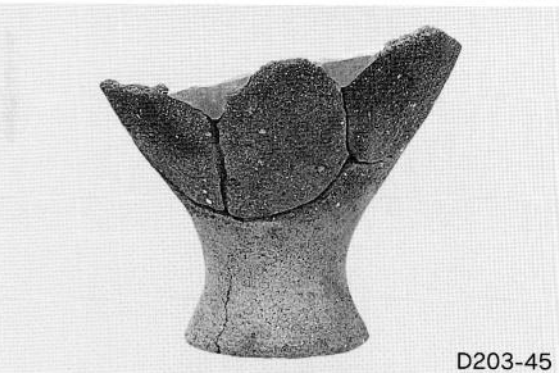
D207-51



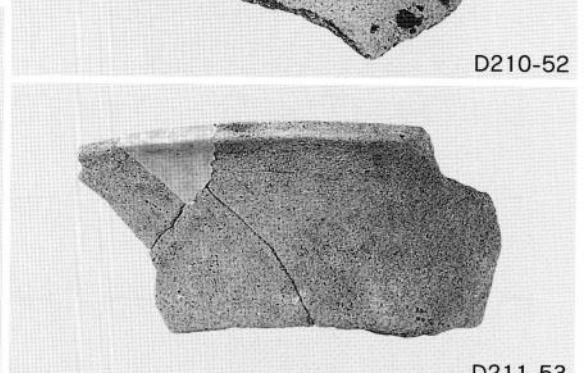
D202-39



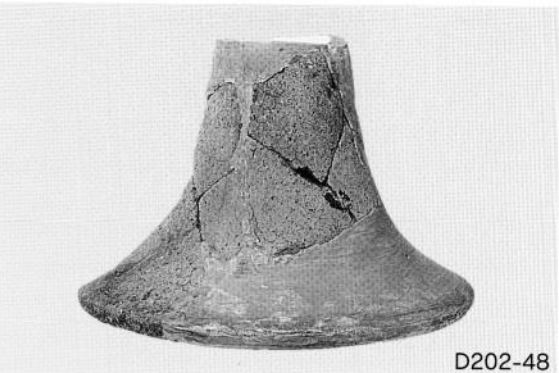
D210-52



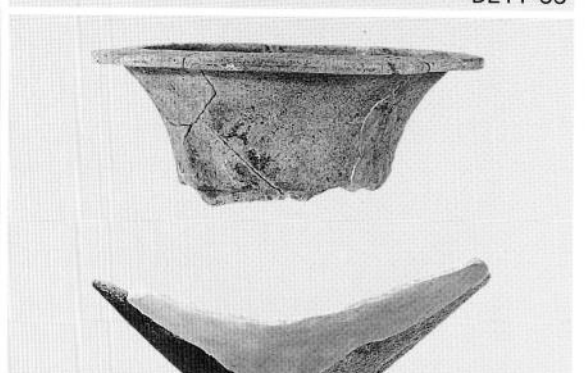
D203-45



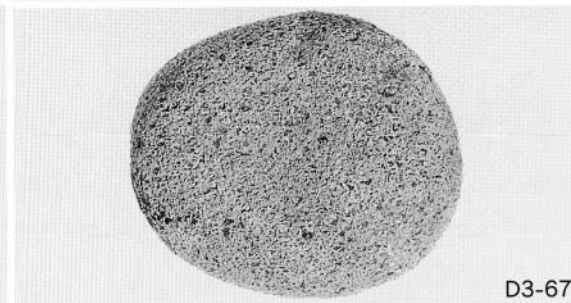
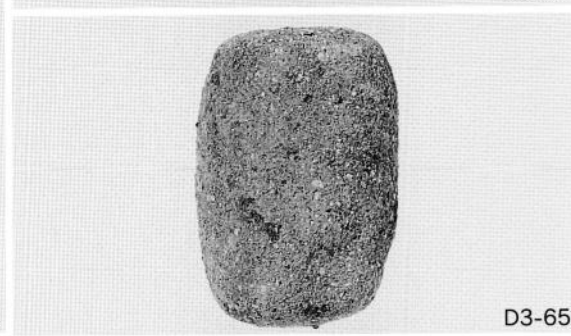
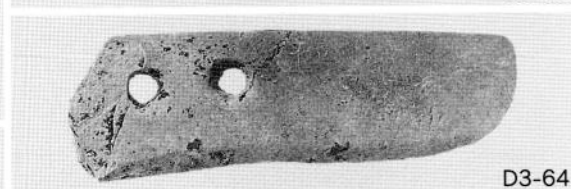
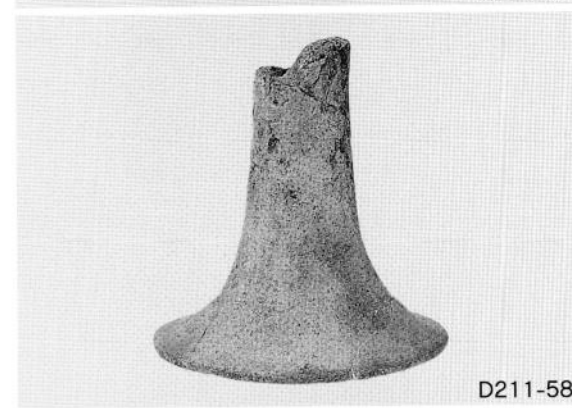
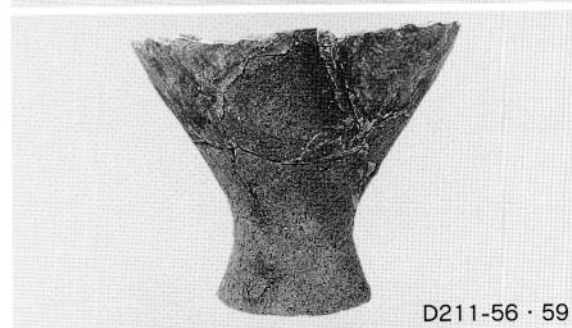
D211-53

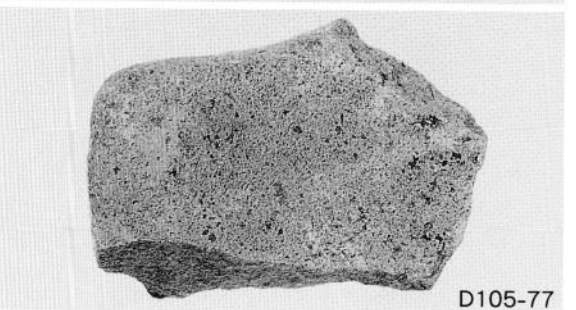
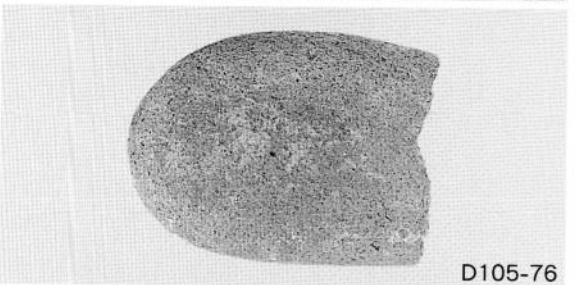
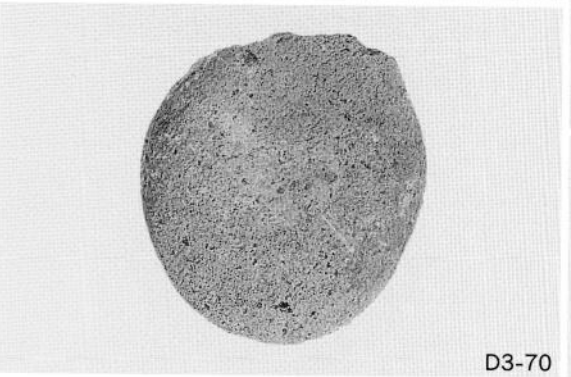
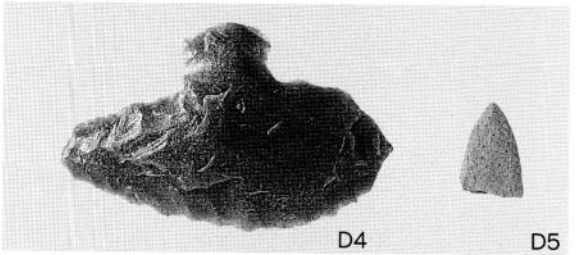
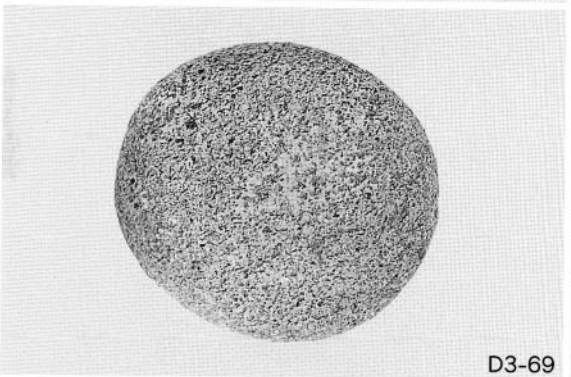
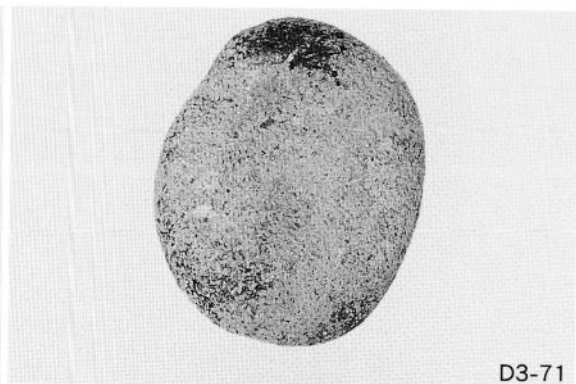
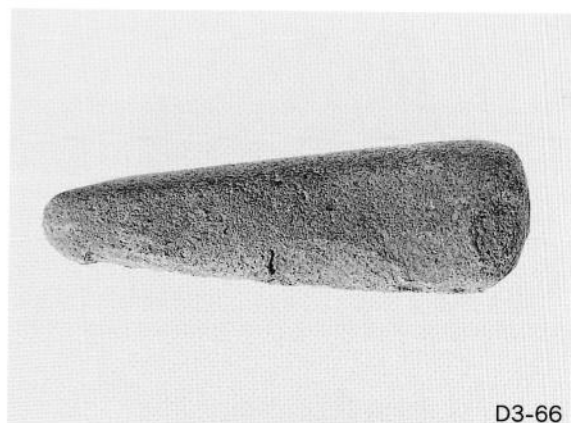


D202-48

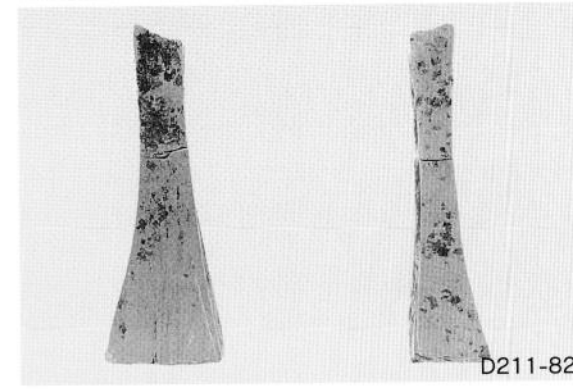
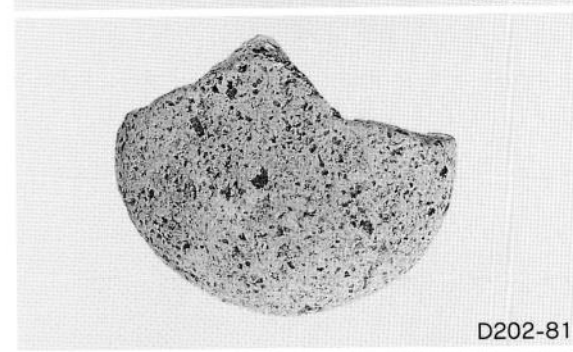
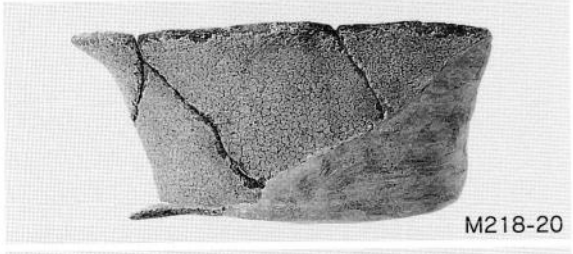
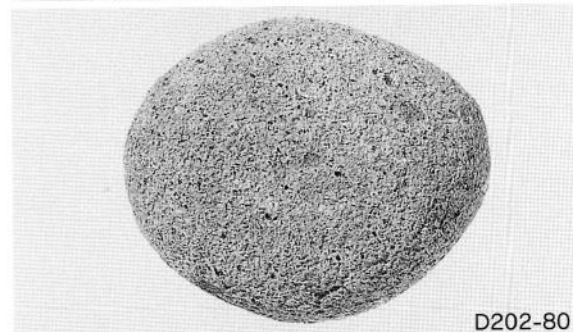
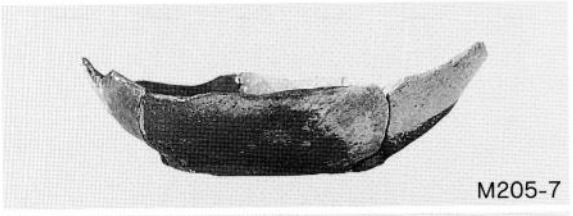
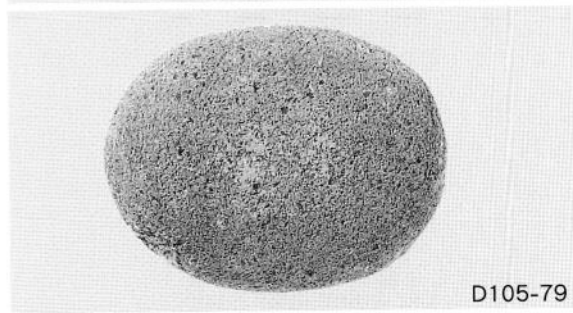
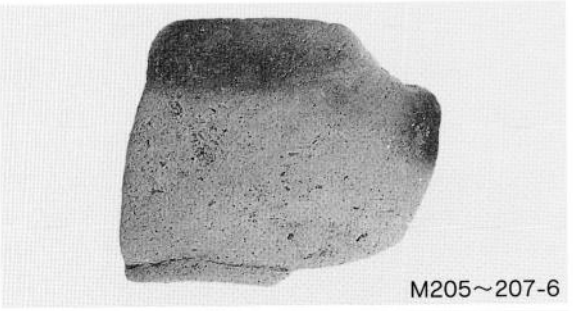
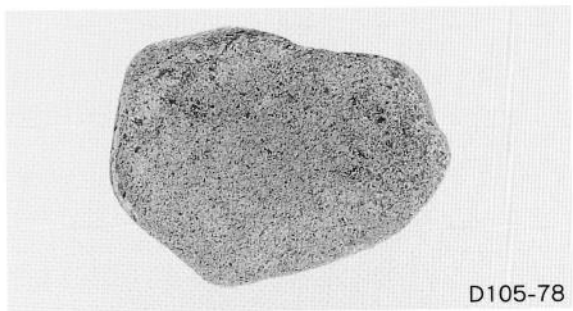


D211-54 · 55

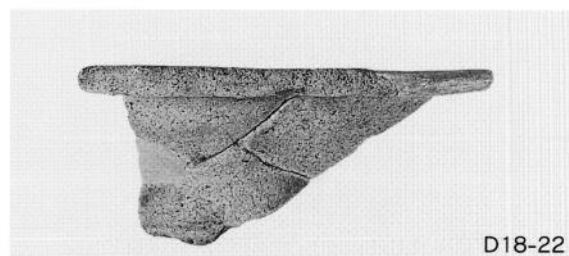




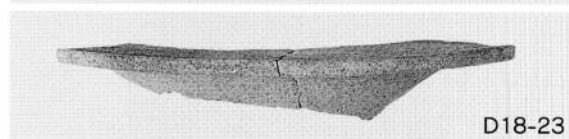
出土遺物8 (土坑出土石器)



出土遺物9 (土坑出土石器、M5~7·18)



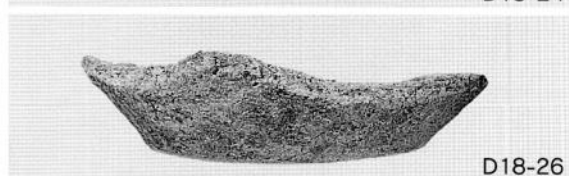
D18-22



D18-23



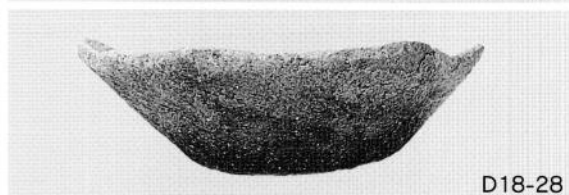
D18-24



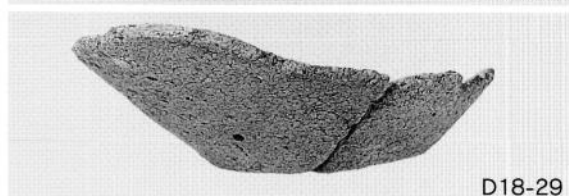
D18-26



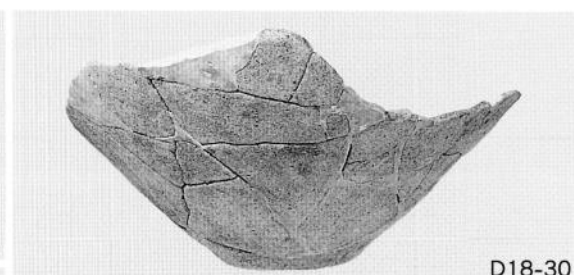
D18-27



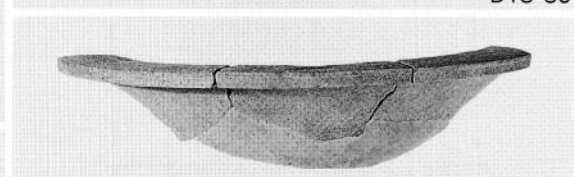
D18-28



D18-29



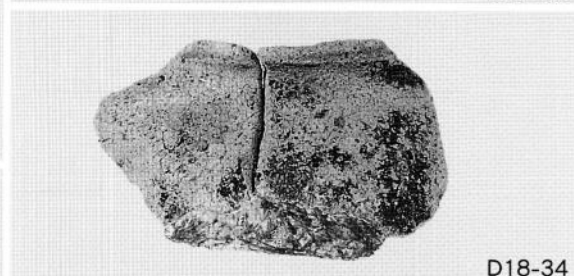
D18-30



D18-31-32



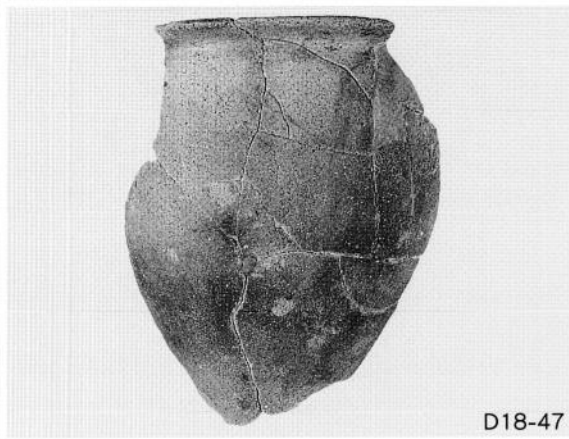
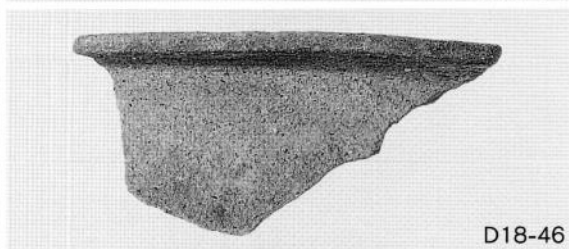
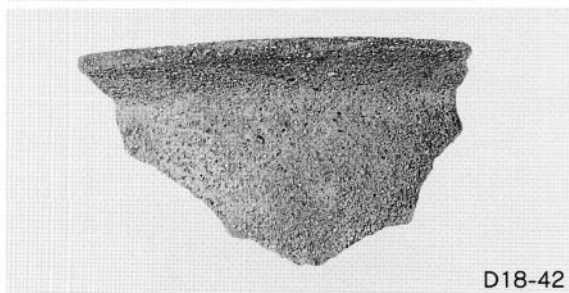
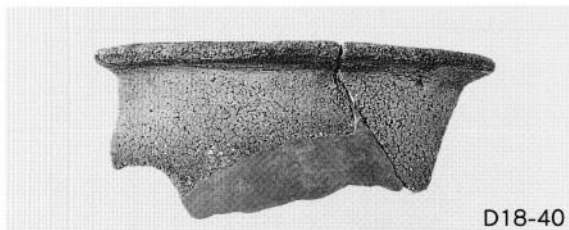
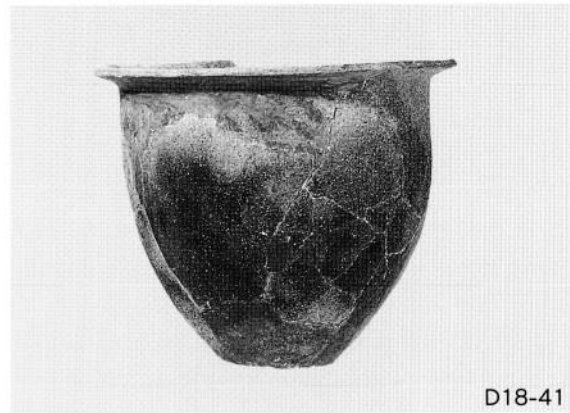
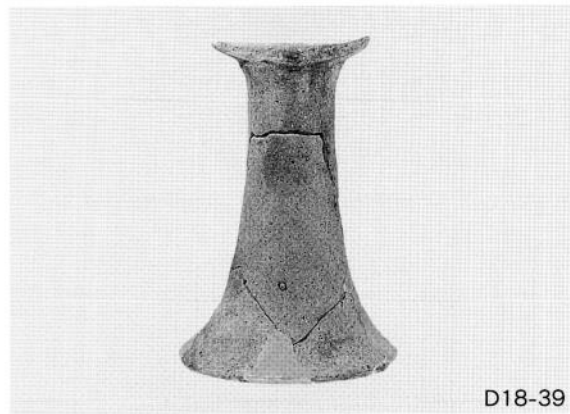
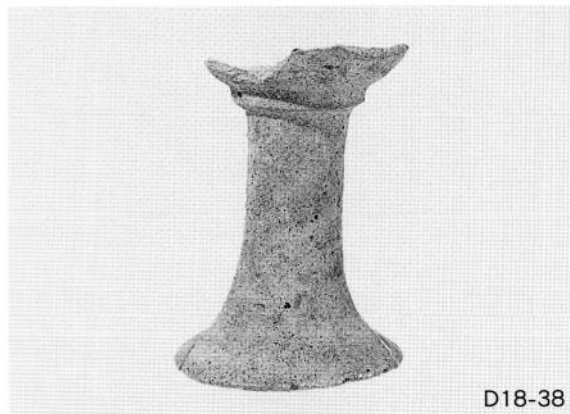
D18-33

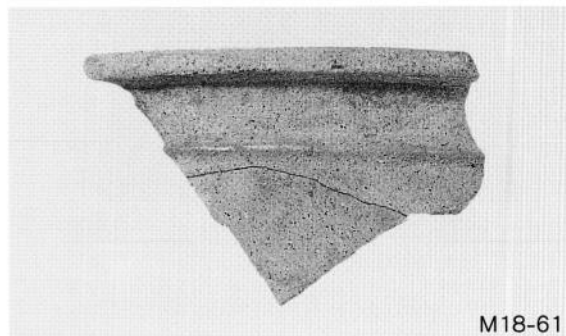
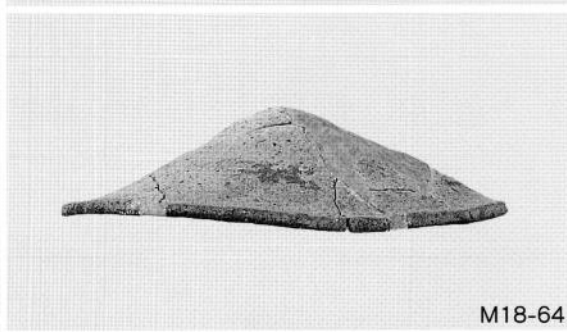
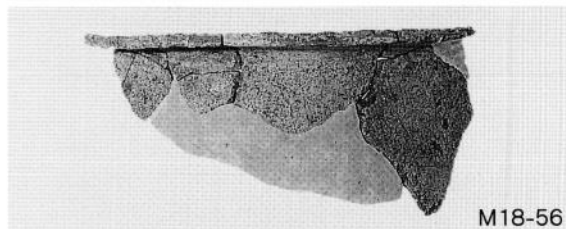
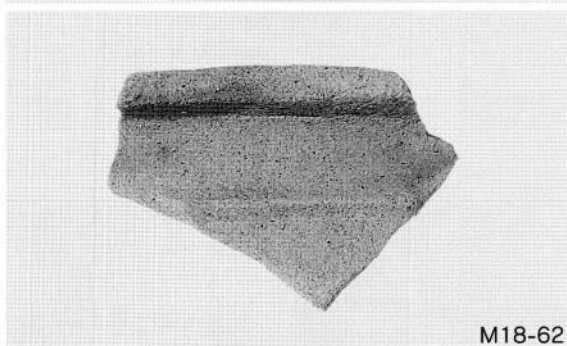
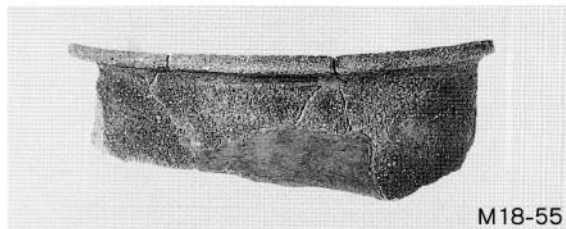
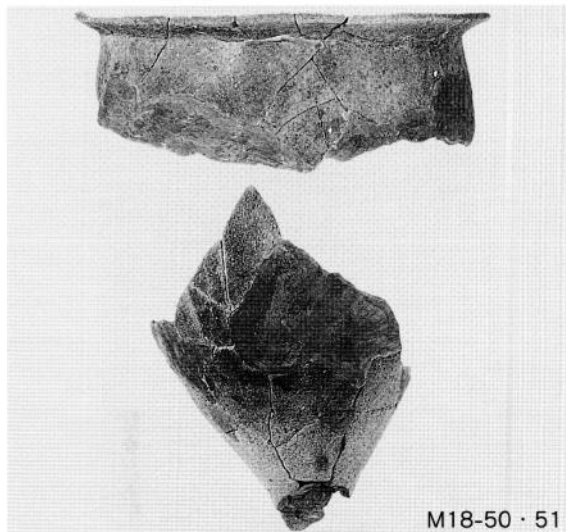
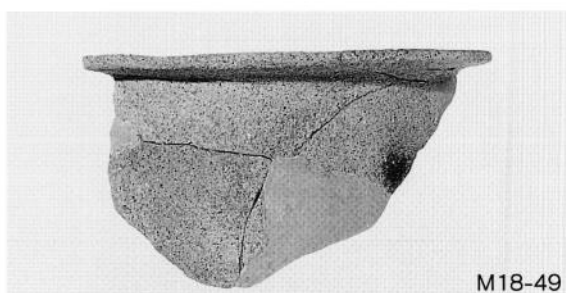


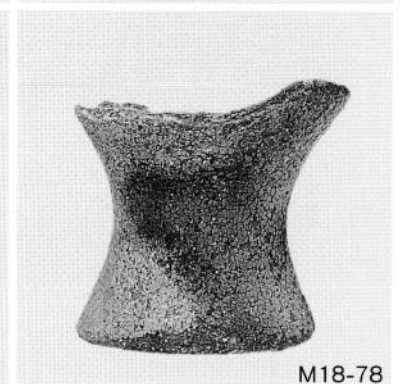
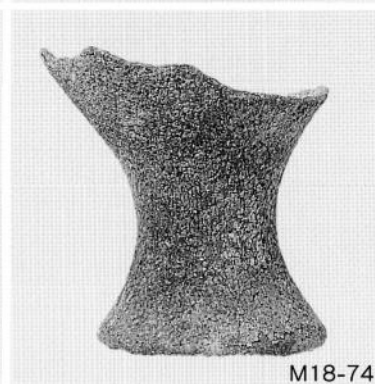
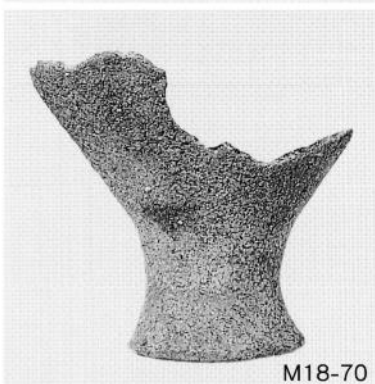
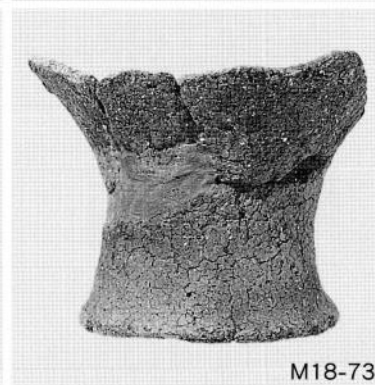
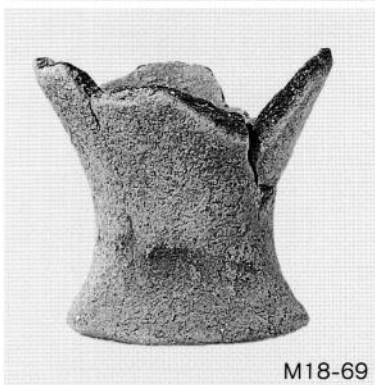
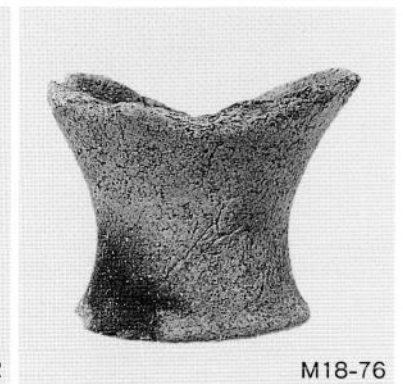
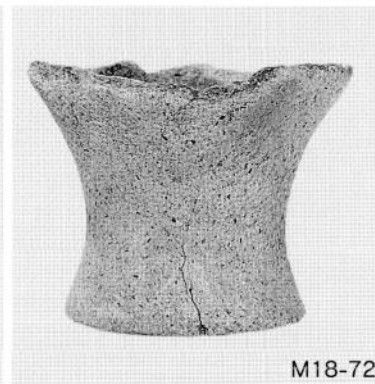
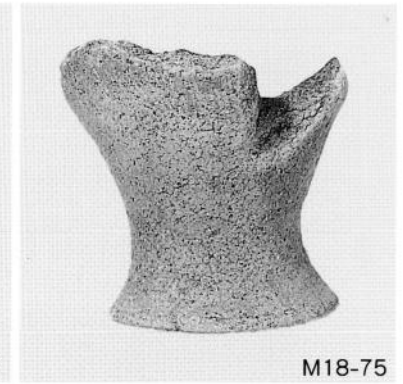
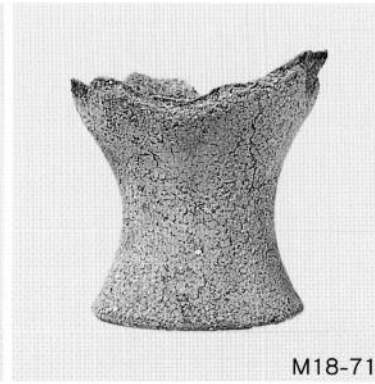
D18-34

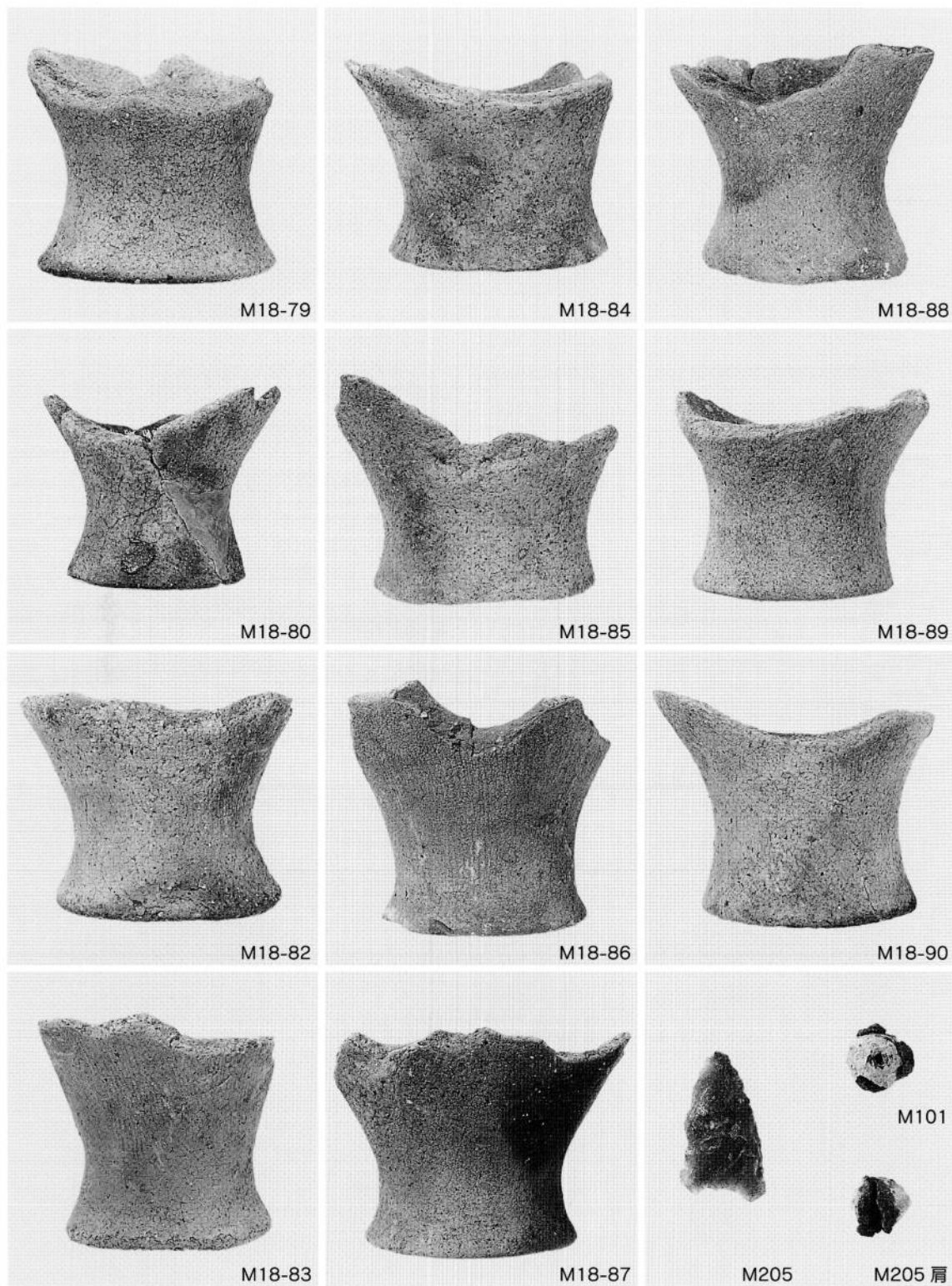


D18-36

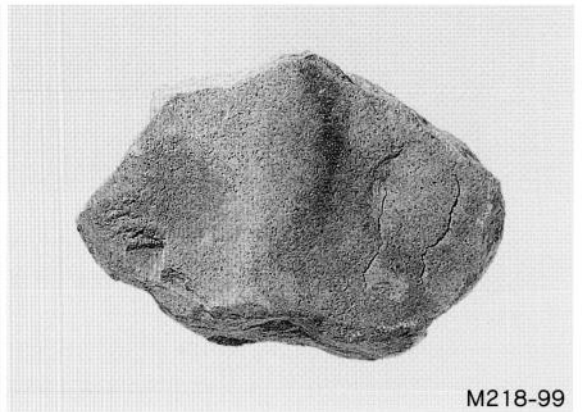
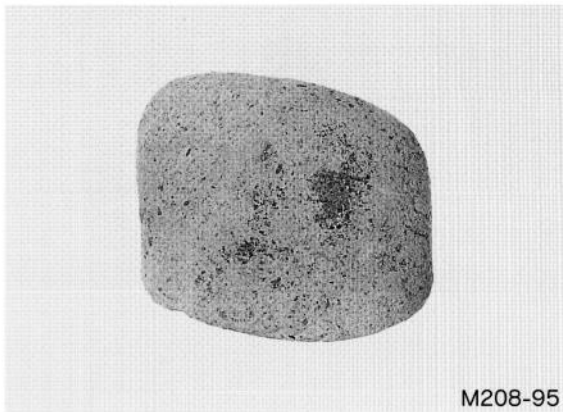
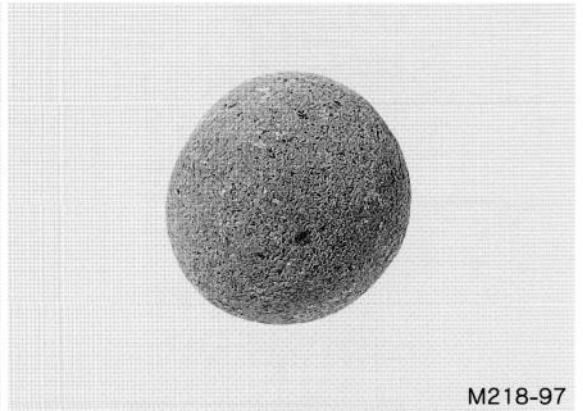
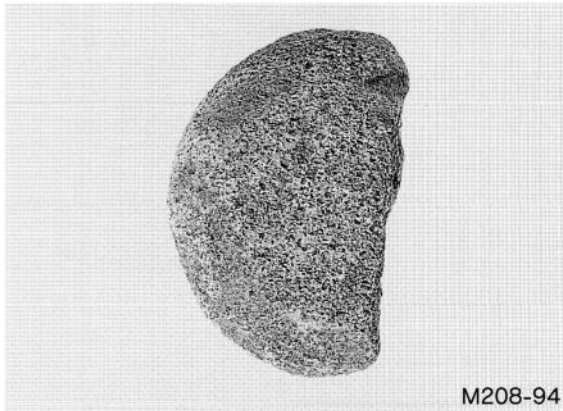
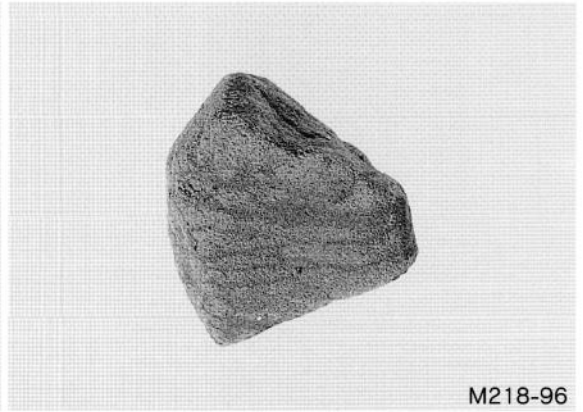
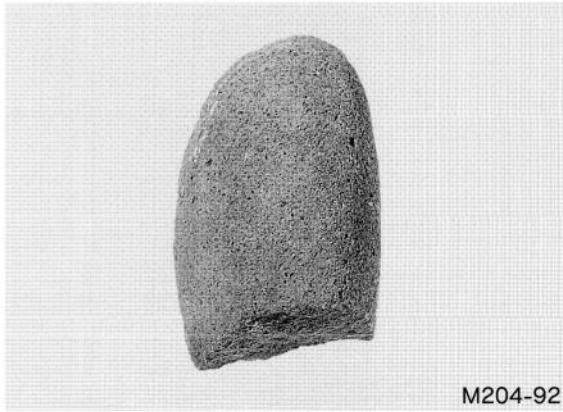
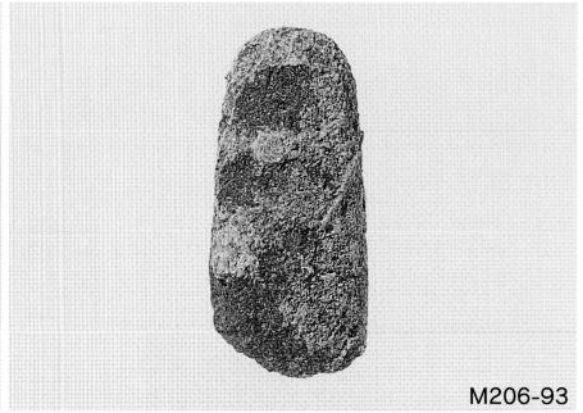
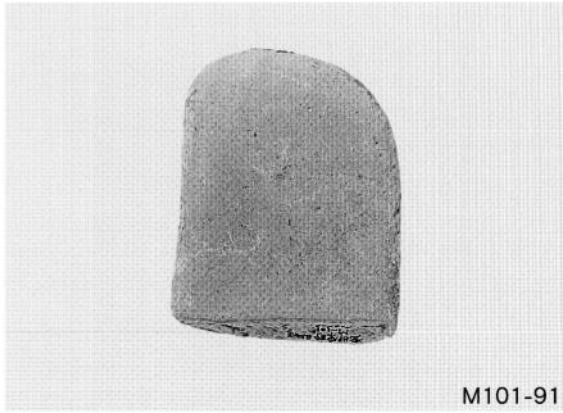








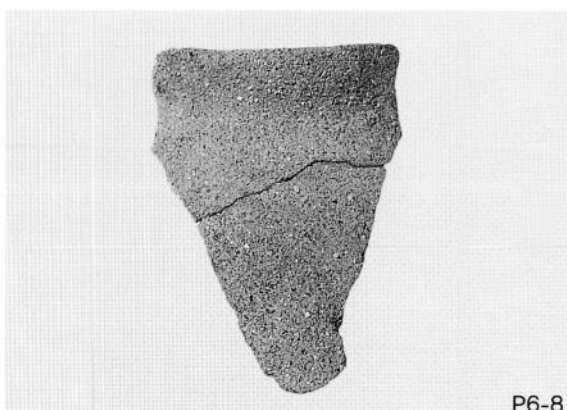
出土遺物14 (M18)



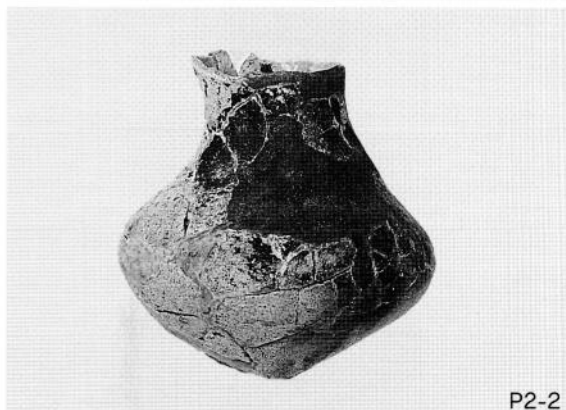
出土遺物15 (溝状遺跡出土石器)



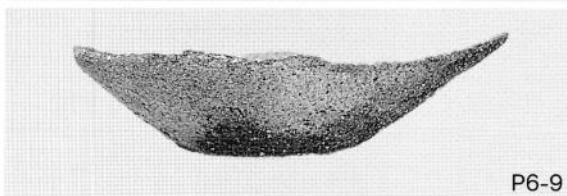
P1-1



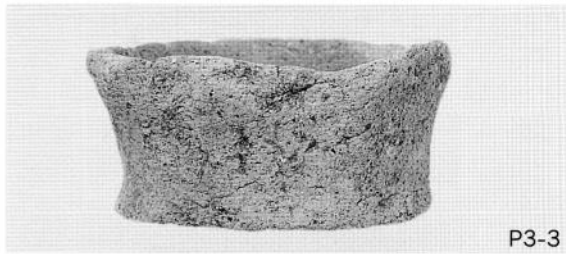
P6-8



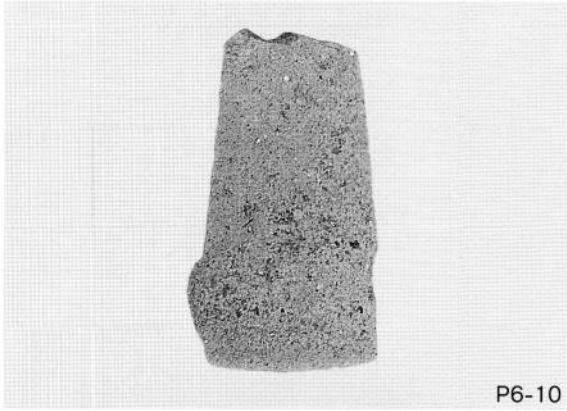
P2-2



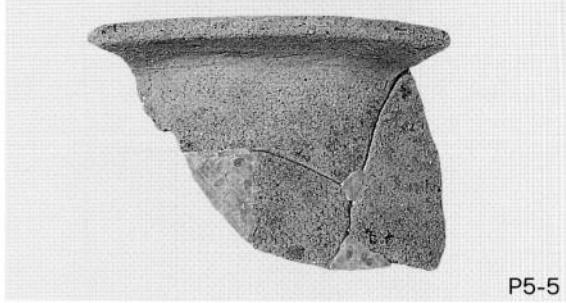
P6-9



P3-3



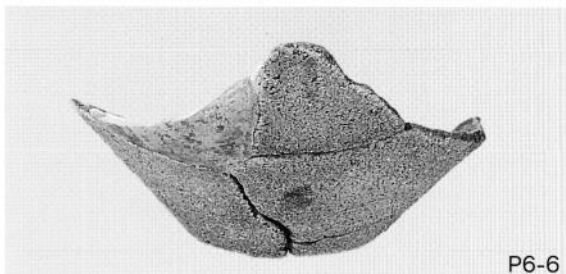
P6-10



P5-5



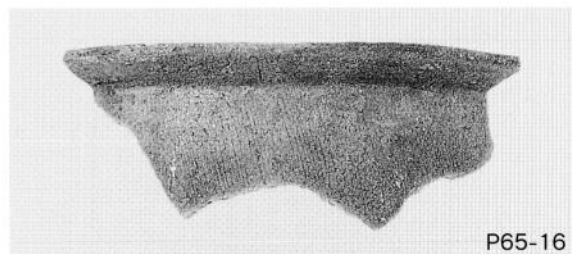
P65-13



P6-6



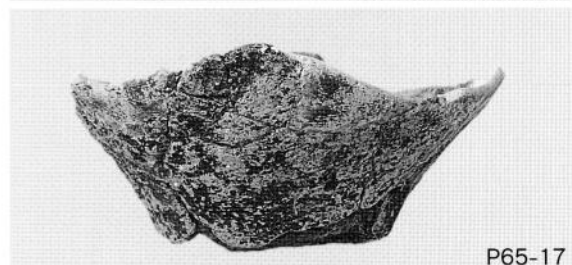
P65-15



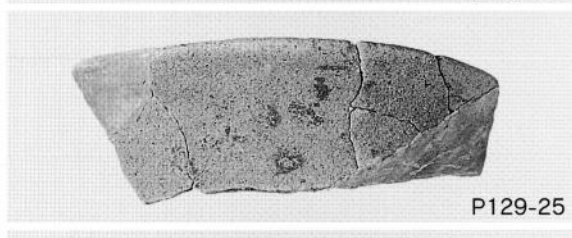
P65-16



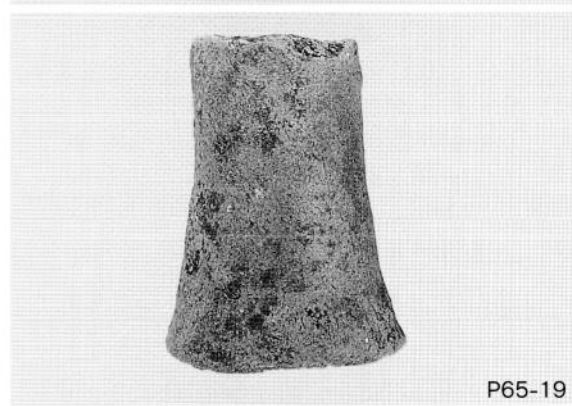
P127-24



P65-17



P129-25



P65-19



P129-26



P65-20



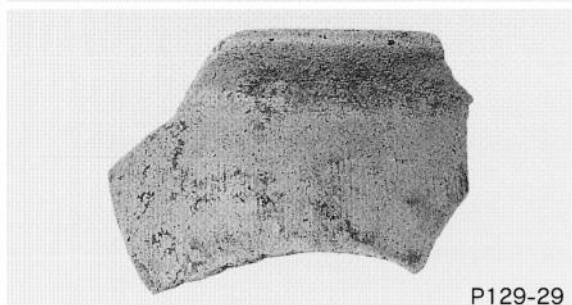
P129-27



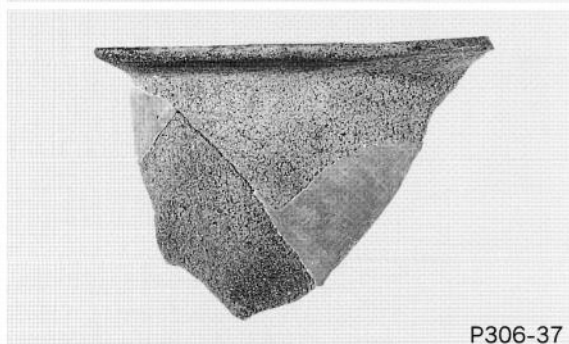
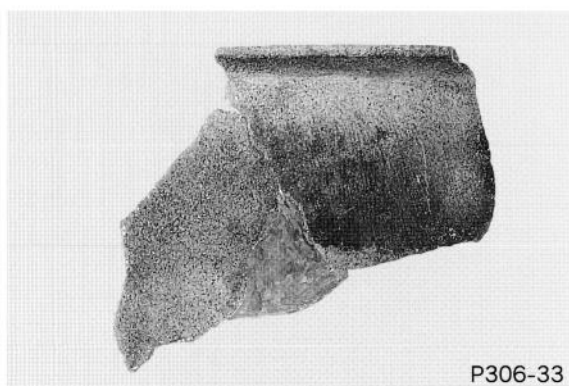
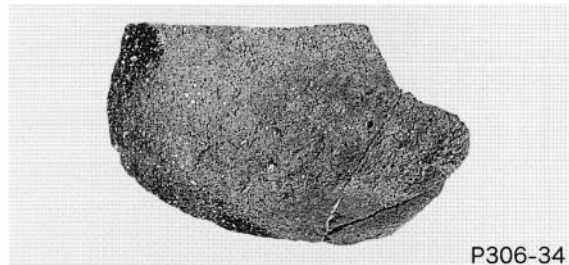
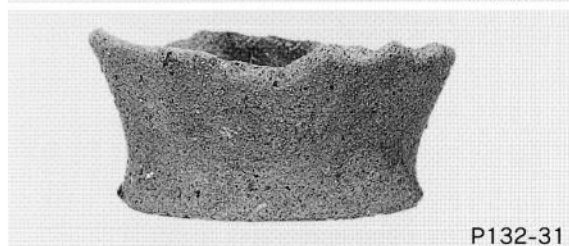
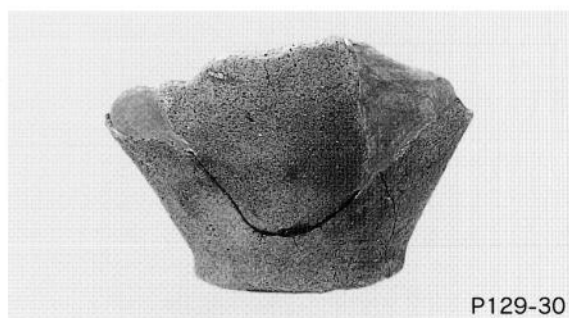
P65-23

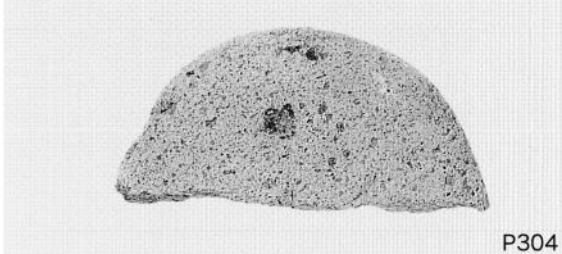
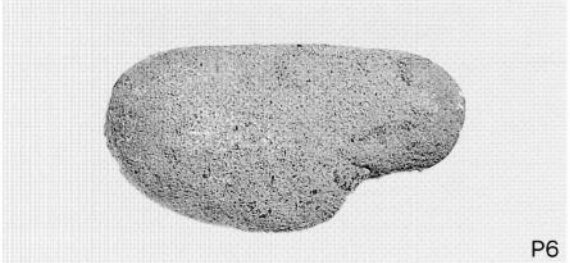
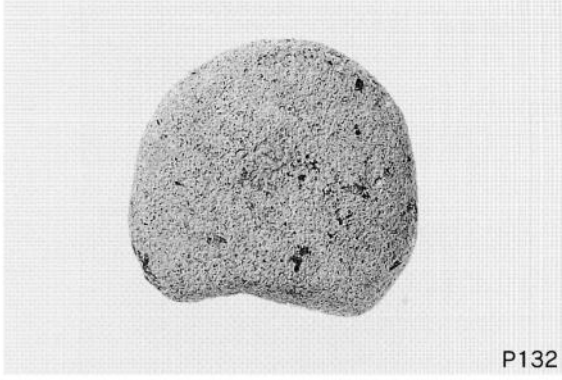
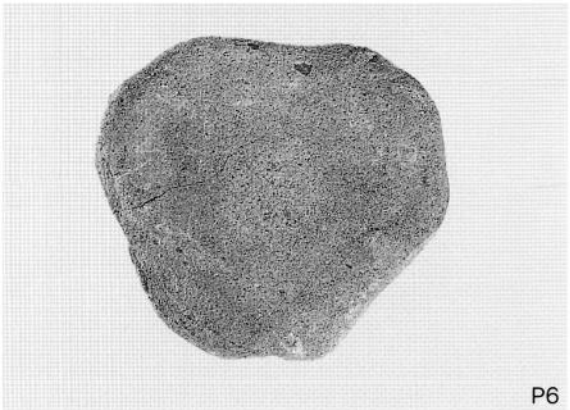
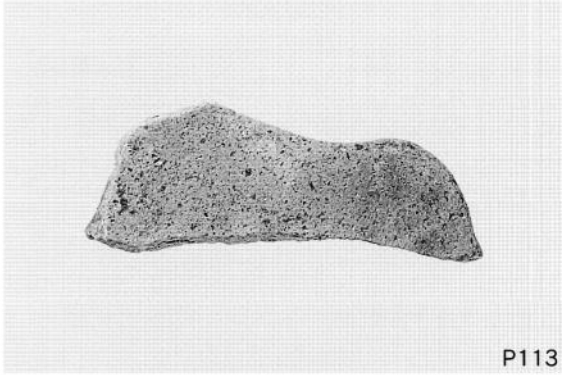
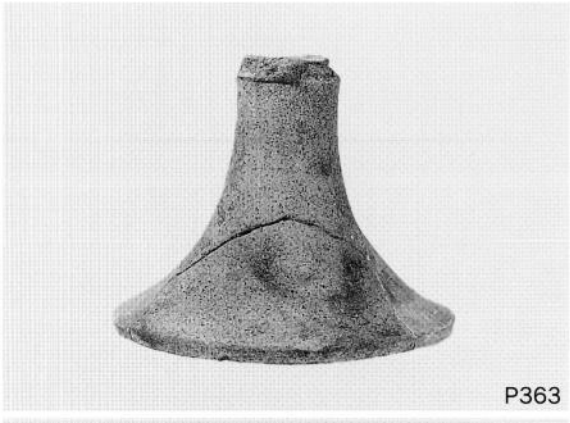
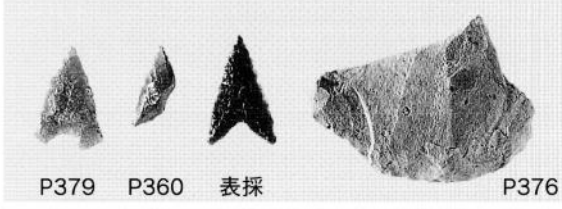
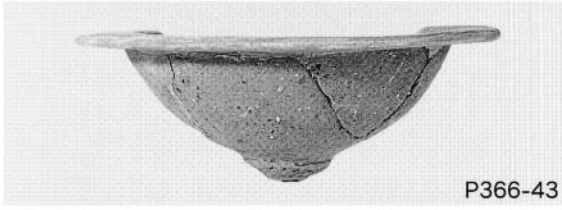


P129-28



P129-29





出土遺物19 (P360・363・366、柱穴出土石器)

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 8	登録番号 12

桑野遺跡

(上の熊・小松原)

豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告

第 6 集

1997年(平成9年)3月31日発行

発行 福岡県教育委員会

812 福岡市博多区東公園7-7

電話 (092) 651-1111

印刷 株式会社 三光

810 福岡市中央区大名1丁目2番20号

電話 (092) 731-6271

報 告 書 抄 録

ふりがな	みつみぞいせき・おさだいせき・おおいせき・ウツケぼたけいせき・たけのしだいせき・うえのくまいせき・こまつばらいせき・かのいせき							
書名	三ツ溝遺跡・長田遺跡・大池添遺跡・ウツケ畑遺跡・竹ノ下遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡・桑野遺跡							
巻次	下巻							
シリーズ名	一般国道10号線豊前バイパス関係文化財調査報告							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	池辺元明・飛野博文・小川泰樹・秦 憲二・杉原敏之(編集)							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL092-651-1111							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
三ツ溝	福岡県築上郡新吉富村 大字宇野字三溝、正ノ坪	40644	970076	33°34' 40"	131°9' 50"	19920623 ～199208	3,500m ²	バイパス建設
長田	福岡県築上郡新吉富村 大字宇野字長田、一つ板	"	970083	33°34' 30"	131°9' 55"	19930823 ～19940527	6,900m ²	"
大池添ウツケ畑	福岡県築上郡新吉富村大字 垂水字大池添、ウツケ畑	"		33°34' 20"	131°9' 58"	19940214 ～19940519	4,500m ²	"
竹ノ下	福岡県築上郡新吉富村 大字垂水字竹ノ下、衣装	"	970075	33°34' 02"	131°10' 59"	1992021 ～0326	3,500m ²	"
上の熊	福岡県築上郡大平村 大字下唐原1658-1他	40645	960181	33°33' 40"	131°10' 38"	19910418 ～19910607	4,500m ²	"
小松原	福岡県築上郡大平村 大字下唐原字上野他	"	960182	33°33' 58"	131°10' 20"	19910114 ～19910330	6,300m ²	"
桑野	福岡県築上郡大平村 大字下唐原1296-3他	"	960184	33°34' 03"	131°10' 12"	19910611 ～19910907	4,800m ²	"
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三ツ溝		古墳・奈良	大溝	須恵器				
長田	集落	古墳・奈良	竪穴住居2・大溝・溝7・ 掘立柱建物6	土師器・須恵器・ 陶磁器				
大池添ウツケ畑	集落	古墳・奈良・ 平安他	竪穴住居20・掘立柱 建物26・土坑1	土師器・須恵器・ 緑釉陶器				
竹ノ下		古墳・奈良	掘立柱建物7・ 土坑1・柵1	須恵器・土師器				
上の熊		旧石器・ 古墳・江戸	掘立柱建物1・ 土坑10・溝6	石器				
小松原		弥生・江戸	掘立柱建物1・ 土坑9・溝8	陶磁器				
桑野	集落	弥生	竪穴住居7・ 土坑17	弥生土器				

※上巻の遺跡分も収録